

# ロウきゅーぶ！短編集

gajun

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

バスケ要素はほぼなく、主に智花を中心に昴とイチヤついたり、慧心学園初等部ミニバスケ部6年生5人組の日常の1シーンを切り取ったような物がテーマの短編集を考えております。

原作やアニメ・漫画版をベースにした補完シーンや、その都度思いついた内容を少しずつ形にして行きながら投稿できればと考えております。

表記ゆれや誤字等、個人的に気になった部分はその都度細かく微修正してることがあります。

現在は不定期更新中です。

最新話は一定期間、最後尾で掲載後に時系列や関連性で掲載順が変化することがあります。

## 目次

コーチ不在の少女たちの日常（智花視点メイン）

本番に備え、準備は焦らずゆつくりと 1

お風呂会議プロローグ 6

みんなの長谷川昴コーチ。ひなとおにーちゃんのおつきくなりた

いなつ 17

みんなの長谷川昴コーチ。俺を信じた愛莉を満足させてみせる。

25

みんなの長谷川昴コーチ。すばるんはしようがないにやあゝ

37

みんなの長谷川昴コーチ。私に長谷川さんの全てを教えてください

い 46

みんなの長谷川昴コーチ。最高の智花（パートナー）のために。

57

シユートからゴールへ 69

長谷川さん充な夏休みの日々

智花とかき氷。 79

いつもと違うシチュエーションで少しだけ背伸び 87

この小さき花々に活力を1 96

この小さき花々に活力を2 103

この小さき花々に活力を3 110

この小さき花々に活力を4（完） 117

長谷川家お泊り計画

忍さんは心配性1 128

忍さんは心配性（SNS） 134

忍さんは心配性 2

137

忍さんは心配性 3 (完)

143

甘え下手な彼女のために 1

156

甘え下手な彼女のために 2

164

甘え下手な彼女のために 3

170

甘え下手な彼女のために 4 (完)

178

智花二回目のお泊り 1

186

智花二回目のお泊り 2

194

智花二回目のお泊り 3

202

智花二回目のお泊り 4

210

智花二回目のお泊り 5

217

智花二回目のお泊り 6

224

智花二回目のお泊り 7

234

智花二回目のお泊り 8

241

智花二回目のお泊り 9 (完)

248

長谷川家お泊り報告 (SNS)

259

お兄ちゃんと愛の秘密特訓

棺よさらば 1

271

棺よさらば 2 (完)

279

三度目の決戦とこれからの少女たち

マッチアップ 1

289

マッチアップ 2

294

マッチアップ 3

302

マッチアップ 4

311

マッチアップ 5

318

マッチアップ6 (完)	328
祝 男バスとの対抗試合三連勝達成! (SNS)	341
みんなの憧れの初体験	353
時期ネタ単発物	
智花の出張スイーツ教室	359
未分類・最新投稿物	
おにーちゃんとHの秘密特訓	366
ラストインターバル	378
初めてのダンク (前)	384
初めてのダンク (後)	395
耳掃除	405
少女たちの初めて争奪戦	415
二人で打ち上げる開幕の花火	422
無垢なる天使の成長	430

コーチ不在の少女たちの日常（智花視点メイン）  
本番に備え、準備は焦らずゆつくりと

「昴さん……」

今この場にはいない人の名前をポツリと寂しげに呟きながら、ゆつくり上着を脱ぎ、そつと床に置いた。

そして自分の髪の毛のワンポイントを彩っているお気に入りのお気に入りの髪留めにそつと手を当てる。

それだけで心がポカポカと温かな気持ちに包まれてくる。

——昴さんが笑顔で優しく髪を撫でてくれているような感じがする。

この髪留めを頂いてからは、いつも昴さんへの尊敬と感謝の気持ちを想いながら始めることにしていた。

こんなこと昴さんにはもちろん友達にだって絶対言えない。

万が一にでも誰かに知られてしまったら恥ずかしさでどうにかなってしまうそうだ。

そんなことを考えていたら、少しドキドキしてきてしまったが、そのままゆつくりと行為を始めていく。

「んっ……」

すでに何度となく行い、慣れ親しんでいる動作のはずなのに、始めるときはいつも緊張しているせいか指先も思う様に動いてくれない。

少しずつ緊張を解していくように意識しながら、指先を目的の場所へとゆつくりと伸ばしていく。

「あ、あれ？」

始める前に変に意識しすぎてしまったせいかな、どうやらいつも以上に体が緊張してしまっているようだった。

「あ、あはは……はうっ!!」

どうしてこんなに緊張してるんだろ?と自分を笑って誤魔化しながら、少しだけ強引に体を動かしてみたら、今度は思った以上に強い刺激が来てしまった。

「うう……」

予想以上の刺激に驚いてしまったが、少しずつだけど体の準備は整ってきている。それならこのまま続けても問題ないはずだ。

意を決してより強い刺激を求めるように手を動かそうとすると同時に――

「にひひー もっかーん！ いつも一人寂しくじゃなくて、たまにはあたしと一緒にしようぜー！」

「ふええ!? ま、真帆！ ちよ、ちよっとくすぐりたいよお」

自分の行為に意識を向けすぎてしまっていたせいか、近づいてきていたことに全く気づかなかった真帆にいきなり抱き着かれてしまった。

真帆の細い指先が幽かに火照り始めた私の身体の上を這う様に撫でまわす。

「いつもは一人でさっさと終わらせちゃうくせに、めずらしくていねーにしてたからさ。ちよっと手伝うだけだつてー！ ほらほら〜もつと力をぬいて〜身も心もあたしにまかせちゃってさ〜」

「ひ、一人でできるから大丈夫だよお……はう！」

決して真帆にしてもらうのが嫌ってわけではないし、むしろ嬉しい誘いだ。

だけど、今は昴さんのことを考えていたせいもあって、変に体が緊張してしまっていた。

真帆自身は気づいていない様子だけど、彼女の身体も私同様に火照り始めている。

背中全体に感じる彼女の体温の温かさや、今も少し強めの刺激を送り続けてくる細い指先が、心地良さ以上の変な高揚感を私に与えてしまっている。

「え〜いっつもすばるんにしてもらってんじやねーの？」

「ふええ!? す、昴さんはそんなことしないよっ……んっ……い、今の真帆みたいに体中を触ったりなんか……はあう!? ……してないよおー」

真帆の指からむず痒いような刺激が送り込まれ、そのたびに自分が出してるとは思えないような変な声が出てしまっている。

全身を揉まれながらも、変な声が出ない様に必死に抑える。

これ以上は本当にはしたくない醜態を晒してしまうかもしれない危機感を覚え、必死に止めてくれるようお願いする。

「んっ……ま、真帆お……お、お願いだから……もう止めて……はうう!!」

「今はずっとあたしのターンだ！ ほらほらくショージキに言っちゃえよっ」

「こら真帆。そろそろ離してやれよ。トモだつて長谷川さん以外に体を撫で回されるのは嫌だろうしな」

「ちえー。もうちよつとで終わりそうかなと思っただけだなー。ま、もっかんを満足させるのはすばるんの役目かー」

さすがに自分を不憫に思ってくれたのか紗季が真帆を窘めると、真帆も諦めたように私の身体を揉む手を止めてくれる。

なんか2人からさらつと、すごいこと言われたような気がするけど、まだ頭がぼーつとしているためか上手く聞き取れなかった。

変な高揚感もおさまったところで、最後に身体を大きく伸ばす——そして、真帆の乱入もあつたが無事に部活前のストレッチを完了する。

「どうせ長谷川さんのこと考えて油断してる時だったから驚いたんだろうけどさ。残念だったなトモ。長谷川さんに来てもらえなくて」

「ふえええ!! そ、それは……ち、ちが………わない………けど……うう」

紗季の言うように昴さんは今高校のテスト期間であり、自分の勉強に励むため期間中は少しの間だけコーチを休ませて欲しいと申し訳なきように仰っていた。

それでも私の朝練だけはいつも通りお付き合いして頂いている。

昴さんは「智花と思う存分に激しくやりまくって溜まったストレスを発散しないと調子が狂いそうだから。遠慮せず今まで通り自分に



付き合っただけで欲しい。」と言ってくれている。

みんなも気にしなくてもいいとは言ってくれているけど、昴さんを自分だけが独り占めしてしまっている感じがしてしまい、やっぱり少し心苦しさを感ずってしまう。

ちよつと寂しいけど、私だけ部の代表として朝にお付き合ひさせて頂いているのに、放課後も昴さんと一緒にしたいなんてわがまま言えないうもんね。

「ごめんなーもつかん。すばるんのこと考えてた時にジヤマしちやつて」

「智花ちゃん長谷川さんのこと大好きだもんね」

「おーともか。お顔まっかー」

「うう……愛莉もひなたもからかわないでよお」

紗季が遅れて出してくれていた助け船は、乗せてくれないどころか、真帆側の援軍を運ぶ船だったようだ。

「えつと……みんなどうして私が昴さんのこと考えてたってわかったの?」

「だってトモ、その髪留め触ってる時ってだいたい長谷川さんのこと考えてるでしょ」

私の質問にあっさりと答える紗季。確かにこれから何かを始めようと思うときに、つい昴さんに甘えたくなって手が伸びてしまうことはあるけど――

「ふええ!? そ、そうだけど。私、そんなに触ってた?」

「あく本当に重症だな。長谷川さんのテスト期間が終わったらすぐにも会わせてあげないと一大事だ」

「もつかんーもつかんがすばるんにラブラブなのは、みんなわかってんだぜー?」

「おーともか、いつもさわってるよー さわってるときのもか、たまにへんなお顔してるー」

「ひ、ひなちゃん! えつと、全然変じゃないよつ。好きな人のことを想ってる、とても幸せそうなお顔してると思うよ」

みんな好き勝手言っている中で、愛莉だけが必死にフォローしてく

れたけど、言ってることはやっぱりみんなと同じだった。

「はうう……これからはもう少し触る回数減らすように気を付けないと……」

「——って、トモ言ってる側からまた触ってるから」

「こ、これは違うよっ！ バスケ始めるときは危ないから外そうとしてただけだよお！」

「でも、今日のリボンもすばるんからのなんだろ。しってる」

「はううう!? お願いだからもう許してよおおー!!」

髪留めを外すと丁寧に脱いでいたジャージのポケットに大切にしまう。

「そ、それじゃみんな今日も始めていくよっ」

「ふふ。そうね。そろそろ真面目に部活も始めないとね」

「よっしやーいっばい笑って満足したし、今日もがんばるぞー!!」

「えへへ。ごめんね。智花ちゃん、今日もよろしくお願いします」

「おー! きよーもみんなでがんばるぞー!」

このままだとみんなにかかわれたまま終わってしまうと思い、恥ずかしい気持ちを必死に押さえ、誤魔化しながら強引に部活動の開始を宣言すると、ようやくみんなも表情を引き締めてくれた。

「最初はダッシュから始めていくよー!」

『おー!!』

昴さんがいなくても、今日もみんなで頑張ろうね。そんな想いを込めながら一斉に走り出した。

## お風呂会議プロローグ

久しぶりに真帆の家のバスケットコートをお借りしてみんなでバスケットをする事になった。

元々今日は男バスが体育館を使用する日なので、部活自体もお休みだけど、昴さんがここ最近とても忙しかったため、直接ご指導頂けなため練習不足になっていないかが不安だった。

——指導して頂けない分せめてしつかり自主練しないと。と考えていたら、みんなも同じ気持ちだったみたいで、

真帆が「どうせなら久しぶりに家でみんなでれんしゅーしよーぜ」と私たちを誘ってくれた。

今日の朝練の時に昴さんにもこの話をしてみたら、「頑張り過ぎないことと、ケガに十分注意すること」という条件で笑顔で許可を頂いた。

そして、せっかくみんながやる気になってくれるのに、コーチすることができないことを本当に申し訳なさそうにされていた。

「昴さん……」

どんな時でも私たちのことを大切に考えてくれている。

——昴さんがいらつしやらない時でもしつかりがんばらないと。

そんなことを考えていたら突然真帆に抱き着かれてしまい、からかい混じりに「すばるんと約束守んないとダメだかな」と体中を撫で回されてしまい思わずドキドキしてしまった。

いつも以上に念入りにストレッチを行い、ダッシュで身体を温めてから、基礎動作の反復練習。

そして、最近昴さんが私たちのために考えてくれた特別訓練の準備をする。

私と紗季のコンビネーションと真帆と愛莉とひなた三人のディフェンスを重点的に強化するために、私と紗季の二人と真帆、愛莉、ひなたの三人に分かれてミニゲームを開始した。

\*

場面は真帆と紗季が今日二回目の正面对決を迎えた。

真帆は紗季を絶対に通すまいと。紗季は正面で構える真帆の動きに警戒しながら、じつくりとその状況下で自分が取るべき最善手を考えている。

私がひなたと愛莉の動きに注意しながらも、紗季を見ているように、紗季も私の動きを。そして、私に動いて欲しい場所を伝えるように視線を送ってくれている。

「紗季!!」

「トモ!!」

お互いにフェイクを混ぜて作りだした一瞬の隙を突き、私は愛莉とひなたを一気に振り切り、紗季のパスは真帆の足元を潜り抜け、一直線に私が駆け抜けた先へと届く。

受け取ったボールを構えシュート体勢に入る。

自分が常に思い描き続けている理想のフォームへの想いを込め――放った。

みんなの視線を釘付けにしながら放物線を描いているボールは、ボードやリングに触れることなく、ただネットを擦る音だけを立てながらゴールを通過した。

ボールが二度三度と地面にぶつかり転がり出すのと同時に真帆が溜めていた息を大きく吐きながら、その場に仰向けに倒れ込む。

「あーつかれたーすばるんもガンバリすぎんなって言ってるし、今日はこんくらいでいいじゃねえ?」

「そうね。ちょうどきりもいいし。私もだけどみんな疲れただろうしね」

「うん。それじゃ、今日はここまで」

『お疲れ様でした!!』

みんなで自分と相手への労いの声を掛け、今日の部活動を締めくくった。

「ちえくせつかくサキを一回止めれたから、今日はあたしの勝ちだと思っただのにー」

「ま、引き分けがいいところでしょ。私も真帆に止められたままなのはイヤだし、どうせなら今度は直接抜いてあげるわ」

「やっぱ智花ちゃん、すごく上手いし羨ましいなあ」  
「おーひなとあいりのだぶるちーむでもかてなかった」  
「そ、そんなことないよっ。二人ともどんどん上手くなってるよっ」  
反省会。というほどのものではないけど、自然とみんなで今日の部活のことを話しながらお風呂場へ向かう。

\*

「うわあ……汗ベトベトで気持ちわるいー」

みんなで脱衣場に着くや否やすぐに真帆が服を脱ぎ出す。

上も下も一緒に脱ごうとしているため汗で湿っている体操服は肩の途中で引つ掛かり、下は同じく汗をたっぷり吸ったスパッツとパANTSが片足に引つかかっている。

すごく脱ぎ辛そうだが、お構いなしに強引に脱ぎ捨てていく。

「おー。まほはやーい。これはひなも負けてられない。あいりーてっだってー」

両手を上げ万歳の姿勢で愛莉を見つめている。

「うん。ひなちゃんいくよー」

「おー」

スポーンという音が聞こえそうなくらい綺麗にひなたの体から体操服が引き抜かれていった。

「——ってひな。愛莉に手伝ってもらわないで自分で脱ぎなさい！」

「えっと、下の方は私も恥ずかしいから自分で脱いでね」

「おー。まかせろー」

そういつてスルスルとスパッツと一緒に下着も脱いで脱衣カゴに入れると真帆の後を追いかけていった。

先にお風呂場へと向って行った二人と同じく、汗で少し衣服が張り付いているけど、ゆっくり順番に脱げば特に苦勞なく上も下も脱げる——脱げてしまう私と紗季……

それに対して、ひなたを手伝っていた愛梨は汗でべったりと肌にくっつく服を脱ぐのに手間取っているようだ。

胸が引つかかって窮屈そうになっていたり、大きなお尻と長い脚に体操服やスパッツがまるで自分の意志で愛莉の体から離れまいとし

ているかのようだ。

「……トモ。愛莉置いてって先に行こっか」

「ふえ!? そ、それはちよつとかわいそうだよ……羨ましいけど……」  
紗季と羨望の眼差しで見つめてから手伝ってあげると、「うう……二人ともごめんね」と顔を赤くした愛莉が忌々しげに自分の体を撫でていたけど、その動作すら羨ましく思えた。

「あーあー。すばるんも来れば良かったのに〜」

五人揃って湯船に浸かったところで真帆がみんな内心で思っている、あえて言わなかった不満を声に出す。

「もうー、仕方ないでしょ。長谷川さんにだって都合があるんだから。いくらご指導して頂いてるからって、ずっと付きっ切りってわけにもいかないでしょ」

紗季の言うとおり、昴さんは今はテスト勉強中だ。私一人だけ朝練でお会いしてしまっているため、一日中会うことができないみんなに少し後ろめたさを感じてしまう。

みんなは自分たちにはそれぞれ用事があるから気にしなくてもいい。とは言ってくれてるけど、みんなだって本当は昴さんと会いたいと思っっているのに。

私がいんまりした表情になったのを知ってか知らずか真帆が話題を変えてくれる。

「……にしても、やっぱりアイリーンのおっぱいはずりーよなあーフコーヘーだー!」

「あんだ、みんなでお風呂入るたびに毎回それ言ってるわね。言ってる虚しくならないの?」

「あたしは将来、ゼツタイ巨乳になるから大丈夫だ。」

私も人のことは言えないけど、真帆がない胸を張っている。どこにそれだけの自信があるのかはわからないけど、それでもあの自信は私も見習わなきゃ……きつと大きくなるもん。

「なんの根拠があって言ってるんだか……でも、私も真帆に負けてられない!」

「私だって大きくなるもんっ……なるんだもんっ……」

「おーひなもあいりみたいに大きくなって。おにーちゃんをのうさつするー」

「うう……背だけじゃなくて胸までこれ以上大きくなっちゃったら困るよおー」

気づくとみんなが自分の胸を揉み始めていた。

真帆は必死の形相と気合で叫びながら力いっぱい自分の胸を押しつぶし続ける。あれじゃ逆に余計ペったんこになっちゃいそうなの……

紗季は無言だけど、隣で必死に胸を揉んでいる真帆に対抗心が燃えちやつてるみたいだけど、少し力が入り過ぎてるんじゃ……

ひなたはおっとりした様子でマイペースに鼻歌交じりで自分の胸の感触を楽しむように揉んでいる。せめて私もひなたくらいあれば……

愛莉は……みんなに釣られて少しペタペタ触ってる感じだけど、これ以上大きくなったらどうしよう。とか、そんな心配してそうな表情だ……羨ましいよお……

私も、もつと大きくなって欲しいのに……大きくなれば、きつと昴さんも喜んでくれるかな？

それぞれの思惑で自分の胸を触っていた時に、唐突に真帆が口を開いた。

「あーあー、もっかんはいつもすばるんにしてもらってんだろーしいなあー」

「え!?! と、智花ちゃん、長谷川さんとそんなことまで……」

「ふえええ!?! そ、そんなことしてもらってないよっ!!」

とっさに否定しながらも真帆の一言で昴さんに私の胸を揉まれてる様子を想像してしまった。

「おー。ともかお顔まっかー。でもいいなーひなも、おにーちゃんに大きくしてもらいたいー」

「だからそんなこと一度もしてもらってないんだってばっ!!」

「じゃー、今度すばるんに頼んでみよーぜ!」

「真帆にしてはいい案ね。トモの胸だったら、きっと長谷川さんも喜んで協力してくれると思うわよ。してもらってない。つてことは本当はトモだつてして欲しいんでしょ？」

「ち、ちがっ!? そういう意味で言ったんじゃないよっ!」

さつきから昴さんが優しい笑顔で私の胸を揉んでいる姿が頭から離れない。

頭の中の昴さんが囁く——智花……智花のおっぱい。いっぱい揉んで大きくしてあげるからね。

——違う。昴さんはそんなこと言わない。変な想像してしまつて本当にごめんなさい。

「よーし! それじゃーみんなですばるんにおっぱいマッサージ頼んでみたらどうなるか考えてみよー!」

その一言で私だけでなく、他のみんなまで自分の胸を昴が揉んでいる様子を想像してしまつていた。

変わらずにこにこ笑顔のひなた。

両手で庇う様に胸を抑えている愛莉。

どこか自信に満ちた表情をしている真帆。

抑えきれずニヤニヤとした笑い声が漏れてしまつている紗季。

みんな戻つてきてー

そんな願いが通じたのか再び真帆が高らかに宣言する。

「よーし! みんな準備おつけーだな! そんじゃー誰から発表するー?」

——ダメだ。全然通じてなかった。何も知らない昴さんをこんなことに巻き込んでしまつて本当にごめんなさい。

「おー。まずはひながはっぴよーするねー」

「お、さすがヒナ早いな。じゃーさいしよはヒナからだー」

私と愛莉がどう逃げるかを考えている間に羞恥心とは無縁のひなたが高らかに宣言してしまつた。

心なしか真帆もわずかに頬が赤くなっているみたいだったけど、勢いそのままに突っ込み過ぎて引くに引けなくなつてしまつているよ



うにも見える。

「おー。まかせろーえつとねー」

いつもの調子でマイペースに自身が考え作り出した独特な物語が  
少しずつ紡がれていく。

\*

「ひなたちゃん。入るよー」

「おー。おにーちゃんいらっしやーい。ひな、まってましたー」

腰にタオルを巻いただけの恰好で風呂場のドアを開けると、ちよこ  
んとイスに座っていたひなたちゃんが笑顔で出迎えてくれた。

俺がすぐにでも始められるように。と気づかってくれていたのか、  
とても細く白い透き通った肌には、タオルなどという余計な装飾など  
一切身に着けていない。

そう、今ひなたちゃんは俺の目の前に生まれたままの姿をさらけ出  
しー

——って、それはダメー!!!

いきなりひなたの話が危険な方向に脱線したことに思わず大声を  
出してしまい、ひなたの発表会が中断させてしまった。

「ぶー。今はひなの番なのにー。ともか、ひなのほーこくかいのジャ  
マしちやだめー」

「そうだぞーもつかん。せつかくヒナが、みんなに話してくれてるん  
だから、ジャマするなー」

「うう……ひなた、途中で大声出しちゃってごめんね……で、でも昴さ  
んの前では、ちゃんとタオルで隠さないとダメだよっ」

「そ、そうだよ、ひなちゃん。男の人の前なら、せめて隠さないと恥ず  
かしいよう」

すぐに愛莉もこちらの意見に賛成してくれた。

例えば話だとしても、す、昴さんに…は、裸を見られるのは……

「おー。たしかにー、おにーちゃんなら、別にいいけど、たけなかだっ  
たら少しイヤかもー」

「ああ、ひな。長谷川さんにはもちろんだけど、間違っても夏陽にも絶

対言うなよ。多分あいつ本気で泣いちやうと思うから」

「おー。りようかいー。たけなか泣かしちゃったら、ひな悪い子になっちやうー」

無意味に巻き込まれた竹中君を不憫に思いながら、相変わらずひなたの無防備さに羨ましさと同時に危うさを感じる。

今までだって何度も昴さんが、すぐに目を逸らして頂いてるから良かったものの、もしかしたら何度か見られちゃってるんじゃないか……

「でもさータオル巻いてると、まったいらな奴らはすばるんに、どこがおっぱいか気づいてもらえないんじゃないかー」

「ふえ!? ……いくらなんでもわかると思うよ……思うよね……?」

「自分のこと棚に上げて何言ってるのよ。じゃーあんたもひなと同じくすっぱんっぽんで長谷川さんに胸を揉まれまくったらいんじゃない?」

あまりにもな大胆すぎる物言いだと思ったけど、そのおかげで真帆もその様子を想像してしまい恥ずかしくなったのか、ほんの少しだけ冷静さを取り戻してくれたみたいだった。

「や……さすがにそれは……す、すばるんには刺激が強すぎんじゃないかなーあ、あたしは全然平気だけどさー!」

声が少し震えている。

いくら真帆でもひなたみたいに裸を昴さんに見られても平気だとは思わない。

ひなたには悪いけど、これで発表会がうやむやになってくれる。そう思った矢先、唯一の味方だと信じていた愛梨から飛んでもない爆弾が投下される。

「あー! でも、前に本で直接触らないとあまり効果が出ない。って読んだことが——っ!?」

「なにー!! アイリーンそんな大事なじょーほーどうして黙ってたんだーっ!!」

「ごめん!! 今の忘れて! ホントに何でもないからー! 多分読み間違えただけだから!!」

「うそだー! 絶対大事な話だろー! 包み隠さず全部教えろー!!」

無意識に出てしまった一言に頬を赤らめながら、必死に真帆の追求から逃げようとしている愛莉。

「ぶー。ひなのはっぴよーかい。いつになっただらさせてくれるのー？」

「悪いな、ひな。ちよつと愛莉が隠し持ってた最重要機密を聞き出したら、すぐに再開するから。トモも気になるだろう？ あ、聞いたからにはもう発表会に参加しないなんてことは許さないから覚悟しろよー」

目をギラつかせた紗季が真帆と愛莉の元へ音もなく近づいていくと、すぐに愛莉を後ろから羽交い絞めにした。

「愛莉ー自分には必要ないからって。なんでそんな大事なことを隠してたんだー」

「え!?! ……さ、紗季ちゃん……!! 隠してたわけじゃないよー」  
マンツーマンからダブルチームとなり、愛莉はそれ以上逃げられない。

「ナイスだ紗季！ ほらほらーアイリーン。さつさとはいて楽になっちゃまえよー」

「きやあ!! ……お、お願いだからそんなに揉まないでー!! ひなちゃんもダメえくく!」

いつの間にかひなたまで参戦してトリプルチームになっていた。

なかなか口を割らない愛莉。だけどあともう一人分くらいの力が加わればもしかしたら……

「……ねえ、愛莉。さつきお風呂入るときに服を脱ぐの手伝ってあげたよね——だから……ごめんねっ」

「智花ちゃんまでー!?!」

——この後みんなで、めちやくちや愛莉のおっぱい揉んだ。

ことが終わり、すっかり長湯になり火照ってしまった身体を丁寧に拭きながら、私服へ着替える。

思ったよりも話に夢中になり過ぎてたので、のぼせてしまうといけないからと、紗季の提案で続きは真帆の部屋ですることになったためだ。

「おー。やっぱ愛莉のおっぱいが一番気持ちよかったー」

「クツ……やっぱあれの前では、いかに自分が小さな存在か思い知らされてしまう」

「まーいーじゃんかー。ちゃんと愛莉からも聞き出せたんだし。これであたしもきよにゆーの仲間入りだー」

「ごめんね。愛莉。私まで夢中になっちゃって……あ、でも、あれだけ動かされたんだったら逆に脂肪が燃烧されて小さくなるんじゃないかな？」

「それならいいんだけど……すごく恥ずかしかったよお」

\*

引き続き行われた秘密の発表会は、みんなで恥ずかしながらも自分の想像を語り合った。

みんな自分が話す時も聞く時も顔を真っ赤にしてしまっていたけど、みんなとたくさん話すことができて、すごく楽しかった。

みんなの胸を揉む昴さんを想像するのは、恥ずかしいような、なんだか寂しいような感じがしたけど、みんなの中の昴さんを知ることができたのも嬉しかった。

そして、最後に私が想像してしまった、昴さんが私の……を話し終わったところで、みんなの考えが一つになった。

——これは私たち五人の秘密にしよう。

ひなただけ少し不思議そうに首をかしげていたけど、紗季が「長谷川さんには内緒の私たち五人だけの秘密だ。」と話す嬉しそうに納得していた。

昴さんには申し訳ないことをしてしまったと思うけど、みんなとの絆をもっと深めることができた感じがして、すごく嬉しかった。

その後、ひなた以外の私達4人は、この時の話がいつまでも記憶に残ってしまい、恥ずかきで昴さんの顔をまともに見ることができなくなってしまうた。

不思議そうな、どこか申し訳なさそうな顔をしている昴さんに、こつちが申し訳なさを感じてしまっていたけど、すぐに昴さんの優し

さと時間が、私たちの溝をあつさりと埋めてしまった。

みんなの長谷川昂コーチ。ひなとおにーちゃんのおつきくなりたくなっ

お風呂場でのガールズトークは盛り上がりいつまでも終わりを迎える気配はなかった。

愛莉からの最重要情報を入手し、ほくほく笑顔の紗季がみんなをまとめる。

最高潮を超えて上がり過ぎてしまったテンションのクールダウンを兼ねて一度場所を移すことを提案していた。

「いい具合に盛り上がりすぎて来たけど、このままお風呂場で話に夢中になってるとみんな上せてちゃうし、続きは真帆の部屋でしない？」と、提案した紗季自身はもちろん私達も羞恥心と入浴の二つの暑さから体の火照りが、かなり強くなっていることを感じていた。

中でも突然話題の中心とされていた愛莉はフラフラで、倒れてしまいうんじやないかと心配になるくらい真っ赤になってしまっている。

真帆の部屋に集まり、腰を下ろす頃にはみんなだいぶ落ち着いてきた様子だった。

みんなに配られたオレンジジュースが火照った体を心地よく冷やしてくれる。

「ふふふふふ。さて、それじゃ一息ついたんだし、再開するわよ！

トモも愛莉も覚悟は決めたわねっ」

アイスエイジってなんだっけ？と思わず言いたくなるような普段の紗季からは想像も付かないくらい興奮しているように見える。

もしかしてバスケの時以上に熱くなってるんじゃない？と思つたところで、さすがにそれは失礼だと心の中で謝る。

その紗季の熱気に同調するように、すっかり回復した真帆が会話に加わる。

「お、サキと気が合うなんてめずらしいな。それじゃヒナ！ 今度こそイチバンヤリまかせたぞー」

「おーまってましたーひながみんなのつぱーひらくよー」

一度閉じられてしまったひなたの心の世界が再び解き放たれる。

\*

「ひなたちゃんお待たせーようやく準備ができたよ」

「おーいらっしやーいっ」

お風呂場のドアを開けるとひなたちゃんが元気な声で迎えてくれた。

ついさつき同じ場面で裸ん坊のひなたちゃんに迎えられた気がしたが、決してそんなことはない。

しつかりと。とは言い難いが、それでも日ごろからみんなに注意されているためか、今回はおっぱい以外の女の子の特徴的な部分である、おまたやお尻が隠れる様にタオルが腰から膝元辺りまでを覆っていた。

かなり心もとなく、ほんの少し動いただけで、すぐにひなたちゃんの体から滑り落ちてしまいそうなくらい危うい状況ではあるが。

ひなたちゃん自身が気にしてないんだから、俺も気にしないことにする。今回の目的はひなたちゃんのおっぱいなんだから。

「それじゃ、ひなたちゃん。ひなたちゃんのおっぱいが大きくなるよ  
うマツサージするからね」

「おーどんとこーい。ひなもあいりみたいにおつきくなるぞー」

みんなの中では一番小柄なのに、おっぱいの大きさは2番目という可能性を秘めた存在。そんな、ひなたちゃんのおっぱいを揉み始めた。

サイズとしては年相応の大きさではあるが、ひなたちゃん自身が元々小柄なためか意外とぷにぷにとした、ふくらみを堪能できることに驚きだ。

「ひなたちゃん、どうかな？ 痛いとかくすぐったいとかないかな？

もしどこか変なところがあつたら、遠慮なく言ってね」

「おーそのままでもいいじょうぶーつづけてー」

意外な揉み心地の良さに思わず夢中になって揉み続けてしまいそうだが、おっぱいソムリエたるひなたちゃんに少しでもイヤな思いをさせてしまつてはいけない。

少しでもひなたちゃんにそぐわない揉み方をしてしまえば、ひなたちゃんのおっぱいを大きくすることなんて夢のまた夢になってしまう。

誠心誠意丁寧に優しくひなたちゃんのおっぱいを揉み続けていると、突然ひなたちゃんが口を開く。

「おにーちゃん。あんまりこわいかおしちやだめー！ おっぱいは気持ちいいんだから、楽しくもまないでだめなのー」

ひなたちゃんの一言に衝撃を受けた。確かにその通りだ。俺はひなたちゃんに気に入られることのみ集中しすぎてしまい、

俺自身がひなたちゃんのおっぱいを揉むという行為に対して、まったく楽しみを求めていなかった——揉み心地の良さは本当に気持ちよかつたけど、そんなのこの場に限って言えば、些細なことだ！

そんなの俺におっぱいを差し出してくれたひなたちゃんに対して失礼すぎるだろ。

「ありがとうひなたちゃん。俺、ひなたちゃんのおかげで目が覚めたよ。せつかくひなたちゃんが俺におっぱいを揉ませてくれてるんだ。俺もいっぱい楽しませてもらうよ」

「おーさすがおにーちゃん。これはおにーちゃんもおっぱいソムリエにならざるをえないっ！」

心機一転しておっぱい揉みを再開した俺の様子にひなたちゃんも嬉しそうに無垢な笑顔を向けてくれた。俺もひなたちゃんの期待に応えないとな。

やがて事前に決めていたマッサージ時間が終わりを告げる。

幸いにもひなたちゃんの機嫌を損ねて途中で終わりを告げられてしまうという事態だけは避けることができた。

だが、実際にひなたちゃんの口から直接、判定結果を告げられなければ決して安心なんかできない。今だって不安でいっぱいだ。

「どうだったかな？ ひなたちゃん。俺、ひなたちゃんのおっぱいをちゃんと揉むことができたかな？」

「おーごうかくーおにーちゃんもなかなかやりますなー」



ひなたちゃんの写真の合格判定に不安が一気に吹き飛んだ。

「やったー!! よかった。ひなたちゃんのおっぱいちゃんと揉むことができたんだね!」

「おーなかなか気持ちよかったーでも、一流のおっぱいソムリエはまだ道がきびしいんだよー」

喜びも束の間、改めて自分が目指している道の厳しい現実を師匠から直々に突きつけられてしまった。

「そっか。俺もつともつと上手くならないとダメなんだね。」

「うん。ひなもまだまだーでも、おにーちゃんのおかげで、ひなももつとうまくなれたかもー。だからお返しにひなもおにーちゃんのおっぱいが大きくなるようにマッサージしてあげるねー」

ひなたちゃんが俺のおっぱいを揉んでくれる。俺がさつきまでひなたちゃんにしていた揉み方とはまるで練度が違う、とても精錬された揉み方だ。

対象のおっぱいの大きさや形に合わせて優しすぎず強すぎず、それでいて、とても丁寧で一切の不快感を感じさせない。まさにおっぱいソムリエだ。

やはり今までに揉んできたおっぱいの数が絶対的に違いすぎるということなのか——よし、これからは俺ももつともつとたくさんのおっぱいを揉み続けなければ!

「ありがとうひなたちゃん。一緒に愛莉みたいな、いやそれ以上に大きなおっぱいになろうね」

「おー二人でいっぱいがんばるぞー」

そして、ひなとおにーちゃんはいつまでも笑顔で笑い合いました。おしまい。

.....

話し終わって満足している、にこにこ笑顔のひなた以外の全員の間が止まっていた。

ダメだ。恥ずかしさに負けずに最後まで頑張ろうと思っていたけ

ど、最初から挫けてしまいそうだ。

頭痛がしたわけでもないのに、頭を抱えてしまう。相変わらず自分の独特な世界観を持っている子だと言うことを痛感した。

「あーひな。わかってるとは思うけど、男の人はおっぱい大きくならないからな?。」

この状況からいち早く復帰に成功した紗季が凍結した空間の解凍を試みる。

「おー知ってるー。でもおにーちゃんだったら、おつきくならないかなー?おつきくなくなったおにーちゃんのおっぱいもひな揉んでみたいなー」

「いや長谷川さんでも無理だろ。っていうか、長谷川さんが私たちよりおつきくならたら、色々イヤだし、なによりトモが一番困るだろ」

「そこでなんで私に振るの?!」

「だってすばるんに、『悪いけど俺よりおっぱいが小さい奴とは付き合えないんだ』とか言われたらもっかん詰むだろ」

それはイヤだけど——っていうか

「ねえ……私の胸ってそんなに見込みないのかなあ……みんなから見るとそんなに成長しなさそうなの……」

「そ、そんなことないよ! 智花ちゃんだって絶対に大きくなるよ!!」

「さすがに男の人より小さいままなんてことはないだろ。真帆も悪乗りしすぎだ」

「もっかんごめんな。さすがにからかいすぎた」

すかさず愛莉がフォロース、紗季が真帆を窘め、罪悪感を感じた真帆も素直に謝ってくれた。

「私だってホントに心配してるんだから、あんまりいじめないでよお……」

情けないことに今にも泣きそうなくらい涙目になってるのが自分でもわかる。みんなが本気で私をいじめてるわけではないのはわかるんだけど、ここまで言われると本当に不安になる。

「おーここはひなの出番かもー?。」

落ち込んでいた私のところへひなたが滑り込んでくると、いきなり私の胸を揉み始めた。

「ふえ!?… ちよっ…ひなた!?!」

「ダメー… もう少しジツとしててー」

戸惑っている私のお構いなしにひなたが胸を揉み続ける。

ひなたの小さな手の中にすら、すっぽりと収まってしまふ私の膨らみ……

最初は恥ずかしく身体を揺らしてなんとか逃れようと抵抗していたが、ひなたはお構いなしに私の胸を揉む。

手の平全体で包み込まれたり、指先一本一本で感触を確かめられるように丁寧に揉まれたりと、常に変化がある刺激を胸に送り込まれ続ける。

すると不思議なことに、次第にどんどんマツサージが心地よくなってきた。次第にどんとどんとマツサージが心地よくなってきた。

「きつとこれでもかのおっぱいも大きくなるよー」

「……はうう……なんかひなたに揉まれるの、すごく気持ちよかった……ひなたありがとう……もしかして本当にひなたがいつも触てるから愛莉の胸も……」

さつきまで暗い表情だったのが嘘みたいに気持ちが高揚してしまっていた。そして私の変化を見ていた真帆が興奮気味に叫ぶ。

「ヒナ!… あたしにもやってみてくれ!… すっげえ気になる!!」

「おーまかせろー」

もみもみもみもみもみもみもみもみもみもみもみもみもみ

「うおおお!!… なんだこれ!?! ホントにすっげええええ!!!… ヒナ!

マジですげーぞー!… さすがおっぱいソムリエだ!!」

「おーせんきゅー」

どうやら真帆もひなたのマツサージがとても気に入ったようで、ひなたを強く抱きしめ全身で喜びを伝えていた。

「なあ、ひな……私にも試してみてくれないか?」

「いいよーささきのひかえめのふかふかもすきー」

真帆の反応に紗季も気になったのか、うずうずと悩んだ末にひなた

にお願いしていた。

もみもみもみもみもみもみもみもみもみもみ

「くっ！ まさか本当にこんなことが!? いや、これで確信した！  
ひなが愛莉の胸の成長を促進させているに違いない!!」

「ええ!? ……ひなちゃん、これからは私の胸、揉んじやダメだよ!」

「えーひな、あいりのおっぱい好きなのに、もう揉んじやだめなのー  
?」

ひなたがとても残念そうに、そしてどこか寂しそうに、上目づかい  
で愛莉を見つめている。

純粹に好意を向けてくれているひなたに対して愛莉も強く禁止な  
どできるはずもなく、やっぱり優しく受け入れてしまっていた。

「え、えつと……その……絶対ダメってわけじゃなくて、たまになら  
……で、でも絶対にこれ以上私の胸を大きくしちやだめだよ?」

「おーあいりありがとーこれからは少しひかえめに揉むねー」

先ほどの少ししよんぼりした顔からすっかり笑顔に変わったひな  
たと、少しだけ困り顔だけど嬉しそうな愛莉。

やっぱ二人とも仲いいなあ

真帆と紗季も幼馴染だけあって、たまにすごく息が合ってる時もあるし。

私ももつとみんなと仲良くなりたいな。

すごく恥ずかしいけど、みんなのお話をいっぱい聞いたら、みんな  
のことが、もっとよくわかって仲良くなれるんだから、頑張らない  
とっ!

「でも、ひなた。毎回言ってるけど、昴さんに胸を揉ませるのはもちろ  
ん見せるのも絶対にダメだからねっ!」

「おー。りよーかーい」

みんなの不安をよそにひなたは両手を上げて元気よく答える――  
本当に大丈夫だろうか?

「よっし。じゃー次にはっぴよーしたい人ー」

……あ、もしかして、これ、いつか私もみんなに話さないといけな  
くなっちゃうんだよね?

あまり気づきたくなかったけど、気づいてしまった事実には戸惑っている間に、真帆の呼び掛けに一つの手が上がっていた。

みんなの長谷川昴コーチ。俺を信じた愛莉を満足させてみせる。

「よっしゃー次はだれがハッピーヨーするー?」

元気な真帆の声とは正反対にビクビクしながらであるが、高らかに一つの手が上がった。

「じゃあ、私が……恥ずかしいけど」

「ふええ!? 愛莉……いいの?」

「お、アイリーンが二番目か、ずいぶんとセツキヨクテキになったなあ、あたしはうれしいぞっ」

「そうね。私もてつきり最後はトモか愛莉のどっちかになるかな? っ  
て思ってたけど、意外と早く愛莉が決心してみたよね」

「おーつきはあいりのおはなしーひな楽しみー」

みんなからの注目を浴びて恥ずかしそうにしている。

ちよつとだけ体を縮こませてしまっていたが、それも一瞬。

目を瞑りながら、一度だけ大きく頷くと、ゆつくりと顔を上げ目を開き、強い意志が感じられる瞳で私たちのことをしっかりと見つめ返してくれた。

「う、うん。みんなと話すのは大好きだし、みんなといっぱい秘密を共有すれば、もっと仲良くなれると思うから——それに、早い方が多分、みんなの話を聞いてもっと恥ずかしい話が思いついちやっても話さなくてもいいかなって……」

話し終わる頃には、また恥ずかしさが戻ってきてしまったのか、顔が赤いのは変わらずだが徐々に声が小さくなっていく。

愛莉も自分と同じくみんなともっと仲良くなりたい。と思っただけを知ることができたのが本当にうれしい。

ちよつとずるいけど、愛莉が勇気を出して見せてくれた方法を私も使わせてもらおうかな?」

——愛莉の次は私が話すね。そう告げようと思った瞬間、ほんの一瞬だけメガネの奥の瞳が細くきらりと怪しい輝きを放っていた紗

季と目があつたような気がする。多分気のせいだよな？

「なんだーアイリーンすこしズルいぞーっ思ったことは、もつとバンバン口にだしちゃえよー」

「まあ、それくらいはいいじゃない。あ、でもトモは「愛莉の次は私が話すね」って言つても委員長権限で却下するから」

「ふええ!?! ど、どうして!?!」

真帆が少し不満そうな様子だけど、引つ込み思案の愛莉を気遣いつつ、同じく引つ込み思案なはずの私に対してはしっかりと釘を刺されてしまった。

やっぱり目が合ったのは気のせいじゃなかった。しかも紗季に自分の考えが見抜かれていた。

「どうしてって絶対愛莉のまねして、すぐに終わらせて楽になろう。って思つたでしょ。トモの話が一番楽しみなんだから、私たちの話が終わるまでしつかり長谷川さんにマツサージしてもらおう様子を想像してなさい」

「そうだぞーもつかん。カンネンして身も心もすべてさらけだしちゃえー」

「私も智花ちゃんのお話は気になるかな。智花ちゃんが一番長谷川さんを知っているんだし。きつと素敵な話をしてくれるんだと期待しているよ」

「おーひなもみんなのお話きくの楽しみー」

気づくと、何故か逃げ道を完全に塞がれるどころか、さらにハードルまで上げられてしまつていた。

私が昴さんにおっぱ……胸を揉まれる話にみんなはいったい何を期待してしまつているんだろう。

頭の中では相変わらず笑顔の昴さんが私の胸を揉んでいる様子が浮かび上がってきては、恥ずかしくなる。

「おーいトモー構想を練り込むのはいいけど、ちゃんとみんなの話も聞かないとダメだぞー」

「練つてませんからっ!!」

ダメだ。気持ちを切り替えないと。今は私と同じくらい恥ずかし

がり屋の愛莉が勇気を出してくれてるんだから、私もしつかり見届け  
ないとおつ。

「あんまり真剣に聞かれると恥ずかしいから、そんなに期待しないで  
ね？」

そして、顔を赤くした愛莉が一言一言確かめるように彼女が想い描  
いた物語を語り始める。

\*

「愛莉！ ラスト一本。最後までがんばれ!!」

「はい!! お願い！ 入って!!」

俺が放ったボールがゴールボードに当たり強く跳ね返る。

それを持ち前の長身とジャンプ力でしっかりとキャッチ、そして力  
強く着地すると同時にボールを抑え込む。

一拍置いて再び跳躍し、シュートを放つ——放たれたボールは綺麗  
な放物線を描きゴールを潜り抜ける。

「よし。今日はここまでにしようか。おつかれさま、愛莉」

「はい。ありがとうございます。長谷川さん、無理を言ってお願  
いしてすみませんでした」

今この場にいるのは俺と愛莉の二人きりだ。

なんでも俺に頼みたいことがあるらしく、せっかくだから少しバス  
ケの練習も見て欲しいということ、こうして二人きりの秘密特訓を  
行なっていた。

「それじゃ、さっそくになっちゃうけど、本題の方を聞いてもいいかな  
？ それとも少し休憩してからにする？」

引つ込み思案だった愛莉が俺を頼つてまでしてくれた相談事だ、す  
ぐにでも解決してあげたいという気持ちもあるが、まずは愛莉自身が  
しつかり話しやすい状況になった方がいいだろう。

「いえ。長谷川さんがお疲れでなければ、今お願いしたいのですが  
……」

「了解。愛莉のためにできることなら、なんだったとするつもりだから、  
遠慮なくどうぞ」

自分でも安請け合っていると思われるてしまいそうな言い方だと



はわかってるが、きつとこの方が愛莉も気楽に話しやすいだろう。「で、では……は、長谷川さんには大変申し訳なくて頼みづらいのですが……長谷川さんにしか頼めないんですっ」

体操服の裾をぎゅつと握って、絞り出す様に必死に言葉を紡いでいる。

もしかしたら俺には荷が重すぎる内容なのかもしれない。一瞬そんな考えがよぎるが、頭を振りすぐに気持ちを切り替える。

たとえ無理難題であろうと、それでも愛莉は俺を信じて頼りにしてきてくれたんだ。ならば俺は愛莉のコーチとして悩みを正面から受け止め、自分ができる最善を見つけ出すだけだ。

「その……………」

「うん。愛莉のペースでゆっくりでいいよ。俺はちゃんと愛莉の言葉聞いているし、いくらでも待つてるからね」

じっくり愛莉の言葉の続きを待つ。決して焦らせてはいけない。愛莉だって悩んで末に俺に相談すると決意してきてくれたんだ。

やがて愛莉も決意が固まったのだろう。俯いていた顔を上げて俺の目をしっかりと見つめる。

そして、はっきりとした口調で俺に想いを告げてくれた。

「お願いします。私の胸を揉んでください!!」

「ああ！ 任せてお……………え？」

——今なんて言いましたか？

「…………えっと、ごめん愛莉。ちよつと聞き間違いじゃないかと思うんだけど、もう一回聞いてもいいかな？」

「え!!」

顔を真っ赤にしているのは変わっていないが、さらに驚いた顔で止まってしまっている——が、

「お、お願いします！ 私の胸を揉んでください!!」

俺の言葉攻めに従い、本当にもう一回はつきりと同じことを言うてくれた。

どうやら俺の聞き間違えではなかったようだ——というか、愛莉にこんなこと二回も言わせるなんて羞恥プレイ以外の何物でもないだ

ろ。本当にごめん!!

——と、愛莉に心の中で謝罪したところで、さてどうしたものか……

「一応理由を聞かせてもらってもいいかな? 愛莉にとっても間違いなく一大事なことになっちゃうわけだし」

「そ、その……豊胸マッサージって……知ってますか?」

およそ愛莉の口からは出てくることがないと思った単語がでてきた。

「知らないわけではないけど……それって、その……大きくするためものなんじゃ……」

どちらかというとき愛莉は反対に小さくしたいと思いつつ、ビクッと震え両手で胸を庇うように抑えてしまったので、慌ててそこから視線を外す。

愛莉も俺の視線が自分の胸元へと向かってしまった。顔も茹だこのように真っ赤になっているが、必死に羞恥心に耐え、健気に俺との会話を続けてくれる。

「は、はい。そうなんです、本の記事にはマッサージを決められている時間以上してしまうと、その分胸の脂肪を余計に消費してしまって小さくなってしまうことがある。って注意があつたんです」

——誰がこんな記事書いた奴は! この記事のせいで引つ込み思案で健気な女の子が無意味に男の前で感じなくてもいい羞恥心に晒されてしまつてるんだぞ!!

本の記事に内心で怒りを湧き上がらせつつも、愛莉がどこまでも純粹に大きさに対してのコンプレックスをどうにかしたいと真剣に悩んでいることも知つてしまつている。

身長の方はバスケットを通じることでも克服できたと思つていたが、思わぬところに意外な伏兵がいたものだ……いや全然潜伏してないどころか、常にその存在感を強く放ちまくつているが。

まあそこら辺の事情はいつまでも意識し続けるのも愛莉に失礼だし。

いつまでも意識し続けるのも愛莉に失礼だし。

「でもどうして俺にそんなこと頼もうって思ったんだい？ 自分でやったり真帆とかひなたちゃん達だったら、喜んで協力してくれそうだけど」

どうしてもここがわからない。なんでわざわざ男である俺に頼もうと思ったのか。間違っても絶対に男なんかに触らせちゃダメってことくらい愛莉だって分かってるだろうに。

少なくとも良からぬ男が愛莉の胸に触れようなんて考えでもしたら、愛莉を守るために不埒な輩など、ぶん殴ってでも止めてやる自信がある……万里が。

「……マツサージは男の人にももらわないとダメみたいでして……だから……その……長谷川さんにしかお願いできないんです!!」

——ホント誰だよこの記事書いた奴!! 今すぐ撤回して謝罪しろ!! 俺と愛莉をこんな窮地に立たせやがって、絶対に許さねえぞ!!

「万里は？ いつでも愛莉を大切に想っている、とても頼りになるお兄さんをお願いはしてみたの？」

この状況の打開策を必死に探す。この際使えるものはなんだって使う。たとえ万里に迷惑がかかったとしても、溺愛してる妹が他の男に穢されるような事態に瀕していると知れば絶対になんとかしてくれるに違いない。

「不甲斐ない兄を許してくれ。俺には大切な愛莉にそんな真似は絶対にできない。と泣きながら土下座をして断られてしまいました」

愛莉の足元で何度も額を打ちつけながら泣きながら断っている万里を想像するのは容易だった。

多分、実際想像した通りの光景だったんだろうなあ。という変な確信があった。

「でも、万里がダメだったんなら、俺も愛莉にそんなことをするわけには——」

——いかない。と言おうとして気づく。そうか、だから愛莉は俺にしか頼れない。って言っていたのか。

「お願いします！ 私にはもう長谷川さんしかいないんです!! わがままですけど他の人にやられるのなんて絶対にイヤなんです!!」

万里が心から大切に想っている君を穢すことはできない。そう  
言って突き放すことは簡単だ。

でも、本気で悩み苦しんだ末に、縋り付くような思いで俺を求めて  
きてくれた愛莉を突き放して本当にいいのか？

それが愛莉にしてやれる正しいことなのか？

「愛莉。覚悟は決めてきたと思うけど、覚悟だけじゃなくて、本当に後  
悔しない。って言い切れる？」

「——!! はい！ もう私は迷いません！ きつと長谷川さんにいつ  
ぱい辛い思いをさせてしまうことになると思います。それでも長谷  
川さんが前に私に言ってくれました。私の事を大切に想ってくれて  
いると。そんな長谷川さんだから、頼らせてほしいと、わがままを言  
わせて欲しいと思ったんです！」

愛莉のまつすぐな気持ちに俺も覚悟を決めた。たとえこの後、万里  
にボコボコに殴られようと構わない。俺は愛莉の気持ちを尊重し、あ  
いつにできなかったことを代わりにやってやる。

なにより、これ以上無意味に愛莉を辱めてしまうことなんかできな  
い。

「それなら、愛莉はお願いなんてしなくていいよ。愛莉、俺を信じて君  
の胸を揉ませてくれ」

愛莉の覚悟の全てを俺が代わりに背負ってあげることではできない  
けど、それならせめて少しでもいいから、俺にも愛莉と一緒に同じ覚  
悟を背負わせてほしい。

そつと愛莉の両肩を抱きながら、約束事を告げる。

「嫌だと思ったり、怖いと思つたら暴れてもいいから、ちゃんと抵抗す  
るんだよ。俺は愛莉を傷つけないわけじゃないんだ。頼むから俺に  
愛莉を傷つけてしまうような行為をさせないで欲しい」

「はい！ わかりました。よろしくお願いします!!」

愛莉も背をピンとはり、気をつけの姿勢で俺を待つ。

心の中で強くごめんと謝罪の言葉を告げながら愛莉の胸に手を伸  
ばした。

最初はそつと体操服の上から触れるだけ。それだけでも心臓が破

裂しそう気分なのは愛莉も同じだろう。

ただ愛莉の胸に手を置いていただけなのに、その大きさと柔らかさが伝わってくるような気がする。

今すぐにも——というか、無意識に指を動かして胸を揉んでしまいたい衝動に駆られるが、理性を総動員して必死に本能を抑える。

「愛莉。大丈夫？ 嫌ならできるだけ早く答えてくれないと、申し訳ないんだけど、俺の方がちよつとヤバいかもしれない」

「は、はい！ すごく恥ずかしいけど大丈夫です！ その…ね長谷川さんに触られるの…いい、嫌な感じが全然なくて…自分でもちよつとびっくりしてます」

とりあえず最悪な事態を避けることができたことに安堵し、もう一つ確認。

「それで…そのすつごく情けないこと聞いちゃうんだけど、このまま揉ませてもらってもいいんだよね？」

「…ご迷惑でなければ…でも、できればあんまり強くはしないで頂けると助かります…」

ほんの少しだけ指先に力を込め愛莉の胸に指を沈めては戻してを繰り返していく。

それだけでなんとも幸せな感触が手に伝わってくる。

揉んでいて気づいたが、体操服以外にも、もう一枚何か少し硬めの生地があるようだが、何なのかは知らない…うん、これっぽっちも、男の俺にはわからない。

何よりその謎の物体越しからでも、愛莉の胸は心地よい手触りと柔らかさを俺に与えてくれた。

本当はもつと激しく揉み抱きたい欲望がどんどん膨れ上がってくるのを感じているが、俺を信じてくれた愛莉を裏切るようなことは絶対にできない。

「これくらいなら大丈夫かな？ もしかしたら、ちよつと強くなっちゃうかもしれないけど、その時は正直に教えてね」

「は、はい。本当は…ちよ、直接…さ、触らないといけないんです…私の場合はきつと服の上からでも大丈夫だと思います」

愛莉の言葉に一安心。どうやらこれ以上、愛莉を辱めずに済むようだ。いや残念だなんか思っただけ。一切、これっぽっちも、少しも、幽かにも……

側からみたら愛莉の胸を鷲掴みにして揉みまくって、愛莉を泣かせてるようには見えないだろうか。

そう考えるとひどくこの状況が危険な気がするが、だからと言って俺を信じてくれた愛莉を裏切ることにはできない——たとえ偶然この場に現れた何者かに誤解されたって構うものか。

俺はこのまま最後の一瞬までしっかりと愛莉の胸を揉み続けるんだ。

愛莉が恥ずかしさを堪えてまで俺に託してくれた使命なら、俺もその使命を果たすことに全てをかける。

「愛莉。他に何かして欲しいこととかない？ ……いや、もつと色んな場所を触りたいとかじゃなくてね」

「え、えっと……は、はい。も、もう少し他の場所も揉ん……マ、マッサージして頂けると……力加減は、もう少し強くして頂いても大丈夫です……うう」

ダメだ。なんか普通に聞いているはずなのに、愛莉を言葉責めして変に辱めてしまってる気がする。

でも変なことをして正しいマッサージができないと、愛莉はただ俺に胸を揉み抱かれただけで終わるといふ、最悪な結果しか残らないわけ……

顔を赤くしながら必死に俺のマッサージに耐えている愛莉に、細かく揉み方を尋ねながら実際に愛莉の胸で実践させてもらった。

——両手で左右の胸を下から支えゆっくり上下に揺らす。

「こんな感じかな？」

「は、はい。多分大丈夫かと。あんまり強くやったり、回数を多くし過ぎてしまうと、大きくなったり、形が悪くなってしまうようなので、今くらいの強さでもう少しだけお願いします。」

なんだかねで、愛莉も触られ慣れてきた感じがする。

俺の方は相変わらず、目のやり場に困る状況だが。

愛莉の大きな胸が上下にプルプルと揺れているし、しかも揺らしているのは俺で、実際に下から抱えてみると意外と重量感があつて……色んな思いが溢れだしてきて今にも土下座して逃げ出したい衝動に駆られるが、今更そんなことができるわけもない。

愛莉も恥ずかしいはずなのに、真剣な表情で俺を見つめて、的確に俺に指示を出してくれる。

ならば俺もこれ以上恥ずかしかつてなんかいられない。と気持ち切り替える。

きつとこの試練を一緒に乗り越えることができたなら、俺と愛莉はもつとお互いを信頼し合える関係になれるに違いない。

より強く愛莉の胸を揉む決意を固めたところで、次の指示が下される。

「次は……えくと……た、たしか……両手で左右から挟んで、今度は左右に揺らしてください……っ」

愛莉さん、言い終わった直後に自分の過激な発言に気づいて頬を染めるのは反則です。

不意打ちに一瞬こちらもドキリとしてしまったが、互いに向き合い再び真剣な表情で愛莉の指示通りの揉み方をする。

どれくらいの時間が経ったのだろうか？

お互いに緊張しっぱなしで、内容をほとんど覚えていないけど、愛莉から出された最後の指示をクリアしたところで、ついにマッサージは終了した。

永遠にも長く感じた時間は、終わってみるとあつという間で、今まで自分の中にあつたものが、するりと抜け落ちてしまったかのような、どこか寂しさに近い物を感じられた。

もしかしたら、愛莉も同じ気持ちを抱いてくれたのだろうか？  
心なしか瞳がうるんでいるように見える。

「長谷川さん、すごく心苦しい想いをさせてしまっていたのに、最後まで付き合ってくれて、本当にありがとうございます。私のためにごく真剣な顔で胸を揉んでくれてる長谷川さん、すごくかっこいい

なつて思つちやついました」

「そんなに畏まらなくてもいいよ。俺はただ愛莉の胸を揉んでただけなんだから」

実際そうだし、真剣な顔で胸を揉んでる俺がかっこいいと言われても正直反応に困つたりもするのだが……

「これからも、たまにお願いしてもいいですか？」

「もちろんだよ。これからもよろしくね愛莉」

この恥ずかしさすら糧にして愛莉はもつと成長してくれることだろう。

願わくは彼女の胸が小さくならんことを。

\*

「~~~~以上、ですつ」

愛莉が自分の話が終わったことを、やつとの思いで告げるとすぐに真つ赤な顔を俯かせて黙ってしまった。

本当に全部言い切ってしまったって、聞いてた私でさえ恥ずかしかつたんだから、愛莉はもつと恥ずかしい思いに耐えながら、話してくれていたんだろう。

「なあ、アイリーン……絶対にすばるんにお願いしちやダメだぞ。多分バンリーンが怒つてすばるんがタイヘンなことになりそうな気がするからさ……」

「まあそうなるわね——間違いなくね」

「あ、あはは……」

真帆がものすごく真面目なトーンでしゃべってる。

でもこればかりは紗季も私も同意見だった。

そんな中、いつもにこにこしてるひなたが珍しく不満そうに口を尖らせている。

「ぶーあいりーおっぱい揉んでる時はこわいかおしちやダメー」

「べ、別に怖い顔してたわけじゃないよ」

「でも、おっぱいはキモチイイし楽しいから笑顔じゃなきやダメー」

「きやつ!? ひなたちゃん……ダメっ……お願いだからそんなに揉まないで——!」



あირりが自分のおっぱい好きになるまでやめないーと、ひなたが愛莉の胸を揉み始めている。

微笑ましき半分、羨ましき半分でその様子を眺めていると左右の肩に真帆と紗季にポンツと手を置かれた。

「もつかんー。そろそろセツキヨクテキにすばるんにアプローチしないと、アイリーンにすばるんたられちゃうぞー?」

「まあ今のところは愛莉もそこまでの勇氣はないだろうから、まだまだ大丈夫だろうけど、勝負するなら早く決めた方がいいわよトモ。愛莉が動き出したら一気に劣勢に追いやられちゃうかもしれないんだからねっ」

「ふええええ!? わ、私は、まだ……昴さんにそんな大それたこと……はうううう」

愛莉はきつと誰よりも勇氣があると思う。

私たちのバスケを守るために自分の身長ともしっかり向き合って、乗り越えてくれたんだし。

少し引つ込み思案だけど、とても頼りになる優しい友達だつてみんな知ってるんだから。

私も愛莉を見習って、もうちよつとだけ勇氣を持てるようになりたいな。

みんなの長谷川昴コーチ。すばるんはしようがないにやあゝ

「にひひーそんなじゃー次はあたしの番だー！ よっしやー！ すばるんをノーサツしちゃうシミュレーションバッチリだぜー！」

「おー待ってましたーぱちぱちぱちー」

「本当にどこからそんな自信が出てくるんだか。あと細かいようだけどシミュレーションね」

ひなたは待ってましたと言わんばかりの笑顔と拍手で歓迎し、紗季は半ば諦め気味に真帆の言い間違いを訂正している。

真帆の高らかな宣言と今までの前科にどんな話が飛び出してくるか不安でならない。

だけど、どこまでも自分の自信を信じ切れる積極的な姿勢に、みんなの中でも特に私と愛莉は少なからず憧れを抱いているのも事実だ。

「あーあー。せつかくいい手を思いついたのに、すばるんにはちよゝつと刺激が強すぎんのが残念だなあゝ」

「とりあえず、真帆。終わったら、ちゃんと後で長谷川さんに謝りなさいね」

「あはは……あんまり昴さんを変な人にしないでね？」

「真帆ちゃん、お手柔らかにお願いね」

真帆の自信に対して無駄とわかりつつも自重の願いを込めた釘をさす紗季。私と愛莉もこれから聞かされる話に不安も自然と大きくなってしまうていた。

「だー!! なんでみんなして、あたしが話す前からそんなこと言うんだよっ」

「だっていつも長谷川さんに失礼な妄想するからでしょうがっ」

「もーそんなことないってばっ！ じゃー黙って聞いてろよーこれがあたしのそーだいなシミュレーションだー!!」

——どこまで自信満々な様子で、さりげなく最初の言い間違いを言い直しつつ、真帆が自分の作り出した世界を語り始めた。

\*

こちらプレアデス・ワンこれよりミッションを開始する。

すっきり通い慣れ内部構造を隅々まで把握しきつっている我が愛しのまほまほ邸（新館）。

意味もなく廊下をぶらついているように見えるかもしれないが、まほまほのスケジュールは完璧に把握済みさ。

俺の脳内にしっかりと焼きつけてある、この『今日のまほまほのスケジュール』に従い、今現在まほまほがいるであろう場所を指している最中なのだ。

廊下を歩き、ついに念願のまほまほがいるであろう部屋の前で止まる。

——大浴場。まずはドアを開けると広がる脱衣場。そこに目的のまほまほの姿を見つけることはできなかったが、確実にいると確信した。

愛しのまほまほが直前まで着ていたと思われる衣服一式が脱衣カゴの一つに丁寧に折りたたまれているの確認。

いや、俺は紳士なのだから、決してカゴの中を物色する気なんてない。あくまでも、まほまほが浴室にいるという確信を得ただけなのだ。

そして、脱衣場から浴室へ続くドアをそつと開いて中を覗き見るが、やはりまほまほの姿は見当たらない——だが、これも予想通りだ。何も慌てることはない。

万が一、まほまほがその神聖な御神体を清めている最中の姿を覗いてしまう。というラッキー……じゃなくて、不幸な事故が起きてしまえば一大事だが、残念ながr……幸いなことにそのような事態にはこれまで一度も遭遇できていない。

そろそろ、ちよつとくらいニアミスが起きてしまってもいいのではないだろうか？……うん、故意ではなくあくまでも偶然に。

浴室の通路から先に進みミストサウナ室へのドアノブをわずかに回す——と同時に、中から俺がただひたすらに求めていた人物の声が聞こえてきた。

「あつれゝすばるんまた来ちゃったの〜？ ま、いいや。そんなコソコソしてないで早く入っておいでよ〜」

「は！ はい！ 失礼します!! ま、まほまほ〜〜お!!」

ほんの少しドアノブが動いただけで、まほまほが俺なんかの存在に気づいてくれて、しかも入室の許可を出して頂いたっ！

なら、もう遠慮はいらない。ドアを一気に開くと——バスタオルを体に巻いた状態で、長椅子に腰下ろし笑顔で手招きしてくれている——まほまほへ全速力で駆け出した。

「ほい。そこでストップだよー。にひひーすばるん、どんどん足が速くなってきたみたいだね〜いつかすばるんに命令出す前に捕まっちゃうかもしんないな〜」

「ああー。まほまほおー、あとほんの少しで手が届くのに……どうして俺の脚はもつと早く走れないんだ……こんなに！ こんなにもすぐ近くにまほまほがいるのに、どうしてこんなに遠い存在になってしまったんだ!!」

まほまほの待て。という命令で緊急停止した俺とまほまほとの距離はわずか1〜2 m程度。だが、そこからどんなに手を伸ばしても俺の手はまほまほの身体に届くことがなかった——自分の不甲斐なさはどうしても許せない。悔しすぎる。

まほまほは、俺が本気で悔しがっている姿を満足気に頷き、ニヤニヤ笑いながら口を開く。

「で、どしたのすばるん？ マッサージはもうしなくていい。って前から言ってるのに、どーしていつも来ちゃうのかなあ？ も・し・か・し・てっあたしの身体が忘れられないのかなっ？」

「うう……わかってるくせにひどいっすよ。俺は、まほまほの身体を知ってしまったあの日から、もうまほまほの身体以外をマッサージなんかできないっす!!」

「ま〜別にすばるんのマッサージがなかったとしても、あたしならゼツタイにキューキョクボディになると思ってたけど。……ま、ほんの少しくらいは、すばるんのおかげの部分もあるかもしれないけどね〜」

まほまほは嬉しそうに胸を張っている。今もこうしてミストサウナ室に入っているのはおそらく、より一層自分のプロポーションを完璧に引き立て、それを維持するためであろう。まったくどこまでも自分を磨くことに貪欲な方だ。

だからこそ、俺のマツサーズが少しでも今のまほまほの身体を作ることに関与したということが誇りにもなっているのである。

タオルに包まれながらも、隠し切れていない、愛莉に匹敵する程の大きさと形の良さを備えた双丘が——まるで自らの意志でタオルの束縛から逃れようとするかのように——ぷるんと揺れると、思わず俺の視線がそこにロックされてしまった。無礼とはわかりつつも、思わずおっぱいを応援したくなってしまふ。頑張るんだ！ もう少いで君は、君達は自由になれるんだぞつ。

——ふと、まほまほの視線がこちらの視線に気づいたように、面白そうに眺めていることに気づき、慌てて話題を絞り出す。

「まほまほのその豊満なお胸が今日もとても魅力的つす！」

「もうすばるんはしよーじきものだなあ〜」

視線は変えることはできても、思考はまほまほのおっぱいのことでいっぱいになっていた。それでもまほまほは怒らず、寛大な心でそれを許してくれている。

なら、もうこのまま本題に入っても、きつと怒られないよね？

「はあはあ……それで、宜しければどうか今日も俺にまほまほの……そ、その豊満なお胸をより一層魅力的に完璧なものにするためにどうか……どうかマツサーズをやらせて欲しいつす!!」

「ん〜気持ちはいれしーんだけどさー最近はよく肩が凝るようになってきちゃったし、これ以上大きくなっても少しジヤマになりそうなんだよなあ〜」

ちらりと俺を見ると、腕を交互に回しながら反対の手で肩の辺りを抑えて、いかにも肩が凝ってますアピールをしている。

すぐにまほまほの後ろに回り込んで肩揉みを開始する。

透き通るような細く白い肩。そして、とても柔らかい。こんなに細かい肩で、まほまほはこの圧倒的的重量物を支えているというのか。

肩越しにこっさり前を覗きこんでみると、タオルに包まれた二つの大きな球体が今も必死に自由を求めて揺れ動いていた。

何がと言わないが、あと少しで見えそうなのに見えないもどかしさ。

ほんの少し前までは、マッサージをさせて頂くたびに思う存分見ることができたというのに、

それができなくなった今、あの時の自分がどれだけ恵まれたのかを痛感する。

失ってから気づく大切な物、瞬間、場所。

—— いったい、どうすれば俺はあの時の最高の至福の時間を取り戻すことができる。

「そ、そんなあゝ……お、お願いします！　ほんの少しだけ！　さきつぽだけ……いえ、最初のさわりの部分だけでいいですからあゝ」

なりふり構わず、ただ必死に懇願した——もしかしたら、という一縷の望みにかけて。

「もうすばるんはしょうがないにやあゝまあ今まではすばるんにいつぱいキョーリヨクしてもらった恩もあるし少しだけだかんねゝ」

まほまほは困り顔から一転、ウインクをしながら笑顔であっさりOKしてくれた。

—— 思った通りだ。まほまほは本当は最初から俺にマッサージをさせてくれるつもりだったんだ。

まほまほの自室がある本館側はたとえ内部構造を把握できていたとしても、俺の立場ではそこまで自由には動けない。

だからこそ、俺がそこそこ自由に活動できる場所である新館側の施設内で、まほまほが利用しているタイミングを狙うしかない。

そして、聴いまほまほもそのことに気づいてくれるからこそ、あえて本館ではなく新館の浴室を利用してくれていたのだ。

「まほまほゝありがとうございます！　本当に！　本当に光栄です！！」

「ぎゃつ……もうゝそこまではゆるしてないぞっ」

まほまほから向けられていた俺への優しさに気づくと、その感激の

あまり勢いそのままに抱き付くとあろうことか、その豊満なおっぱいに顔を埋めてしまっていた。

「す…すみません。でも…でも俺本当に嬉しくて…：…うう…：…まほまほお」

「ごまった甘えん坊さんだな、すばるんは。ホントに今日だけ特別だかんねっ」

とんでもない無礼を働いてしまった俺を、まほまほが優しく抱きしめ、そつと髪を撫でてくれる。

表情は見えないけど、きつとすごく慈愛に満ち足りた優しい表情をしてくれているんだろう。

俺が今まで抱いていた多くの邪念——おっぱいとかおっぱいとかおっぱいとか——がまほまほの手によつて浄化されていく。

「すばるんには期待してるんだから、これからガンバつてよねっ」  
「はい！俺の全てはまほまほのためにあります!!」

こうして俺はまほまほへの一層の忠誠を誓い、身も心も全てを捧げる忠実な僕となる決意を新たにしたのだった。

イエスマイまほまほ。全てはあなたの思いのままに。

\*

どう？ あたしの考えた完璧なけいか…：「長谷川さんに今すぐ謝りなさい!!」「あんまり変な話にしないでつて言ったのに真帆ひどいよお」「長谷川さんかわいそうだよお」「ぶーまほのお話。あんまりおにーちゃんっぽくないー」

真帆が言い終わるよりも早く、紗季が口火を切り、すぐに私や愛莉、ひなたまでも続いて一斉非難が始まる。

真帆だって本当は昴さんがそんな人じゃないってわかっているのに、いつも茶化してばかりなんだから。

「えーなんでみんなそんな怒つてんだよー面白くなかった?」

「まったく、いつも変な脚色ばかりしてふぎけすぎなのよ。だいたい一番のぺったんこ胸なくせして何が豊満なおっぱいよ」

言った紗季本人だけでなく私ごと巻き込む覚悟で地雷を踏み抜く。

「私は隠れきよにゅーだつて言つてんだろ!! 絶対に大きくなるんだ

から！」

「いい加減私みたいに認めて諦めなさいって、いつも言ってるでしょ。その方が気楽よ」

「さ、紗季……私も諦めたくないよお……」

「きつとみんなだって大きくなるから大丈夫だよ」

「おーあいいーひとりたかみのけんぶつー？」

真帆と紗季の言い合いの中、必死に仲裁とフォローを入れる愛莉とにこにこ笑顔でさりげなくみんなの気持ちを代弁するひなた。

紗季に怒られそうだけど、私も真帆の隠れ巨乳に賛同したい。

「愛莉。気持ちは嬉しいけど根拠のないフォローはかえって悲しくなるものなのよ」

紗季の淡々とした突っ込みと同時に私たちの矛先が一人余裕の態度の——本人はそんなつもりはないだろうけど——愛莉に向かっていく。それに愛莉自身が気づいた途端、胸を庇う様に怯え出してしまう。

でも、すでに今日だけで何度も胸を揉んでいるから、これ以上はかわいそうだと、みんなも手を出さないようだ。

「あーあーやっぱ少し恥ずかしいけどマジですばるんに揉んでもらおうかなー」

「おーひなもおにーちゃんにお願いしてみるー」

「み、みんながお願いするなら……私も……」

「だからそんなこと絶対ダメだってばー!!」

真帆がなんの気なしにそんなこと言いだすと、すぐにひなたも紗季もつられて乗りそうになってしまう。

昴さんだって、みんなからそんなお願いされちゃったら、ご迷惑ですよね……とても真面目な方なんだし。よ、喜んで揉みに行くようなことしないですよね？

「ところで真帆。話は相変わらずメチャクチャでオチもひどかったけど、なんで急に長谷川さんを甘えん坊にしちゃったの？」

「んー別にー？　なんかベタベタおっぱい触りたがるすばるんよりもし、逆にこつちがこーギユツてしてみたいなーって思っただけ。もし



かしたら、そっちのがコーカテキ？　かしんないし」

「なんとなくわかるような…でも、私はどちらかというと、昴さんにギョってされたいかなあ……はうう」

「真帆ちゃんの気持ち少しわかるかも。私もたまにひなちゃんをギョってしたいって思うことがあるし、あ、ごめんね。もしかして迷惑だった？　ひなちゃん」

「お？　ひな、あいにぎョってされるのもするのも、どっちも好きーあいのりのおっぱい温かくて、とつても気持ちいいよ」

珍しくしたい派とされたい派に別れた。真帆と愛莉はしたい派で、私と紗季はどちらかというときれたい派で、どっちかに決められず、結局どっちも好きーと答えたひなた。

抱きしめられたい派とは言ったけど、抱きしめる側の方も少し気になる。

失礼は重々承知だけど、一度感じてしまった好奇心は抑えられない。

両手で頬を抑えながら俯いて、みんなにバレないようにちよつとだけ想像してみた。

普段よりほんの少しだけ子供っぽくて、私を真っ直ぐ見れずに目線をキョロキョロさせながら、恥ずかしそうに、抱きしめて欲しいとねだりする昴さん。

そんな昴さんからお願いなにかされちゃったら、私はきつと……少し甘えん坊な昴さん……ちよつといいかもつ

昴さんのお顔を胸に抱いてギョツてしてあげたいな。そしたら、今度は昴さんもお返しに私のことを……きやつ

——もっかんと紗季はされたい派かー。まあすばるんも大きくないと嬉しくないかもなー

他人事のように放たれた真帆の一言に妄想の中で抱きしめていた昴さんが、ほんの少しだけ残念そうな顔をしてしまったような気がするの、少し悔しい。

ふと顔を見上げると同じく渋い顔をし、自分の胸元をペタペタと

触っていた紗季と目が合った。

「紗季……」

「……そうね。トモ達に偉そうに言っておきながら、私ももっと自分に正直になるべきだったわね」

どちらからというわけではなく差し出しあつた手を互いに固く握り合い、共に先の未来の可能性を信じて、カミサマへ強く願った。

「真帆も私たちの仲間だからねっ」

「いつまでも自分は無関係って態度してんなら、私とトモだけで先に行くからな」

私と紗季の言葉に真帆も慌てて私たちが強く握り合い深め合っている絆の中に加わった。

——真帆、紗季。絶対にみんなで大きくなるうね。脱スットン共和国。愛莉とひなたには悪いけど、こればかりは私達3人だけの固い絆だ。

愛莉と——その腕の中ですっぽりとおさまっている——ひなたが、微笑ましくそれでいてちよつとだけ羨ましそうに私達3人を見ていた。

みんなの長谷川昴コーチ。私に長谷川さんの全てを  
教えてください

「さて、それじゃ次は私の番ね。」

私と真帆と紗季の3人の絆を確認し深めたところで、紗季がゆっくりと宣言する。

「実は紗季の話を聞くの少し楽しみだったんだっ」

「えへへ。私も。紗季ちゃんってすごくお話作るのが上手だもんね」

私と愛莉もワクワクしながら、紗季の話を心待ちにしている。

私たちの期待に紗季は少しだけ恥ずかしそうにしている——と、その横で真帆がぽつりと呟く。

「あたしのカンだと、サキは間違いなくこの中で一番エロい」

「おー？ さきはエッチなの？」

「な、何言ってるのよ！ あんたの方が普段からどんだけ過激な発言してると思ってるのよ!!」

真帆の軽口を受けて、ひなたが無邪気に紗季にたずねる。

紗季にしては珍しくちよつと怒りすぎかな？ って思うくらい大きな声で真帆を怒っている。

でもいきなり自分が一番エッチだ。なんて言われたら誰だって怒っちゃうと思う。

「にひひー。だって結局サキだって、すばるんにおっぱいマッサージしてもらいたいって思ってるじゃんっ」

「べ、別に今回は長谷川さんにして頂くのがテーマなだけで、本当にするつもりはないわよ！ あ、あくまでも例え話なんだから！」

真帆がからかうようにニヤニヤと満足そうに笑うと、紗季が慌てたように例え話だということを強調していた。

「ホントかー？ もっかん、サキにすばるん襲われないよう、しっかり守るんだぞっ」

「ふええええええ!! わ、私が昴さんを守るの!?!」

「ダメー！ さき、おにーちゃんおそつちやダメだよ?」

「紗季ちゃんが長谷川さんを……お、おそ……そ、それじゃ私も……だ、ダメやつぱりそんなの無理だよー!!」  
「なんでみんなの中で私が長谷川さんを襲うことが決まっちゃったのよー?!」

私達4人の慌てふためいている様子を眺めながら、ただ一人真帆だけが楽しそうに笑っていた。

——みんなが落ち着いたところで、ようやく紗季の物語が始まった。

\*

「それでは、営業時間中であまりお構いできず申し訳ありませんが、せめてどうかごゆっくり過ごしていただくさいね」

「いえ、こちらこそ忙しい時におジャマさせていただきますので、今日のところはどうかご容赦ください」

そんな会話を亜季さんとしている内に紗季の自室前まで到着。案内して頂いた亜季さんは申し訳なさそうに最後に一礼しながら、一階のお店へと駆け足気味に戻っていった。

——途中でびたーんという音と直後に亜季さんの恥ずかしそうな泣き声が聞こえた気がするが、わざわざ確認しに行くようなことしちや失礼だよな。

気持ちを切り替えて、ドアをノックし、部屋の主へ声を掛ける。

「紗季、入っても大丈夫かな？」

「はい、お待ちしております。どうぞお入りください」

紗季の許可をもらい、ゆっくりドアを開けて中を確認すると、やや大き目の白い無地のワイシャツを羽織っている紗季がベッドに腰を下ろしていた。

バスケをする時以外は三つ編みにしている長い髪も今は解かれており、ヘアバンドも付けていない。

綺麗なサラサラのストレートロングがワイシャツと相まって、いつもそう紗季の大人びた雰囲気醸し出していた。

俺と目が合い、照れたような笑顔で迎えてくれた紗季に思わずドキ

リとする。

「あ、あの……長谷川さん、できれば中に入ってドアを閉めて頂けると……誰も来ないとは思いますが開けっ放しのままですと……この格好を他の人に見られるのは少し恥ずかしいです。」

「あー、ああ、ごめん！ お邪魔するねっ」

そういえばドアノブに手を掛けたまま半開きにして廊下で立ちっぱなしだ。

慌てて部屋へ一歩踏み込んだところで一度振り返り、ドアを——絶対に開いたりしないように、しっかりと締めたのを確認する。

そして、誘われるままにベッドに——紗季の隣へ腰を下ろすと、ふわりと石鹸の良い香りが鼻腔をくすぐった。

「紗季がこんな恰好してるなんて珍しいね」

特に真帆やひなたちゃんと比べると落ち着いた感じの服装が多いが、なにかしら可愛らしいワンポイントくらいはあるはずんだけど……

もちろんシンプルなワイシャツだけってのも十分過ぎるほど似合っている。

ん？ ワイシャツだ………け？

「——!? その格好って、もしかして……」

上から下へと確認するように眺めていると、あることに気づいてしまった。

大き目のワイシャツなのでダボダボになってしまっていて袖口を肘が見えるくらいまで腕まくりをしている。こういう部分は彼女の年相応の子供らしさを感じられて、微笑ましく思う。

その子供らしさとは裏腹にワイシャツのボタンを上から三つ目まで大胆に外している。

大きく開けた襟元から鎖骨がちらりと見えている。胸元も見えそうで見えないギリギリのラインだ。

下もワイシャツの裾の部分が彼女の白く細い太腿から膝上10cm位までを覆っていて、こちらも見えそうで見えないという男心をくすぐる際どい魅力を演出している。

——紗季さん、ワイシャツの下どうなってるの？ いや、ワイシャツの中という意味ではなく、上にワイシャツという服を着ているのなら、下にもズボンなりスカートなり身に着けるべき衣服があるのでは……

「あ、あの……長谷川さん……こ、こういう格好でお出迎えしたのは私ですが、あまりジロジロ見られてしまうと恥ずかしいです」

頬を赤く染め、わずかに身体を縮こませて上目づかいでこちらを見つめてくる。

俺の心の中の疑問に対して、彼女の反応が十分過ぎるほどの答えとなっていた。

「ご、ごめん!! まさか紗季がこんな大胆な格好してるとは思わなくて……その……ちゃんと履いてるよね?」

何か言わないといけないと無意識に声に出してしまった自分の最大の失言に気づく。

俺のバカ。いくら裸ワイシャツに驚いたからって、そんなこと聞くなんてホントにただの変態じゃないか。見ろ紗季だって俺のあまりな発言に絶句しちやって……あれ?

「あ、ちゃんと下着は履いてるので大丈夫です……正直、長谷川さんにそんなこと確認されるなんて思わなかったので少しビツクリしちゃいましたが」

恥ずかしさはあるようだが、比較的落ち着いている様子だ。どうやら本当に見つめられてたのが恥ずかしかっただけで、ドン引きされたわけではなかったようで一安心。

いや、だからと言ってさっきの質問は我ながら控えめに言って最低だと思う。

「本当にごめん。ドキドキして変なこと聞いちゃって。また変なこと言ったと思ったらてきとうに聞き流していいからね」

「ふふ。長谷川さんをドキドキさせることができたのなら成功です。男の人はこういう服装が好きだって本で読んだので、恥ずかしかったけど勇気を出してみてもよかったです」

珍しく自分の作戦が大成功したとしたり顔の紗季——いつもの和

やかな空気が戻ったかと思うと、さっそく紗季が本題に話を移した。  
「長谷川さん、申し訳ありません。私なんかのために今日もお付き合  
い頂いて」

「こーらっ。私なんかは教育的指導だって教えただろ」

「ふふ。そうでしたね……では、どうか今日もよろしくお願いいたし  
ます」

「俺の方はいいんだけど、その……紗季はいいの？ さ、触られるの」  
紗季と今の関係になってから、まだほんの数日程度のはずなのに、  
すでに長い年月を共にしているような感じがする。

それくらい俺も紗季も今の関係が自然になってしまったのだろうか？

毎朝、俺に会いに朝練に來ている智花は、今の俺と紗季の関係を知  
るわけもなく、彼女が知らないところで彼女にとってかけがえなのな  
い大切な友人との秘め事に後ろめたさを感じてしまう。

紗季もまた、俺が智花の思い人であると知った上で、このような関  
係になってしまっていることに罪悪感を感じていることだろう。

「私は構いませんよ。もう慣れましたし……あ、ところで長谷川  
さんはおっぱいと胸とどっちで言われるのが好きでしょうか？」

——罪悪感を感じていることだろう……？

「へ……………ちよ、ちよつと紗季……さん？」

「きつとおっぱいですよ。私の口からおっぱいって言われると、す  
ごく恥ずかしそうにしていますね。こうして今もおっぱいって単語を  
出すたびに視線が泳いでいます」

なんなんだこの紗季の圧倒的な迫力は。

まるでこちらの一挙手一投足どころか、わずかな表情や動揺からも  
情報収集されているような感覚だ。

「うふふ。驚いていらっしやるようですね、長谷川さん。それならこ  
ちらも嬉しい限りです」

「あ……え、えつと……」

ダメだ言葉が全然出てこない。少しでも動く紗季に全てを見透  
かされてしまうのでは、という恐怖が完全に俺の動きを封じてしまっ

ている。

「私が今こうして長谷川さん相手に優位に立てているのは長谷川さんの教えのおかげなんですよ。長谷川さんにおっぱいを揉まれている間もずっと長谷川さんのことを見ていました。いつも本当に申し訳なさそうにしながら、それでいてとても優しくして頂いてました」

俺も紗季の胸を揉んでいる間に、少しでも紗季に苦痛を与えないようにと彼女のことを見ていたつもりではあったけど、どうやら紗季は俺以上に俺の様子を細かく観察し、冷静に分析していたようだ——おっぱいを揉まれながら。

「もう少しだけ私のことをよく見てください。今日には最初に少しだけ長谷川さんを動揺させることに成功しただけで、まだまだ長谷川さんには遠く及びません。私は長谷川さんと同じポイントガードのポジションを授けられました——ですから、私はもっと多くのことを長谷川さんから学び、少しでも長谷川さんと対等になりたいんです」

紗季が一つ一つ丁寧にボタンを外していき、お腹の辺りまでのボタンを外し終わると同時に紗季はワイシャツから手を離す。はだけた隙間から白い肌が露わになる。だが肝心のおっぱいはまだほとんど隠れてしまっていて、端の幽かなふくらみがわずかに見えるか見えなにかくらいだ。

あとは、もう少しだけワイシャツを左右に広げてくれれば完璧なんだが……

ふと紗季の表情を見ると羞恥心からか顔が真っ赤になり、眼鏡越しから見える綺麗な瞳を潤ませている。

今までの紗季とは思えないような言動は、俺に覚悟を伝えることと同時に、自分が途中で挫けてしまわないように、自らを鼓舞するためのものだったのだろう。

——紗季が勇気を振り絞ってくれたんだ。ここからは俺が勇気を見せる番だな。

紗季の小さな肩をそっと抱き寄せ互いに向き合うとベッドが一度だけギシリと音を立て軋んだ。

「恥ずかしいのいっぱい我慢して頑張ってくれてたんだな。ありがとう



う紗季」

「——!! ずるいです。すぐに私の気持ちに気づいてしまうなんて……私が勇気を出しても言えなかったこともしてくださるつもりなんですよね?」

紗季のワイシャツが紗季の肌を包み隠すという役割を果たさなくなりつつあるようだが、もう俺たちには関係ない。

はだけ掛かっているワイシャツに両手を差し入れ左右に開き、完全に紗季の肌を露出させた。

成長途中の淡いふくらみの感触を確かめるように、それぞれ左右の手で覆い、撫でるように優しく触れていく。

紗季の胸で最も敏感な部位を指先で確かめたいという欲望も芽生えるが、いきなり強すぎる刺激を与えるのは紗季に恐怖を感じさせてしまうかもしれないと泣く泣く自重する。

「いっぱい虚勢を張ってた割におっぱいはまだまだ控えめだよな」

「もうっ……それくらいわかってますよ。だから少しでも長谷川さんにその気になって頂けるようムードを高めようと必死に頑張ったんですから」

その不満を紛らわすように、少し意地悪な軽口を叩いてしまったが、お互いの緊張を和らげるのには多分有効だろう。

手の平全体で紗季の胸の形や感触を確かめるように、それでもできるだけ力を込め過ぎないよう細心の注意を払ってマッサージを開始する。

胸だけでなく、その周辺——脇や、ろっ骨にあばら付近と丁寧に撫でるように揉んでいく。

おっぱいマッサージとはいっても、ただおっぱいだけを欲望のままに好きに揉んでればいいというものではない。

正しい揉み方をしないと小学生のおっぱいという夢と希望に満ち満ちている希少な可能性に影を差すような悪影響を与えかねない。

だから、引き受けた以上こちらも万全の態勢で紗季のおっぱいと向き合わなくてはならないのだ。

「そんな背伸びしなくても紗季は今のままでも十分魅力的だよ」

「長谷川さん、私とトモのおっぱい……どっちが大きいと思います？」  
「比べられるわけないだろ。智花のなんてこんなマジマジとみせても  
らったことだってないんだし。それに今見てるのは紗季っていうか  
かわいい女の子だけなんだから、他の人の名前なんか出しちゃだめだろ  
？」

ささいなやり取りだけでも湧き上がる劣情が高まり続ける。

やがて抑えが効かなくなった本能のままにおっぱいを求めようと  
する俺の手に紗季が手を添えた。

「あ……長谷川さん、ダメですよ。私が頼んだのはマッサージだけな  
んですから」

さっきの軽口へのお返しのもりだろうか——いや、それもあるだ  
ろうけど、多分これは二人が覚悟を決める最終確認のもりだろう。  
「わかってるよ——でも、今日はマッサージ以上のこともしてしま  
いそう。このまま紗季のおっぱいを揉み続けると俺もどうにか  
なっちまいそう」

「——!? は、はい。ちよつと恥ずかしくて口には出せないのですが、  
きつと私と長谷川さんは同じ気持ちですよ——長谷川さんの望む  
ままに、どうかお願いします」

胸を揉んでいた手を離し、今度は小さく震えている白く細い肩を抱  
きながら紗季と見つめ合う。

少しずつ覚悟は固まりつつあるようだが、それでも俺は年上の男と  
して、これから行う行為の責任を取るためにも、しっかりと紗季の気  
持ちを確認しなければならぬ。

少しでも紗季に躊躇があるなら——ここまでだ。絶対に紗季に後  
悔なんかさせたくない。

「紗季、本当にいいのか？」

「はい……少しだけ怖い気持ちはありましたけど……本当は今のこの  
瞬間にも長谷川さんに襲われたって何も言えないのに……どこまで  
も私の事を大切にして頂いているんですよね——だから、そんな長谷  
川さんなら安心して全てを託せます」

長谷川さんの優しさが私に覚悟を決めさせてしまったんですよ。

そう言いながら、紗季はベッドに仰向けになると、両手を広げながら俺のことを愛おしそうに待っている。

ここまで来た以上、俺ももう引けない——絶対に紗季を悲しませるようなことはしないと固く決意し、紗季の上に覆い被さるようにして、少しずつ紗季との距離を詰めていった。

\*

「そして少しずつ迫ってくる長谷川さんに私はこういうの!! 私に長谷川さんの全てを教えてください……私の身体に長谷川さんをしっかりと刻み付けてください!! ——つて、はああああう!? 私ったらなんてこと口走ってるのよおおお!!」

『すごいドキドキしちゃった……』

何故か紗季が話の途中で変な声を上げていたが、私と愛莉はそれどころではなかった。

一緒に顔を赤くしているお互いの顔を見合って恥ずかしい気持ちを共感し合っていた。

なんとなく続きもありそうな気がしたけど、これ以上いったいどんなことするつもりだったんだろう?

「おーさきとおにーちゃん、とつても仲良しさんだったーやっぱり仲良しいいものですなー」

ひなたはさっきの真帆の話と違って、今度は昴さんと紗季がとても仲良くしている感じが伝わってきて楽しかったのだろう。にこにこ笑顔で、うんうん頷いて紗季の話を喜んでいる。

紗季も自分の話が終わった後だと恥ずかしいのか、私たちの反応をそわそわと見守っている。

「なあ、やっぱりサキって間違いなく一番エロいよな」

「な!? 何言つてのよ!? 男女二人きりのシチュエーションなら普通はこうなるのが当たり前でしょ。お互いにドキドキしながら、女の子が男の子に大切な物をあげるのが普通の展開でしょうが!」

それでも真帆の一言は許せなかったらしく、慌ててすぐに言い返す。

「ん? なんでそこで大切な物をすばるんにあげるんだ?」

「…………この際だから、一応確認しておくけど、みんなが考えてる大切な物ってなに？」

——ふええ!? 自分の大切なもの……それって……やっぱり……  
「あたしはアルパカさんのぬいぐるみだな。チョツチおしーけど、すばるんにだつたらあげられるぜ。すばるんなら、ゼツテータイセツにしてくれるだろーしさっ」

「おーアルパカさんかわいいよねーひなもお気に入りのぱんつとかトカゲさんのぬいぐるみをあげてもいいかもーでも、かげやおとーさんとおかーさんあげちゃったら、ひな一人ぼっちになっちゃうからあげられないかなー？」

「私は…………、心かな? 気づいたらその人のことしか考えられなくなっちゃうんだけど、それはきつと幸せだと思うの」

真帆とひなたはあつさりと即答。愛莉は何故か一度だけ私の方をとても優しい眼差しでみつめてから、そして、私は——

「わ、私は…………そ、その…………き、ききき、キス…………かな? ファーストキスって…………その、とつても大切だし…………」

私なんかの初めてなんて、昴さんにご迷惑なだけだから、とてもあげられないけど。

「んで。サキはなんなんだ? ほれほれいつてみー?」

「みんなごめん。私が一番エロいの認めるわ。だから本当にゴメン。もう許して」

これからは本当に妄想を自重しないと!!と顔を両手で覆いうずくまりながら、うーうー唸っていた。

——こんな紗季、見たの初めてかもしれない。というのは多分みんな同じ気持ちだろう。

「うお!? なんでそんな簡単に認めちゃうんだよ!? あ、あたしの方こそ、からかいすぎちゃってごめん!」

紗季の消沈振りに真帆も追撃の手を緩めるどころか、悪いことをしてしまったと感じているようだった。

それにしても珍しく言い返しもしないで負けを認めてたな紗季。

紗季が口に出せないほど恥ずかしいものってなんだつたんだろう

？

今度こつそり教えてもらおうかな？

みんなで紗季の話を思い返しながら、それぞれで感想や気になったことを話し合いながら、紗季の気持ちが悪くなるのを待つことにしている——

「お願いだからみんな忘れて——！！！！今すぐ全部忘れなさい——！！！！」

紗季の心からの叫びが部屋中に響き渡った。

みんなの長谷川昴コーチ。最高の智花（パートナー）のために。

「よーし！ そんなじゃ、みんなチューモークっ！ ラストはもっかんだー！ー！」

「ぱちぱちぱちー」

何故かまだ落ち込んだままの紗季に代わり、私の番になったところで真帆がウキウキしながら場を仕切り出す。

「うう……そんな注目されたって、私は面白い話なんかできないよお……」

「そんなことないよ。智花ちゃんが一番長谷川さんのこと知ってるんだし、智花ちゃんにとつては普通のことなんだろうけど、私たちには素敵なお話になると思うよ。私は聞かせて欲しいなっ」

ちよつと待って、愛莉にとつて昴さんが私の胸を揉むことが普通だっと思われちゃってるの!?

そこだけはしっかり否定しておかないと。と思つたが、私が口を開くより早く、すでにみんなも愛莉の発言に乗つかるように、それぞれが私への期待を投げかけてくる。

「おーひなも、ともかのお話聞きたいな」

「安心しろもっかん。すでにサキが一番恥ずかしい思いをしてんだから、もっかんもすばるんへの熱い想いをBUCKIMAKEちゃえよっ」

「くっ……今回ばかりは否定できないのが悔しい……まあようやく落ち着いてきたわ……私たちが勝手にトモの話を楽しみにしてるだけなんだから、変に気負いしないで軽く話しちゃえばいいのよ」

まだ自分の想いを話すことに戸惑いや恥ずかしさもあるけど、それでも大切な友人たちが私の話を楽しみだと言ってくれているなら……

「もう……わかったよお。上手く話せるかはわからないけど……よかつたら私の想いを聴いてくださいっ」

\*

「今日も智花が家に泊まりに来ることになったわけだが、なんか智花と一緒に寝るのがすっかり当たり前になってきたような気がするな」  
——いや、あくまで俺の部屋で寝るのが一緒なだけで、それぞれが寝る場所は俺が布団で智花がベッドと、ちゃんと別々に別れて寝ている。

たまに智花が寝ぼけて俺の布団に潜りこんでしまい、目が覚めて、朝最初に見るものが智花の可愛らしい寝顔。というのが日に日に増えてきている気がする。

幸いなことに事故らしい事故は起きてないし、起こしてないと信じたい。

万が一でも接触事故が起きてしまい智花の大切な初めてを奪ってしまうような事態になってしまったら、不可抗力だとしても多分、自分を許せなくなってしまう。

きつと心優しい智花は許してくれるかもしれないし、その後も変わらずに今の関係のままできてくれるだろう。

でも、絶対に俺の見てないところで実は深く悲しんで、涙を流してしまっていることくらい容易に想像できる。

「本当なら、やっぱり智花の身の安全のためにも、一緒に寝るべきではないんだよなあ〜」

智花だって、そんなことくらいわかってるはずなのに、それでも俺の家に泊まりたい。と言ってくれてるし、俺自身も少しでも彼女と一緒に時間を過ごしたいと思ってしまうのも事実。

何にしても、今後も今の関係を気兼ねなく続けていくためにも、彼女の信用を損なうことは絶対にできないな。

そんなことを考えながら俺ごと長谷川昴は現在自室で智花の風呂上りを待っている。

普段はどんな状況だろうと智花に先に風呂に入ってもらっているのだが、今回だけは例外的に俺が先に風呂に入り智花を待つことになった。

当然、これにはちやんとした理由がある。

それは入浴後の智花にマッサージをするためだ——かなり局地的な部位に対して。

今回行うマッサージに限らず、基本的に入浴後の血行が良い状態の時の方がマッサージ効果も期待されているため、それらを考慮した結果、俺が先に風呂に入ることになったわけだが……

「いざ待つてみると。意外と長いものだな」

朝の練習後も先に智花にシャワーを譲り、その間自分は追加練習をして時間を潰しているが、こうして何もすることがなく、ただ智花のお風呂が終わるのをじっくり待つてみると意外と長く感じてしまう。

もしかしたら、時間が止まりその時が来ない方がお互い幸せなんじゃないかという考えも廻るが、すぐに否定する。

智花自身が望み、それに俺が応えることを決意したんだ、それなのに今更俺だけ自分勝手に迷うなんて智花に失礼すぎるだろ。

気持ちを引き締めるためにパソコンの前に座り、今までに得た知識の確認を兼ねて最後の情報収集を行うことにした。

——（豊胸マッサージ 小学生 小ぶり胸 方法 e t c）

まさかこんなキーワードを調べるようになるとは夢にも思わなかったな。そう思いつつ検索を開始する。

表示されるキーワード関連の文章や画像の数々に気恥しさと共に、俺はいったい何をしているんだろう？ と自分の行動を冷静に考えってしまうこともあったが、大切な智花のためという大義名分がある以上、この程度の羞恥心に怯んでなんかいられない。そのまま作業を続行だ。

さすが情報社会となったこの時代は気になったことは情報の真偽に関わらずいくらでも入手できる。

数か所のサイトを確認し、それぞれで表示されている情報を比較し合い、各情報の精査を行う。

「ん〜これは大人とか中高生向きじゃないのか？ お、これはちやうど智花と同じくらいだし使えそうかな？」

時折チラチラと表示される画像が視界に入る。たまに特定の画像



を見た瞬間、反射的に智花と比較してしまい、まったく関係ない思考がよぎるも慌てて首を振る。

あとは、どういう感じにやっつけていくかシミュレーションしていけば——というところで不意にドアを叩く音。

「昴さん、お待ちせしました。失礼しますねっ」

智花の声に慌ててパソコンの画面を閉じる。

いくら智花のためとはいえ、あらぬ誤解を掛けられないためにも、今の俺のパソコンの画面を見られるわけにはいかない。

「ああ。どうぞ」

パソコンの電源を切ったのを確認してから、声を掛けつつドアの方へ視線を移す。

控えめにドアを開きながら、恥ずかしそうにこちらを覗く智花の顔が見えてくる。

そして、智花の全身が見えたところで、相変わらず智花の寝巻——薄桃色を基調にした薄手のキャミソールとショートパンツという姿を男の前で晒すのは自分の魅力に無関心すぎるのではないだろうか心配になる。

しかもお風呂上り直後で、顔も身体もほんのり赤くなっててすごく色っぽいことになっていた。

そんな簡単に見慣れることができるわけもなく毎回ドキドキさせられているし、下手に俺と智花の立ち位置がかみ合ってしまうと、襟元や脇口の隙間から何かが見えてしまいそう……とんでもない事故が起こりかねないため常に自分と彼女の動向に気をつけなければならぬ。

もつとも今回はそれを思い切り見るところか触らせてもらうことになってしまうんだが、

——絶対に智花に後悔させないようにしないとな。と智花に悟られない様で心の中で静かに決意を固める。

「何かお調べになっていらしたんですか？」

パソコンの前に座っていた俺を見て、智花が不思議そうに尋ねながら部屋に一步を踏み出した瞬間——ミルクと石鹸の甘い香り漂い、俺

のむさくるしい部屋の匂いを一気に浄化されたような錯覚を覚える。

直接智花に向かつてすごくいい匂いだ。なんてことは智花が恥ずかしがってしまつたため言えないが、これからマッサージするときに思ふ存分この匂いを堪能させてもらおうという野望が一つ生まれた。

「ちよつと言いつらいんだけど、智花のための調べ事をね。智花が俺を頼ってくれた以上、俺もできる限りベストを尽くしたいし」

「ふええ!? ……そ、それって、その……」

「うん。今日のマッサージのために俺も調べられる範囲で色々調べてた。できることなら智花をいっぱい満足させてあげたいし」

「はうううう……」

言外に智花のおっぱいを智花が満足するまでしつかり揉ませてもらう。という発言とも取られかねないとは思つたが、案の定、あまりの羞恥心に言葉を失つてしまったようだ。

俺としてはこの発言で智花が考えを改めて、このままいつも通り雑談をするだけのただのお泊りとなつても構わないと思つている。

俺自身が智花の胸を揉みたいか揉みたくないかと問われれば、間違ひなく『揉みたい』と即答できる。

だが、それはあくまでも智花が俺に揉まれてもいい。もしくは今回みたいに揉んでほしいと思つてくれていることが前提だ。

大切な存在を傷つけてまで、そんなことをする意味はないつていうのは俺も智花もわかつている。

智花も俺にこんなことを頼むのに相当な引け目を感じていることくらいは容易に想像がつく。

だから俺からも智花がそんな引け目を感じる必要は一切ない。つてことをしつかり伝えてあげないとな。

「俺の方はいつでも準備万端だ。それで……確かに最終的には智花の……そ、その……む、胸を揉ませてもらうわけだけど、いきなり触るわけじゃないから、少しでも嫌だと思つたらすぐに教えて欲しい」

「わ、わかりました。でしたら私からも昴さんをお願いしてもいいでしょうか?」

「ああ、俺に智花を傷つけさせるようなこと以外ならね」

「はい。そう仰って頂けると思ってた……だから、もし私が怖そうにしたり嫌なのを我慢していると思われたのでしたら止めて頂いて構いません——でも、その代わりそうじゃなかったら……さ、最後までお願いしますっ」

良かった、お互いにパートナーとしてできることは頼ったり協力し合えるけど、無理なことに付き合わせたくはない。っていう想いは同じだった。

「えへへ。昴さんとちゃんと気持ちを通じ合えてたっていうのがわかってすごく嬉しいですっ」

「俺もだよ……智花」

互いに自然と笑みが零れる。

「不束者ですが。よろしくお願いいたします……って、この挨拶は違うんでしたよね？」

床に腰を下ろした智花が正座をしながら深々と頭を下げている途中で、軽く小首を傾げる。

「そこら辺は深く考えくてもいいんじゃないかな？ とりあえず、体も温まってるうちに始めようか」

「あ、あの……正面から向き合っては少し恥ずかしいので……後ろからして頂いてもよろしいでしょうか？」

「いいよ。おいで」

「し、失礼しますっ」

ベッドの端に腰を下ろし、自分の膝を軽く叩きながら呼び寄せるのと、智花もそつと俺の膝の上に腰を下ろす。

膝から太腿にかけてに感じる幽かな重さと火照った小さな体の淡い温かさ。そして彼女から発せられる甘い匂い。

無意識に彼女の髪に頬を摺り寄せながら、お腹の下に両手を回し優しく抱きしめていた。

「あ、あの……昴さん？」

「あ、あぁごめん。それじゃ、ちよつとずつ慣らしていこうか」

いかにいかに。智花を抱ける幸せを噛み締めるのに夢中になって

しまったな。

恥ずかしそうにしながらも肌の密着に嫌悪感を見せないでくれている智花に一安心。

回していた腕を一度解くと、左手はわずかに捲れ上がったキャミソールの中に差し入れ智花のすべすべのお腹の上の手を置きながら、右手は指先で首筋から鎖骨へかけてのラインをそつとなぞる。

「ちよつとずつ他のところも触っていくよ」

「はい。お願いします……ん……すぐドキドキしますけど、昴さんに触って頂けるの全然嫌じゃないです」

身体を撫でるたびに小さく可愛らしい声が漏れる。

多分大丈夫だとは思うけど、まだ智花の胸には触れない様に。と細心の注意を払いながら、下からはお腹からろっ骨付近へ、上は首から胸元付近へと智花の身体のラインを確かめるように徐々に撫でていく範囲を広げていく。

少しずつ大胆な触り方になってきているため、智花の表情を確認してみたが、心地よさそうに目を細めながら、俺に撫でられることを受け入れてくれている。

そして、俺の視線に気づくと、照れたような微笑みと甘えるような上目づかいで続きを求めてきてくれた。

手の力をわずかに強め、撫でるから本来の目的であるマッサージのための揉む動作へと変えていく。

「はふう……昴さんの手、ちよつとくすぐったいですけど暖かくて気持ちいいです」

俺の手に温かい小さな手が重ねられる。

「昴さんには物足りないかもしれないかもしれませんが……そ、そろそろ触って欲しいです……わ、私の……む、胸を」

「ごめんな。焦らしてたわけじゃないんだけど、やっぱり俺もどこかで智花に嫌われないかって不安に思ってたんだ」

「私が昴さんを嫌いになるなんて絶対にありえませんが。今回のことも私が昴さんにご無理を言ってお願ひしてしまっただけですし」

「それじゃ、智花の胸触らせてもらおうよ」

キャミソールの裾を両手で掴み捲り上げようとしたところで、智花に止められる。

「どうやら脱がされるのは恥ずかしいらしく、自分で脱ぎたいようだ。」

智花は一度深呼吸をして気持ちを落ち着けると、ゆつくりキャミソールを脱ぐと、そつとベッドに置いた。

実は撫でてる間に智花が体をよじったり前かがみになった時とか、胸元が大きく開いてしまった時にチラチラ見えてしまい、

そのたびに何度か目をそらしていたが、智花が自分の意志で俺に見せてくれるのだから、ここから先はしつかり見ないと失礼だよな。

智花の肩越しから覗き込むように、彼女のご神体を拝見させて頂く。

かなり緩やかな曲線のラインだけど、確かにふくらみがあって、幽かなふくらみの頂点には小さいながらも、本人同様に決して主張してゐるわけではないが、それでも目立ってしまう淡いピンク色の先端部分。

智花も俺の視線から俺が智花のおっぱいをマジマジと見てしまっているのはわかっていることだろう。

「ダメだ。申し訳なさを感じながらも智花の胸から目が離せない。」

「ちよつと失礼しますね……んしよつ……と、えいっ」  
「と、智花!？」

智花が俺の膝の上で向き合う様に体勢を変えると背中に回した両手で強く体を密着させるように抱き着いてきた。

上半身裸の少女が力いっぱい抱き着き肌を密着させてくる。というあまりにも刺激的な状況に思考が一瞬凍りつく。

「えへへ。こうすれば私の胸も気にならないですよ。嫌じゃないですけど、恥ずかしいんですから、あんまりおっぱいばかり見ちゃダメですよ——私のは小さいですし……」

「さつきから本当にごめんな。あと少しで落ち着けそうだから、もうちよつとだけこのままでもいいさせてくれ」

俺の胸に顔を埋めていたため智花の表情は見えなかったが、僅かに領きながら小さく微笑んでくれたような気配を感じた。

「よし！ 待たせたな智花」

「昴さん、もう確認はいらないですからね。いっぱいーっぱい私のおっぱいを揉んで大きくしてくださいねっ」

智花の両肩を抱き、密着していた二人の身体の距離をわずかに開けると、そのまま智花の胸へと手を伸ばし、優しく包み込むように胸を揉み始める。

やや張りが強いが十分柔らかくプニプニとした弾力はいつまでも味わい続けたくなるほどの中毒性を秘めていた。

智花の胸を揉む手から彼女の鼓動が伝わってくる。

「昴さんに私のドキドキが伝わってしまったてますよね？」

「うん。すごくドキドキしてるのわかるよ。俺だって智花のおっぱい触らせてもらってすごいことになってるんだよ——ほら」

智花の手を取り、俺の興奮が一番伝わるであろう場所へ智花の手を導く。

智花は幽かに震えながらも、俺の誘導に導かれるままに俺の一点へ伸びていく。小さく繊細な手がそつとそこに触れた瞬間——

「!？」

思わずビクリと俺の方が震えてしまった。

「ごめんなさい！ もしかして痛かったですか！ 私、変な触り方をしてしまったのでしょうか？」

とつさに手を離し目元に涙を浮かべながら心配そうに俺に尋ねてくる。

「いや、驚かせてごめんね。自分で触らせたくせに俺の方が智花に触ってもらったとたん驚いちゃっただけだから——もう一回触って確認してみてよ」

「はい。そ、その……何か粗相がありましたら遠慮なく教えてくださいね——それでは失礼しますっ」

再び智花の手が当てられる。

最初はそのまま手を置くだけであったが、次第に俺の熱い生命の躍動を手で感じ取っている間に、その感触が愛おしくなってしまうたのか、無意識に優しい手つきで智花がそこを撫で始めてしまっていた。智花に撫でられる度にどんどん緊張が高まり変な力が入ってしまふと、それがより熱く硬くなりながら、強く脈打っていくのが自分でもわかる。

「昴さんのどんどん熱く硬くなってきてます。私でこんなにドキドキして頂けるなんて嬉しいです！」

俺の左胸に手を当てて俺の早く脈打っている鼓動を感じ、嬉しそうにしている。

そんな彼女を見つめながら、俺も胸揉みを再開する。

夢中になって揉み続けている間、刺激に耐えるためか智花が身をよじるのと俺の胸を揉む動作が絶妙なタイミングで合わさってしまい、偶然にも智花の胸の一番敏感な部分に指をこすりつけるように触れてしまった。

「ふあああああん!! ……………はううう!!」

「ごめん智花!! 変なところ触っちゃった」

「い…………いえ…………私も変に動いてしまったので…………はしたない声を上げてしまって申し訳ありませんでした！」

ほんの一瞬だけ味わうことができた感触は他の部分よりもちよつとだけ固くて、触れた瞬間の智花の顔がめちやくちや可愛いことになっっていた。

思わず、もつとそこを重点的に攻めたいという欲望が湧き上がる。

「智花。俺が全部責任取るから、頼むからこのまま少しだけ激しくさせてもらっていいか」

欲望を抑えきれず、そのまま自分の思いを口に出してしまっているが、止められない。

大好きな智花の匂いを堪能させてもらっている首筋やうなじ。まだまだ揉み足りない柔らかい胸が、可愛らしいくぼみのあるお腹。まだ触れてはいないが、きつとすべすべした触り心地の良さそうな太腿やふくらはぎ。智花の全てが愛おしくなり、もはや理性のタガが外れ

る寸前だ。

わずかな動揺と期待に小さくコクリと頷く智花を確認すると同時に唯一残った良心の欠片——絶対に大切な智花に優しくするという決意を残して全て弾け飛んだ。

智花から言質を取れた瞬間、俺は彼女の肩を強く抱きしめながら、押し倒すように一緒にベッドに倒れ込んだ。

そして智花の大切な初めてを奪い取るべく顔をどんと近づけていく。

\*

「智花、俺がお前の初めてを全て奪いつくしてやる!!」

「あーだめえーすばるん……じゃなかった。昴さん!! お願いだから優しくしてー!!」

「はううう!! お願いだからもうやめてー!! 本当に恥ずかしすぎるよおおおっ!!」

途中から紗季が脚色を始め、真帆も便乗して加わりだし、最終的に昴さんにベッドに押し倒されておっぱいどころか全身を撫で回されたり匂いを嗅がれてしまう話へと変わってしまった。

「もうくなんで真帆と紗季が話に加わってきちゃうの? 最後だって絶対に昴さんはそんな強引なことしないよお」

「だって、もっかんの話、いつまで経っても話すすまねーんだもーん」  
「確かにトモと長谷川さんならこういう感じになるかな? って思うけど、延々と惚気話を聞かせられる身としてはね。お互いにもう少し積極的に求め合ってもいいんじゃないの?」

真帆も紗季も上手く話せない私に協力してくれたのはわかるけど、こんなに恥ずかしい話にされるとは思わなかったよ。

「話聞いてて思ったけどやっぱもっかんはエースだな」

「そうね。やっぱ普段から長谷川さんを見てるだけあるわね」

「智花ちゃんと長谷川さん、やっぱいいなあ」

「おーともかいっぱいおにーちゃんのこと知ってていいなーひなももっとおにーちゃんのこと知りたいー」

みんなからの感想もすごく恥ずかしいことを言われている。



私だって全然昴さんのこと知らないのに。

「みんなっ絶対に今日の話は昴さんに内緒だよっ」

「にししーまさかすばるんも自分があたしらのおっぱい揉んでる話なんてされてるとは思わないだろうなー」

「もしかしたら今後何かの拍子に触られちゃうことはあるかもしれないけど、長谷川さんだしきつとエッチなことはしないとと思うけどね」  
「ひなちゃんも絶対に長谷川さんだけじゃなくて、他の人にも話しちゃダメだからねっ」

「おーみんなとのひみつのおはなしー」

最後にみんなとすっかりと密約を交わしたところで、一番の問題に気づく。

——うう……明日からどんな顔して昴さんに会いにいけばいいんだろう？

「もっかん。すばるんはべんきよーちゅーなんだから、終わるまで誘惑してジャマしちやダメだかな」

「終わった後なら劳いの意味を込めてたつぷり癒してあげるのもいいかもね」

「そんなことしませんからっ!!」

真帆と紗季の二人にからかわれながらも、最後にはみんなदैいつぱい笑い合って五人だけの秘密の発表会は無事終了することとなった。

## シュートからゴールへ

初めての他校（硯谷女学院）との交流戦。結果は惜しくも負けてしまった。

以前、男バスとの部の存続を賭けた女バス初めての試合や球技大会でも勝つことができていたのだから、心の中ではきつとまた今回も勝てるだろうと思ってしまうんだと思う。

終了を告げるブザーが鳴り響く中、紗季から放たれたシュートがゴールから弾かれてしまった瞬間、体が震えあがっていた。

立ち尽くしていた私に真帆がすぐに駆け寄って「惜しかったな、もっかん」と優しく声を掛けてくれたおかげで、すぐにただの勘違いに怯えていたことに気づけた。

あの時の私は試合に負けたら、私達の部活が——バスケットが終わってしまう。そんな恐怖に身を引き裂かれそうになってしまっていた。

もちろんあの時と違ってみんなと一緒にいられるし、大好きなバスケットで続けられる。という安心感にどこかホッとしてしまったけど、やっぱり負けてしまったのは悔しいし、もっともっと頑張らないとってという気持ちだった。

何より、これまで私達を信じてたくさんご指導して頂いた昴さんの気持ちに応える結果を出せなかったことに申し訳ない気持ちでいっぱいになってしまった。

試合が終わった後も、昴さんは決して私達を責めずに、労いの言葉をかけて下さったり、自分の指導力不足だったと、まるで責任を昴さん自身が全て背負い込もうとしていらっしやるようにみえた。

あれからも朝練には付き合ってもらっているけど、どこか落ち込んでしまっているような辛そう表情をしているようにみえてしまう。

いつもより口数は少なかったけど、それでも私の事を気遣い優しい言葉をかけて下さる昴さん。

これ以上昴さんの元気のない顔を見るのが辛かった。

「それじゃ、午後からそっちに行くからよろしくね」

「はい。部活でもご指導よろしくお願いします」

結局今日も、何一つ気の利いた言葉を掛けることができなかつた自分が不甲斐ない。

ずっと昴さんのお側に居たい気もするけど、多分、隣に居るだけで余計な気苦労をかけてしまいそうな気もしてしまう。

どうするべきか迷っていたところに真帆から、みんなでお気に入りの公園に集まることになった。という呼び出しを貰えたのは幸いだったのかもしれない。

そして私は元氣のない昴さんを見続けることから逃げてしまう罪悪感を拭い切れないまま昴さんのご自宅を後にした。

集合場所だつた公園に到着するとベンチに並んで腰を下ろしている真帆達が四人で何かを話しているようだった。

私がこの学校に転校してくる前から、すでに四人は友達だったのだから当たり前だけど、みんな笑いながらとても楽しそうに話している。

「こらーっもつかーん!! なんてそんな離れてるところで見てんだよーっ!!」

私に気づいた真帆が大きな声で私を呼ぶ。

そういえば、真帆がいつも私のことを気にかけてくれたから、みんなとも友達になれたんだよね。

「よしー。そんじゃさっそくはじめっかつ」

「はーいっみんな揃つたし、緊急会議始めるわよー」

みんなに挨拶をしながら、同じベンチに腰を下ろすとすぐに真帆と紗季が高らかに宣言する。

——テーマは昴さん抜き私達五人だけの秘密の反省会。

真帆の謝罪を皮切りに——

「まずは……みんなごめんっ!! すばるんがせっかく立ててくれた作戦をダイナシにしちゃって、ホントごめん!! うう……ホントはすばるんにもあやまりてーんだけど、ゼツテーすばるんはあたしを甘やかしちまうから今はダメだつて、サキに口止めされてんだよなー」

——続いて紗季。

「最後のラストシユート。あれを決められなかったのが本当に悔しい。みんなが……トモが最後に私を信じて託してくれたのに、長谷川さんや美星先生は運が悪かっただけで最高のシユートだったって、おっしやって下さったけど、それでも決めることができなければ意味がない。だから絶対に今度こそ決めてみせる！」

紗季の反省と強い決意に続き愛莉が口を開——こうとして、真帆がそれを遮る。

「アイリーンとひなは別に今回わりいところなかつたし別にいいんじゃない？」

「そっそんなことないよ!! 私だっていっぱい反省しないといけないうって思ったことたくさんあるんだよっ」

「ぶーひなもみんなとはんせーかいしたい」

「ちゃんとみんな思うところあるだろうから、話させてやりなさいって」

紗季が真帆を窘めたところで、改めて愛莉が想いを告げる。

「みんなからも、長谷川さんにも私にいっぱい負担掛けちゃったけど、よく頑張ってくれたって褒めて貰えたのは嬉しかった。でも、やっぱり私は勇気が足りなかったと思う。本当はもっとしっかり足を踏ん張って止めないといけなかつた場面だってたくさんあつたと思う——ううん。絶対にあつた。怖い気持ちはあるけどもっともっと勇気を出さないと。って思いましたっ」

初めて愛莉と出会った時には、無配慮な言葉で愛莉を傷つけてしまったけど、そんなことがあつたことが信じられないくらい、今の愛莉はとても堂々としている。

きつと愛莉はこれからも、もっともっとセンターとしての力を成長させていくことを確信すると同時にその才能に羨ましさを感じた。

「おー今度はひなのばんー。ひなはおにーちゃんとのヒミツトックンでおぼえたカツコイーシユートを決めることができてるうれしかったです。でもでも、もっともっとみんなのお役に立てるよーにがんばりたいです。みんなよりもヘタツピなひなは、みんなのゴキタイに応え

るためにもがんばらざるをえないっ」

「なー。別にアイリーンもヒナもハンサーするとこなんてねーじゃんかっ！ これからもあたしやもっかんを見習ってマジメにレンシューすればどんどんうまくなって今度こそチビリボンチームをやっつけれるんだしきっ」

「まてっ聞き捨てならないわね。トモや愛莉はともかく、あんたとひなはたまに余計なこと仕出かして長谷川さんを困らせてんでしょーが！」

昴さんの秘密特訓で新しいシュートを教えてもらっていたことを改めて羨ましく感じながら、ひなたの反省を聞いていたら、やっぱり真帆が二人の話に水を差して紗季を怒らせている。

「あたしとヒナはみんなとのチームワークコージョーのためにやってんだぞー」

「おーそうだそうだー！」

「はあ……もういいわよ。でもあんまりハメを外しすぎて迷惑だけはかけないようにね」

真帆とひなたの抗議に諦めたように返す紗季。実際この二人のおかげでみんなが仲良くなってきているのは事実だから仕方ないと割り切っているのかもしれない。

「じゃ、さいごはもっかんだな」

真帆の一言に自然と私への注目が集まったように感じた。

「わ、私は……その……初めの頃と比べてみんなどんどん上手くなってきてるんだし、信じて付いてきてくれたみんなのためにも私自身ももっともっと頑張らないと。って思いましたっ」

——そして、みんなや昴さんの悲しい顔を二度と見なくて済むように。

「それだけ？」

「ふえ!? ……え、えっど……」

紗季の本当はもっと言いたいことがあるんでしょ。とでも言いたげな視線に思わず言葉を詰まらせてしまった。

「この際だからはつきり言うけど、トモはせめてバスケの時くらいは

私達に遠慮しなくてもいいんじゃない？ 真面目にバスケットを始めてわかったんだけど、今まで私達に遠慮してほとんど本気を出せなくて、とても窮屈な思いをさせてしまったんだと気づいた」

「もっかん。私達とバスケットするのはすっげー楽しそうだけど、たまに物足りなそうな顔してんぜ」

紗季と真帆の二人に詰め寄られてしまい、返すべき言葉を必死に探す。

今まではみんなと楽しむバスケットをするだけですごく充実した日々を過ごせていたけど、その幸せな日々を脅かす出来事があった。

そんな中、出会ったその人は今の自分が持てる全ての實力を出し切っても未だに遠く及ばない尊い存在。

あの日を境に少しでも昴さんに追いつけることを目標に再び燃え上がらせることができたバスケットへの情熱に力を入れているのは本当だ。

「で…でもみんななどのバスケットが大切だし、本当に大好きなんだよ!!」  
それも胸を張ってはつきりと言える。

「私達だってトモのこともバスケットのことも大好きだよ。最初の頃はトモと私達の間で楽しむバスケットと勝つためのバスケットで考え方にずれがあったのかもしれないけどさ。もう私達だって、そろそろトモが本当にやりたかった勝つためのバスケットに参加させてくれてもいいんじゃない？」

「で、でも……」

「だいじょーぶだってもっかんっ。もっかんのおかげでみんなバスケット大好きになっただしさっ」

「うん。今まで智花ちゃんがいっぱい私達を引っ張ってきてくれたんだから、私だってもっともっと智花ちゃんの役に立てるバスケットができるようになりたいっ」

「おー楽しむバスケットもまだまだいっぱいやるけど、勝つためのバスケットもいっぱいやって上達せざるを得ないっ」

本当にいいの？ 私きつとまた失敗しちゃうんじゃない？…みんなを失ってしまったら、もう私立ち直れなくなっちゃうよ……

きっと自分でも泣きたくなるくらい、すごく情けない顔をしていたんだと思う。そんな顔を見られてしまったのは恥ずかしいけど、真帆が――

「そんなしんぱいそーな顔すんなって、もしもつかんがあたしたちにムリなことをキョーヨーしようとしたらすばるんが止めてくれるからさっ」

――たった一言で私の不安を全てかき消してしまった。

「まったくここぞって時にもっていくわね」

「にししーだって、このサイツコーのメンバーをそろえたのはあたしなんだぜ!!」

バスケから離れるために転校した私に、バスケのために声を掛けてくれた。

そしてあつという間に紗季、愛莉、ひなたをチームに入れてしまい、私を再びバスケへと導いてくれた。

「まあ、そこら辺の功績は認めてあげるわよ。トモも知ってると思うけど、やり口がほんと強引だったけどね。誘ってもらってバスケを知ることができたのは感謝してる」

「えへへ。そうだよね。私とひなたちゃんは真帆ちゃんに助けられた同士で仲良くなったけど、紗季ちゃんや智花ちゃんとも、友達になれたのはバスケを始めたおかげなんだよっ」

「おー！ ひなもまほやあいりだけじゃなくて、さきやともかとも仲良しになれたのすっごくうれしーよー」

「な、なんだよーみんなして、そーゆーのは、かゆくなるんだからやめろよー」

恥ずかしがってる真帆に素直な感謝を述べながらも、みんなが今にも泣きそうな私のことを温かく見守ってくれている。

「うん……うんっ……ひつく……」

怖くて泣きそうだったのは必死に我慢できたのに、嬉しくなるとたん全然我慢できないよ。みんなの前で泣くのなんて恥ずかしいのに……

泣き出してしまった私をみんなが優しく抱きしめてくれた。

——後ろから抱きしめてくれている紗季が優しく語りかけてくれる。

真帆のおかげで私達と友達になれたと思ってるから真帆に一番心開いてるかもしれないけどさ、それはみんな同じなんだよ。

たまたま同じクラスの四人が知り合いだった所に最後に智花が来てくれた。

それまではみんなバスケ一つでここまで仲良くなれるなんて思わなかった。

最初は私が真帆に引つ張り回された者同士って感じで、みんなを誘導して上手く仲良くなれるようになって張り切ってたつもりなんだけどね。

でも、そんな必要はなかった。だってみんなすぐに打ち解けられたんだし、私もつい夢中で楽しくなっちゃったんだから。

トモが私達にバスケを教えてくれたおかげで、こんなに仲良くなれたんだからトモが私達に遠慮する必要なんかない。

トモが私達に感謝してるくらい私達だってトモに感謝してるんだよ。

——みんなを温かく包み込みながら私の頭を優しく撫でてくれる愛莉が続く。

正直言うと、初めて智花ちゃんのバスケを見た時はすごく迫力があつて少し怖かった。

でも、普段は私みたいにおとなしい子がこんなに強くかつこよくなれるなんて。っていうのがとても羨ましかった。

智花ちゃんと一緒にバスケができたら、私もこんな風に自分に自信を持つて堂々とできるのかな？って思ったんだ。

だから迷惑じゃなかったら、これからもたくさんバスケを教えてください。

初めて言われた時はびっくりしちゃったけど、これからは智花ちゃんや長谷川さんと葵さんが私に自信を持って勧めてくれたセンターとして頑張るからっ。



——私よりも小柄なひなたが全身でしがみ付くように抱きしめてくれている。

ともかーうれしーときは泣いちゃだめだよ。

ともかが泣いてるとひなもかなしくなっちゃうよ。

それでね。今度はひながお話する番だよ。

初めてともかのバスケットを見た時、ともかすっごくかっこよかった。

まほのおさそいでバスケットをはじめた時もひなは足おそいし、運動できなくてダメダメでした。

それでも、ぜんぜん怒らないで、ひなのことも仲間に入れてくれたことにすっごく感謝です。

だからひなはみんなのこと大好きだよ。

——泣き出してしまった私を真っ先に正面から抱きしめて、照れたような眩しい笑顔の真帆。

もー！　なんでみんなしてあたしが照れてる間にすきほーだい  
言ってくれてんだよー

おかげであたしはなに言えばいいかわかんなくなっちゃったじゃんかっ。

あー！　もうー！　いいや！！　こーしきせんなんてかんけーねえ  
！！

これからもあたしたちのバスケットをずっとずっとやり続けるぞ！！

だからもっかんもあたしらにエンリョなんかしねーで、どんどん  
すっげえプレーをやってみんなをビックリさせちゃえ！！

「みんな……ありがとう。私……みんなと知り合えて、友達になれて  
本当にうれしいよっ！！」

どれだけ絞り出したって自分にはこれ以外の言葉は見つからなかった。

絶対にみんなのことを離したくない。

みんなの中に入っていききたい。もっともつと絆を深めたい。

だから少しでも自分の想いがみんなに伝わるようにせいっぱいみんなのことを抱き返した。

「ふふっ。それじゃ一番の案件が片付いたところで次の議題に移りましょうか」

「うし、もっかん。さっそく期待してるからがんばれよ」

「おーともかがんばれー」

「えつと……智花ちゃん、さっそくで悪いんだけどごめんね。多分智花ちゃんが一番向いてる役割だと思うから……」

「ふえっ!?!」

——二つ目のテーマは落ち込んでいる昴さんを元気づける（最重要案件）だった。

昴さんのことが最重要だったんなら、私の事より先に話すべきだったんじゃない？ と真帆に聞いてみたら、「もっかんのことはチョージューヨーだから当たり前だろ」と即答で返ってきた。

そして、すでに昴さんを元気づけるための具体的方法も挙がっていて、その方法が——

——私がメイド服で昴さんの言うことを何でも聞く。だった。

「あートモ？ 本当に嫌だったら断っていいんだからね？」

「ううん。大丈夫だよっ。私だって昴さんの悲しそうな顔なんか見たくないし、みんなが私ならできるって信じてくれてるんなら、それに応えたいっ！」

これくらいなら初めて昴さんをお出迎えした時にみんなで作ったことだし。

少し恥ずかしいけど、これで昴さんも元気になって下さるなら——「すばるんのことだから、もしかしたらもっかんの初めてをヨーキューされるかもしんねーけどいいの？」

「長谷川さんならそこまではしないでしょ……でも、まあ、キスくらいは覚悟した方がいいかもね。その方が私としても楽しみだけど」

「智花ちゃんと長谷川さんが……き、キス……はうっ」

「おーともかいいなーひなもおにーちゃんとちゅーしてみたいー」

「ふええ!? す、昴さんはそんなことしないよお!」

もしかして私、とんでもないこと引き受けちゃったんじゃないか……

羞恥心に震えている私に真帆と紗季が笑いながら話しかけてくる。

「だいじょぶだって、もっかんがほんとーに怖がつてんなら、すばるんだってそんなことしねーだろーし、あたしらだってもっかんを守ってやるからさっ」

「私達とトモとの絆が深まったことを確認できたんだし、こんな感じで今まで以上にトモと長谷川さんの仲が進展するように少し無茶振りするかもしれないけど、そこはよろしくねっ」

「ほ、本当に恥ずかしいことは絶対にやらないからねっ」

そして昴さんを元気づけるための作戦を執行するためにみんなで準備を始めることとなった。

## 長谷川さん充な夏休みの日々 智花とかき氷。

「やっぱり智花は最高だぜっ」

「はあ……はあ……お役に立てたのなら……嬉しいです……私も……すごく楽しかったです……はううう」

俺との激しい運動で、智花はすっかり疲れ切ってしまった様子だ。思うように動かない体を横たわらせて、紅潮した頬と小さな胸を大きく上下させながら息を整えている。

極限まで高まっていた緊張状態から一気に解き放たれ、解放感とその余韻に浸っている、といった感じのとても満ち足りた表情をしていた。

「ごめんな。智花のかわいい顔をこんなにしちやって」

ベトベトに汚れてしまった智花の顔を丁寧に拭いてあげていると、「自分でできますからっ」と慌てて起き上がろうとしていたが、上半身を少し起こしただけでそこから動くことができないようだった。

やはり小学生の体力で毎回俺に付き合わせてしまうのは相当の負担になってしまっているのだろう。

「無理しなくていいよ。いっぱい俺に付き合ってくれたんだから、せめてこれくらいはさせてほしいな」

初めては智花から誘われたことであり、俺自身も確かに智花とどここやりたい。という欲求はあったが、理性が邪魔をしまい乗り気にはなれなかった。

——だけど俺の心を救い、本当に大切なものを教えてくれた智花に。

小さな自分では俺を受け止め切れないとわかっているながらも、それでも少しでも深く俺を受け止められるようにと覚悟を決めている智花に。

悩んだ末ではあったが、どこまでも真摯に求めてくれた智花に俺も自分の気持ちに正直になろうと決めた。

「ふえええええ!? こ、こんなに早いですかっ!？」

——ちなみにこれが初体験直後の智花の感想だった。

そりゃ、若さで言えば全盛期の高校生だ。まして智花がお相手をしてくれてるんだから、これ以上にもっと早くなれることは確定的に明らかだ。

初体験から以降数回は、俺も絶妙な加減を模索するべく智花が頑張りが過ぎて無理しないようにと気遣う余裕もできていたと思う。

もちろんまだ簡単には抜かれるつもりはないし、抜かせないどころか逆に一瞬の隙をついて攻守を入れ替えて、子供の智花に大人の実力を思い知らせてやる。くらいの意気込みを持っている。

「ごめん、智花。またちよつと夢中になりすぎて負担掛けすぎちゃったみたいだね」

「い、いえ。私もどうしても昴さんを抜きたい。ってムキになってしまった」

俺にいいように攻め続けられていることに対抗心を燃やしてしまっていた自分の姿を思い出し、照れたように笑っている。

どんどん上達していく彼女について手加減を忘れ、激しくなってしまうことが最近増えてきたような気がする。

今となつてはお互いに相手の弱点や得意なタイミングも熟知できたせいで、こうして互いの弱点を突きあつた激しい攻め合いになってしまうことも——そして気づいたら智花を限界まで付き合わせてしまうことも増えてしまった。

「でも、本当に大丈夫? 朝からこんなに頑張らせちゃつてごめんな」「えへへ。ちよつと大変でしたけど、毎日とてもいい経験をさせて頂いて……あれだけ激しく攻め合ったのに昴さんが全然余裕そうなのが少し悔しいですけど」

智花が少しだけ羨ましそうな表情で俺を見上げている。

こればかりは高校生と小学生の純粋な体力の差だから仕方ないけどね。と言つても、彼女の性格では納得しきれないだろう。

「でも智花くらしいの年齢で、ここまで動けてテクニクもある子なんて、そうそういないと思うよ。毎回、どんどん上手くなつて驚かさ

れてばかりだ」

自分が今までに溜めこんでいた物をすぐに吸い取られてしまうのでは。と錯覚する程の飲み込みの早さ。

そして、それでもまだ足りない。と言わんばかりに、どこまでも純粹に俺に求めてくる。

そのうち俺が一方的に抜かれてしまう展開もあるのではないかと内心冷や冷やしているのが本音だ。

「でも、まだまだ足りませんっ。もっともっと上手くなって昴さんにたくさんご満足して頂けるようになりたいですからっ」

そして、いつか絶対に勝ってみせます。と小声ながらも彼女のささやかな野望がポロツとこぼれでてしまっていた。

慌てて俺へのフォローをしている彼女の髪をそつと撫でながら、楽しみにしているよ。と伝えたが、それでも自分が大変な失言をしてしまった。と感じているのか顔を真っ赤にしながら俯いてしまった。

本当にどこまで成長していくかが楽しみな存在だ。

成り行きで始めることになったコーチとしてではなく、長谷川昴個人として、湊智花の成長をいつまでも見続けていたい。

無限の可能性をその小さな体に秘めているんだから、まったく、智花は最高だぜ!!

「それじゃ、少し休んだことだし身体が冷えない内にしっかりとクールダウンしようか」

「はい。今日も朝から練習にお付き合い頂いてありがとうございます。追いついて見せますからねっ」

「いっぱい汗かいたちやたらうし、先にシャワー浴びてきなよ。俺のためにいっぱい頑張ってくれたんだから、本当はお礼の意味も込めて俺が智花を隅々まで洗ってあげたいくらいなんだけどさ」

「そんなっいつも私からなん……ふええええええ!? す、昴さんが……わ、私を……す、隅々まで!? ……はううううう!」

しまった。智花に付き合ってくれたことへの感謝をしつかり伝えたくて思ったことそのまま言ってしまったが、明らかにこれはやらかしちまった。

「ごめん智花！ さすがにデリカシーなかったよな。前に智花に背中流してもらって嬉しかったけど、智花が俺に洗われるのは嫌だよね」  
「い、いえ……その……嫌というわけでは……むしろ……いえ……き、今日はその……は、恥ずかしいので……い、いつか心の準備ができた時にお願ひしますねっ」

俺の発言を責めるどころかフォローまでしてくれるなんて。本当はすごく嫌だったんだろうに悪いことをしてしまった。

いちいち自分の失言を蒸し返してギクシヤクするより、ここは彼女の優しい好意に甘えさせてもらうことにした方がいいよな。

「ああ。遠慮せず、いつでも構わないよ」

あれ？ なんか嫌がってる智花に強引に迫ってるような感じに取られちゃうんじゃないか………反省。

「……やっぱり今してもらおうかな………あ、いえ！ ……な、なんでもないですっ。それではお風呂先に頂いてきますねっ」

恥ずかしそうな顔を隠しながら、パタパタと風呂場へ駆けていった。

ああ、こんなつもりじゃなかったのにな……そりゃ、ちよつと考えれば女の子が男に身体を洗われるのなんて嫌なことくらいわかるのに。

最近、どんどん智花を身近に感じるが多くなってきたせいか、俺の方が無意識に過剰なスキンシップを求めてしまっているのかもしれない……

もしかしたら、気づかない内に智花を不快にってしまう行動が増えていたとしたら本当に申し訳がないな。

彼女に対しての自分の行動で少しでも変な行動はなかったか振り返っている、いつの間にかだいぶ時間も過ぎてしまったようで、頬を上気させ恥ずかしそうにしている智花が律儀に俺にシャワーが終わったことを伝えに来てくれていた。

——俺がシャワーを浴び終わり自室に戻ると、何故か俺のワイシャツを羽織り、恍惚とした表情で物思いに耽っている智花がいた。

智花にしては珍しく慌てた様子で粗相をしてしまったと俺に何度も謝罪の言葉を口にして許しを求めていたのが少し不思議だったが。

ちなみに俺に気づく直前までの智花は大きすぎるワイシャツに包まれながら幸せそうな笑顔を浮かべていて、その姿が本当にかわいらしく天使のようにさえ見えた。

もし写真の一枚でも撮れたなら携帯の待ち受けなり俺の部屋に飾っておきたかったのに。残念ながら本人から撮影はNGとのお達しだった。

俺と智花の関係が良好状態で維持されていることにお互い安堵したところで、長谷川家のおやつ時間を迎えていた。

それぞれ透明な器に粉々に粉碎された氷の山が盛られ、山の頂上付近には俺のは緑色で智花のは赤色の液体がかけられている。

夏の風物詩ではあるが、小学生にかき氷はどうだろうか？

「なんか安っぽいおやつになっちゃってごめんね。ちよつと期待ハズレだったろ？」

「いえ、そんなことありませんよ。この時期じゃないと食べれないですし、とても冷たくておいしいですっ」

その笑顔に偽りはないようで純粋に喜んでもらえてるのが幸いだった。

おいしそうに氷の山を口に運んでいる智花の姿を見て、ふと幼少期に親父に言われたことを思い出す。

「そういえば かき氷のシロップって実は色が違うだけで味は同じって聞いたことあるんだけど、智花知ってた？」

「ふえ!? そ、そうなんですか!? 昂さんに教えて頂いて初めて知りましたっ」

「なんか色で味覚の錯覚を引き起こさせて、赤色はイチゴで緑はメロンの味だと思わせてるらしいんだけど」

「へえ……昂さんって物知りなんですねっ」



智花の視線が俺の手元——正確には俺が持つてるかき氷（通称メロン味）に釘付けになっていた。

「……一口食べてみる？」

「ふえ!? あ、あの……その……」

さくつと氷を掬ったスプーンを智花に差し出したところで——智花の反応を見て気づく。朝にこれからは気をつけようと誓ったばかりなのにまたやらかした自分につくづく学習能力のなさを痛感した。

「ご、ごめん。さすがに俺が使ったスプーンは嫌だよ。智花が興味津々で見てたから、つい無意識でやっちゃっただけだから——」

「い、いただきますね……はむっ」

無理に食べなくてもいいよ。と言い終わる前に智花が俺のスプーンを啜えてしまった。

俺が使ったスプーンで智花にあーんをしてしまうなんて……本当は嫌なのを我慢して俺の好意に気を使って、本当にごめん。

深い罪悪感に打ちひしがれてる間に、智花はスプーンに乗っていた氷の塊をしっかりと口の中に受け取るとゆつくりとスプーンから口を離す。

しばらく味を確かめる様に小さく口を動かしてから、こくと嚙下させる。

「す、すみません……は、恥ずかしくて……よくわかりませんでした……私からお願いしたのにごめんなさいですっ」

「もともとは俺が始めちゃったことだし、智花が謝る必要はないよ。俺の方こそ変なことさせちゃってごめん」

赤くした顔を俯かせながらも、律儀に正直な感想を伝えてくれる智花に胸が痛くなる。とにかくこれ以上お互いの傷を広げないためにも、この話はこれで終わらせてしまおう。

「あの……よろしければ、私のも一口食べていただけますか？ 昂さんのを頂いてしまいましたので……」

智花さんそのお返しはさすがに恥ずかしすぎると思うんですが——そんなことを考えている間にすでに智花は先ほどの俺を真似て一口分の氷の山を自分のスプーンに盛っている。

そして、俺の前にどうぞと言わんばかりにスプーンを差し出してくれた。

——シロップが一切かかってない真っ白な雪山を。

こんなことにも気づいてないくらい緊張しているのは、今にも泣きそうなくらいビクビクと怯えた表情でもわかるし、そんな智花に無粋な突っ込みはするべきではないことくらいもわかってる。

自分が取るべき行動を決め兼ねて、いつまでも受け取らないままだと智花を不安がらせてしまっただけだし、彼女を傷つけてしまうくらいなら、俺が罪悪感を背負い込めばいいだけだよな。

「ああ、そ、それじゃ一口だけもらうね……ずずっ」

内心でごめんな。と一言だけ付け加えながら、できるだけ智花のスプーンに口が触れない様にして氷の山を吸い込んだ。

音を立てて食べるのは食事の基本マナー違反だったかな？ と罪悪感から気を紛らわせるための自衛か、場違いな考えを思い浮かべてしまったが、智花も気づいていないし、別に気にしないでおう。

「昴さんはどうでしたか？ 違いというか、味がわかりました？」

「うくん、なんか上手く言えないんだけど、智花の方がちよつとだけ甘いかな？ って気がしたかな。多分気のせいなんだけどね」

俺が食べたのは氷の山だし——とは口が裂けても言えないが、口の中に含んだ氷からは、なぜかほんの少しだけ淡い甘みを感じた。

「あ、あの、差し出がましいお願いなのですが……も、もう一口だけ昴さんのをいただけじゃないでしょうか？」

ここにきて、自分のよくわからないコメントが更なる失言となってしまっていたことを悟った。

——いかん。俺の変な感想に智花さんが余計興味津々になってしまった。かと言って、これ以上はダメなんて言うわけにもいかないし、今更一回も二回も同じだよな。

あとで智花に深く懺悔することを心の中で誓いながらの二口目を差し出す。

「別にそんなこと構わないよ。はいどうぞ」

「こ、今度はしっかりと味あわせて頂きますっ……はむっ」

言葉に偽りはないと言わんばかりに智花は先ほど以上にしつかりと俺のスプーンを啜えながら、味を確かめているようだ。

「……………んっ……………んっ……………はふう」

智花の様子を見るだけでこちらも気恥しくなってくる。

俺のスプーンをしゃぶるように啜えていた智花は途中で何かに気づいたのか一瞬恍惚とした表情を浮かべ、口の中の液体をじっくり味わうように飲み干すと、ようやく口を離してくれた。

「ど……………どうだった？」

「ちよつとだけ昴さんが言ってたことがわかったかもしれません——ほんのり温かくて優しい味がしました」

「昴さんもどうぞ」

「ん……………言われてみると、ちよつと不思議な感じがするよ……………ね？…………………………っ!!」

再び差し出された氷の山——今度はちゃんと赤いシロップがかかっている。を反射的に自分も受け取ってしまった。

何がとは言わないけど、これで二回ずつなんだよな。と考えていたところで、智花が言わんとしていたことに気づく。

味は確かに同じなんだけど、本当に気のせいと思うくらい幽かにだけど温かいな。食べてるのは氷なの……………に？

かき氷食べてて温かさ感じるってそれってスプーンに残ってる俺と智花のたいお……………いや、これ以上考えてはダメだ。

進行中だった思考プロセスを強制的に終了させ、智花には全てが伝わらないだろうけど、色々な思いを込めた謝罪を伝える。

「智花ごめん。俺が変なこと言い出したせいで」

「い、いえ、貴重な体験をさせて頂いたので嬉しかったです……………」

図らずしもお互いの温かさを味わうことになってしまった、そんなひと夏の思い出。

——食べ終わった後に、台所にいた母さんに確認したところシロップは自家製だったということが発覚し、頬を真っ赤に染めて俯いてしまっていた智花に何度も土下座しながら謝った。

いつもと違うシチュエーションで少しだけ背伸び

「どうだ智花」

いつもの……いや、いつも以上に大きくパンパンに張りつめた物を智花の眼前に突き出す。

これを見た時の智花がどんな表情をするかが楽しみになってしまい、俺自身も相当興奮して、つい驚かすような出し方をしてしまった。「すごい……いつも触り慣れてるものとはまるで別物です。とつても硬くて大きくて……私にはまだ扱い切れないかもしれません——」

小柄な見た目通り、普段は自分の気持ちを抑え過ぎてしまうところがあるが、やはり大好きなことに対してはとても積極的で、ひるむことなく俺に想いを告げてくれる。

「ごめんなさい。私、気持ち焦ってしまいました……すぐにでも昂さんとしたい気持ちを抑えられなくなってしまった……はう」

——が、どうやら自分が勢いで口走ってしまったことを恥じてしまったようだ。

頬を赤らめ蚊の鳴くような声で呟いているが、それでも無意識に、その小さな手で優しく大切な物を撫でるような動きは止まっていな

い。口ではこう言っても、やっぱり体は正直なんだな。と思わず嬉しい笑みを零しながら智花を見ているが、智花は俺の視線には気づいていない様子でそれを撫で続けている。

「気にしてなくていいよ。俺だって智花とするの大好きだし……だけど、こっちの準備は見ての通り万端だけど、智花の方もちゃんと準備を整えないとな」

胸から沸き上がる感情を抑えきれず、すつと彼女へと手を伸ばす。

「あ……そ、そんな昂さんのお手を煩わせなくても……ひ、一人でできますよ……」

遠慮がちに断られたが、多分今の智花なら簡単な説得ですぐに俺にも手伝わせてくれるはずと判断し言葉を続ける。

「それはわかっているんだけど、俺も手伝った方が早くできるだろ。俺だって今すぐにも智花と楽しみたいんだからさ。それに二人でいっぱい楽しみたいだけなのに、万一智花の準備が不十分のまま始めて智花に痛い思いなんかさせちゃったら、責任感じちゃうし、俺ももつと丁寧にするべきだったって自分を許せなくなっちゃうよ。」

「ずるいです。そんな言い方……絶対断れませんよ」

言葉は不満そうだが、口調はとても嬉しそうだった。

再び智花に指先を伸ばしていくが、今度は止められることなく、智花のとても柔らかい部分に触れることができた。

「ん……昂……さん」

「無理しないで痛かったら、正直に言ってくれよ？　本当に智花を傷

つけたくないんだから」

「大丈夫ですよ。昂さんには、いつもとても優しくして頂いてますから。もつと強くしてくれてもいいくらいです。」

それじゃ、遠慮なく行くぞ。と、

智花の後ろに回り込みベストポジションを取った俺はグツと力を込め――

――智花の背中を押した。

「やっぱいつみてもすごいよなー。ほんと体柔らかくて羨ましいよ」

「そうでしょうか？　私たちの中ではひなたが一番ですけど……それに昂さんも十分柔らかいと思います」

普通に自分のバスケットをする分には支障がない程度は維持されてると思うが。

智花はそう言ってくれるけど、やはり小学生のとても柔らかい体に比べれば俺なんかガチガチだろう。

俺も智花くらいの頃にはきつとそれくらいの柔軟性はあったと思うんだけど、やっぱ技術を求めるだけじゃなくて、その頃からストレッチもしっかりやっておくべきだったよなあ

「……あ、あの……昂さん？」

「ん？」

俺の下にいる智花が何故か小さく震え声で俺を呼ぶ。

「そ、そろそろ手を離して頂けると……」

「あ……ぶ、ごめん！　もしかして痛くしちゃった!？」

慌てて彼女の小さな背中押し付けていた両手を離す。

俺の両手には智花の温もりがしっかりと残ってしまっているあたり、無意識に何度も彼女の背中を押してしまったのかもしれない。

感触は……うん。ただちに記憶から抹消しないと。

「大きいけど、とても優しくしてくれたので、ちよつとドキドキ……いい、いえっ！　すっかり背中を押して頂いたので、十分体も温まったと思いますっ」

「そ、それならよかった。うんっ。それじゃさっそく始めようか。今日はちよつとだけいつも違うシチュエーションになるけど、智花だったらすぐに慣れると思うよ」

いつものミニバス用に設定した位置よりも更に高い場所にあるゴール。

ついでにボールも最初に智花に確認してもらった通り六号玉だ。

ボール自体はマネージャーになるって言い出した葵から「私にはあんまり必要ないからあげる」と言われもらったというか、一時的に借りてるだけだが。

葵だって、自分の気持ちに正直になって、いつ再開できるかわからない男バスのマネージャーよりも女バスに打ち込んでもらいたいんだけどな。

そう言ったところで殴られるか蹴られるかして終わるだけだろう。

今は時期尚早なだけだろうし、もう少しの間だけ智花のためにも、ありがたく貸してもらおうことにしよう。

「ちよつとだけ早いけど、智花もこれで大人の仲間入りだ」

「えへへ。まだ小学生ですけど、少しだけ背伸びをした気分です」

さすがに家じゃコートのはさままでは再現できないけど、今後中学以降はボールの大きさもゴールの高さも変化しない。

試合時間は高校まで少しずつ伸びていくけど、それは追々。

「中学生になったら、昴さんと同じゴールの高さで一緒にできるんですよね」

「そうだね。ボールの大きさは残念ながらちよつとだけ違うけど」

「うう……そこだけは本当に残念ですつ。もう少しだけ私が早く生まれることができたなら、中学生の昴さんと本気の勝負ができたかもしれないのにつ」

男バスと女バスは中学までは六号サイズだが、高校以降は男子だけは七号サイズと一回り大きな物を使用することになっている。

「それだと俺と会えたかもわかんないよ？」

「あはは。そうですね……それに、私は自分が生まれた時に生まれることができても本当に良かったって思います。いっぱい辛いことや後悔したこともありですけど……それでも真帆に紗季に愛莉とひなた、みんな大切な友達です。それに、昴さんに出会うことができましたから」

みんななどの大切な思い出もつとたくさん作っていきこうな。そんな想いを込めながら、自然と智花の髪を撫でると智花も嬉しそうに目を細め、撫でられることを受け入れてくれた。

——そこで、ようやくあることに気づいた。

「あれ？　もしかして髪……切つてたり……する？」

正直、かなり自信がない。撫でた時の髪感触がいつもとちよつと違う気がする程度だ。

そんなかなりあやふやな言葉なのに、急に智花が驚いたように目を見開いた。

「あ……は、はいっ!!　気づいて頂けたんですねつすごく嬉しいです!!」

「智花の髪を撫でた時によやくだけだね。本当は今日会つてすぐに気づくべきだったんだけど、俺って鈍いからさ」

「そんなことないですよつ。昴さんが私のこと、ちゃんと見て頂いていたんだつて思うとすごく嬉しいですよつ」

「それなら良かったけど……よし、それじゃ、そろそろ始めよつか」

今日の朝練の智花は今までにないくらい絶好調だった。

またしても危うくガチで抜かれてしまいそうになったが、なんとか踏みとどまることができた。

「はふう……やっぱ昴さんはすごいです。一気に深いところまで入られちゃいました」

「智花だって、最近はややく良く飛んでくれるようになったよ。智花が飛ぶところ、いつみてもすごい綺麗だったよ」

お互いのプレーを賞賛し合ったところで、激しく攻め合いで汗まみれになった智花にシャワーを浴びてくるように浴室へ送り出す。

「さすがに疲れたし、少し水分補給を……」

台所に向かう途中で「すみませーん」とやや遠慮がちだが、明らかに助けを求めている感じがする智花の声が聞こえた。

——事前にはつきりと言っておく、そんなつもりはなかったんだ。

ただ助けを求めている智花の声が聞こえたから。という理由で俺は一切何も気に掛けることもなく、思わず声が聞こえてきたドアを開けてしまったんだ。

ドアを開けてしまった瞬間俺は凍りついた。

目の前には俺の予想通り助けを求めている感じの智花がいた——ただしバスタオル一枚しか身に着けていない状態で。

「ふえ？……すばるさん？……きゃあああああ!？」

智花の悲鳴にハッと我に返る。

そして、少しでも自分の体が俺に見えない様に慌ててしやがみ込もうとする智花を認識した。

——待つんだ智花。その格好で俺の目の前でしやがむのは本気でヤバイ!!

「ごめん！ 智花!! 本当にごめん!!」

慌てて後ろを向き、すぐに脱衣場から退出しドアを勢いよく締め

る。  
ドアの向こう側からは智花の恥ずかしそうな呻き声が聞こえ、より一層罪悪感に苛まれる。



それでも俺の頭の中には直前の映像が——智花の少しだけ赤みを帯びた細く白い肩や鎖骨回り。普段から見慣れているはずの膝元やふくらはぎ全てが色つぼく見えてしまっていた。

いや、ダメだ。こんな映像はすぐに脳内からDeleteだ。完全消去だ。

きつく目を閉じ激しく頭を震わせ、衝撃で記憶を彼方へ消し去る——消し飛ばした……はず。

「と、智花？」

恐る恐る声を掛けてみるが、なかなか返事が返ってこない。

とうとう完全に嫌われてしまったかと思いついた時に、ようやく聞きたいけど、聞くことに対して罪悪感を感じてしまう声が俺の耳に届いた。

「す、昴さん……は、はしたない姿を見せてしまいました……失礼しました……」

「いや、謝るのは俺の方だって。許してもらえないとは思わないけど、本当にごめんな。すぐに忘れるようにするから」

「そ、そうして頂けると助かります……そ、それで……その、お願いしたいことがあります……」

「俺に償えることだったら何でも言うてくれ」

今のこの状況だ。例えばどんなことだろうと、智花のお願いだったら二つ返事で即答してしまう自信があった。

それくらいのことを仕出かしてしまった自覚くらいある。

「実は石鹸が無くなっちゃってしまってます、お風呂場にある物をお借りしてもよろしいでしょうか？」

「へ？ それくらいだった別に構わないよ」

「すみません、シャワーまでお借りしてるのに凶々しく……」

「そんなこと気にしなくていいよ。家にある物なら何でも遠慮なく使っているから」

ありがとうございます。それではお借りしますね。という智花の言葉に続き、ドアの向こうのさらに奥のドアが開く音が聞こえ、慌ててその場から立ち去る。

庭に戻り腰を下ろしたところで、ようやくさつきまでの自分が台所に行く途中だったことを思い出したが、今更戻る気にもなれなかった。

——やらかしちまった。

せっかく智花が髪を切ったことに気づけて、珍しく喜ばせてあげることができたと思っただのに、

それを帳消しどころが台無しにするミスをしてしまうなんて……

智花は代わりに家の石鹸を使わせて欲しいなんて言ってくれたけど、到底そんなじや釣り合うわけもないことくらいわかる。

彼女が戻ってきたら、許してもらえないのはわかるけど、せめて誠心誠意謝らせてもらおう。

「す、昴さん……お待たせしました」

正直今の自分の時間間隔などあてにならないことくらいわかっている。

それほど時間は経ってないとは思うけど、ただ茫然と死刑宣告を待つ気分で智花の到着を待っていたが、どうやらその時が来たようだ。

「智花っ!! 本当にぐめん!! 謝った程度じや智花の気が済まないことくらいわかってるんだけど、こうでもしないともう俺が罪悪感で潰れそうなんだ!!」

「そっそんな!? す、昴さんお顔を上げてください! 今回のことは私の責任ですし。昴さんは何も悪くないですよ!」

「だからと言って智花を傷つけてしまったことは変わらないだろ」

例え不幸な偶然とはいえ、年ごろの少女を辱めてしまったのだ、しかもよりによって自分の心を救ってくれた恩人でもある大切な人だ。

「私は全然傷ついてないですよ……その……恥ずかしかったですけど、昴さんすぐに目を逸らして下さいましたし、本当に私の事を女の子として大切にしてくれているんだなってわかってすごく嬉しかったです」

「だ、だけど……」

「わ、私がいいって言うてるんですから大丈夫です……そ、それにあまり気にされてしまうのも恥ずかしいです……」

必死に食い下がろうとしてしまったが、これ以上は返って智花が負い目を感じてしまいそうになっていることに気づく。

不本意ではあるが、今回ばかりは俺が折れて、智花の深い慈愛の心に感謝をするのが一番お互いに気まずい空気を残さない最善の選択なのだろう。

——でも、絶対にいつかこの埋め合わせをしなくてはと心に誓うことも忘れない。

「わかったよ。それじゃ智花の優しさに甘えさせてもらうよ」

「はいっ。えへへ」

俺がそういうと智花はようやく元気な返事と笑顔を見せてくれた。

ようやく今回の事態が収束したところで、俺もシャワーを浴びて一緒に俺の部屋にいるんだが、智花はしきりに自分の匂いを嗅いでいた。

「……やっぱいつもと違うから気になっちゃう？」

「ふえ!? いえ、そういうわけでは……」

自分が何度も確かめる様に匂いを嗅いでいたことに気づいていなかったかのように慌てて顔を上げている。

「でも、俺と同じ匂いって嫌じゃないか？」

「そ、そんなことないですよ。私、昴さんの匂い大好きですから!!」

「……つて、はう!? 私なに変なこと言っちゃってるんだろ!？」

「そう言ってくれるのは嬉しいけど、やっぱ俺は普段の智花の匂いの方が好きかな？」

「……いかん、智花に釣られて俺もなんか変なことを言ってしまった気がする。」

「そうだ。提案なんだけどさ。良かったら智花の私物を少しこの家にも置いてみない？」

気まずい空気が流れる前に誤魔化すようにシャワーを浴びていた

際に考えていた話題を出してみる。

いつも着替えから、今回の事の発端となった消耗品まで毎日鞆に詰めて家に通いに来ているんだったら、少しでもこっちで預からせてもらった方が智花の負担だって軽くなるのに、なんで今まで気づかなかったんだ。

「そんなんっ。悪いですよ」

「別に智花一人分くらいなら大したことないって。それにここに置かせてもらった方が智花だって何かと便利だろうし、それに……今回の件だって……ごめん」

「で……では、少しだけ置かせて頂いてもいいでしょうか？」

さすがに今回の件は智花にも刺激的過ぎたようで遠慮がちながらも、俺の提案に賛成してくれた。

そして、徐々に家に智花の私物が置かれるようになったわけだが……

「ここは智花ちゃんの専用スペースだから、昴くんは開けちゃダメよ」……母よ。なぜ息子のタンスの一角に智花の衣類スペースを作った。

今後絶対に俺が踏み込んではいけない危険地帯が増えてしまったような気がする。

その後、午後から二人で学校の体育館に向かうなり

『智花、髪切ったんだね。それに智花から長谷川さんの匂いがある』

と他の四人からの追求を必死にはぐらかそうした俺と智花がいるのはまた別の話。

## この小さき花々に活力を1

智花の小学生最後の夏休みを俺との思い出でいっぱいにするため、今日も二人の大切な思い出作りに励んでいた。

「はあ……はあ……ダメっ……もつと、がんばらないとっ……」

「くっ……と、智花、これ以上はもう無理だ……」

激しい雨音の中、幽かに聞こえる少女の乱れた呼吸。

俺も同じく相息を荒くしてしまっているが、自分以上に辛そうな表情をしている少女の方が心配だった。

やはり小柄な少女には、まだ早すぎたのだ。

これ以上彼女に辛い思いをさせないためにも、今すぐ中断しなくては――

「わ、私はまだ大丈夫ですっ……お願いします……も、もう少しだけ続けさせてくださいっ――昴さんと最後まで一緒にがんばりたいんです!!」

俺の思考の変化に気づいたのか、慌てたように必死に行為の継続を懇願する智花に俺の中で葛藤が生まれる。

俺だって、欲を言えばこのまま智花と最後までしたいけど、彼女の体に相当な負担を掛けてしまっているのは明らかだ。

だからといって途中で止めてしまえば、彼女の性格からして俺の期待に応えられなかったと、ひどく落ち込んでしまうだろう。

――仕方ない。本当はあまり良くないんだけど……

このまま余計に時間を掛けて智花の苦痛を長引かせるくらいなら、一気に終わらせてしまおう。

「わかった。智花、ラストスパート行くから、最後まで一緒に頑張るぞ!」

「は、はいっ! 最後まで昴さんにお付き合います!!」

一気に速度を上げた俺の上下運動に呼応するように智花も動きを合わせる。

「っ!! これで、一緒にゴールだっ!」

「はう!! す、昴さん!! わ、私も昴さんと……い、いっしょ……一緒にく

くく!!

二人で絶頂を迎え、体を大きく仰け反らせながら、達することでのみ味わえる解放感を体中で噛み締めていた。

「ふう……お疲れ様、智花。よく頑張って俺についてきてくれたよ」

「はあ……はあ……え、えへへ。本当はすごく大変でしたけど、最後までがんばれて良かったです」

「だけど成長期なんだから、身体に負担掛けすぎるのも良くないし、あんまり無理しちゃダメだよ——ふう……いっぱい汗かいたし、先にシャワー浴びておいで」

「はい。ご心配をお掛けしてしまつてすみませんでした……えへへ、昴さんと最後までできて嬉しかったですっ」

俺の苦笑に申し訳なさそうだけど、どこか嬉しそうな笑顔を見せながら、タンズから取り出した着替えを抱え浴室へ向かつていく智花を送り出す。

——今の様子だと、また次も俺に合わせて、最後まで頑張っちゃいそうだな……

智花の身体能力の高さは身を以て味わっているけど、さすがに女子小学生の彼女に男子高校生の俺のメニューをそのままやらせるわけにはいかないし。

実際、今やつていた腕立てやスクワットの回数とペースを少しだけ普段より緩めに調整していたりする——と言っても、智花が本当にそれをこなしてしまうのは十分驚愕に値するのだが。

やっぱり、筋トレもそれぞれの能力に合わせたメニューを組み直してあげないといけないな。

彼女達のコーチとして、もっとよく彼女達の成長の具合をしつかり把握できるよう、常に良く観察することも怠らないようにしなくては。

そういう意味では、今日の筋トレは良かったのかもしれない。

本来ならいつも通り庭で智花とバスケットをするつもりだったのだが、俺がロードワークを終わる頃に急に雨が降り出し、残念ながら今朝のバスケットはお預けとなつてしまった。

せつかく来てくれた智花のためにも何かできることはないかと考えたが、これくらいしか思い浮かばなかった。

最初は俺一人でするつもりだったが、二人っきりの部屋で一人息を荒く『はあはあ』してる様子を智花に見られるのはなかなか恥ずかしくかったし、

彼女も俺が一人で必死に頑張ってる姿を見て体が疼いてしまったのだろう。

結局、二人でそのままいつもとは違う朝練に励むこととなった。まあ、バスケをする上でも足腰の鍛錬は大事だし。

ふと、ダンスの近くを見ると、床に一枚の小さな布切れが落ちていた。

疲労した足腰に鞭を打ちながら立ち上がり、一步踏み出し確認し、気づいてしまったことに心底後悔した。

——クマさんお久しぶりです。どうやら今日もオフの日だったようです。

もしかしたら、さつき着替えを取り出す時に、うっかり落としてしまったことに気づずにそのまま行ってしまったのだろう。

クマさんはダンスの中に戻りたそうに寂しそうな目をして、こちらを見ている（気がする）

クマさんをダンスに戻してあげますか？

↓はい。

いいえ。

クマさんは嬉しそうにダンスの中へ戻っていった。

智花は俺を信じて色んな私物をここに入れてくれてるのに……本当にごめんな。

せめてもの謝罪代わりに丁寧に畳んで、クマさんを戻してあげた。シャワーを終えて俺を呼びに戻ってきてくれた智花が、頬をほんのりと染めて、内股をすり合わせるようにしていた——まさか……な。

深く考えずに、こちらの動揺を悟らせない様できる限り自然体のまま風呂場へ向かって行く。

廊下に出た時に、ドア越しに智花の恥ずかしさを堪えるような唸り

声や「パン…」とか「忘れちゃうなんて」と言った声が聞こえたような気がするが、多分気のせいだ。絶対気のせいに決まっている。

俺もシャワーを浴びてリビングに入ると、母さんと智花が朝食の用意をして待っていてくれた。

「はうう……雨、なかなか止みませんね……」

「午後からは止むみたいだし、それに学校の部活は体育館でやるから……残念だけどそれまでバスケはお預けだね」

「智花ちゃん、せっかくだから学校行くまでは、家で雨宿りしていったらどうかしら？」

雨で気が滅入ってる俺と智花を気遣ってか、母さんがそんな提案をする。

俺としても智花の都合さえ良ければ大歓迎だが……

「そ、そんな悪いですよ。いつも凶々しく朝ごはんまで頂いてしまっているのに……」

「別に気にしなくていいって。母さんも人数が増えた方が飯の作り甲斐もあるって喜んでるんだし。もちろん智花にこの後、用事があるっていうなら、無理強いはできないけど」

「いえ……今日は、日舞も茶道のお稽古もないので、だけど部活前にお花のお世話をしないといけないので、少しだけ早く学校へ行かないといけません」

そういえば智花は学校でお花係だったんだっけ。

綺麗な花に囲まれながら、花の一つ一つに優しく微笑みかけながら、水やりをしている姿もなかなか似合いそうだな。

「良かったら俺も一緒に行ってもいいかな？」

「ふえ？ いいんですか？ 部活の時間に間に合わせないといけないので、いつもより少し早く行かないといけないですし……きっと退屈な思いをさせてしまいますよ？」

「智花と一緒に絶対退屈なんてしないって。あんまり役立てないかもしれないから、ジヤマにならないようにだけは気をつけるけどさ」



「そ、そんなおジャマなんて!! えへへ、それではよろしくお願いしますね。昴さんっ」

よし。智花をこのまま家に引き止めることに成功した。

「あらあら。二人とも仲好くて羨ましいわね」

「当たり前だろ。智花は俺の最高のパートナーなんだから。それに智花をこんな雨の中、外を歩かせるわけにいかないだろ」

「はうう!? そ、そんな……あ、ありがとうございます……」

あれ? なんで智花は両手を顔を抑えて俯いているんだ? 母さんまでなんかニヤニヤ笑いだしてるし。

うくん、なんか気まずさを感じる……

「と、智花。食べ終わったら良かったら俺の部屋に行こう。色々見せたいものもあるからさ」

「……は、はいっ。……あ、でも、お片付けしないと」

「あらあら。いいわよく二人でごゆっくりね〜」

「で、ですが……」

「智花はお客さんなんだから。母さんも言ってるんだし、気にしないでいいって」

実際のところ見せたいものなんて、多分ほとんど出し尽くしてしまった気がするが、

母さんから逃げるように、まだ気まずそうにしている智花の手を引き俺の部屋に連れ込んだ。

「うう……良かったんでしょうか? 私、昴さんのお母さんに礼儀知らずと思われてしまったのでは……」

「別にそんなこと思うわけないって。智花だって母さんの性格のことで、そろそろわかってきたろ?」

「ですが……」

「せめて俺の家くらいでは、もっと遠慮しないでくつろいで欲しいんだけどな。俺だって智花にいっぱい感謝してるんだしさっ」

本当に小学生とは思えないくらい、礼儀正しくて慎み深い良い子だよなあ。

花織さんと忍さんの教育が良く行き届いている。というか、届きす

ぎだよな。

もう少しくらい、年相応の可愛らしい隙を見せてくれてもいいのに。

「その……すでに昴さんのお家では、自分でも驚くくらいくつろがせて頂いてます。はしたないことだと思ってても、気づいたら気が緩んでしまっていたり……今日だってお部屋の中なのに、あんなに激しく体を動かしてしまつて……」

「それだと俺は毎日家で、はしたないことをたくさんしてしまつてい  
るんだけどな」

「はう！ す、すみませんっ！ そういう意味で言ったわけでは……」  
「ははっ。わかつてるって」

優しく髪を撫でると、少女がはにかみながら笑顔を向けてくれた。

真帆達のもつとたくさん智花の笑顔を知っているんだろうな。

智花も真帆達の色んな表情を知っているんだろうし、俺ももつとみんなの色んな顔を知りたいけど……あんまり踏み込み過ぎるわけにもいかないか。

もしかしたら、俺の方はみんなが知らない彼女達の顔を知っているのかも知れないし、これからきつとそんなことがあるのかもしれない。

——なんて、さすがに考えすぎか。小学生の期間なんてあつという間なんだし、みんな卒業しちゃったら、これっきりになつてしまう可能性が高いだろう。

「あの……昴さん……撫でて頂けるのは嬉しいのですが……そんなに見つめられてしまうと恥ずかしいです……」

ちよつとした感傷に浸りながら、撫でるのに夢中になつていて気づかなかつたが、智花は笑顔から一転して恥ずかしそうに俯いてしまつていた。

「ごめんな智花。ちよつと考え事してたら、智花の髪、すごく撫で心地良かつたから、つい夢中になつちやつたよ」

「ふええ!？」

驚いたように顔を上げ、上目使いでこちらを見上げてくれるのはか

わいいけど、多分、これはきつとやっちゃダメなやつだ。真っ赤になつて本気で恥ずかしそうにしちやつてるし。

年頃の女の子をベタベタ触りまわるなんて、普通じゃ絶対にできない……というかしちやいけないことだよな。どう考えても。

それで智花に恥ずかしい思いをさせちやつてるし……

俺の方がもっと智花に憤み深く接するべきかもしれないと反省するべきだな。

このまま俺が頭を下げても、また謝罪合戦が開催されてしまうだけだろうし、この際、さつさと話題を変えてしまおう。

よし、せつかくだし、たまにはバスケット以外のことを話題にしてみようかな？

## この小さき花々に活力を2

「そういうえば、智花は学校でお花係をやってたんだよね」

「は、はいっ……私にはあまり似合わないかとは思いますが、家でもお母さんやお父さんも大切に育ててますし、色んなお花を見るのが好きで……」

「俺は智花と花の組み合わせはすごく似合うと思うんだけどな。名前にだって花がついてるくらいだしさ」

「えへへ……昴さんにそう言ってもらえると嬉しいです……あ、そういうば昴さんから頂いた二つ名にも花って付けて頂いてましたね」

彼女の言うように、偶然にも俺が彼女に授けた二つ名にも花の一文字がある。

智花の大切な母親の花織さんも……気づくと彼女の周りには花がいっぱいだ。

「智花は自分には似合わないって言っても、花の方が智花を囲んでしまってるみたいだね」

「はう……ちよつと恥ずかしいですけど……でも、どれも私にとって大切な花ですので、手放せませんね」

冗談めかして言った言葉に、智花は幽かに頬を染めながらも嬉しそうに呟く。

うん。やっぱり智花には花が似合うな。

たとえ智花の近くに彼女を彩る花がなかったとしても、彼女自身が綺麗な小さな一輪の花そのものだから。

「ところで花の水やりって言ってたけど、まさか全部一人でやるつもりだった？」

まだ俺自身が把握し切れてないけど、初等部だけでもかなり広い面積だし、それを一人でやるのは時間がいくらあっても足りないだろう。

「いえ。ちゃんとクラスごとに分担してますので、そんなに大変ではないですよ」

「それなら安心かな。でも、俺に手伝えそうなおことあったら、なんでも

言ってね」

「はいっ ありがとうございます。昴さんっ」

二人で笑い合った後に、話題が途切れ沈黙が訪れる。

俺の方はそれほど苦痛な物ではないんだけど、自分から花の話題を振つといて、それほど知識を持ってなかったのは失敗だったかもしれない。

「あの……昴さん……」

不意に智花が口を開く。

どうやらこの沈黙に耐え切れずに……という様子ではなく、何か思いついたようだが、口に出すのを躊躇している感じの呼び方だ。

「ん？ 何か思いついたことがあるなら、遠慮せずに言っればいいよ。智花のためにできることなら俺はなんだってしてあげるよ」

「いえ……そうではなくて、ですぬ……」

ありや？ 俺への頼みごとかと思っただが、ちよつと失敗。いったい何を迷ってるんだ？

「昴さんがいらつしやるのに大変申し訳ないのですが、少し真帆達と相談をさせて頂いてもよろしいでしょうか？」

取り出した携帯を胸の前で両手に抱えながら、不安そうに俺を見ている。

「そんなの別に気にしないで好きに使っていいって。智花の大切な友達なんだから、俺よりみんなのことを大切にしなきゃ」

生真面目すぎる彼女を安心させるように軽く笑い飛ばすように返した。

「ありがとうございますっ。それでは少しだけ失礼しますねっ——でも……昴さんのことも同じくらい、大切に想っています……よ？」

「……はう」

しつかり俺へのフォロワーも忘れない優しさ。

俺もこういう細かな気配りができるように、ちゃんと見習わないとな。

携帯の操作を始めた智花は年相応の微笑み交じりの可愛らしい表情になっている。

失礼かとは思ったけど、智花の笑顔が気になって目が離せなくなりました。

少しだけ智花の表情を見させてもらおうかな？

運が良ければ、智花の普段見ることができないような顔が見れるかもしれない。という興味が抑えられなくなってしまっていた。

「うん……うん……」

小さく頷きながら優しそうな笑顔と反比例するように、かなり速い速度で携帯を操作している。

「ふえ？ …… ……はう?!?! …… ……ん!!」

おそらくまた真帆か紗季にからかわれてしまったのだろうか？

一瞬驚いたような顔をしたかと思うと、急に顔を俯かせ体を小さく震わせている。そして一気に顔を上げたかと思うと、最初に見た以上に更に早い速度で携帯を操作し始めてる。

連絡が一段落したのか、携帯から目を離し、ゆっくり顔を上げると俺と目があつた。

「はう?!」

「ご……ごめん」

なんでかよくわからないけど、謝ってしまった。

いや、携帯を操作している智花の顔をマジマジと見ていてしまったのだから、謝らないといけないんだけど。

「もしかして、また真帆達にからかわれちゃった？」

「は、はい。少しだけ……よくお分かりになりましたね？」

「な、なんとなくね……」

「もういつも二人とも私のこと、からかつてばかりなんですよ」

口を尖らせてはいるが、両手で持っていた携帯を大事に胸に抱きしめ、嬉しそうな表情をしている。

「その割には嬉しそうだったよっ」

「えへへ。からかわれるのは恥ずかしいですけど、みんな大切な友達ですから。もちろん昴さんもですっ」

わざわざ気遣って俺を入れなくてもいいのに。

智花が俺を入れてくれたこと自体はすごく嬉しいけど、やっぱり小

学生の中に入るのは、少しだけ引け目を感じてしまうな。

俺という余計な存在がない彼女達五人が本来の姿のはずなのに。

「こんなこと昴さんに言うのは、とても失礼なことだとは思うのですが……」

「ん？」

「今だったら、わかるんです……もしあの時、私達のバスケットが終わってしまったとしても、きつとみんなと何か新しい目標に向かって頑張れてたんじゃないのかな？ って」

「うん。君達五人だったら、絶対そうだった。俺が断言するよ」

例えばバスケットでなくても君達五人の絆は絶対に揺るがない。

新たな目標ができたのなら、それに向かって五人全員がみんなを想いながら一生懸命に頑張る。きつとそんな未来があったと思う。

「——でも、やっぱり私はそんな未来は嫌です。大好きなバスケットができないのですが、今みたいに昴さんが隣にいて下さらない未来なんて耐えられませんっ」

「ありがとう、智花。実は俺も似たようなこと考えたことあったんだ。でも、智花がそう言ってくれるんなら、俺もすごく嬉しいよ」

そうだよな。智花が、みんなが俺のことを受け入れてくれてるんなら、なんの引け目も感じる必要なんてないよな。

俺は俺の意志で堂々とみんな——小学生達の中に入れてもらっていいんだよな。

よし、そうと決まれば、俺もみんなに負けなくらい、どんどんみんなの中に入って深い繋がりや絆を作り上げてみせるぞ。

「……！ あ、あの……す、すばるさんっ」

「!? っ、ごめん!!」

気づくと俺は両手を伸ばして、彼女の両手を包み込んでいた。

付け加えて言うなら、今彼女の両手は携帯を胸の前で抱えている。

小学生の胸元ギリギリまで手を伸ばしている、その姿は第三者が発見次第、即通報待ったなし。

「……びっくりしちゃいました……」

「本当にごめん!! 智花の話聞いてたら、智花も携帯の向こう側の真

帆達のこと今まで以上に大切に想えてきちゃって、無意識に手を伸ばしてしまっていたんだ！間違っても智花に変なことするつもりはなかったんだ、頼むからどうか信じてくれ!!」

智花は両手で携帯をしっかりと握りしめながら呆然と立ち尽くしている。

頼むからその携帯で三ヶタの数字を押すのだけは、どうか許してほしい。

「へ、変な……こと……はう!？」

ピンポイントで拾った単語から、何かを想像してしまったのか、不意に目線が下——胸のあたりに動くと、ビクリと一度体を震わせる。

「本当にそういうことをするつもりじゃなかったから、お願いだからどうか信じてください!!」

「だ、だいじょうぶ……です。す、昴さんがそういうことをする方ではないと、私が一番よく知っていますから……それに……」

最後の方だけ聞き取れず、しかも何故か幽かに表情が暗くなってしまっているようだったが、そこを気にする余裕がなかった。

とりあえず、智花が俺の言葉を信用してくれたことに心から安堵する。

「俺の方から言うのもずるいんだけど、話を少し戻させてもらってもいいかな?」

いつまでもお互い気まずい空気のままにするよりは、さっさと話題を転換した方がいいだろう。

「は、はい。なんででしょうか?」

「俺が聞いていいのかわからないし、答えられないなら、それだけ教えてくれるだけでいいけど、真帆達と何の連絡してたのかな?」

午後から部活があるから、多分そのことだとは思うけど、それなら俺も把握しておきたい。万一プライベートのことだったら、間違っても答えさせるわけにはいかないが。

「あ、そうですね。昴さんにも知って頂いた方が良かったかも。真帆とひなたも飼育係の仕事があるので、それぞれで別れて先に終わった方が相手の方に行って合流しましょう。っていう相談をしました」



「うん。さすがみんなチームワークばっちりできてるね」

「えへへ。そ、それで…その、飼育係の方が人手がいるみたいでして、申し訳ないのですが、お花係の方は私と昴さんの二人で大丈夫でしょうか？ みんな勝手に決めてしまっ…」

「俺はかまわないよ。もともと智花を手伝うつもりだったんだし」

多分、真帆がヌシとの雪辱を果たすべく、強引に決めちゃったんだろうな。

まあ、飼育係の大変さは身をもって味わってるし、もしかしたら俺も飼育係を手伝った方がいいかもしれないけど、智花を一人にはできない。

紗季もそう判断したってことだろうから、多分、このチーム分けがベストなんだろう。

そもそも俺があこのヌシの姿を見てしまうと嫌でも、あの時の事が――いやいやいやいや、ヌシが脱走しただけで特に何もなかったぞ。うん。

本当にひなたちゃんに何事もなくて良かった。あれだけは本気でシヤレにならないからな。

まあ、ヌシもひなたちゃんにだけは懐いてるみたいだから、大丈夫だろうけど。

智花もちよつとだけナニかを思い出してしまっただけだけど、わざわざ確認することでもないし、この話はもう終わらせてしまおう。お互いのためにつ。

「それじゃ、話もだいぶまとまっただけだし、午後まで久しぶりにゆつくり過ごそっか」

「はいっ 午後からもよろしくお願いしますね。昴さんっ」  
気づくと午後の予定も埋まりつつあるな。

まあ、その午後までまだ時間が余ってるわけだが、外はいくらか止んできてはいるけど、まだ雨が降っている。

せっかくだし、もっと智花といっぱい話をして、まだ俺が見たことのないような彼女の部分をたくさん知りたいな。

ふと、あることを思いつき、智花を机の前の椅子に座らせると目の

前のパソコンを起動した。

これなら、最初に俺が持ち出した話題でもネタ切れになる心配もないだろう。

### この小さき花々に活力を3

起動完了したパソコンを前に俺達が最初にやったことは椅子取りゲームだった。

少し違う点は目の前の相手をどうやって椅子に座らせるかを競い合う。という本来のルールとはまるで正反対のものだが。

頑なに椅子に座るのを遠慮し、俺に譲ろうとしていたが、俺だって自分一人悠々と座って彼女を立たせるわけにはいかない。

そこで策を巡らして、一つの提案をした。

——それじゃ、俺が椅子に座るから、その代わり智花には俺の上に座ってもらうよ？

椅子に腰を下ろしながら冗談っぽく言ってみたら、顔を真っ赤にしながらも「失礼します」と本当に俺の膝の上に座ろうとしてしまったのには驚いたが。

いや、智花が俺の上に乗ること自体は過去にも何度か経験あるし全然問題ない——むしろある方面からはご褒美と称されるくらいだろう。

とはいえ、彼女を辱めることに罪悪感を感じないわけもなく、冗談だと告げると、自分が椅子取りゲーム以上のことをしていると気づき、慌ててこちらに頭を下げてきた。

俺が椅子に座る。と言ったことで安心して、すっかり油断してしまったのだろう。

「はうう……す、昴さんまで、あんまりからかわないでくださいよお……」

「ごめんごめん。でもさ頼むから、年上の俺を立てるためにも座つてよ。智花だって俺の膝の上は嫌だろ？」

椅子から腰を上げて彼女に譲ると、渋々ながらも座ってくれた。

一瞬ちらりと俺——正確には俺の膝あたりを見たような気もするけど……

もしかして、実は俺の膝の上に座りたかったとか？ いや、智花がそんなこと考えるわけないか。

俺のパソコンを前にして、やや緊張した面持ちの智花。

こちら辺は、まだ初めて俺と一緒にパソコンを使った時とほとんど変わってないな。

その時はほとんど俺が操作しているのを、彼女が横から見ているだけみたいなの状態だったが。

うまく椅子の占有権を智花に譲渡できたところで、授業ついでにパソコンの操作も彼女にお願いしてみたのだった。

「やつぱりドキドキします。授業でも少しずつ習ってはいるんですが、変な操作をしてしまわないか心配で……」

「そんな簡単に壊れる物じゃないし、俺もちゃんと見てるから大丈夫だよ」

もしこの場にいるのが智花ではなく、真帆だとしたら別の意味で目を離せなくなってしまういそうだが。

変に慣れすぎてしまっていることもあり、逆に何をされるか予想できないのが正直怖すぎる。

俺が純粹に所持してるデータ内には、見られて困るようなものはないが、このパソコンは世界と繋がってしまっている。

おそらく真帆が所持しているパソコンには、彼女の情操教育に悪影響を与えかねない物をしっかりと遮断するフィルターが設定されているだろうが、俺のパソコンにそんな設定はされていない。

万一彼女の目の前に小学生には刺激が強すぎる映像を晒され、トラウマを植え付けてしまうようなことになっては、俺を信用して下さっているご家族に顔向けができなくなってしまう。

まあ、普通に使ってる分にも、たまに妙な深読みをされてしまうこともあるから、その点にだけは十分気をつけなければならぬが。

「はいっ。それで、何か調べごとをされるつもりだったのでしようか？」

「花好きな智花と花について語り合ってみたいな。って思ってるね」

「わ、私もそんなに詳しくないですよ。ちよっと自分やみんなの花言葉に興味があるくらいですし」

「花言葉……か。情熱の赤いバラとかそんなのだっけ？　ごめんね、あんまり詳しくなくて」

うくん……乙女チックすぎて、男にはなかなか難易度が高い話題だったかもしれない。

いや、花が好きな男だつてたくさんいるだろうし、詳しい奴は詳しいのだろうが。

「は、はいっ。花には、それぞれに色んな意味や言葉が付けられていて、それで誕生花というものがあります」

「なんか聞いたことあるかも。確か誕生日に花を割り当ててるんだっけ？」

あとは、それを宝石に置き換えてる誕生石。っていうのもあったよな。

「はい。こういうのは愛莉が詳しいんですけど、私も教えてもらつて。それで自分でもちよつと調べたくなつちやいました」

「それなら、ちよつどいいかな？　さつそくやってみようか」

「わかりましたっ。それでは……あれ？　ええと……あれ？」

授業で使つてるパソコンとも勝手が違うのか、目当ての物が見つけられず戸惑っているようだ。

さつそく手助けが必要かな？

「ちよつとごめんね。……つと、これかな？」

「あ、ありがとうございますっ。えへへ、さつそく教えて頂いちゃいましたっ」

バスケだと教えられることも少ないから、これはこれでなかなか新鮮だ。

「そういえば、文字の打ち方はどうする？　ローマ字で打てる？」

「ひ、ひらがなでお願いします……がんばって覚えなないいけないんですか……すごく難しく……」

彼女には失礼かとは思つたが、上目づかいで恥ずかしそうに俺を頼ってくれる智花つてすごいかわいいな。と、ついそんなことを思つてしまった。

「了解。はい、これで大丈夫だよ」

「うう……何から何まですみません。こんなに昴さんにお手間をかせさせてしま……あ」

そこで二人同時に気づく。

智花がマウスを握っている手に、被せるように自分の手を重ねて、ずつと握りしめていた。

「ご、ごめんっ」

「い、いえっ私が勉強不足なせいで……昴さんに色々と助けて頂いて嬉しいのです」

慌てて手を離すが、彼女の小さくて柔らかな手の温もりが、俺の手の中に残されていた。

恥ずかしいからって拭うようなことしちゃ、まるで俺が智花を嫌っているように思われちゃうよな……

チラリと視線を智花に向けてみると、特に気にした様子なく——頬が少し赤くなっている気もするが、多分気のせいだろう。真剣な表情で文字を打ち始めていた。

花言葉という単語で検索した結果、大量のヒット数に驚いていたようだったので、「大丈夫だよ」と声を掛けてあげると、

そこで意を決したように一つのページを開いた。

少しずつ俺もアドバイスをしながら、操作を進めていき、智花の誕生花が見られるページに辿り着く。

ようやく辿りつけたと安堵の溜め息を一つついたあと、達成感を感じているような微笑みを浮かべながら、そのページを眺めている。

「誕生花って一つだけじゃないんだね」

「私もちよつと驚きました。前に愛莉に見せてもらった本だと一つしか付いてなかったの」

「この中から好きなものを選び放題ってわけだ」

「えへへ。色んな花もですし、花言葉もたくさんありますね」

もしかしたら他のページにも、まだ違う花が誕生花として掲載されているかもしれないが、これ以上彼女の苦勞を増やすのも、俺が代わって操作するのも無粋だろう。

今回は最後まで智花に頑張ってもらおう。

「私は……この花かな？　この花言葉に心当たりがいつぱいあるので……」

しばらく眺めていたところで、智花が表示されてる花の一覧の一つを指さす。

ヘクソカズラ……か。昔のことで色々と思うことがあるんだろうけど……

「智花」

「なんです……ひゃうっ？」

俺の呼びかけに振り返った智花の頬を軽く摘まんでやった。

「す……すふある、ふあん？」

ちよつとイジワルしちやつたけど、俺だつて智花の口からそんなこと言われるのなんて嫌だつたんだから、これくらいはお返しさせてもらつてもいいよな。

急に俺に頬を摘まれて驚いているが、かまわず智花の頬のプニプニとした柔らかな感触を楽しませてもらう。智花が痛みを感じないように優しく押したり引つ張つたり。

しばらく夢中で楽しんでいると、いよいよ智花が不安そうな表示に変わりかける。

そこでようやく彼女の柔らかいほつぺたを解放しながら口を開く。

「智花。俺が君に付けた二つ名は？」

「あ、雨上りに咲く花——シャイニーギフト……です」

「うん。正解。せっかく俺が見つけた花に、俺はそんな名前と言葉を付けて欲しくないし、送りたいくもないな」

「あ……ごめんさい、昴さん……」

うん。俺の気持ちに気づいてくれたみたいだ。

この花にはちよつと失礼だけど、やっぱり俺は、もっと良いイメージの花と言葉を送りたい。

「俺だったら、この辺りかな？」

オミナエシとキキョウの花と言葉を見やすい様にドラッグして色を反転させ強調させる。

どちらかというときキキョウかな？　こんなにかわいい智花には夢

い恋なんて味わってもらいたくない。

「わ、私には大げさですよ……でも、せっかく昴さんがその花がいいとおっしゃって下さるんですけど、その花言葉に近づけるようにがんばりますね」

後になつて知ったことだが、智花が選んだヘクソカズラも、別名にサオトメバナというものがあり、考えようによつては納得できる部分もあった。

だからといって、少しでも智花の花に悪いイメージが連想されてしまうのは嫌だけど。

そのあとも二人でみんなの誕生花を調べていく内に、二人で気づいた。

——結局は、その花や言葉をどう捉えるかってことなんだろう。

例えば、真帆の誕生花の一つにキンギョソウというものがあつた。

花言葉は『おせっかい』や『でしゃばり』。

そのままの意味で捉えてしまえば、あまりいい感じはしないし、傍からは彼女の行動が『おせっかい』や『出しゃばり』に見えるかもしれない。

だけど、彼女を良く知る大切な友人達は、かけがえのない物を取り戻させてくれたり、自分たちを必死に庇い護るための行動だということを知っている。

紗季だつて同じだ。

アジサイの花言葉には、『冷たい心』や『無常』。

アザミには『独立』や『厳格』というものがあつたが、これもみんなのことを大切に想っているからこそその行動や判断なのだ。

一見厳しく突き放しているようでいて、本当に大切に想っているからこそ、その人が正しく、自らが望んだ道を歩むことができることを心から願つてくれているのだ。

ちなみに愛莉やひなたちゃんは、花も言葉も、そのままの意味で十分通りそうなものがたくさんあり、智花と二人で「そのまんまだね」と笑い合つてしまうくらいだったが。

愛莉の方は、名前の愛の一文字どおり、多くの恋愛を思わせる言葉



と彼女の優しい性格の意味を持つ花があり、

ひなたちゃん、彼女の無垢な魅力を全面に押し出す花で溢れていた。モモの花言葉を借りるなら、まさに『天下無敵』だ。

最後に智花と一緒に俺の花を選ぶ。

予想はしてたけど、実際に自分の花を探してもらおうというのは、なかなか気恥しさを感じるものだな。

俺はミソハギを選んだ。悲しい過去の末ではあるけど、そのおかげで、何よりも大切な少女達と出会うことができ、純真な愛情を注ぐことができる日々が、今の俺には何よりの生きがいとなっている。

智花はツルバラを選んでくれた。どこまでも俺を尊敬し、深い絆を求めてくれている彼女達の気持ちに応え続け、愛想を尽かされないよう頑張らないとな。

みんなの花と花言葉を調べ終わったところで、ちようど母さんから昼食の用意ができたと声を掛けられたので、今日のパソコン教室は終了となった。

気づくと外の雨はすっかり止んでいて、雲の切れ間から差し込む光が、眩い輝きを放っていた。

## この小さき花々に活力を4 (完)

『いただきますっ』

「は〜い。二人ともたくさん食べてね」

俺と智花の声に嬉しそうに母さんが返す。

「智花、午後からもみんなとバスケするんだから、遠慮せずにしっかり食べるんだよ」

「ふえ!? ……は、はい。七夕さんのご飯すごくおいしいですっ」

「智花ちゃんにそう言ってもらえると作った甲斐があるわ〜」

う〜ん。普段の智花のあの運動量を考えると、もっとたくさん食べてもいい気がするんだけどな。まして成長期なんだし。

みんなの言葉を信じるなら、本当はもつと食べられるらしいけど……いやあまり無理に勧めるのは良くないな。

昼食を終えたところで、今度は部活の準備を整える。

鞆に体操服を詰め込んだり、みんなの活動や成長を記録するためのノートや筆記用具にその他色々。

「よし。そろそろ行こうか」

「はいっ。お邪魔しました。お昼ご飯まで頂いてしまって、本当にありがとうございましたっ」

「いつてらっしやい。智花ちゃん、また明日も待つてるわね」

笑顔で手を振る母さんに見送られながら、俺達は家を後にする。

智花に用事があつて、別々に慧心学園を目指す時は、自転車で行くという選択肢もあるが、今回みたいに智花と一緒に行くとなると、

まずは松角駅を目指し、そこから最寄駅まで電車で移動、駅からはバスに揺られて慧心学園へ、というのが夏休みの時の主なルートだ。

そう何度も智花にいけないことをさせるわけにもいかないし。

あの時は誰にも見咎められることなく、見事目的を完遂できたが、夏休みという時期は意外と人目につくことも多いだろうし、そもそも無駄にリスクを冒す必要はない。

「この道を通る度に思い出してしまっんですよね……昴さんに呼び止めて頂いたこと」

「あはは。あの時は結構キツい言い方しちゃったよね。俺も自分に余裕なくてさ。それで智花のこと泣かせちゃって」

「えへへ。みつともなくいっぱい泣いてしまつて……思い出すたびに恥ずかしくなつてしまふんですけど、昴さんに声を掛けて頂いて……我慢してた私の本当の気持ちを受け止めて頂いて本当に嬉しかったです」

まさにここが俺と智花のターニングポイントとなつたのは間違いないだろう。

俺が自分の手で、心を魅かれてしまつた智花のバスケットに終止符を打つてしまひそうになつて、慌てて罪悪感を感じて……

でも、そのおかげで自分の中のバスケットの情熱がまだ残っていたことに気づかされて。

できることなら、公式戦にも出させてあげたいし、それが無理ならせめて五人での試合形式の交流戦をたくさん経験させてあげられたらいいけど……こればかりは俺の力や人脈じゃ、どうしようもないからな。

「ごめんな。不甲斐ないコーチで……」

思わずそんな言葉が出てしまつた。

「ふえ!? い、いきなりどうされたんです? 昴さんが、不甲斐ないなんて、全然そんなことないですよ」

「コーチとして教えてあげられることは、俺も色々考えてなんとか伝えようと努力はしてるんだ。でも、せっかくみんながバスケットを続けることができるようになったのに、肝心の試合をほとんど経験させてあげることができないよなつて思っちゃつて」

「そんな……私達は私達のバスケットを楽しませて頂いてますし、それを守つて下さつたのは昴さんなんですよ」

「守つたのは智花達五人だよ。俺はほんの少しだけ手伝わせてもらつただけで」

いかなな、なんかしんみりした話になつてきてしまつた。

智花もちよつとだけ寂しそうな表情になつてきてるし。

「ごめんね。変な話しちゃつて……これからも俺も自分でできる限り

色々考えてみるから、智花達もいつ試合があってもいいようにしっかりと練習頑張つてね」

「はいっ。絶対に今度こそ昴さんのご期待に応えられるようがんばりますっ」

うん。この調子ならきつとみんな大丈夫だ。

この真つ直ぐな気持ちのおかげで俺も目標を失わずにいられるんだろうな。

駅に到着し電車に揺られ、次にバスに揺られ、智花と一緒に慧心学園を目指す。

バスに乗った時に、智花と同じ慧心学園の生徒も、それぞれの部活のためかバスに乗り込む。

気のせいかな、その中の数人がチラチラと俺達を見ている気がする。やっぱ俺が目立ってしまったのだろうか？

隣にいる智花も視線に気づいたのか、恥ずかしそうに俯いてしまっている。

俺はもう慣れたけど、智花に迷惑掛かっちゃいそうだし、これから別々に行くべきかな？

お互いに気まずさを感じながらのバス移動も学園に到着したことで、ようやく解放された。

「なんか俺が変に目立ってたみたいで……智花に嫌な思いさせちゃったよね」

「い、いえ。嫌な思いなんて……すみません、昴さん……もしかして変な誤解されちゃったかもしれないです」

智花に迷惑を掛けてしまったと思ったら、逆に智花が申し訳なさそうに俺を心配してくれているけど……

誤解？ 別に誤解されるようなことは、何も無いと思うんだけどな。

女バスと一緒に体育館を使ってる部活の子は俺が女バスのコーチだって知ってるだろうし。

とりあえず、このまま智花と一緒に体育館に向かう姿を見れば、彼女の部活の関係者だってしっかり伝わるだろうし、特に気にする必要

はないか。

「別に誤解されて困ることもないし、とりあえず体育館に荷物置いて着替えてから、ゆっくり始めていこうか。もしかしたら真帆達とも合流できるかもしれないし」

「ふええ!? あ……は、はい。そうですね。………誤解されちゃつてもいいんだ……」

驚いたかと思つたら、心なしか嬉しそうな笑顔になつている智花を不思議に思つたけど、気まずい空気も払拭できたみたいだし、笑顔になつてくれたならいいか。

それぞれの更衣室で着替えて、再び顔を合わせたのが、別れた時と同じこの場には俺と智花しかない。

「みんなもう来てみたいなんですけど、先に飼育係の方に行つてるみたいでした」

「そっか。それじゃ、俺達もできるだけ早く終わらせて、みんなの手伝いに行かないとね」

「そうですねっ。みんなだつて早く昴さんに会いたいと思いますし」  
智花に案内されながら、まずは外の方の花壇やプランターの周りを確認していく。

良くも悪くも午前中の雨で外の水やりは必要ないだろうけど、自分の担当区域はしっかり確認しておきたいのだろう。

小さいオレンジや白に黄色の花が花壇の中を所狭しといっぱいに咲き乱れている。

こちら辺はどこの学校も同じなのかな? よく考えたら名前は知らないけど、俺の小、中学でも見覚えのある花だし。

そして、すぐ隣にあるタワー状の花全体がほとんど真っ赤な花。あれは確か……

「これってサルビアって言うんだっけ?」

「はいっ。良くご存じでしたね」

「俺も小学生の時とか見覚えがあるからね。主に花の蜜とか……」

「あはは。昴さんもやっぱりされてたんですね」

困つたような苦笑を浮かべる智花。

お花係として、大切に花を扱ってる彼女には、やっぱり花びらを取って蜜を舐める行為はあまり褒められたものではないのだろう。

「——でも、この花は花びらもしっかり残ってて綺麗なままだよね」  
地面にも吸われた後の花びらが落ちていない。

やっぱこういう学校に通う子達は親や学校の教育が行き届いてるのだろうか。

「えへへ。実は真帆達のおかげなんです」

彼女の話によると、やっぱ小学生の定番ネタに乗っかり、男子に混じって真帆やひなたちゃんも一緒になって花びらを取っては甘い蜜を舐めていたらしい。

どうやら育ちの良さは関係ないみたいで、なんか安心。やる子はみんなやるんだな。

「真帆達が舐めてるのを見て、そんなに花びら取っちゃったら花がかわいそうだよ。って、つい口が滑ってしまったんです。——あの頃は、真帆に話しかけてもらえたばかりで、せっかく声を掛けてもらったのに、そんなこと言ったら嫌われちゃう。って慌てて謝ろうとしたんですけど」

「俺もちよつと耳が痛い話だったけど、うん。智花は間違ったことは言っていないよ」

「真帆もひなたもすぐにごめんさい。って謝ってくれて。男子達にも花がかわいそうだろうって注意するようになってくれました」

その後五人で話し合って、どうしたらみんなが花の蜜を吸おうとしなくなるかを話し合ってみたんだけど、その微笑ましい様子が自然と思い浮かんでくる。

真帆が全体に呼びかけて、おそらく男子の中心にいそうな竹中にはひなたちゃんと言えば、智花達のクラス内では、花に手を出そうとする子はいなくなるか。

自分のクラス内が終わったら、今度は校内全体だが、ここは紗季の出番か。

「紗季の提案もあって、先生方からも花びらをちぎって蜜を舐めるのは衛生的に良くないからと、しっかりと禁止にしてくれたんです」

先生から禁止になっても手を出す奴はいるもんだけど……ここま  
で徹底してるとなると、やっぱり育ちが違うのかな？

「みんなでこの花を守ったわけだ。それならこの花だってすごく喜ん  
でると思うよ」

「そうだったら嬉しいですっ。私もおかげでみんなと少しずつ話せる  
ようになってきたので」

花からのお礼代わりに智花の頭を優しく撫でると、心地良さそうに  
目を細めてくれる。

智花がここまで大切に守り育てた花なら蜜はさぞかし甘いんだろ  
うな。

是非とも彼女の花の甘い蜜を味わってみたいこともあるが——いや、さ  
すがにやらないけど。

校庭の花をぐるりと見回り、今度は教室の方へ。

学校の中といい外といい、何気なく歩いている時には気づかなかつた  
けど、こうして注意しながら歩いてみると色んなところに花が飾られ  
ていたんだなあ。

ほぼ完全に智花一人で仕事をこなしてしまっているため、俺は本当  
に彼女の側にいるだけだが、花の世話をしている時の智花はとても優  
しい目をしながら、花と接していた。

「昴さん、これでお花係の仕事は終わったんですが、もう一か所だけお  
付き合い頂いていいでしょうか？」

「俺はかまわないよ。ごめんね。何も手伝えなくて本当にただ付いて  
きただけみたいになっちゃって」

「いえっ。昴さんとこうして学校の中をいっぱい歩いて嬉しかったで  
すっ」

少しはこの構造も覚えられてきたかな？　と思いつつながら、誘われ  
るままに智花の最後の目的地へと歩みを進める。

そこは中庭の一角だった。

「すみませんでした。昴さんをいっぱい連れ回してしまってます」

「気にしなくていいって。俺も校内の色んなところを見れて楽しかったしさ」

「その……昴さんに、どうしても見せて頂きたい物がありました」

うん。すでに俺の目に映っているよ。五つのそれぞれの鉢植えとそこに咲いてる薄紫色の小さな花。

彼女達が今まで大切に育ててきた小さな花は、五人のように小さながらも、力いっぱい花びらを大きく広げ太陽の光を少しでも多く受け止めようとしている。

これが五人にとっての絆とも言える大切な花なんだろう。

「雨が降ってしまったので、少し心配だったんですが……先にここに来てしまうと、離れられなくなってしまいそうだったので」

他の花も大切なのに。と呟く少女。

「智花達にとって、この花は少し特別かもしれないけど、他の花だってすごく大切に扱っているよ。自分では気づいてないかもしれないけど、ずっと側で見てた俺は智花が他の花だって同じくらい大切に想っているってよくわかったよ」

少し律儀すぎるくらいに智花はちゃんと仕事を全うしている。それなら、ちよつとくらい自分にとって特別な花を優しく愛でる時間位あってもいいと思う。

「えへへ。ありがとうございませつ。ちよつとズルいですけど、やっぱりこの花は私にとって、みんなとの大切な絆を確かめ合えた証なので」

「ここで俺がその花の名前と言葉を答えられたらカッコいいんだけど……ごめん。花言葉は予想がつくけど、肝心の花の名前はわからないや」

「ローダンセ。花言葉は『変わらぬ想い』と『終わらない友情』です」

「うん。みんなにぴったりの花だと思うよ」

ちようどいいし。ここで使わせてもらおうかな。

小さなボトルを取り出し、智花に渡す。

「良かったらみんなの大切な花に俺からもこれをあげたいんだけど、いいかな?」



「はい。大丈夫だと思いますけど、いいんですか？ 七夕さんがご自宅で使ってる物では？」

「ああ、問題ないよ。母さんからは、ちゃんと智花に育ててる花に使えるかどうか確認だけはしてもらえ。って言われただけだし。使えるなら使ってくれた方が嬉しいかな」

「そ……それでは、できれば昴さんから、あげて下さいますか？ ……わ、私の花に昴さんのをいっばい下さいっ」

「実はやったことないから、失敗しないで上手くできるか心配だけど……全部智花に任せつきりも情けないからね」

智花の大切な小さな花に、俺からの愛情（液体肥料）をたっぷり（適量）と注いでやった。

「えへへ。こんなに昴さんに愛情を注いで頂けたなら、絶対に大きく元気に育ちちゃいますねっ」

「そうなってくれたら、俺も嬉しいな——他のみんなのはどうしようかな？」

智花の花にだけあげて、四人の花にあげないのは少し不公平だし、智花もそう感じるだろう。

だからといって、本人達が知らないところで勝手に彼女達の大切な花に俺のを注ぐのも少し悪い気が……

「おーい！ もっかーん!!」

「やっぱりここにいたわね。長谷川さんとの校内デートは十分楽しめたかしら？」

「智花ちゃんっ。長谷川さんっ。こんにちはです」

「おーともかに、おにーちゃんーやつと会えたー」

どうやら俺の心配は杞憂に終わりそうだ。ってか、校内デートって……智花に校内を案内してもらいながら、お花係の仕事見てただけだろうに。

「で、でデートってそんなんじゃないよっ!? ただ昴さんにお花係のお仕事に付き合っただけで……」

「ふふっ。でも、ここはお花係の仕事とは関係ない場所よね？ 私達にとっては大切な場所だけ」

「およ？ すばるん、それ何持ってんの？」

「それって、肥料でしようか？」

「おーお花さんがげんきになる、おくすりー？」

「ああ、智花には先にあげちゃったんだけど、みんなのにもあげてもいいかな？」

みんな興味津々のようで笑顔で快諾してくれた。ちよつとだけ、みんなの絆の中に俺も混ぜさせてもらおうとしよう。

実を言うと、最初に智花の花に注いだ分が思ったよりも多かったせいで、四人分があるか少し不安ではあるが、この天使達を前にして途中で枯渇させてしまうなどあつてはならない。

——まずは四人の中で一番最初に俺の前に自分の鉢を持って来てくれた真帆へ。

「うおー!? すっげえー！ すばるんのスツゴイ濃いぞっ!!」

驚きと喜びをそのまま大きな声でストレートに表してくれる。

——最後まで遠慮してる背中を真帆に押されて俺の前まで来た紗季。

「え、私のなんかにあげるくらいなら、他のみんなにもつと……いえ、ありがとうございます……」

注ぎ始めると戸惑った様子だったけど、それでもやつぱり本心は嬉しかったようで、珍しく頬を少しだけ赤くしながらお礼を言ってくれた。

——同じく自分の鉢を胸の前で抱えながらも、なかなか前に出られなかった愛莉に俺から向かっていく。

「私にこんなにたくさん頂けるなんて……みんなに悪いですよ……でも、すごく嬉しいですっ」

みんなちゃんと平等だよ。と優しく頭を撫でてあげると、恥ずかしそうに俯きながらも、嬉しそうに目を細めてくれる。

——最後はひなたちゃんだ。

俺に捧げるように満面の笑顔で自分の大切な花を差し出してきている。

もはや枯渇寸前だが、ここは意地でも最後の一滴まで絞り尽くすくらい勢いで、このかわいい天使の小さなお花にもたつぷりと注いであげなくては。

「ひなたちゃん!! なかに出すよ!!」

「おーおにーちゃんのひなにいつぱいくださいー」

ほとんど空なのに気合を込め過ぎてしまったためか、容器の中に溜まっていた空気と一緒に残り少ない僅かな俺の残滓が勢いよく飛び出してしまった。

「おーびゅって飛んできて、ひなの手にベトベトがついちやつたー」

「ご、ごめん! ひなたちゃん!!」

俺の最後の一発は狙いを大きく外れ、あろうことか、ひなたちゃんの白く可憐な指先を汚してしまった。

だが、ひなたちゃんは一切動じることなく、自分の手に付いた白くベタつく液体を鼻先に近づけ臭いをかぎだす。

「おー? 不思議なおにー? でも、おにーちゃんからもらったにおいだから、ひな気に入りましたー」

「本当にごめんね。ひなたちゃん、すぐに手を洗っておいで…あと絶対に舐めたりしちやダメだよ」

「おー? ひなの考えおにーちゃんにバレバレ? それじゃお手洗いしてくるねー」

顔を近づけていた時にまさかとは思ったが、本当に舐めようとしていたとは…危なかったな。

万一ひなたちゃんが俺の（肥料）を舐めて、お腹を痛めたりでもしたらと思うとゾツとする。

花の肥料なんだし、何が入ってるかわからないものを口にしちやダメだよ……

最後の最後でちよつとしたアクセデントはあったけど、無事みんなの花に肥料をあげることができたんだし、これでいいかな?

ひなたちゃんが戻ってきたところで、みんなで体育館へ向かい、今日の部活動を始めた。

俺が彼女達の花にあげた肥料以上に、俺は彼女達のやる気に満ちた

表情や純粹にバスケットを楽しんでいる姿に、今日も救われているのだと  
実感し感謝の気持ちでいっぱいになっていた。

## 長谷川家お泊り計画

### 忍さんは心配性1

「昴さん……見て下さい。大きくなっても私のここ、ちゃんと通るようになりましたよっ！」

頬を赤らめ恥らいながらも足を大きく広げ、自分の成長をしつかり確認し褒めて欲しそうな上目づかいで俺を見つめてくる小柄な少女。

「ああ、すごいよ。正直この短期間でここまで上達するなんて……くっ……やっぱ智花は最高だっ」

「はう……そ、そこまで褒めて頂けるなんて……で、でも……まだこれからですよ……このまましっかり見て下さいねっ」

そのまま智花は前後運動を開始し、その動きに少しずつ体を馴染ませながら、徐々に速度を上げていく。

初めてした時は、俺をがっかりさせないようにと慎重すぎるくらいに、おっかなびつくりだったのに、今となっては、そんなことがあったのが嘘だと思うくらい、積極的に俺とのプレイを楽しんでくれている。

そして、わずか短期間で智花は遂にここまで来た。

ならばあとは俺もこの最高のパートナーと共に二人の高みまでどんどん上り詰めていくだけだ。

そうと決まれば――

「あ……す、昴さんそんないきなりズルいです！」

「はは。油断大敵……だっ」

俺から褒められ、すっかり自分の行為に夢中になっていた智花の隙を突き、主導権を奪うことに成功。

そのまま一気に智花の領域深くまで侵入する。

油断していたところを俺に攻められ、反応が遅れた智花が慌てて俺を受ける。

「あ……だ、ダメ……んっ……くっ」

「智花もなかなか反応が良くなってきたね」

すでに半ばまで俺の侵入を許してしまっている状況だが、どうやらそれ以上深くまで進むのは難しいかもしれない。

「むく嘘です。昴さんだったら、絶対に今のもっと深くまで入れてましたよね。」

「ちよつと無理をすればできたかもしれないけど、正直今の智花相手だと、いきなりそこまで入るのはきついかかって思ってるね」

「でも……ズルいのはダメですっ!」

おっと、どうやら智花の闘争心に火を付けちまったようだな。これはちよつと失敗だったか? と思ったが、すぐに考えを改める。

いや、この際だ俺も智花と最後の一瞬までしつかりと楽しませてもらうぜ。

——智花と滅茶苦茶バスケットを楽しんだ。

「うん。レッグスルーもしつかりできるようになってたし、この調子ならすぐに今までのテクニクだつて中学生になつても使えるんじゃないかな?」

「それならいいんですけど……初めて六号玉を使った時に昴さんの前で、お恥ずかしい姿を見せしてしまつて……」

初めて六号玉を使ってレッグスルーを繰り返して決めようとしていた際に、何度か内腿にボールを擦らせてしまい細く白い肌を赤く腫らしてしまつていたことを思い出す。

その度に智花は羞恥心と悔しさと顔まで赤くしながら、必死に自分のテクニクを再現しようと頑張つていたっけなあ

普段から繊細な動きを得意としてるだけあつて、少し玉の大きさが変わったという、誤差のせいでコントロールがぶれてしまつていたんだろう。

その幽かな差でも小柄な智花には影響が出てしまった。ただそれだけだ。

「それで、明日本当によろしんですか?」

「ああ、智花の都合さえ良ければ家はいつでもOKだよ。母さんだって喜ぶし」

まだお互いに解放感の余韻に浸っている状態で、智花が少し不安そうに俺に確認を求めてくる。

十中八九、真帆と紗季の差し金だろうけど、朝練の前に智花が休みの日にまた俺の家に泊まりたいと言ってきたのだ。

智花を一日中独り占めできる権利なんて、俺としてはもちろん大歓迎だ。

智花がもう少しだけ大人だったら、今夜は寝かさなないぜ。みたいな感じで、朝までコースですつとバスケの試合映像みたり、バスケで熱く語り合いたいくらいだ。

「お母さんはご迷惑でなければ是非に。と言ってくれてるんですが、お父さんが……今日の夕飯の時にお母さんが一緒に説得を手伝ってくれるみたいです」

「そっか。まあ、忍さんとしては大切な娘を男の家に泊めるのは気が気でないだろうからね」

「むー昴さんすごく優しいのに。前だって泊まるのを許してくれたんだから、今回だって……」

珍しく智花が膨れっ面をしているが、小さな頬をぷっくり膨らませている、すごくかわいいらしい。

俺の視線に気づいたのか、慌てて顔を戻すがもう遅い。俺の脳内に、しっかりと君のレア顔を記憶させてもらったよ。

「す、すみません、昴さんの前で変な顔を見せしてしまいました」

「はは。智花のそういう顔、久しぶりに見せてもらったよ。失礼かもしれないけど、すごくかわいいって思っちゃった」

「ふええ!? か、かわ……かわいい……」

いかん真っ赤な顔を両手で抑えながら震えている。もしかして怒らせてしまったか？

いや、怒ってるのにかわいい。とか言うなんて、失礼かも。じゃなくって間違いなく失礼に分類される発言だろ。

「ご、ごめん智花。またデリカシーないこと言っちゃって……」

「い、いえ……す、昴さんのおっしやりたいことは伝わってますから……お、お願いですから、それ以上言わない下さい!!」

年上の俺相手に本当に怒ってしまいそうなのを必死に我慢してるんだな。

下手に声を掛けるよりは、智花の言うとおり、自分で気を静めてもらうまで大人しくした方が良さそうだ。

口に出せないなら、せめて心の中ではしっかり謝らないと。

ようやく落ち着いたので、体の震えがおさまると、ゆっくりと智花が顔を上げる。

「え、えへへ」

あれ? 笑顔?

あの心優しい智花が怒りを通り越すレベルにまでなってしまう程のことを俺は言ってしまったのか!?

恐れ戦く俺に智花が優しく声を掛けてくる。

「もうダメですよ、昴さん。あんまり私が恥ずかしくなることばかり言わないでください。私、単純だから調子に乗ってしまうんですからっ」

「あはは……ごめん……ね?」

もしかして本当に怒ってない? むしろ喜んでくれる?

万に一つどころか億に一つも怪しいレベルの可能性かもしれないが、その一縷の望みに掛けることにして、そろそろ話を戻そう。

「どうやら今回も忍さんを説得できれば、家に泊まれるってことみたいだね」

「はい……さすがに二度は難しいかもしれませんが、絶対諦めたくありませんっ」

「そっか。本音言うとき、もし智花が乗り気じゃなかったら、俺も忍さんの考えに賛成するつもりだったんだけど、智花がそこまでお泊りを楽しみにしてくれてるんだったら、俺からは何もできないけど、せめて応援だけはさせてもらおうよ!」

「!! ありがとうございます!! 私がんばっちゃいますよーっ!!」

やる気に満ちた表情で智花が気合を込めている——やっぱ智花は



こうじゃないとな。

「はう!? す、すみません……うう……また昴さんの前で、はしたない姿を……」

——俺はそのはしたない姿も大好きなんだけどな。

なんて言ったら、本気で怒らせてしまいそうだから、口が裂けても言えないが。

智花の名誉のために言っておこう。

この直後の発言は、はしたない自分のイメージを俺から拭い去るために、彼女なりに必死に自分の知識を総動員して考え抜いた末に思い付いた提案なのだろう。と。

「そうだ。紗季から教えてもらったんですけど、私、すごい床上手なんですよっ!」

「ぶっ!?!」

思わず智花を見る。

え、智花さん、まさか……

戸惑う俺に気づかず智花は自信満々に話を続ける。

「私、前々からずっと思ってたんですよ。いつも昴さんや七夕さんにご迷惑をお掛けしてばかりなので、何かお手伝いできないかな? つて」

いやだからってそのお手伝いはちよつと……智花にそんなことさせちゃったら俺、間違いなく忍さんにやられちゃうぞ? ——タマ的な意味で。

「もしよろしければ、私に昴さんのお布団のシーツ整えさせて頂けませんか?」

「……あ、ああ。そういうことか……びっくりした……」

自分の発言に気づかず、慌てている俺の様子を不思議そうに見ている智花。

わざわざこのタイミングでこの間違いを正す必要——というか、勇

気はないな。

「ああ！ いやなんでもないよ！ そうだね。智花が敷いてくれたシーツなら、きつとすぐく寝心地が良さそうだね。うん」

「はい。お任せくださいっ——と、言ってもまずはちゃんとお父さんから許可を頂かないといけないんですが」

「しつかり説明すれば忍さんだってわかってくれると思うよ」

「はいっ昴さん、ありがとうございます！」

普段通りシャワーを浴び終えて一息ついたところで、最後の特大の誤爆弾発言に一抹の不安を拭いきれないまま、俺は家へと帰る智花の背中を見送るのだった。

## 忍さんは心配性（SNS）

—交換日記（SNS）01—

『みんなありがとうっ！ みんなが言ってくれた通りだったよっ。昂さんも七夕さんも今回のお泊りも歓迎するって言って下さったよっ。こ、今回は粗相が無い様に気をつけないっ。湊 智花』  
『なーあたしらがいったとーりだったろっ。』

まほまほ』

『えへへ、良かったね、智花ちゃん。』

あいら』

『おーともかいいなーおにーちゃんのおうちにまたおとまりー』

ひなた』

『長谷川さんのところをクリアできたなら、あとはトモのお父さんか。長谷川さんとイチヤイチャするためにも、もうひと頑張りね。』

紗季』

『イ、イチヤイチャなんてっ……!? ただ、いつもよりいっぱい昴さんとバスケができるな。っと思ってただけで……で、でも、お父さんの説得頑張らないっ！』  
湊 智花』

『もっパパもべつにハンタイしなくていいーじやんか。まえだっでもっかんがすばるんちにオトマリすんのさいごまでハンタイしてたんだろ？』  
まほまほ』

『お兄ちゃんも、私が長谷川さんの家に泊まりたいって言ったらダメって言いそうかな。』

あいら』

『まあ、父や兄からしたら、気が気じゃないだろうし。大人の事情って奴ね。』

『紗季』

『おーおとなのじじよー。おにーちゃんのおうちにオトマリした、ともかとひなはオトナのナカマいり？』

ひなた』

『んーひなはみーたん同伴だったから半分だけかな。』

『紗季』

『さすがエース。つねにあたしらのいっほさきをゆくな』

まほまほ』

『そ、そそそんなことないよっ!？』

湊 智花』

『すごくドキドキするけど私も一回くらいは泊めてもらいたいな。』

あいり』

『よーし、それじゃこんどカワリバンコにすばるんちにオトマリしてすばるんにオトナにしてもらおうぜっ!!』

まほまほ』

『あんた少しは言葉の意味わかって言いなさい!!』

『紗季』

『長谷川さんにお、大人にしてもらう……恥ずかしいよお!!』

あいり』

『おーひなもこんどこそカンペキなオトナにならざるをえない!』

ひなた』

『私が言っても説得力ないかもだけど……みんな、昴さんにご迷惑かけちゃダメだよっ湊 智花』

『わかってるって! ちよっとオトマリしてオトナにしてもらった』

ら、すぐかえるって。もっかんほホントシンパイショーだなー

まほまほ』

『そんなことないもんっ——そうだ、紗季が言ってた床上手って本当にあの意味であってるの？ 昴さんに話してみたら、すごく驚いた顔をされてしまったんだけど……』

湊 智花』

『あーあれ。トモのお父さんを説得するときには言わない方がいいわよ。両想いの人同士がすることだから、トモと長谷川さんにはぴったりだと思っただけだね。』

紗季』

『おーとこじよーず？』

ひなた』

『あれってシーツとかお布団を整えるのが上手い人を褒める言葉なんだよね？』

あいら』

『いや、さきのことだからきつとエロいいみがかくされてるはずだ！』

まほまほ』

『気になるなら、お泊りが成功した時に長谷川さんに実践で教えてください。ってお願いしてみたら？ トモになら手取り足取り、大喜びで教えてくれるかもね。』

紗季』

『~~~~~!!? ぜ、絶対言わないからねっ!!』

湊 智花』

## 忍さんは心配性2

「——もう……紗季ったら」

自室でイスに座りながら行っていたSNSを終え、携帯を閉じる。私は別に昴さんのお側に居られれば、それでいいのに。

両思いなんて、恋人さん同士みたいなこと……そんなお願いしちゃったら昴さんにご迷惑を掛けちゃうんだから。

「ん……そろそろ稽古の時間。せつかくお母さんが協力してくれるって言ってくれたんだから、しつかり日舞の稽古もやらないとっ」

バスケットに茶道に日舞に学業。

自分のことながら、色んなことに手を出し過ぎてしまっている気がするけれど、どれも私にとって大切な物だから今更一つになんか絞れない。

お母さんは無理して続けなくてもいいとは言ってくれてるけど、自分から始めたい。って言いつ出したことなんだし、例え才能が無くても最後までやり切るんだ。

「ふふっ。ちょっと力が入り過ぎちゃってるわね」

「ご、ごめんなさいっ」

うう……いきなり失敗。決意したばかりなのに、さっそくミスをしちゃうなんて……

「忍さんの時と違って、私の稽古はバスケットの時みたいにもっと楽しそうにしてもいいのよ」

「そ、そんなこと絶対にできないよっ」

いつも私のためにしつかり丁寧に教えてくれてるのに、教わる身の私自身がそんなことしちゃったら、お母さんにも舞踊に対しても、すごく失礼なことくらいわかってる。

普段はとても優しく心配になるくらいおっとりしているけど、舞を披露している時はとても凛々しく、所作の一つ一つがとても綺麗で

——今も変わらず、私は心の中で強い想いと憧れを持っている。いつか自分もそうなりたいと。

「うん。智花がどんな時でも真剣に稽古を受けてくれてるのはよくわかってるわよ。」

「だったら、そんなこと言わないでよ。ただでさえお母さんに迷惑かけちゃってるのに……今回のことだって、きつとお父さんに色々怒られるつもりなんでしょ？ ……私の代わりに」

自分のわがままのせいでお父さんとお母さんが喧嘩をして、お父さんを怒らせてしまうが、お母さんは私のためにいつも笑っている。その様子を見るのがすごく辛い。

本来なら私は我慢しないといけないのに――

「智花はいつも頑張り過ぎだから、たまには息抜きをしないとダメよ。その方がきつと色んなことが上手く行くようになるわ。日舞も茶道もね」

そう言つて、私がダメ元で言つてみたお願いを叶えようとしてくれている。

できることなら、また昴さんの家にお泊りに行きたいけど、そのせいでお父さんとお母さんの仲が悪くなってしまうのも嫌だな。

そんな私の想いを知つてか知らずか、お母さんが話しかけてくる。

「昴さん、とても優しい方よね」

「うん」

「智花の事をとても大切に下さっている」

「うん」

「だから智花も昴さんのこと大好きなのよね」

「うん……ふええ!? お、お母さん!?!」

なんでお母さんまで紗季達みたいなのを言い出すの!?

「忍さんは、昴さんに近づきすぎるのはお互いにとって危ないことだ。って心配してるみたいだけど、私としてはもう少し昴さんと親密になつてくれた方がいいと思うんだけどね」

「私そこまで昴さんと親しくなれてるわけじゃないと思うんだけど……」

「そうねえ。中途半端に仲良くなっちゃってるから、ちよつとしたきつかけで一気に傾いちゃいそうで、そこがかえって心配だと思うん

だけど……まったく父親ってそこがわからないのよねえ」

なんかよくわからないけど、きつとお母さんはお母さんなりに、私の事を心配してくれているんだろう。っていうことはわかった気がした。

「頑張つて説得はしてみるけど、ダメだったらその時はごめんね？」

「ううん。私がわがまま言っちゃって、二人に心配かけてしまったのはわかってるから大丈夫だよ」

二人で微笑みながら、少しだけ休憩をする。

——その後、再開した日舞の稽古には不思議と手応えを感じることができた。

\*

さて、久しぶりに花織と智花と三人で夕食を共にできるな——とは言え、また例の件で花織と口論になってしまっただろうが。

三人で食卓に着き、手を合わせ口を揃えながら『いただきます』と唱える。

まずは味噌汁を一口啜り、主菜へ箸を伸ばそうとしたところで――

「それで……お父さん――」

「――その話は食事を終えてからにきなさい。せっかく花織が作ってくれた食事が冷めてしまう」

「あら？　今回はちゃんとじっくり向き合って頂けるんですか？」

「前はお前にしてやられただけだ。幸い何事もなく智花が無事な姿で帰って来てくれたが、次も大丈夫とは限らん」

「ふふっ。話し合い。楽しみにしてますわね」

妙に上機嫌だな。前は元氣のない智花のために尽くせる手がなくなってしまう最終的に認めてしまったが、今回は折れるつもりはないぞ。

「それで、智花は今回お泊りする時は昴さんとどうやって過ごすつもりなの？」

「ふえ!?　お、お母さん、食後に話し合おうんじや……」

「別に例え話くらいなら好きにしても構わない。せっかく家族三人揃ってるのに無音の食卓も味気ないだろ」



話題は甚だ不快ではあるが、二人の楽しそうな声を聴くことができる分には悪くはない。

会話には参加せず、二人の声だけを聴いて癒しを求めようと思っていた矢先、その思惑はあっさりと消し飛ばされてしまった。

「確か前は昴さんと一緒にお風呂に入ったり、寝て頂いたんだっけ?」  
「ちよ……お、お母さん!! 昴さんのお背中を流しただけで、私はお風呂には入ってないし、同じ部屋で寝ただけで一緒のお布団でなんか寝てないよっ!!」

——チョットマテ……コノフタリハ、イツタイナニヲハナシテイルインダ!?

「え、そうだったの? てつきり昴さんと一緒にお風呂に入ったり、寝て頂いたのか思ってたんだけど、そうじゃなかったの?」

「そんな恥ずかしいことできるわけないでしょ!! お母さんが昴さんの前で私の服を脱がしたこと以上に恥ずかしいことなんて、してないんだからね!!」

「もうくまだそのこと根に持ってたの?」

「当たり前だよ!! うう……絶対昴さんに見られちゃったよ……」

「ちよつと待ちなさい!! お前たちは彼に一体何をやっているんだ!?!」

さつきから流れてくる不穏な言葉に耐え切れず、つい声を上げてしまった。

「別に大したことはしてないですよ。ちよつと智花が洋服を汚しちゃったから、急いで服を脱がせて昴さんに体を拭いて頂いただけですよ」

「昴さんはすぐに目を逸らして席も外して下さったから良かったけど、本当に恥ずかしかったんだからね!!」

「な……」

まさか……彼の目の前で智花が肌を晒し、しかも体に触れさせた……だと!?

思わず智花を見てしまうと、私の視線に気づいた智花が恥ずかしそ

うに胸を庇った——違う私はそういう目的でみたんじゃない!

話を聞く限り、明らかに花織が原因のようだ。まずは問い質すは花織の方だ。

「花織どういうことか詳しく説明を——」

「でもお風呂で昴さんのお背中を流したことがあるなら、お返しに洗って頂いたり一緒に入ったりしたんじゃないの?」

「私はちゃんと体操服を着てたから裸じゃないし、本当に背中を洗わせて頂いただけだもん!」

説明を聞くまでもなく、それ以上にどんどんと聞きたくはないが確認すべき案件が二人の口から出てくる。

「そうだったの? セっかくお友達の中で智花が一步リードできそうだったのに残念ね。せめて一緒に寝て甘えてくれさえすれば良かったかもしれないのに」

「はう……いい、一緒には寝てないけど……寝る前に少しだけ……甘えさせてもらっちゃった……」

頼むから二人共もう止めてくれ。これ以上は私の心が我慢が効かなくなってしまう。

「あら、珍しいわね。智花が素直に甘えちゃうなんて……でも、あの時の智花は本当に辛そうだったから、良かったわね」

「うん……昴さんだって、本当は私以上にきつくて辛い想いをされていたはずなのに、泣いてる私の手を優しく握ってくれたり、いっぱい慰めて頂いて……とても温かった」

その瞬間、自分から一切の感情が消え去ったことを自覚した。

そして、悟る。

やはり、私は絶対に自分の意志を曲げずに、智花をあの男の元へ行かせるべきではなかったと。

「そういうことか……」

「お父さん?」

「あら?… 忍さんどうしました?」

おそらく私の空気が変わってしまったのだろう。努めて冷静に振る舞っているつもりだったが、どうやら相当頭に来ているらしいな。

「いや……なんでもない。それより、明日は私が智花を送り届けよう」  
「え？ 昴さんのところへのお泊り許してくれるの？」

「忍さん？ 話し合いをするつもりじゃなかったんですか？」

「そのつもりだったんだが、私も今すぐに彼に会わなくてはならない用事ができた——すまないが、仕事を残しているので先に失礼する」  
出来る限り不穏な空気は払拭しておきたかったのだが、今の私にはできそうにないな。

あのままこの場に居続けても、罪のない二人に無意味に怒りをぶつけてしまうことになっていただろう。

二人には悪いが、明日あの男との関係を完全に断ち切れねばならん。

妻と娘の明るい笑い声の裏で一人静かに決意を固める。

約束の日に向かうべく、止まることなく時間は進み、夜は更けて行った。

### 忍さんは心配性3 (完)

「よし、こんなところかな」

智花が泊まりに来るかもしれないため、始めた部屋の掃除もひと段落。

もともと日ごろから頻繁に掃除もしてるし、机の上に散らばってるペンを戻したり本を棚に戻す程度でも大丈夫だろう。

「あとは俺が寝る布団を——いや、それは必要ないな」

——あぶないところだった。なんでまた俺と智花が一緒の部屋で寝るつもりになって準備してるんだよ。前は仕方ないにしたりって、今回はそんな必要全然ないだろうに。

「昂くーん」

「なんだい。母さん——」

不意にドアをノックする音共に俺を呼ぶ母の声にドアを開けながら返事をし固まる。

直前まで俺も同じことを考えていたから、気持ちにはわかる。でも、それなら俺と同じくここに来るまでに気づいてほしかった。

「はい。明日、智花ちゃんがお泊りに来るんでしょ。だからお布団持って来てあげたわよ」

「母さん、心遣いはありがたいんだけど、それはいらないだろ——」

別にここで智花が寝るわけでもないのに。俺はただそう続けたかっただけなのに。

「え!?! 二人とも、もうそんなとこまで進んじやってたの!?!」

「違う!! 何を勘違いしてるのかわからないけど、別に智花が俺の部屋で寝るわけじゃないから、布団は必要ないだろって言いたいだけだ!!」

とんでもない誤解をされる前にしっかりと、その勘違いを否定しておく。なんの勘違いかは知らないけど。きつとろくでもないことだと思うから。

「えーでも、前は仲良く一緒に寝たんでしょ」

「一緒に部屋で別々にね!」

「だったら——」

「前は事情があったからだけど、今回は一緒に部屋で寝る理由はないだろっ」

「どれだけ俺の事を信用してくれてるのは知らないけど、いくらなんでも人様の大切な一人娘を息子の部屋で一緒に寝せようと思わないでくれ。」

「んー？　でも、智花ちゃんが一緒に寝たいってお願いしてきたらどうするの？」

「その時はその時考えるけど、わざわざ俺の部屋で寝るように誘導する必要ないだろ」

最初からここが智花の寝る場所だ。なんて、俺のベッドを提供しちゃったら、智花は断ることもできないだろう。

きっと嫌なのを我慢して、俺と不安な一夜を共にすることになってしまう。

間違っても手を出すことはしないけど、例えそう説明したところで、彼女が怖い思いをすることは避けられない。

「それもそうね。それじゃ、お布団は戻しておくから、これだけ受け取って智花ちゃんの所に入れてあげて」

「りょーかい」

布団の上に重ねられていた数枚の衣類だけを受け取ると母さんはドアを締め、持ってきた布団を戻しに再び廊下を歩いていく。

母さんから受け取った洗濯済みの衣類を何気なく広げると、ふと懐かしさを感じる。

「そういえば、お気に入りだったけなあ」

小学生時代に愛用していた黄色を基調にしたタンクトップとバスケットボールの刺繍入りのハーフパンツ。

——この頃から、バスケットどつぷりハマっちゃってたんだよなあ。あの事件のせいで一時的に止めてしまったけど、智花達と出会ってからは、また再開して毎日やってるロードワークとシユート練習だつて、あの頃からずっと続けてきた。

今の俺には、もう小さくて着れないけど、智花の練習着くらいには

役立ってくれるだろう。

雨や不測の事態で、万一服を汚してしまった時の臨時の着替えとして、智花の予備の着替えを一式預からせてもらってるし、こっちからも俺の古着を自由に使ってもらおうと貸し出している。

俺自身、自分のお古を着せることに抵抗はある。でも、智花が嬉しそうにそれらを着てくれたことに気恥しさと同時に、俺のお気に入り品々を智花も気に入ってくれたように感じられて嬉しさもある。

本当は俺を立てるために嫌なのを無理しているんじゃないかと勘繰ってしまうこともあるが、うっかりその格好のまま帰ろうとしてしまつて頬を染めている智花を見て、それも杞憂だったんじゃないかと思えた。

まあ、そんな感じで少しは俺も智花に恩返しができていいのだけれど、ここで最大のミスを犯してしまったことに気づいた。

「どうしようこれ……」

俺の手の中には俺の古着が数点。それは全く問題ない。俺のなんだし。

でも、それをしまう場所が致命的だった。

俺のタンスの一角。そこを智花専用スペースとしている。

何着かは俺の古着がすでに何枚か入っていると思う——実際に開けて見たことなんてないんだから、思うとしか言えない。

ただ、それ以外は全て智花が自宅から持ってきた、智花自身の私物なのだ。

手元にある古着をタンスにしまうためには、当然タンスを開けなくてはならないわけで、収納されている智花の数々のプレシヤスを目にしてしまう可能性が極めて高いと予想される。

——そう。俺は本来、例えば自分の物であろうと、母さんからこの古着を絶対に受け取つてはいけなかったのだ。

あの時取るべき最善の手は、俺が布団を戻す役割を担い、代わりに母さんに智花専用スペースに俺の古着を入れてもらうべきだったのだ。

「なにが『ここ』は智花ちゃんの専用スペースだから昴君は開けちゃダ

メよ』だっ！ 言い出した本人がやらかしてんじゃねーか!!」

とはいえ、今更後の祭りだ。どうする……俺はどうしたらいい。手元には昔の俺の一番のお気に入り。できることなら、これを智花にも是非とも使ってもらいたい。これを着てくれた智花を見たい。

ゴメン。智花、一度だけ俺は過ちを犯す。自分の欲望を抑えきれない俺を許してくれ！

——そして俺は自らの欲望のままに智花の秘密の場所をこじ開け全てを曝け出させてしまった。

機能性を重視し俺との激しい運動に適した体操服もあれば、やつぱり智花が一番好きな色なのか薄桃色を基調にしたレース素材を使用している、とてもかわいらしいワンピース等々がとても丁寧に畳まれてしまわれていた。

実際に智花が着ているところを見たいものだな。間違いなく似合うだろうし。

——って、何一つ一つ確認してんだ俺は!?

今までの記憶を抹消するように激しくかぶりを振り、本来の目的の遂行を再開する。

「えーと、俺のお古をしまってる場所は——」

——何気なく視線を隅の方へ動かした先で奴と目が合ってしまった。

時に白、時に薄桃色と多種多様な配色形体持ち、またある時はその身の一部にクマの化身を宿し、有事には常に肌身離れず智花の聖域を護り続けている、あのお方がいらつしやった。

どうやら今は智花を守護するという任を解かれ、この場ではしの休息をされておられるようだ。

——智花。本当にゴメン。すぐに記憶から抹消するし、智花は不思議に思うかもしれないけど、絶対にこの埋め合わせを必ずするから。反対側の隅を確認したところで、ようやく俺が安心して目を休めることができる安全地帯を発見した。

そこに目的のブーツを捻じ込むと、今まで曝け出させてしまっていた智花の秘密の場所をぴつたりと閉じる。

「はあ〜〜任務完了」

長い溜息を吐きながら、全て終わったという実感が湧いてくる。すっかり脱力していたところで、急に携帯が鳴り響く。

「!? と、とも……か?」

画面に映し出される発信者の名前に、自分が直前までやっていた行為への罪悪感が戻ってくる。

俺が逡巡している間も彼女が俺を呼ぶコール音が鳴り続けている。

「——と、何してんだ俺は……ゴメン智花。お待たせっ」

『きゃっ……あ! す、すみません。夜遅くにお電話してしまっ』

慌てて電話取り、そのままの勢いで話してしまい、電話の向こうの智花を驚かせてしまったようだ。

「驚かせちゃってごめんね。俺に用事だよね?」

『は、はい。その明日なんです——』

「うん……」

どつちだ。電話越しの智花の様子からは、まだ判断できない。

『ご、ご迷惑でなければ、どうかよろしく願いしますっ!!』

「よっしやっ!!」

『はう!? ……えへへ』

おっと、喜びのあまり思わず叫んでしまったら、また智花を驚かせてしまったが、嬉しそうな笑い声も聞こえてくる。

「無事許可もらえたみたいだねっすごい嬉しいよっ」

『明日のいつもの朝練の時間にお伺いしますので、一日中お世話になってしまいますが、大丈夫でしょうか? ……もしご迷惑でしたら、午後からでも』

「うちはいつでも大丈夫だよ。朝からずっと智花と一緒にいたいからいっだっ」

『ありがとうございますっ!! 私も朝から昴さんと一緒にいられるのすごく楽しみですっ』

人の事言えないけど、電話越しでもわかるくらい智花もテンション上がっちゃってるな。本当にお泊りを楽しみにしてくれているみた



いで何より。

「よし、それじゃ、智花が気持ちよく過ごせるようにしつかり準備しておくから楽しみにしててね」

『あ……すみません、私のために準備して頂いていたのに、手を止めさせてしまつて……それでは明日よろしくお願いします。失礼しますねっ』

「おやすみ。 智花」

『おやすみなさいですっ 昴さん』

電話を終え、智花との会話の余韻に心地よく浸りながら再び作業を再開し、ほどなくして終わった。

——あれ？ もしかして今俺がしまわなくても、智花が来た時に手渡しすれば良かったんじゃないや……うん。すんだことだし忘れよう。俺は何も見えてないし、何もしてない。

「明日は朝からずっと智花と一緒にいられるんだし、早めに寝ないと」  
な」

ワクワクする気持ちを強引に抑えて眠りにつくことにした。

\*

「思ったより寝つきも良かったし、寝覚めもばっちりだな」

心なしかいつも以上に清々しい気分が目覚めた気がする。

「よしつまりはロードワーク行ってくるか」

帰ってきたら、きつと智花が出迎えてくれる。そして今日はずっと一緒にいられるんだ。

いつも以上に気合が入ってしまったている気がする。

最後の角を曲がったところで、家の玄関の前でショートヘアを片結びにしている少女がこちらに向かって手を振ってくれているのを見つけた。

「昴さんっ」

「智花っ」

ほんの少しだけ速度を速め、近づいてきたところでゆっくりと速度を緩めて、手前で停止。

夏祭りの時みたい、勢いそのまま抱きしめてしまいそうになるよ

うなミスは犯さない。

智花も同じことを思い出していたのか照れながら目を細めて微笑んでいた。

「すみません、我慢できなくて、いつもよりちよつとだけ早く着てしまいました」

「構わないよ。っていうか、俺も智花と早く会いたかったし、ちようどよかった」

「えへへ」

「それじゃ、さつそく俺の部屋に行こうか。今日はいっぱい楽しもうな」

二人で笑いながら家の玄関に向かって歩き出そうと振り返ると――

――今まさに振り上げた拳を俺に向かって叩きつけようする怒りに満ちた目をした忍さんの姿があった

「!？」

今何が起こったんだ……

「昴さん!! お父さんなんてことするの!!」

倒れた俺に駆け寄り起こすと、今まで一度も見たことがないくらいに怒りを露わにして父親を睨んでいた。

そこでようやく俺は自分が忍さんに殴り飛ばされたことに気づいた。

強い衝撃と殴られた頬の痛みを体が少しずつ自覚し始める。

以前万里に殴られた時に比べれば威力そのものは低いが、どこか心に響く重さがあった。

きつと智花に対する父親の想いの重さって奴なんだろうな。

「いきなりすまないな。そのニヤついた顔でふざけたことを抜かしていたから我慢ができなくなってしまったよ。――だが、貴様が今までに智花にしてきた仕打ちに比べれば全然たいしたことないだろう?」

いかん俺の呼び方が変わるくらいにマジ切れしていらっしやる。

加えて智花まで険悪な空気になってしまっている。どうする?」

「智花。今すぐその男から離れなさい。これ以上智花をこんな男の近

くになんぞ置いておけるか」

「お父さんいい加減にして!! 何を言ってるのか全然わからないよ!」

俺が自分の行動をどうするか決められずにいる間にも、どんどんと深刻な事態へと進んでしまっていく。

「今はわからなくてもいい。俺を嫌っても構わない。だが父親の俺には智花を守る義務がある。だから今回ばかりは絶対に引けん」

「わかった………これ以上お父さんが昴さんにご迷惑をお掛けするなら、お父さんの事を絶対に許さない。お父さんなんか大嫌い!!」

智花の一言に一瞬だけど、忍さんが悲痛な表情に変わってしまったのを見逃さなかった。

智花がここまで感情を剥き出しにして怒りをぶつけたのはおそろしく初めてだったのだろう。何よりこれ以上ないくらいはつきりとした拒絶の言葉を言われたことに対してのショックも相当なものだろう。

それだけ俺の事を大切に想ってくれていたのは、とても嬉しかった—— だけど、心優しい少女が彼女にとって本当に大切な存在に対して、そんな言葉を表情を向けてしまうことに耐えられなかった。

「智花!!… そんなこと言っちゃダメだ!!」

俺は無意識に叫び出してしまっていた。

予想外の方向から大きな声で自分を非難する声に智花はビクリと体を震わせた。

「え………す、昴………さん?」

怯えた様子の智花を見て、自分が今とても怖い顔をしていると気づき、慌てて表情を崩す。

「怖がらせちゃってごめんな智花。……でも、智花の事を本当に大切に想ってくれてる忍さんに……お父さんにそんなこと絶対言っちゃダメだよ」

「で、でも! お父さんは昴さんに……」

「智花を大切に思うあまり、ちよつと誤解しちゃっただけなんだよ。大丈夫。すぐに仲直りできるからさ。ちよつとだけ家の中で待って

てくれないか？」

「だけど……私……昂さんがひどいことされるの、もう嫌だよお……」  
俺がまた殴られるのではないかと心配してくれてるんだな。

「大丈夫だよ。話し終わったら、俺と忍さんで二人で笑顔で家に入るって約束するから」

優しく撫でながら、説得をすると心配そうに俺の様子を見るように何度か振り返りながらも家に入ってくれた。

「すみません。俺もまだまだ子供ですが、それ以上に子供の智花には聞かせられないと思いますので。少しだけ俺の話を聞いてください。」

「いいだろう。いや、もしかしたら、実は本当に私の勘違いで君を無意味に傷つけてしまったのではないかと思っていたところだ——もしそうだとするなら、私を安心させて欲しい」

誤解が解けることを願いながら、できる限り語弊なく自分の考えはつきりと伝わるように丁寧に伝えていく。

お風呂の背中流しは親睦を深めるためという智花の友人からの提案であること。

もつとも、それに乗った俺も俺だけど、その時は不甲斐ないことに自分のことで余裕がなく、それを心配してくれた智花の好意を無碍にしたくなったという想いがあったこと。

智花が不可抗力で不本意に肌を晒してしまうことがあったのは事実だけど、できる限り彼女の心を傷つけないように配慮した対応をしているつもりだ。

たまに頭を撫でたり手を繋いだり、思わず肩を抱きしめてしまったことは認めるがそれ以上のことは絶対にしていない。

——智花が寝ている布団に潜りこんでしまったことはさすがに言えなかったが。

そして、智花がいる場面では絶対に口に出せない単語を交えつつ、最後の決定的な証言をした。

「と、智花はその……俗にいう綺麗な体のまま……です——と、当然そ

れに類似するようなことも一切してません」

忍さんが絶対に確認したいことだとは思うけど、自分の口からこんなことを言うのは本気で恥ずかしかった。

こればかりは信じてもらうしか確認手段はないが、事実だ。とりあえず、今までの説明をしてきた上で、この直接的な釈明をすれば、多分大丈夫だろう。

もつとも開幕からこんなこと口走ったら、明らかに怒りを煽ってしまいそうな雰囲気だったが。

俺の必死の釈明会見にずっと無言を通してきた忍さんが突然その場に座り込む——そして、地面に頭をこすり付けるように深く土下座を始めた。

目上の方が突然、地べたで俺に向かって土下座を始める様子に思わず言葉を失う。

「昴君。本当に申し訳なかった!! 確かに一部不本意なところもあったが、間違いなく君は智花のことを大切に扱ってくれている。その事実とは間違いないと確信できた!! 本当に申し訳ないことをしてしまった!!」

「ちよ……か、顔を上げてください!!」

自分の行動で明らかに俺が動揺してしまっていることに気づいてくれたのか、ゆっくりと顔を上げてくれた。

「すまないな。一度信じると言った君を疑い、また大変な迷惑を掛けてしまった」

「そんなことないですよ。誤解が解けて俺も安心しました」

「しかし……これで本当に智花に合わせる顔がなくなってしまったな」

「俺は忍さんの味方です。種類は違いますが大切な物を守るために必死になるのは俺も智花も同じですし、忍さんも同じ気持ちだったんですよね」

「そう言ってもらえると助かる。君からの口添えは非常にありがたいのだが、君に借りを作ってしまうと将来がづらいかもしれない」

「それじゃ、その時が来たら今回の一発分は免除してください」

笑いながらドアを開け玄関に入ると同時に――

「お父さんごめんなさい!! 私、お父さんにとってもひどいことを言うてしまいました!! 本当にごめんなさい!!」

――飛び出してきた少女は泣きながら父親を強く抱きしめ謝罪の言葉を口にする。

俺に叱られて、きつと智花も気づいてくれたんだと思う。

俺の事も大切だけど、同じくらい忍さんのことだって大切なんだと。

泣きじやくる智花を優しく抱きしめ返す忍さん。

「智花。謝るのは私の方だ。勝手に勘違いし、智花の大切な物を傷つけてしまったのだから」

「……うん。わかってくれたんだったらいいよ。お父さんも私の事を大切に想ってくれてるから、私みたいについて熱くなっちゃったんだよね」

その日は結局、智花はお泊りを中止して自分の家に帰ることになった。

「ご、ごめんなさい! 私の勝手に何度も予定を変えてしまつて、ご迷惑をお掛けしましたっ」

「気にしなくていいって。お泊りはいつでもできるんだし、いい機会だから、前の俺との時みたいにな、いっぱい忍さんといろんな話をしてみるといいと思うよ」

「この度は大変な粗相をしてしまいました。大切なご子息を傷つけてしまったこと深くお詫び申し上げます。私を許して頂けないのは承知の上ですが、どうか智花だけはこれまで通りに扱ってやっては頂けませんか?」

「あらあら。ちよつとびつくりはしましたけど、これくらいでどうにかなるような息子じゃありませんので、お気になさらないでください。忍さんの心中お察し致しますわ」

子供同士、親同士でしっかりと和解が成立したところで、俺は忍さんに呼び出された。

「申し訳ないが、以前君の学校のことを調べさせてもらった……なぜ

智花に手を出さなかった？ 昴君に相当懐いているし、器量だって悪くはないだろ？」

「全てのバスケ部の人間がそういう人間だとは思わないで下さいよ」  
「そうだったな。すまない」

「智花は俺を大切な場所を護ってくれた恩人だって言ってくれてますけど、俺はそれ以上に智花に救われたと思ってはいるんです。だから、彼女も彼女の大切な人も場所も手の届く限りは絶対に護りたいんです。最初にそういう約束をしましたし、後悔もしてません」

しっかりと視線を交わらせたところで、忍さんが困った様な苦笑を浮かべ表情を崩した。

「最終的には昴君が一番危なくなるのは間違いないみたいだが、今はまだ君のそばが一番安全みたいだな。それまでは改めて娘をよろしくお願いします」

「はい！ 俺だって智花のことを大切に想う気持ちは忍さんにだって負けるつもりはありませんからっ」

「ほう……父である私よりも智花を大切に想っていると……」

ヤバい、せつかく丸く収まっていたところで、また不穏な空気が……

「す、すみません。言葉が過ぎました。忍さんよりもなんて、自意識過剰でしたっ」

「いや……今はおそらくそうなのだろう。君の方が智花をよく理解していると思う。それでは、今日はこれで失礼する」

家に帰ろうとしている仲の良い父娘の後姿を見ながら、心の底から安堵する。

——仲直りできて本当によかった。俺のせいで二人が険悪になったら、花織さんに合わせる顔がなくなるところだった。

その日の夜、俺はいつも以上にウズウズしていた。

智花が俺のために準備してくれていたことを早く試したい。

「さて、それじゃそろそろいい時間だし床上手を自称した智花の腕前を確認させてもらおうとするかな」

帰る前に智花がシーツを敷いて整えてくれた俺のベッドに入る。  
うん。これはなかなかいい感じだな。まるで本当にすぐ側に智花  
がいてくれてるみたいない心地良さを感じる——ってのはさすがに言  
い過ぎか。

でも、これで今日もいい夢が見られそうだ。



甘え下手な彼女のために1

「トモのこと抱いてやってくれませんか？」

今日の部活終了後に他の四人がシャワーを浴びに行く中、俺に少し用事があるから。と、ただ一人残った少女——永塚紗季の口から突然そんな言葉が飛び出した。

——キミハイッタイナニヲイツテルンダ？ 思わず反射的に出そうになった言葉を飲み込み別の言葉を絞り出す。

「いやいや!! 突然そんなこと言われたってできるわけないだろうっ」

俺のもっともな正論に、紗季も何かに気づいたのか急に顔を赤くしながら早口で説明を始める。

「……!? いえ違うんですっ!! 抱いて欲しいと言っても別にトモの初めてをもr——」

「ストーーップ!! 女の子が男の前でそんなこと口にしちゃいけません!!」

恥ずかしさのあまりか、矢継ぎ早にとんでもないことを口走りそうになった紗季の言葉に慌てて割り込み暴走を食い止める。

「わ、私としたことが……失礼しましたっ」

「う、うん。とりあえず何か理由がありそうなのはわかったよ——それと……言いづらんだけど、紗季はとても勉強熱心だから色んなことを知ってるのはわかるんだけど……もう少し言葉を選ぼうね？ 俺もドキッつとしちやうから……」

「うう……本当に失礼しました……」

自分の失言にバツが悪そうに黙り込んでしまった。

やっぱり真帆と違って紗季は言葉の意味わかって使ってるんだろうなあ……たぶん。

でも、言葉の表面上の意味だけで、本質には気づいてないみたいだし、ここら辺はまだ真帆と大差ないのかも知れない。

いずれ本当の意味を知っちゃった時には紗季だけじゃなくて、みんなともギクシヤクした関係になっちゃやうかもしれないのは少し寂しいけど、いつかは訪れることだろうし仕方ないか。

せめてその時までには、智花達と深く繋がり合える関係のままではないな。

端から見れば小学生と深め合った絆なんて。と思われるかもしれないが、今の——いや、今後の俺にとってもこの絆が永遠の宝物になるのだから。

小学生という一生の内でもっとも大切な時期を俺に捧げてくれて、みんなの決意と覚悟に報いるためにも、俺も俺が与えられる全てを彼女たちに注ぎ込むつもりだ。

——おっと、つい己の中に宿る小学生への熱く燃え滾る想いに夢中になってしまっていた。この気持ちに偽りがないことを証明するためにも、まずは目の前の少女を自らが招きよせてしまった羞恥心から解放してあげなくては。

「勝手に勘違いしちやっつたのは俺なんだし、俺の方こそ紗季に恥ずかしい思いをさせちゃってごめんね——さすがに紗季がいきなりこんなことを言い出すのにもちゃんとした理由があると思うんだけど、それを聞かせてもらえるかな？」

「はい。いつも長谷川さんを頼らせて頂くのは申し訳ないとは思いますが、今回もやっぱり長谷川さんが適任だと思いましたが」

過去にも智花に俺の背中を流させたり、俺の部屋に泊まらせたりと、たまに真帆との悪ノリに歯止めが効かなくなり、智花をからかいすぎてしまっているとは思う。

だけど、最終的には彼女たちの目論見通り、俺と智花をより親密な関係にさせることに成功した。という実績がある彼女からの提案だ。

きつと今回も大切な友人のためを想ってこそその提案なのだろう。

——と言っても口ぶりから今回もなかなか高いハードルを用意してくれたいのだが。

これを飛ぶか潜るか俺と智花次第ではあるんだが——智花はきつと友人からの提案を信じて飛び越える選択をしちゃうんだろうな。

そして、その智花の決意に俺も一緒の道を選ばざるを得ない。紗季……恐ろしい子。

「長谷川さんもご存知かと思いますが、トモは実はすごく寂しがり屋なんです。本当は真帆やひなみたいに抱き付いたり触れ合ったりして喜びや気持ちを伝えたいと思ってるのに……きつとトモの家でも厳しく育てられているでしょうし、よっぽど嬉しい時以外は、恥ずかしさもあつて普段は我慢してしまうんですよね。」

「あくなんとなくわかる気がするな。智花も前に寝てる時とか手に届く物を強く握りしめたり、抱き締めてしまう癖があるって言ってたっけな。今思うと、やっぱり本当は寂しいし、手にした大切なものを絶対に失いたくないっていう気持ちが強いんだろうね」

智花がそうなってしまったであろう一番の原因は俺も紗季もとつくに気づいてしまっている。

「——何より前の学校のこともあつて人に嫌われることに対してひどく怯えてしまっているんでしょね。私たちと本気でバスケットを始めようになつて、ようやくトモ本来の性格が戻ってきたんでしょけど、やっぱり心のどこかで失うことに対しての恐怖が根強く残つてしまっているんだと思います」

紗季が言うことが多分正解なのだろう。

彼女達は俺が出会う以前の傷ついた心を必死に守るために殻に閉じこもり続けていた智花を知っているのだから。

四人の出会いが、智花の心をゆつくりと癒し、再び智花が飛び立つことができる新しい翼を創り上げた。

だからこそ、大切な友人に嫌われるかもしれないと思つたことは無意識にできなくなつてしまっているんだと思う。

「でも、それなら真帆とかひなたちゃんやんが適任じゃない？ っていうか、普段からよく抱き合つてそんなイメージがあるんだけど」

「そうですね。ちよつとしたスキンシップくらいなら私達でも十分できると思います」

「それならわざわざ俺に頼むことでもないんじゃないか……っていうか、智花だって俺みたいな男に抱き着かれたら、恐怖こそすれ喜びなんて絶対にしらないと思うよ」

下手すると一生物のトラウマになりかねんし。

俺としても大切な智花にそんな真似は絶対にできない。

「抱き合うくらいなら私達でもいいんですが、私達が知ってる限りでは長谷川さんには頼めないことだと思っています。同い年の私達よりも年上の長谷川さんの方が、トモも甘えやすいでしょうから」  
「あ、なるほどな」

確かに智花は普段から色々頑張り過ぎちゃってるところがあるし、いつも粗相がないように。と気を張り詰めていることだろう。そんな少女が少しでも気を緩めることができるような場所が増えてくれるなら、反対する理由なんてどこにもない。むしろ推奨するくらいだ。

家でも花織さんは優しそうだけど、多分忍さんの父としての優しさっていうのは、智花の年齢じゃ伝わりにくいと思うし。あまり忍さんには甘えられないのかもしれない。

智花を甘やかしてあげられる役割を俺が担うことができるのなら、これ以上に嬉しいことはないだろう。

まあ、智花とこれまでの間にどれだけ信頼関係を築けていたかが、はつきりしてしまうから、少し怖いところではあるが。

下手すると今まで必死に積み上げ、慎重に築いてきた信頼が一瞬で消し飛んでしまいそうだし、そうなったら俺の方が、多分もう二度と立ち直れなくなるかも……

「……でもさ、もう少しだけハードルを下げられないかな？ さすがにいきなり智花を抱きしめるのは……」

「では、長谷川さんにお聞きしますが、抱き癖のあるトモが一番甘えやすくて、嬉しい状況ってどんな場面だと思います？」

「……抱き付いたり、抱きしめられることだとは思うけど……」

智花の名誉のためにあえて蒸し返すようなことはしたくはなかったのだが、お淑やかで自制心の強いはずの智花が衝動のままに動いてしまっていた時の出来事を思い出してしまった。

ForM主催のミニバス大会の優勝祝賀会の時は、智花が俺に全身しがみ付くように強く抱き着いた拳句、スク水越しの幽かな膨らみを顔面に押し付けらr——いやいやそんなことはない。絶対になかつ

た。

そして、羽多野先生のご実家の旅館でも、智花らしからぬくらいに着崩した浴衣姿で俺に全てを曝け出そうとしてしまっていた時も、やっぱり俺に強く抱き着いてきた——あの攻防戦の後すぐに寝落ちしてくれたおかげで事なきを得たが、本当に危なかった。

確かに俺に心を開いてくれるからこそその行動だとは思いますが、だからといって無自覚の状態の智花を気兼ねなく抱きしめてやれるかと言われれば、そんなことできるわけもない。

初めて会った頃に、あの歩道橋の上で本当はみんなとのバスケットをしたい。と泣きながら話してくれた時は、先に俺の感情が爆発してしまっただが。

俺も智花もいつもお互いに相手に迷惑が掛からないようにと、限界まで我慢した末に、ようやくほんの少しずつ気持ちを打ち明け合うことができていた関係なんだ。

「私からトモにも話してみるので、長谷川さんからも提案して頂けませんか？ きつとトモは恥ずかしくて遠慮するかもしれませんが、それならそれで構いません——だけど…もしトモが長谷川さんに抱きしめてもらうことを望んだら、その願いを叶えてあげることにはできませんか？」

「俺で良ければ全然構わないけど……お願いだから、くれぐれも無理強いするような言い方はしちゃダメだよ」

「それはわかってます。私からは、もう長谷川さんをお願いしちゃったってトモに話しちゃいますし、長谷川さんからも私からトモを抱いて欲しい。って言われたって、トモに迫って頂いても構いませんよ？」

その方がトモも——」

「え〜と……迫るっていうのは、さすがに冗談だよな？」

どこまで本気で冗談なのが少々読めなくなってきた。

紗季のことだから、ちゃんとわかってくれてるとは思っているんだけど、俺の立場上、からかい目的で智花を抱くようなことは絶対にできない。っていうのをしっかりと説明するべきだろうか？

「ふふっ。はい。長谷川さんがそんなことしなくても、トモのことだから長谷川さんが許して下さっているとわかっただら、きつとすぐに甘えちゃうと思いますよ」

「紗季の期待に応えられればいいんだけどね。それじゃ俺の方はいつでもいくらでも構わないよ。って伝えてくれるかな？ ちゃんと俺からも誤解がないように正しく伝えるつもりだけど、先に俺の気持ちがあわかった方が智花もきつと話しやすいだろうし」

「どうやら紗季の中では俺が智花を抱くことが、すでに確定事項になつてしまつているようだ。」

「智花を良く知る彼女から見ても俺と智花の信頼関係はそれくらいのことのできるレベルになつてると判断してくれてるのかな？」

「だとしたら嬉しい限りだけど、それを盲信して先走るような真似は絶対にしないよう気をつけないな。」

「……………ほんつとトモが羨ましくなつちやうな」  
「え？」

ポツリと小声で何か呟いたようだが聞き取れなかった。

「いえ。それでは真帆達がいる前で話すと色々と話がこじれてしまうと思うので、後でトモにだけそれとなく話してみます。結果は近いうち、トモの口から直接聞けるのを楽しみにしてて下さいねっ」

「そう言い残して急いでみんなが待つているシャワー室へと駆けて行く紗季の後姿を見送りながら考える。」

「——本当にこれで良かったのだろうか？ という不安がいつまでも拭い切れなかったが、俺はみんなが戻ってくるのを立ち尽くしながら待つしかできない。」

「まあ、いつ智花を抱いてもいいようにしっかりと準備はしておかないといけないかもな…………いや、智花を思う存分抱けるなんていう、身の程知らずな期待などしてないが。」

「……………あれ？ もしかして葵に頼めば良かったんじゃないや…………親でもなく面識もあつて、年上かつ同性ならもっと甘えやすいんじゃない…………」

「我ながら名案だと思うが…………どうしてあと数分早くそのことに気

づかなかったんだ!？」

「なあ紗季。気づいたんだけど、これって別に俺じゃなくて葵に——」  
「ダメです。長谷川さんは、トモが望んだら抱いて頂けるとおっしゃいましたよね」

みんなと一緒に汗を流し終えて体育館に戻ってきた紗季にこつそりと話しかけるも、俺の意見はばつさりと切り捨てられてしまった。  
ほんの少し前の紗季とのやり取りが思い返される。

——もしトモが長谷川さんに抱きしめてもらうことを望んだら、その願いを叶えてあげることができませんか？

——俺で良ければ全然構わない

俺は紗季に智花が望めば抱く。という言葉質をしっかりと取られていた。

日ごろから思慮深くしているつもりだったのに、まさかこんな大事な場面で致命的な判断ミスを引き起こしてしまうとは……

「でも、智花だって女の子同士の方が——」

「長谷川さん……お願いします。ほんの少しだけトモに歩み寄って頂けませんか？　そうして頂けるだけ、きつとトモは長谷川さんへの本当の気持ち伝えられるだけの勇気をもらえると思います」

俺がどう食い下がろうとしても、やはり紗季は俺に智花を抱かせたらしい。

紗季自身も智花のことを想っての行動なのだろうし、俺も二人の仲を信じるべきかも知れない。

確かに思慮深い紗季が、葵に頼るといふ発想に至らなかったとは考えにくいし、もしかしたら、その上で葵よりも俺の方が適任だと判断してくれたということなのだろう。

「あの……長谷川さん……本当に無理だとおっしゃるんです……はつきりおっしゃって頂ければ、撤回しますので……」

「いや、俺が智花を抱くのは全然、嫌なんかじゃないんだ。むしろそれで本当に智花が安心して気持ちを休めることができるのなら、いくらでも抱いてやりたいくらいだ」

「ありがとうございます。長谷川さんにはいっぱい気苦労を掛けてしまい申し訳ないですが、どうかよろしく願います。あまり関係ないかもしれませんが、もし長谷川さんがトモ以外の事も抱いて頂けるのであれば、私たちは間違いなく葵さんよりも長谷川さんを選びます」

俺と紗季がこんな話をしているとは夢にも思っていないだろうな。と、視線をちらりと智花に向ける。

紗季と同じくらい大切な友人達と楽しそうに笑顔で何かを話している様子からも、俺達の様子には気づいていないのだろう。

「はは、みんなにそう思われてるなら光栄だよ……でも、紗季、女の子があんまり過激な発言をしないようにね」

視線を戻すと頬を赤く染め、俯き加減に視線を落とし、体操服の裾を握りしめている紗季がいた。

そこで紗季もまた恥ずかしいのを我慢して、彼女なりに必死に智花のためにできることをしていたのだと気づく。

「ありがとな。紗季」

「!? ……いい、いえっ、私は長谷川さんにご迷惑なお願いをしてしまっただけで……」

——この友達想いの優しい少女の期待に応えるためにも、絶対に智花を抱いてやらないとな。と、紗季の髪を優しく撫でながら、決意を固めた。



## 甘え下手な彼女のために2

「トモ、長谷川さんが抱いてくれるって」

「ふえええええ!?」

二人つきりになったタイミングを見計らって、余計な話は挟まず単刀直入に伝えてみたら、予想通りの反応をしてくれた。

突然の一言に驚き固まっているが、どこか怪訝そうな表情をしてこちらを見ている。

「だから、長谷川さんがトモのこと抱いて下さるって言ってたわよ」

「……昴さんがそんなこと言うわけないし……絶対に真帆か紗季の作業だよな?」

「正解。今回は私の提案」

「もう……昴さんにご迷惑掛けなくて言ってるのに……少し前から昴さんが少し変な気がしたのは紗季のせいだったんだね……」

むくれちゃってるけど、満更でもなさそうね。

そりや当然か。たとえ冗談だと思っても、好きな人が自分を抱いてくれる。なんて話聞いてたら嬉しいに決まってるし。

「……で、どうする。もう少し私の話聞いてみる?」

「うう……お願いします」

また自分をからかうつもりではないかと、疑ってるみたいだけど、やっぱり気になるらしく、渋々頭を下げてくる。

よし、掴みは上々ね。あとはじっくり切り崩して行くとしますか。

やっぱトモや長谷川さんにバスケ教えてもらって本当に良かったなあ。

こうやって少しずつ相手を自分のペースに持っていく方法を考えるのが、こんなに楽しいなんて。

元々クラス委員長もやってるし、好き勝手騒ぐ子達はともかく、トモみたいな良い子を相手に怒ったり、威圧的な態度で従わせる必要なんてほとんどないのよね。

欲しい物を目の前でぶら下げて興味を引いてから、ほんの少し背中を押してあげれば、引っ込み思案な子でも勇気を持って、私の提案を

実行してくれる。

こういうおせっかいをするからには、私もちやんと責任を果たさないといけないけどね。

「前に部活が終わった後に、長谷川さんに話があるからって、少し残ってたことがあるでしょ？ あの時にとモのこと抱いて欲しいって頼んでみたの」

「ど、どうしてそんなこと言ったの!? 昴さんだって、そんなこと言われたら、驚いちやうし…ご、ご迷惑でしょ!!」

「ええ。驚いてたし、とモにそんなことしたら傷つけてしまうんじゃないかって、すごく心配してたわよ」

「当たり前でしょっ もうっ…あとでちゃんと昴さんに謝らなきゃ…」

怒ってる様子から一転して、すぐに長谷川さんへの謝罪の言葉を考え始めたのか、小さく俯いて口元に指先を当てながら、ブツブツと呟き出す。

「ここまで勝手なことしてるんだから、もつと私を怒ってもいいのに…本当に甘いんだから。」

ま、だからこそ私もとモの事を応援しなくなっただけだね。

「—でもね、もしとモが自分から抱いて欲しいって言ってくれたら、いつでもいくらでも構わない。とも言ってたわよ」

「ふええええ!?! え!?! ……え!?! さ、さすがに……じよ、冗談……だよ……ね?」

私の言葉が耳に届くと同時に、今まで考えていたことが吹き飛んでしまったかのように、俯いていた顔を一気に上げると同時にこちらを見る。

「ううん。本当よ。長谷川さんからは、とモに無理強いするような言い方はしちやダメだ。って言われたから強制はできないけど、とモが勇気を出してお願いできたら、いくらでも長谷川さんが抱いてくれるわよ」

「で、でも……やっぱりご迷惑なんじゃ……うう……」

ふふ。迷ってるわね。でも、間違いなくどうやってお願いしよ

う。って考え始めてる感じよね。

「トモは、もうちよつとわがままになつてもいいんじゃない？」

「そんなことないよつ。私、いっぱいわがまま言っちゃってるし、みんなや昴さんにだって、たくさんご迷惑を——」

「誰も迷惑だなんて思つてないわよ。大切な友達なんだから。長谷川さんだって、自分がトモを抱いて嫌われなかつて心配してただけで、迷惑だなんて思つてなかつたわよ」

「だけど……」

もう、言葉に詰まつてまで必死に遠慮する理由なんか考える必要なんてないのに。バスケット以外になると愛莉以上に引つ込み事案なんだから。

「トモ……今この機会を逃したら、次はもうないかも知れないんだよ」  
「!!」

トモの体がビクリと震えた。

「私達が長谷川さんと一緒にいられる時間も、もうあんまりないんだよ。そりゃ、たまには会えるかもしれないけど、今まで見たいにお休みの時に一緒に遊びに行つたり、合宿にお付き合ひして頂けるとは限らないし、もう無いかも知れないんだよ」

これは強制になつちやうかもしれないけど、事実なんだし仕方ない。私だって、長谷川さんと会えなくなるのは寂しいし、あんまり考えたくない。

「だけど、いつか来ることだつてことくらい、みんなわかつてる。」

「それなら、今の内に自分の正直な気持ちをしっかりと伝えた方がすつきりするんじゃない？」

「さ、紗季はどうなの？ 紗季だつて本当は昴さんのことを……」

「それは……少しはあるけど……ここまで本気のトモを応援したいつていう気持ちの方が強いかな」

気持ちの強さもだし、初めてお会いした時、長谷川さんは真つ先にトモに興味示したんだし、

それから先も、ほとんど二人つきりで過ごしてる時間がどんどん増えてきてるんだし、敵うわけないよ。

「でも、紗季やみんなが本当は昴さんのことが好きだってわかっているのに……みんなの気持ちを無視してまで昴さんに告白するなんて……そんなこと絶対にできないよ!!」

「へっ? トモは、もう自分が長谷川さんと付き合えると思っちゃってるのかな?」

ちよつとイジワルな言い方だとは思ったけど、トモの本心をしっかりと確認させてもらう。

「そうじゃないよっ! 昴さんのことだって好きだけど、それよりも、みんなの方が私は大切なんだもん!!」

予想以上に力強い声で、トモらしい嬉しい答えが返ってきてくれた。

「まったく……トモは本当に私たちに甘いんだから」

「だって、みんなは私の本当に大切な友達だもんっ。一人ぼっちだった私の事を優しく受け入れてくれた……」

「そう言えるトモだから、私達は本気で応援できるんだよ」

ごめんね。イジワル言っちゃって。そんな想いを込めて、小さく震えながら今にも泣き出してしまいそうなトモを抱きしめる。

きつと長谷川さんだったら、もつと上手く、優しく声をかけてあげられたり、抱きしめてあげられるんだろうな。

ほんと……トモが羨ましいな……

「——ところで、なんで長谷川さんが抱いてくれるって話から、トモが長谷川さんに告白するって話になってるのかしら?」

「ふええ!? だ、だって、昴さんにそういうことをして頂けるってことは……そ、その……こ、恋人さん同士になるってことじゃ……」

「別に抱いたり、抱きしめたりなんて真帆やひなたはしよっちゅうやってるし、私達だって、たまについしちゃうことだってあったでしよ?」

長谷川さんじゃないけど、今も私としてるし。そう言いながら、恥ずかしそうにしてるトモを解放する。

やっぱ人との触れ合いって、とても温かくて安心できるし……意外といいかも。

私も自分からはあまりやらないけどね。

「でも、やっぱり恥ずかしいよお……」

まあ、いきなり抱いて下さい。って言うのは恥ずかしいし、すごい誤解をされちゃうかもね。

それなら、それで、トモと長谷川さんの関係が一気に進展して二人の雰囲気が変わった様子を見てみたくも……いやいや、長谷川さんに注意されてしまったんだし、これ以上はいけないわね。

「そこは勇気を持ちなさい。抱いて下さい。が恥ずかしくて言えないなら、少しだけ甘えさせてください。でもいいし」

「う……うん。それくらいなら……でも甘えん坊なのって昴さん嫌じゃないかな？」

「面倒見が良い長谷川さんなら、むしろ喜びそうだと思うけど？ トモだって昴さんが甘えん坊だったら嫌だったりする？」

「ううん。それならいっぱいギユってしてあげて、大丈夫ですよ。って安心させてあげたいな……って私に何を言わせようとしているの!？」

いやあんたが勝手に言ったことでしょうが。

「多分、長谷川さんも同じ考えだと思うわよ。二人ともどこか似てるところあるし」

「それは、紗季だって同じでしょ。特に今とか、紗季にすごい誘導されてる気がするし……」

「長谷川さんと同じポジションなんだから、いっぱい長谷川さんの考え方を参考にさせて頂いてるからね」

「昴さんと同じ……ちよつと羨ましいな」

トモが羨ましそうな眼差しでこちらを見ている——けど、私はそれ以上にトモが羨ましいとは、多分気づいてないんだろうな。

長谷川さんの隣に立ってるのがトモなら、せめて私は尊敬している長谷川さんと同じようになりたい。

人や流れを良く見て感じて、より良い方向に導けるような存在。

長谷川さんがトモより私の方が向いていると言ってくれたこと——だから、これだけは譲れないし、トモにだって絶対に負けられない。

「私だってトモのこと羨ましいと思ってるんだし、お互い様よっ」

「えへへ。うんっありがとう。紗季」

「それじゃ、そろそろみんなのどこ行こっか。真帆に勘付かれる厄介なことになるわよ」

「あ、あはは……」

もし、真帆が混ざっていたら、もつと場をかき回されてたかもしれないけど、結果的には私より上手くトモを誘導できてた気もするけどね。

なんだかんだ言たって、あいつも本当に友達思いなんだし。

「ねえ紗季……」

「ん？ なに？」

一緒に歩き出した少女が不意に自分を呼ぶ。

「わがままだとは思うんだけど……これからもいっぱい相談したり頼らせてもらってもいい？」

「もちろんっ。でも、私に相談するからには、ちゃんと頑張りなさいよ」

トモの手を強く握ると困ったように苦笑を浮かべながらも、しっかりと握り返してくれた。

うん。これなら大丈夫そうね。

それじゃ、トモからの結果報告を楽しみにさせて頂くとしようかしら。

### 甘え下手な彼女のために3

「まだ紗季も智花に話してないのかな？」

紗季から智花を抱いて欲しいと言われて三日程経過したが、未だに智花になんら変わった様子が見られない。

むしろ朝練の時に俺の方が変に意識してしまい、そのせいで智花に余計な心配をかけてしまったくらいだ。

それなら、こつちが変に考えすぎて待ち構えるよりも、普段通りのままの方がお互いに自然体でいられるだろう。

「よし。智花が来る前にロードワーク行ってくるか」

庭先で入念にストレッチを行った後、走り慣れたルートを駆け出す。

戻って来る頃には、いつものように家の前に智花が待っていてくれるはずだ。

片結びの髪を揺らしながら、大きく手を振って、優しい笑顔で俺の名前を呼んでくれる。

いつの間にかそんな日常が当たり前になっていて、それが今の俺の心の支えになっている。

いつも俺の事を待っていてくれる少女がいる。

俺もすぐにでも彼女に会いたいし、当然、会うだけじゃ終われない。お互いの気持ちを、想いを確かめ合うように、汗まみれになるだけ

激しく肌を重ね合う。

どんどん上達し合える確かな実感と共に、俺も智花も自分の全てを、あるいは相手の全てを自分の物とするべく、激しく求め合い、朝から充実した日々を送る。

そんな日常がたまらなく愛おしく思えた。

俺達には、いつたい後どれくらいの時間が残されているだろうか？

確認してしまえば簡単に分かってしまうだろう。多少の猶予はあるかもしれないが、そんなのはせいぜいロスタイム程度の誤差ではないこともわかっている。

ならせめて、その最後の一瞬を迎える時まで俺は絶対に彼女を離さ

ずに、俺の全てをたっぷりと注ぎ込んでやるだけだ。

「そのためにも、一々いつ来るかもわからないことに怯んでなんかいられないよなっ！」

智花が俺に抱かれる事を心から望んでくれるのなら、俺は彼女の甘えたいという想いも温もりも全て受け止めてみせる。

まあ、間違つてもトラウマを植え付けるようなことは絶対にしないように気をつけないとな……

回数で言っちゃえば、もう自分の手足の指の数では数えきれないくらい、たくさんみんなを抱いちゃったと思うから、大丈夫だとは思っけど。

——よし、気を取り直してラストスパートだ！

ここを曲がれば後は最後の直線。

この直線の先にはいつものように元気な智花が待つてくれているんだ。

「とも——!?!」

視線の先には確かに目当ての少女が立つてくれたのだが、遠目から見ても明らかにいつもと様子が違って見えるように見えた。

こちらに気づくと一瞬ビクリと体を強張らせる。

いつもよりは幾分か控えめながらも、かろうじて手だけは振つてくれている。

彼女の様子からしても、明らかに紗季と例の話をしてしまったのだろうと予想が付く。

そうだよな。平日にあんな話されたって、朝は俺との練習があるし、学校や部活もあるから、俺と一緒にいられる時間なんて、ほとんどないよな。

それなら、二人の時間が作りやすい休日に合わせて話を聞かされた方が、智花も俺みたいに悶々とする期間が短くて済むだろうし。

そう考えれば紗季は、ベストタイミングで智花に自分の計画を伝えてくれたとも考えられる。俺には油断しきった状態からの完全な不意打ちとなっていたが。

——さて、どうしたものか……



ついさつき決心したばかりだと言うのに、しおらしくなっている智花を見てしまった途端にだいぶ決意が鈍ってしまった。

刻々とゴールへ近づくまでの間に、俺は彼女に対して、どう声を掛けるべきか必死に考えるが、悪い方ばかり思考が向いてしまい、全然まとまらない。

すでにラストスパートへの加速を開始してしまっている以上、今更急に足を止めるわけにもいかない。

まだゴールしたくないのに、俺のゴールである智花との距離がどんどんと近づいてくる。

そして俺は智花にゴールした。

「おはよう。智花。休みなのに今朝も早いね」

「お、おはよう……ございませす。昴さん……えつと……」

「その様子だと、紗季から色々言われちゃったみたいだね」

「はう!? うう……は、はい。……そ、その……ちよつと前まで昴さんのご様子が変わったのも、このせいだったんですね……すみません」  
目の前で頬を紅潮させている少女に対して、どう声をかける。必死に考えるんだ。

俺達に残されてる時間はもうわずかしかないんだ、こんなところで無駄に足踏みをしていいはずがない。

「智花。今の状態だと気が乗らないかもしれないけどさ、いつもみたいに一緒にバスケットしてから話してみない? 色々悩んでる時は、とりあえずいっぱい体を動かして気持ちを発散させた方が、きつといいと思うしさ」

「は、はい。そうですねっ。昴さん。後でいっぱいご迷惑おかけしてしまうかと思いますが、今日もよろしくお願いしますっ」

よし、まだ具体的なことはしてないけど、俺も智花も普段通りに戻れた。と思う。

あの話のせいでお互い変に意識し過ぎちゃってるだけで、この程度で俺と智花の信頼関係が揺らぐはずがないんだ。

俺も智花もバスケットを通じてこんなにも深く繋がりを合えている。

この後だったら、きつと智花だつてもつと俺に心を開いてくれるに

違いない。

「……ふう。今日もすごい良かった。どんどん動きが良くなってきてるよ、智花」

「ふあふうううくく私もすごく気持ちよかったです。昴さんにいっぱい色んな攻め方を実践で教えて頂いちゃったし……昴さんとするの本当に大好きですっ」

「俺も智花をもっと満足させられるようテクニク磨くから、これからもいっぱい付き合ってくれるか？」

「はいっ。私だって昴さんに少しでも早く追いつけるよう頑張りますから、これからもよろしくお願いしますねっ」

バスケット後の、この清々しい解放感には本当にいつだっていいよなあ。

俺の隣で腰を下ろしている少女がにこやかに微笑んで俺を見つめてくれている。この笑顔を見ていると、ついさっきまでの刺激的な光景が鮮明に浮かび上がってくる。

いつまでもこうしていたいけど、このまま体を冷やすわけにもいかないし、そろそろ動かないとな。

「よしっそれじゃ、しっかりストレッチ始めようか」

「はいっ。今日もありがとうございましたっ。昴さん」

「智花、背中押すよ？」

「あ……はいっ。ありがとうございますっ」

力を入れ過ぎないように、かと言って弱すぎないように、ゆっくりと小さな背中を押して彼女の前屈を手伝う。

うん。智花は自然体のまま俺に体を許してくれている。

「あのさ、智花」

「なんですか？ 昴さんっ」

「今みたいにさ。後ろから俺に触られて嫌だっと思ってたり、怖いって感じる？」

「ふえ？ いえ？ 昴さんのお手を煩わせてしまってるのは申し訳なく感じますが、すごく大きいし温かくので安心できちゃいます。……それで、つい甘えたくなくなってしまいます」

後ろにいるから彼女の顔を確認することができないのが残念だけど、きつと今、智花はすごく可愛い顔をしてくれてるんだろうなあ。周囲に気を遣ってる時の、どこか自分の本心を抑えたような儂さを感じるものとは違って、心から幸せを感じて浮かべることができている、あの笑顔を。

まあ、本当に幸せかどうかは智花にしかわからないし、俺が勝手にそう思ってるだけに過ぎないのかもしれないけど、そう思わせてもらっておこう。

「まだまだ甘えられ足りないから、もっといっぱい甘えてもいいよ。って言ったらどうする?」

「ふええ!?!」

智花が体を起こした時に彼女の両肩に手を置いて、耳元で悪戯っぽく囁いてみたら、背筋をピンと伸ばして固まってしまった。

いかな。これだと紗季みたいにならかかっていると思われてしまいそうだ。

俺もこういう言い方は慣れてないから変にドキドキしてきてしまったし。

よし、慣れない言い方でアピールするよりはいつも通り直球で行こう。

「からかっているように聞こえちゃったかもしれないけど、俺は本気だよ。智花が俺にいっぱい甘えてくれるなら、これ以上に嬉しいことはないし、智花の全てを受け止めてあげたい。って思ってる」

「ふええええ!?! す、すす昴さんっ!?!」

ダメだ。なんか直球は直球で言ってる俺もすごく恥ずかしい事言ってる気がしてきた。智花もすごい動揺しちゃってるし。

「も、もちろん智花が嫌がることは絶対にしないし、俺じゃなくて、女の子同士のが良いなら葵に頼むのも——」

「!? 昴さんがいいですっ!!」

紗季にはダメだと言われたけど、智花を安心させるのが目的なんだし、使える手はなんだって使う。そんなつもりで提案をしようとしたのだが……

彼女の予言通り、葵より俺の方がいいと、力強く宣言されてしまった。

葵の名前が出た瞬間、一瞬智花の体が震えあがった気がしたけど……気のせい……だよな？

「はう!? す、すみませんっ。で、でも……本当にご迷惑でないのなら……す、昴さんに……して頂きたいです……」

「わかった。それじゃ、ちよつとずつしていくから、嫌だったり、これ以上は無理だと思ったらすぐに言うんだよ」

しつこく確認しても、逆に智花が心変わりして遠慮されてしまうかもしれない。それならいっそ、もうこのままやってしまった方がいいだろう。

肩に置いていた手を解くと、そつと抱きしめるように前に回していく。

「あ……昴さん、すみません、その……だ、抱きしめて頂くの、少しだけ待って頂いてもいいでしょうか？」

「ん？ ああ、ごめん。やっぱり怖かった？」

「いえ、そうではなくて……さ、先にシャワーをお借りしても……汗をかいたままだと、恥ずかしいので……」

「そ、そう言えばそうだったね。まだ俺達、朝練終わったばかりだったね」

智花が気づいてくれて本当に良かった。俺も無意識に完全に外で智花を抱くつもりになってたし、危なかったな。

家の敷地内だから目撃されることはないだろうけど、庭先でお互い汗まみれの体で小学生を抱きしめてるところを誰かに見られでもしたらと思うとゾツとする……

別れ際に智花の頭を優しく撫でてから送り出すと、家の中でニヤニヤと楽しそうに眺めている母さんの視線を感じたが無視を強行する。

智花の方は、恥ずかしそうにしながらも丁寧に挨拶をしていた。本当に律儀な子だよな。

「すみません、シャワーお借りしますね。いつも申し訳ありません。なるべく早く出るようにしますので……」

「あらあら、気にしないでゆつくり使つてね。女の子なんだからいつも綺麗にしておかないきやダメよ」

「はう!? は、はい……そ、そうですね。それではお借りしますっ」  
多分母さんにそんな気はないんだろうけど、まるでこれから俺に抱かれることが分かっているかのような言い方に聞こえてしまった。きつと智花もそう捉えてしまったのかもしれない。

逃げるように駆け出している智花の背中を微笑ましそうに見送つてから、ゆつくりとこちらに振り返る。

「智花ちゃんは本当に良い子なんだから、大切にしていあげないとダメよ」

「わかってるって。——ってか、母さんもあまり智花をからかうなよな。かわいいそうだろう」

「そんなつもりはなかったんだけどねえ。なんだかいつもより智花ちゃん嬉しそうだったから、気になっちゃって」

「普段と変わらないように見えるが」

珍しく母さんが鋭いのか、俺が鈍いのか……いや、きつと母さんの勘違いだろう。

俺の方が智花と長く一緒にいるんだし。俺の方が智花のことに詳しいはずだ——って、なんで母さんと張り合ってたんだ俺は。

「もう少しだけ追加で自主練してるから、朝飯頼むな」

「はいはい。いっぱい頑張つてね」

俺の考えを見透かしているかのようなニヤニヤ笑いと視線に耐え切れず、母さんの視界から逃げるように身を翻し、再びバスケットボールと向き合う。

先にシャワーを終えた智花を俺の部屋へ待たせ、続いて俺もすぐにシャワーで汗をしっかりと流す。

汗臭い体で智花を抱くわけにもいかないし、普段よりも良く洗わな  
いとな。

智花にはこれから、思う存分俺の腕の中で甘えてもらうだし、その  
ためにも一切の妥協は許されない。

よし、いつもよりたつぷり時間も掛けて丁寧に洗ったし、これなら抱いてる途中でも智花に嫌な顔をされることもないはずだ。

あんまり待たせちゃうのもいけないし——ってか、俺もいつもより長湯でのぼせそうだし、そろそろ上がるとするか。

まずはお湯で濡れた身体をバスタオルで軽く拭き取り、浴後の火照った体から徐々に滲み出る汗もしっかりと拭わないとな。

正直、ここまでするのもどうかとは思ったが、せっかく綺麗な体の智花を俺の汗でベタつかせて不快な思いをさせたくないし、念には念を入れておくに越したことはない。

準備をしっかりと整えたところで、俺は自室のドアをノックし、部屋の中で待たせている少女に声を掛ける。

「智花。入るよー」

「は、はいっ！ お待ちしてましたっ!!」

ドアを開けると同時に三つ指をつけて丁寧に辞儀をする智花が出迎えてくれた。

……本当にすごく真面目な子なんだけど、真面目過ぎて相変わらずどこかずれてしまってるな。

その様子がとても微笑ましくはあるんだけど。

ゆっくりと部屋に足を踏み入れ、しっかりとドアが閉まるのを確認したところで一息つく。

——智花、いっぱい可愛がってやるからな。

そんな想いを込めながら、目の前の少女と向き合った。

## 甘え下手な彼女のために4 (完)

さて、当然だが、今この場には俺と智花しかいない。

彼女の誰も見たことがないような可愛い姿も、彼女にとって恥ずかしい部分も俺にしか晒されることがない。

唯一俺だけが彼女の大切な場所。最も深い聖域と言ってもいい場所に踏み込むことを許されたということだ。

——ヤバい。なんかゾクゾクしてきた。

いや、決して俺を信頼して迎え入れてくれる彼女の聖域を好き勝手に荒らしたり、穢すようなことは絶対にしないけど、俺だけが今この瞬間、智花の全てを独占してしまっていると思うと胸にこみ上げてくるものが……

絶対に傷つけないように大切にしてあげないとな。

とりあえず、目の前で深々と頭を下げて俺のことを待っていてくれた少女に対して色々突っ込みたいことがあるが、一番最初に気になったことから確認させてもらおう。

「智花、今着てるのって、朝練用の俺のお古だよな?」

今の智花の服装は、小柄な彼女にはやや大きいサイズで、いかにも男物のTシャツだ——ってか、完全に昔の俺のお気に入りのお品だ。

「は、はいっ!! すみません、練習の時だけお借りするつもりだったんですが、待ってる間どうしても我慢できなくなっちゃって……」

俺に指摘されると、顔を俯かせたまま頬を染め、悪いことをしてしまった。と申し訳なさそうにしている。

謝る必要なんて全然ないのに、しゅん。と小さくなってしまった少女を見て、変に緊張していた部分が一気に脱力する。

「ごめんなさいいっごめんなさいいっ……今すぐ着替えますのでっ」

「ちよっ!?! と、智花! 落ち着いて!! それは絶対にダメだ!!」

突然、自分の服の裾を両手で掴むと、一気に捲り上げて脱ごうとする智花に慌てて声を掛けて制止させる。

全体的にほんのりと桃色に染まっている細いお腹と、中心の小さな

かわいらしい窪み。

目線をわずかに上にあげると、お腹が完全に露出しているどころか、かなり際どいギリギリのラインまで捲り上げてしまっていたが、幸いにも致命的な物は見えずに済んだ。

反射的に確認するように目線を上げてしまったけど、見えなくて本当に良かったと心の底から安堵する。

「はうううう!? す、昴さんの目の前で私ったらなんてはしたない真似を!? うう……み、見えちゃいまし……た……?」

「だ、大丈夫。かなり危なかったけど、本当に見てないから!」

真つ赤な頬を両手で抑え、涙を浮かべている少女に、こちらも必死に見ていないことを説明する。

「……ち、小さかったから、見られないで済んだのかな……」

男としては、なんとも答えづらい独り言を小声で呟きながら、安堵したように胸をなで下ろしていたが、これにはノーコメントを貫く。

何がとは言わないけど成長期なんだから、別に心配しなくても、すぐに大きくなると思うよ。

「うう……本当に何度もすみませんでした。その……昴さんが嫌でしたら、すぐに自分のお洋服に着替えますので……」

「別にそのままでもいいよ。朝練の時しか着ちゃダメなんて言っただいし、智花に貸してるんだから自由に使っただよ」

「ですが、昴さんの私物を関係ない時に勝手に使ってしまった……」

「母さんが勝手に残してただけで、俺はもう着れないんだし。それに俺が昔気に入ってた奴を同じように智花がそれだけ気に入ってくれてるんだしたら、俺も嬉しいよ」

別に智花は怒られるようなことは一切してないんだ。と優しく頭を撫でると、泣きそうだった表情を一転させ、自分の肩を抱くようにしながら、着ている服を大切そうに抱きしめていた。

不覚にも、そんな彼女の表情を見て、自分がそれだけ彼女に大切に想われているような気がしてしまい、思わずドキリとした。

何を勘違いしてるんだ。智花も昔の俺と同じく、俺のお気に入りの服を気に入ってくれただけなんだぞ。



そう思うと、今度はそこまで智花に気に入られている、自分の服を妬ましく思ってしまった……我ながらなんとも情けない……

さて、気を取り直して――

まずはこちら腰を下ろし、智花と向き合う。

「智花。どういう風に抱いて欲しい？」

言ってから気づいた。盛大にやらかしてしまったと。

確かに抱くんだけど、こんなストレートな言い方はさすがにないだろ。

「はう!? ……は、初めてなので……優しくお願いしますっ」

つられてしまったせいかな、智花にとんでもないことを言わせてしまった。

無自覚というか、気づいてのが幸いだったけど……智花、本当にごめん。絶対に優しくするよ。

「えーと、初めてなのはわかるよ。俺も自分からするのは初めてだし……その……前と後ろとどっちがいいのかな? って」

「どっちも恥ずかしいですが……ま、前でお願いします。後ろからより、昴さんの顔が見える方が……きつと安心できるので」

「了解。智花、本当に嫌だったら絶対に我慢しちゃダメだよ?」

肩に両手を置くと彼女の方からも遠慮がちにだが、俺の背中に両手を回してくれた。

彼女の緊張が少しでも解れて、安心してできることを願うように、とても小さく儂さを感じる少女の背中に手を回す。

「嫌なんて……そんなこと絶対ないですっ。昴さんにこうやって抱きしめて頂けて……すごく嬉しいです」

「だったら、どうしてそんなに不安そうに震えて……」

「その……こ、これ以上昴さんに甘えてしまって、はしたない姿を見せてしまったら……昴さんに嫌われてしまうんじゃないか。って思うと、すごく怖いんです……」

智花の言葉で俺の不安が一気に吹き飛んだ。

お礼に智花のことを強く抱きしめてから、お返しにこちらも正直な

思いを告げる。

「俺だって、智花のことを嫌いになるなんて絶対じゃない！ もっと強く抱きしめるから、嫌じゃないなら……いっばい俺に甘えてくれると……俺も安心できるからさ」

智花が痛みを感じないように注意しながら、もう少しだけ抱きしめる力を強め、しつかりと体を密着させた。

より強く彼女の温かな体温が小さく柔らかい体越しに伝わってくる。

一瞬驚いたようにビクリと体が大きく揺れたが、それだけで智花からは抵抗がない。

「はう……そ、それでは……す、少しだけ失礼しますね……」

智花も最初は恥ずかしそうにしながら可愛らしい声を上げていたが、徐々に安心感を覚え始めたのか、背中に回されていた手が俺を強く抱きしめ返してくれる。

俺の膝の上で身体をもぞもぞと動かし、自分で安心できる体勢に直していくと、俺の胸に顔を埋めて子犬のように鼻先を嬉しそうにこすり付けている。

「鼻さん……すごく温かくて、いい匂い……」

俺も無意識に智花を抱きしめる力が強くなっていった。

彼女のミドルショートに手を置いて、サラサラで手触りの良い髪の毛を楽しむように撫でてみる。

それすらも智花は驚く様子なく、嬉しそうに受け入れてくれる。そして、もっとして欲しいと、ねだるように体を摺り寄せて甘えてきてくれる。

「すばるさん……だいですきい……ふあふううう……」

緊張で硬く強張っていた体もすっかり緩み切っている。

小柄な少女の柔らかな体を抱きしめながら、彼女が俺を受け入れてくれたことが、自分でも驚くくらい嬉しかった。

「すばるさくん……こんな甘えん坊でごめんなさい……でも……もっともっと、すばるさんにギュってして欲しいですよお」

「ああ、今は俺と智花二人つきりだから、智花の恥ずかしいところ見て

いるのは俺だけだ。いっぱい甘えさせてやるぞ」

大人びていてお淑やかで、どこか遠慮してしまってる感じの子が、ここまで無防備に俺に心と体を許してくれるなんて、

いつもの智花からは考えられないくらい安心しきった表情をしていて、俺が彼女をそんな顔にすることができたと思うと——お互いに勇気を出しあえて本当に良かった。

——さあ、もつと智花の恥ずかしいところを俺だけに見せてくれ。俺の前ではもつともつと色んな智花を見せて欲しい。

頑張ってる姿や、ちよつとしたことでドキドキして恥ずかしそうにしてる顔もかわいいけど、こうやって年相応よりも少し幼い感じがする甘えたがりの顔だって、もつともつと見せて欲しい。

「……やばい。すごくかわいい。かわいすぎる——いや、かわいいのはいつも通りなんだけど……」

無防備に甘えてくれる彼女に愛おしさが湧き上がる。どこまでも智花を可愛がりたい。甘えさせてやりたい。

智花はいつだって家でも学校でも頑張りを続けているんだ。

だったら、せめてこの時くらいは彼女が安心できる時間を過ごさせてあげたい。

「——おっと……あんまり騒がしくすると起きちゃうな」

気づくと智花は俺の腕の中で穏やかな寝息を立てていた。

起こすのもかわいそうだし、俺もこうやって智花のことを抱くことなんて、滅多にないだろうし……

「……ちよつとくらいなら、いいよな?」

今の内に、もつとしつかりと智花の抱き心地の良さを堪能させてもらおうかな?

起きたらきつと「ふええ!」なんて言いながら、顔を真っ赤にして慌てる彼女の姿が想像できたけど、そのあとだって離してやるもんか。

そんなことを考えながら智花の幸せそうな寝顔を見ていたら、なんだか俺も眠くなってきた。

——少しだけなら、このまま一緒に寝てもいいよな? っという

か、寝たい。一緒に眠らざるを得ない!!

こんなにかわいい子を抱きながら寝れることなんて一生の内に何度もないだろうし、智花には悪いけど、ちよつとだけ俺の至福の時間に付き合ってもらおう。

智花を起こさないように注意しながら、自分の体を下に、ゆつくりとベッドに倒れ込む。

幽かに聞こえる智花の寝息や温かな体温に誘われるように、俺も気づいたら安らかな眠りへとついていた。

朦朧とする意識の中、何やら聞きなれた気がする声が聞こえる。

「ふわあ……あれ? 私寝ちゃってたのかな? ここどこだっけ?

……ふええ!?”

驚いたような感じの声と同時に、自分の上に何かが乗っている感触に気づく。

それほど重さを感じるものでもなく、むしろ自分の上にいるのが自然な感じがするくらい心地良いものだったらしく、

どうやら自分から、それが離れてしまわないように両手を回して強く抱いていた。

始めは、それが自分から逃げるように、グラグラと揺れていたようだったが、俺が離そうとする気がないことを察すると、大人しくそのまま抱かれたままできてくれた。

「私……昴さんになんて粗相を……あ」

再び自分の体の上に乗っている物から声が聞こえてくる。

「……昴さん……好きです……自分でも変だと思ってくらい、はしたない変な子ですけど……大好きです……」

自分の上半身の方へ昇っていくように動いているが、逃げようとしてる様子ではなく、その動きや温かさがとても心地よかったため、手の力を緩め自由にさせる。

「昴さん……大好きです。いつだって私達のことを大切に見守って下さっていて、本当に嬉しいです」

——そうか。この声は智花だ!

ようやく声の主に気づくことができたが、まだ意識が朦朧としているせいだろうか。

彼女が何を話しているかが、上手く聞き取ることができない。

「……本当はもつとしたいことあるんですけど……私なんかの初めてを勝手に押し付けてしまってもご迷惑ですよ。……でも、いつか昂さんにもらって頂けたら嬉しいですよ」

また何か遠慮しちゃってるのかな？ 俺に遠慮する必要なんかないのに……いつか、もつともつと智花が俺に心を開けるようにならないと……な。

まだ声も出ないし、体もほとんど動かすことができない。

すぐにまた眠っちゃいそうだけど、せめて智花が安心できるように、もうちよつとだけ優しく抱きしめてあげないと。

腕の中にいる智花が嬉しそうに微笑んでくれたような気配を感じ、安心したところで、俺は再び意識を手放した。

今度は、しっかりと意識を覚醒させて目覚めると、俺の寝顔を幸せそうに眺めている智花と目が合った。

今の今まで、自分の寝顔を見られていたかと思うと、すごく恥ずかしい。

そして、今もなお俺に強く抱きしめられている状態で智花は――

「………またお願いしてもいいですか？」

「いつでも歓迎するよ。毎日だっていいくらいだよ。智花にあんな風に甘えてもらえるなんて夢にも思わなかったし」

俺の言葉に頬を真っ赤にしてしまった。多分、ついさっきまでの自分の姿を思い出してしまったんだろうな。

「はう!?」だ、ダメですよおくそんなこと言われちゃったら、私絶対我慢できなくなっちゃいます。……その……ど、どうしても我慢できなくなっちゃったら……ご迷惑を掛けてしまいますが、よろしくお願いします……はうう」

うん、まだ少し遠慮してるところがあるみたいだけど、ちゃんとおねだりができるようになったのはいい傾向だな。

——後に俺のお古を着ている時が、彼女が俺に抱きしめて欲しい時のサインだと理解するのに、そう時間は掛からなかった。

「……ところで、多分風邪を引かないようにだと思っただけど……この毛布を掛けてくれたのって……」

「いえ……私も目が覚めた時は……その、まだ昴さんに抱きしめて頂いたままだったので……」

時計をちらりと確認するが、それほど時間は経っていない。二人で寝てしまったが、せいぜいうたた寝をしていた程度だったのだろう。

だが、例えば母さんが朝食を作り終えたのに、いつまでもリビングに來ない俺達を心配して様子を確認するくらいには十分に時間が経過してしまっている……かもしれない。

「……ってか、これ絶対に見られてるよね!？」

でもさ、小学生の女の子とベッドで抱き合いながら寝てる姿を微笑ましそうに眺めながら、俺達に毛布だけ掛けてそとと去っていくのは親としてどうかと思うんだが……いや、その状態に持ち込んだのは間違いない俺なんだけどね!!

「はううううう……ど、どどどうしよう……絶対見られちゃってるよ……」

どうやら彼女の方も俺達が寝てる間にこの部屋に第三者が訪れた可能性に気づき、自分のはしたない姿を見られたことに酷く狼狽していた。

「ごめん智花。俺のせいだ」

「そ、そんな！ 昴さんは悪くないですつ。元々は私が昴さんに無理を言ってお願ひしてしまっただけですからっ」

「とりあえず行こっか。あんまり待たせるわけにもいかないし……」

「はう……はい……うう……七夕さんに会うの恥ずかしいよお……」

二人で並んで自首するような気持ちでリビングへ向かっていくのだった。

ドアを開けた瞬間「あら? もっとゆっくりしてて良かったのよ?」と、心の底から祝福してくれているような、それはもう清々しいまでに温かな笑顔に出迎えられたのは言うまでもない。

## 智花二回目のお泊り1

—交換日記(SNS)—

まほまほ『あしたもつかんは、あたしたちをおいてまたいつぽオトナにちかづいてしまうのか』

湊 智花『ふええ!? い、いきなり何を言ってるの!?!』

紗 季『前は残念だったけど、今度こそ長谷川さんの家にお泊りするんでしょ。二回目の』

あいり『に……二回目……やっぱり前に長谷川さんの家に泊まった時に……』

ひなた『おーともかいいなあーまたおにーちゃんにおとなにしてもらえるんだー』

湊 智花『みんないったい何を想像してるの!? 本当にただ泊めて頂いただけだよお……』

まほまほ『でも、こんかいはまえのもっパパのぶんもしっかりオワビすんだろ?』

紗 季『私達はトモから聞いた話しか知らないけど、結構大変だったらしいわね。まあ結果的に

丸く収まったみたいで良かったけど』

あいり『私もちよつとビツクリしちゃった。前にお兄ちゃんも長谷川さんに思わず手を出してし

まったことがあるって言ってたけど……』

ひなた『ぶーみんななかよしがいちばんなのに。ケンカしちゃ、めっーなのー』

湊 智花『うん。でも昴さんにも七夕さんにも許して頂けて本当に良かった。お父さんもあの後、

私にすぐく謝ってくれたよ』

まほまほ『で、今回はそのオワビにすばるんにおっぱいもませんでした』

あいり『え!?!』

紗 季『あ、いいわね。それ、しかもお詫びついでに自分の胸を大

きくしようなんで、なかなか

いい手だと思わよ』

湊 智花『ふええ!? そ、そんなことするわけないでしょ!!』

ひな た『おーいいいなーひなもおっぱいもみたいー』

紗季 『ま、何にせよしっかり楽しんできなよー。あ、ちゃんと報告は待ってるからね』

湊 智花『だからそんなことしないでばーー!!』

\*

まだ早朝とも言える時間に長谷川家のインターホンが鳴る。

この時間帯にこの音を鳴らす人物はたった一人しか心当たりがない。

「おはようございますっ 昴さんっ!」

「おはよう、智花。今日も早いね」

ドアを開けると予想通り、来訪を心待ちにしていた少女が元気よく挨拶をしてくれた。

はにかみながら見せてくれる笑顔がいつもより嬉しそうなのはきつと気のせいではないだろう。

——と思っていたら一転。表情を引き締め、こちらをしっかりと見つめると深々と頭を下げる。

「先日はお父さ……父が昴さんに大変なご迷惑をお掛けしてしまい申し訳ありませんでした!」

「ああ。そういえば。それより大丈夫だと思うけど、帰った後でちゃんと仲直りできた?」

智花に頭を下げられるまで本気で忘れてたな。

確かに驚いたけど、あれくらいで済んだならマシな方だと思うし、むしろ俺としては智花と忍さんのわだかまりがしっかり解消されたかの方が心配だ。

「はい。昴さんのおかげで私と父もあの後、家でしっかりとお互いの気持ちを伝え合うことができました」

「それは良かった。蒸し返す様で悪いけど、智花にあんなこと言われて忍さんすごく傷ついてたと思うしさ」



「うう……あの時はすごく悲しかったんですけど、昴さんに叱って頂けて本当に良かったと思います。じゃないと……きつとお父さ……父に謝ることができなかつたかもしれないです……」

「はは。俺に謝ってる時だからって、別にそんな畏まった言い方しないで、俺の前でなら普段通りお父さんって呼んであげなよ」

忍さんだってその方がきつと嬉しいに決まってる。俺が忍さんをお父さんと呼ぶのは論外だが。

「ありがとうございます……私だけでなく、お父さんのことまで気に掛けて頂けて……やっぱ昴さんは優しいですっ」

「そこまで大したことはしてないよ。俺はただ智花にはいつも通り笑顔でいて欲しいだけだからさ」

良かった。ちよつとずつ、智花もいつもの柔らかい表情に戻ってきてくれた。

「そ、それで……その。今回の事もですが、日頃から昴さんと七夕さんにお世話になっていきますので、どうか受け取って下さいっ！」

智花が抱えていた時点で察していたが、丁寧に風呂敷に包まれている、いかにもなお土産を差し出されてしまったが、中々対応に困る。

「わざわざそんな……俺も母さんも別に——」

「あら？ わざわざありがとう智花ちゃん。あとで花織さんにもお礼の電話をしなくちゃ」

「——って、そんなあつさり受け取るのかよー！」

「えくだって、ありがたく受け取らせて頂いた方が、お互い気持ちいいでしょ？」

「わ、私もそうして頂けると嬉しい……です」

まあ確かに変に遠慮し合って、押し合い引き合いをするよりは、この方がすつきりするか。

俺も智花とよく謝罪合戦をしてしまうが、どちらかが早めに引いた方がお互いもつと気持ちよく終われるのかもしれないし。

母さんも意外と考えてるのか？ 多分天然だと思うけど。

「それじゃ、昴くん受け取って」

「俺がかよっ！」

「だって、せっかくの智花ちゃんからのプレゼントよ。私が受け取るより昴くんが受け取った方がいいでしょ」

「ふええ!?! あ、あの……その……今回はお店の物ですが、本番の時は……て、手作りの物をお渡しさせて頂ければと思います……」

本番ってなんのだ？ さすがに何度も頂くわけにはいかないぞ。

そんなことを考えている間に智花が丁寧な風呂敷からお土産を取り出す——洋菓子の詰め合わせかな？

てつきり智花の家のイメージだとお茶とか和菓子かと思ったけど、意外だな。

もしかしたら、花織さん辺りが気を利かせてくれたのかな？

俺も智花に倣って思いつく限り——と言っても全然そんな礼節なんて知らないから、俺の想像の限りで丁寧だと思う動きでお土産を受け取る。

「昴くんは幸せ者ね〜」

「はうう……」

母さんはどこか楽しそうなのに対して、智花は少し慌てているような恥ずかしがっている……

それでも二人の間では何らかの意味疎通がされていたみたいだし……本当になんだ？

不思議そうに感じながらも、受け取ったお土産のその後を母さんに託したところで、俺はさっそく彼女を部屋に連れ込むでしょう。

「ドキドキします……またここに泊めて頂けるんですね」

「いや、別に俺の部屋じゃなくていいんだよ?」

「え!?!」

「え!?!」

なんでそんな心なしか寂しそうな目を……

実際は皆無だろうけど、俺の出来の悪い脳みそをひっくり返して考え抜いた末に引っかけかけた幽かな可能性を口に出してみる。さすがにないだろうとは思っただけね。

「……もしかして、また一緒に部屋で寝るつもりだった?」

「はい……てつきりまた昴さんのお部屋に泊めて頂けるのかと……ご迷惑でした……？」

だからどうして智花はそんなに寂しそうに瞳を潤ませているんだ!?

彼女の甘え癖を引き出しちゃったのは俺が原因なんだけど、もう少し異性に対して抵抗感を持つてもらわないと将来がすごく心配になってしまうぞ。

智花みたいにかわいい子に甘えられたら、絶対に勘違いする輩が続出するだろうし。

もつとも智花を甘えさせることができる権利を誰かに譲る気はさらさらないが——俺が一番智花を甘えさせられるんだ！

「迷惑というか……智花は俺と一緒に寝るの平気なの？」

「その……昴さんにぎゅってして頂きながら一緒に寝て頂くのも、とても魅力的ではあるんですが……多分ドキドキして寝れなくなってしまいそうなので、わがままを言ってしまうですが、またお布団をお借りしてもいいでしょうか？」

うん。ちよつと説明を省いてしまったせいで、変な勘違いをさせてしまったが、寝る部屋が同じなだけで断じて一緒にベッドで寝るわけではない。

さすがに夜寝るときに抱きしめるのは完全に意味合いが変わってくるのは俺でもわかる。

もちろんそんなこと智花にするわけにいかないし、彼女が俺に望んでいることでもないだろう。

まあ、初めてのお泊り以外にも、同じテントの中で寝たことだってある仲なんだし、今回も後の彼女にとってちよつぱり嬉し恥ずかしの甘酸っぱい思い出くらいになればいい。

「それなら前みたいにならぬに俺が寝るから、智花はベッドを使つてね」

「うう……今回も私が昴さんのベッドをお借りしないとダメなんですか？」

「やっぱ智花が下なのは俺としてもあまりいい感じがしないからね」

……頼むから智花が上になって欲しい」

「わかりました……今回も昴さんのベッドを使わせて頂きますので、くれぐれも粗相がないよう気をつけますっ」

智花が下で俺が上という構図はどう鼻屑目に想像しても、あまりよろしくない気がする。

誰も見てないから気にする必要はない。と言われてしまえば、それまでだけど智花はお客さんだしねっ。

「さて、お互いの寢床が決まったところで、さっそく朝練始めよっか。先に庭で待つてるから、ゆっくり準備してきてね」

「はいっ。今日もよろしくお願いしますっ！——えへへ……昴さんとずっと一緒にいられるんですよね」

やる気に満ちた表情で目を輝かせているのは嬉しいけど、ハリキリ過ぎて無理しないように気をつけないとな。

ちゃんと一回一回を大切に、休むときはしっかりと休まない、無駄に体力を浪費するだけで不完全燃焼のまま終わってしまうかもしれない。

せっかく俺も智花もお互いに全てを曝け出しあえる、楽しい時間を過ごしたいと思ってるのに、どちらかが満足できないで終わるようなことはしたくないし、させたくない。

まあ、最近は智花も俺の想いに気づいてくれてるから、それほど心配はしてないけどね。

案の定、今日もお互いが気持ち良く楽しめる、とても充実した時間を過ごすことができた。

俺が抜かれないよう抵抗していると、負けず嫌いの彼女が息を乱れさせ、顔を赤くしながらも、手や足、腰だけでなく、視線や幽かな仕草すらも利用して俺を抜こうとしてくれる様子を堪能できるのは、まさに最上級の贅沢と言ってもいいだろう。

まだまだ抜かれるわけにはいかないけど、いつか彼女が俺を抜いてくれたら、お互いにとって最高の瞬間になることは間違いない。

——でも智花に抜かれたら悔しさのあまり、俺も思いつき智花を抜いちやうと思うけど。

我ながらオトナゲナイとは思うけど、お互いに昇り詰めていく最高のパートナーとは言っても、俺だつていつまでも智花の目標であり続けたいからな。

みんなの成長速度を間近で見させてもらってる立場からすると、本当に小学生の成長速度を羨ましく思ってしまうな。

俺だつてその時期があつたし、同じくらい成長できたと思うんだけど、今の俺にどんどん肉薄してくる智花を始め、

チーム全体のムードメイカーであり、持ち前の身体能力や飲み込みの速さで今も急成長中の真帆。

状況判断に徹して常に最適解を選択できる冷静さ。かと思えば、みんなの気持ちを汲みしつかりとチームをまとめあげてくれる紗季。

引つ込み思案だつた自分を守ってくれた友達の役に立つためという優しい理由で真剣にコンプレックスに向き合い、遂に克服したかと思えば、すぐにその生まれつきの才能を開花させ、常に新たな成長を続ける愛莉。

自分を待つてくれているみんなと足並みを揃えるために、どこまでもひたむきな努力を続ける姿と、その独特な感性や個性で見る人を魅了する小さな天使、ひなたちゃん。

これからもできる限りみんなの成長を見守りたいな。みんながどこまで成長していくかが本当に楽しみだし。

「昴さんっお待たせしましたっ」

先にお風呂に送り出した智花が、お風呂上りの僅かばかり頬が紅潮している顔で俺を呼びに来てくれた。

髪が生乾きみたいだし、急いであがってきたのかな？

「ああ、ありがとう、智花。俺のために早く上がってきてくれたみたいだけど、ちゃんと髪を乾かさないとダメだよ」

濡れた髪を優しく撫でると恥ずかしそうに俯きながら「すみません」と申し訳なさそうに呟く。

さつきまではあれだけ激しく動いて俺を喜ばせてくれたのに、まるで別人のように大人しくなってしまったな。

「俺を気遣ってくれてるんだから、怒ってるわけじゃないんだけどさ、もしこれが原因で智花が風邪を引いたりでもしたら、せつかくの楽しい時間を過ごせなくなっちゃうよ？ そうなったら俺も残念だしさ」「わ、私もです……昂さんと一緒にいられる時間が減ってしまうの……しつかり乾かしてきますねっ」

紅潮した頬と生乾きの髪にどこか色っぽさを感じてしまったのは事実だが、そんなことよりも彼女の健康管理の方が大事に決まってる。

智花に髪をしつかり乾かしてもらってる間に俺は自分の部屋に着替えを取りに行く。

部屋の隅に置かれた、以前智花の誕生日に二つ名と共に贈らせてもらったスポーツバッグが普段よりも大きく膨らんでいる。

それを見て、改めて智花が俺の部屋に泊まりに来たという実感が湧いてくる。

あの時は全然心に余裕なかったし、智花にも窮屈な思いさせちゃったしな。

俺を信じて智花を送り出してくれた花織さんや忍さんの信頼に応えるためにも、智花には思いっきり楽しんでもらわないとな。

そんなことを考えながら、着替えの準備を揃え、俺は風呂場へと向かっていった。

## 智花二回目のお泊り2

「今日一日出来るだけ、この家のお手伝いをさせて頂けませんか？」

俺がシャワーを浴び終え、リビングで三人で朝食を囲んでいた時に隣に座っていた少女からの言葉だった。

「あら？ いいの？ せっかく家に泊まりに来てくれたのに」

「ただ泊めて頂くわけにもいきませんし、その……出来れば七夕さんにお料理を教えて頂ければと思ひまして……あつ、もちろん他のことだつてなんでもやりますっ」

まさか智花からそんなことを言いだすなんて、これはちよつと予想外だったな。

礼儀正しい彼女らしいと言えばそうなのだが、もしかしてまだ気にしちやつてるのかな？

無碍に断るよりも、それで少しでも彼女の気が晴れるなら、その方がいいかもしれないけど……

「お手伝いしてくれるのは嬉しいんだけど、昴くんは本当にいいの？」

「そこでなんで俺に振るんだよ？ そりゃ、智花には泊まりに来てくれてるんだから、もっと自由に過ぐして欲しいとは思うけど」

「家でもお母さんのお手伝いをしてますので、七夕さんのお邪魔にならないようがんばりますから、どうかやらせてくださいっ」

ここまで真剣に頼まれちゃ、母さんだつて断れないよな。

智花を独り占めできる時間が減つてしまうのは、少しだけ残念な気がするけど、彼女の意志を尊重しなくちゃな。

「それじゃ、お言葉に甘えちゃおうかしら。よろしくね、智花ちゃん」  
「はいっ。ありがとうございますっ！」

まるで本当の親子の様に仲良く微笑みあっている二人になんか疎外感を感じてしまう……

「——それで、昴くんはどうするのかなー？」

多分、俺の心情を察して声を掛けてくれたんだろうけど、なんか悔しい。

別に苦ではないんだけど、そのニヤニヤした表情で俺を見るのをや

めろ。

「俺も手伝うよ。智花一人にやらせるわけにいかないし」

「そんなっ。昴さんはゆっくり過ごしてくださいっ。いつも私達のお相手までして頂いて、とてもお疲れでしょうし」

「ふふっ。いいんじゃない？ たまには昴くんにもお手伝いして欲しかったんだし、昴くんも智花ちゃんの花嫁修業ぶりをしっかり見てあげてね」

俺と智花を交互に見比べるながら、それはそれはとても楽しそうに、からかう様な笑顔を浮かべている。

「ぶっ!? ……お、おいつ。いきなり何言ってるんだ!?」

「は!? は、はは花嫁!? ふあううううう……花嫁……修行………昴さんの………はう!?」

両手で可愛らしく頬を抑えているが、紅潮しているのは頬どころか顔中が真っ赤になってしまっている。

「……すばるさんに……はなよめとして……ごまんぞくしていただけるか……みていただけ……ふあううう」

「智花! 落ち着くんだ!! これは母さんのいつもの悪戯だ。真帆達みたいに俺達をからかっているだけなんだ!!」

「……いっぱいがんばりますから……ためして……みて、くだ……さ……!?!」

頼むから焦点の合っていない瞳で、考えようによってはすごく危なそうな事を呟かないでくれ!!

思わず智花の両肩を抱き、顔をじっと見つめる。

俺の祈りが届いたのか智花の瞳に徐々に光が戻るが、小さな口をぱくぱく開いたり閉じたりを繰り返して何か言葉を縛り出そうとしているが何も出ていない。

「智花。ゆっくり深呼吸しようか」

俺の声にこくこくと首を縦に振り、ゆっくりと小さな胸いっぱい空気を溜めこんで、ゆっくりと吐き出す。

俺と見つめ合いながら何度か深呼吸を繰り返していく内に徐々に落ち着きを取り戻し始めている。



「わ、わわ私、何を言っちゃって……はううう!!」

なんとか極限状態を脱することはできたようだけど、顔を隠しながら俯いてしまった。

「あまり母さんの言うことを真に受けなくていいからね。たまに変な事言うけど聞き流してくれて全然構わないから」

「は、はい……はうう……わ、私にはまだ早すぎますよね……」

「うふふ。本当に二人は仲良しさんね」

元凶が何を言ってるんだ。

「頼むからあまり智花をからかわないでくれよな。すごく真面目な子なのわかってるだろ?」

「あら? 別にからかってるつもりはないわよ? 女の子にとって素敵なお嫁さんはいつの時だって憧れなんだから。ね、智花ちゃん」

「ふええ!!? は、はい……ですが、私になれるんでしょうか? ……」

お、お嫁……さんに……」

智花なら十分すぎるんじゃないや。礼儀作法も家事も一通りできるみたいだし、あとは年齢さえクリアしちやえば、よっぽどそこらの自称主婦よりも、いつでも嫁入りできる気がする。

まあ智花が欲しければ忍さんを攻略しないといけないわけだが

……

もつとも忍さんが認める程の男だったら、きつと智花も幸せに暮らせるだろうし、毎日がすごく楽しい日々を過ごせるんだろうな。

「智花を嫁にするには、まず忍さんを説得しないとイケないけどね」

「あはは、お父さんすごく厳しいですから大変そうですね  
……え?」

「あら? 昂くん、本気で智花ちゃんをお嫁さんに迎え入れるつもりなの? まだ少し早いから難しいと思うけど、できるなら歓迎するわよ?」

「な!!? ち、違う!! 俺がじゃなくて、智花を嫁にしたい男はって話だよ!!」

「そ、そそそうですよねっ……す、すみません、勘違いしてしまいましたっ……はあ……」

「ダメよ昂くん、女の子に期待させておいて、がっかりさせちゃうのは」

「……どうして俺が智花と結婚する話にすり替わってんだ。ってか、歓迎するとか何さらつと、とんでもないこと言ってるんだよ！」

「智花と一緒に暮らせるなら、きつと今みたいにすごく楽しい生活を送れると思うけど……」

「きつと智花が大きくなる頃には、俺よりも相応しい男に俺も忍さんも智花を奪われちゃうんだろうなあ……」

「それなら、その時が来るまでに今回のお泊りみたいに、智花とたくさん思い出作りを……」

「もちろん俺を信用して大切な一人娘を俺の元に預けてくれてる花織さんや忍さんを裏切るつもりも、智花に不埒な事をする気も一切ないけど、」

「残り僅かな時間しかない小学生の智花達と触れ合うくらいはいいよな？」

「あはは……やっぱり私なんかじゃ、昂さんにご迷惑ですよね……」

「いや、迷惑なんてことは全然ないんだけどさ……」

「普通に考えたらそうよねえ、私は本人達はその気なら構わないんだけど、智花ちゃんのご両親は心配よね」

「頼むからいい加減、俺と智花を結婚させようとする発想から離れてくれ。」

「ふえ？　えつと、その……どういう意味でしょうか？」

「俺もだけど、智花達も今後いっぱい色んな出会いがあると思うんだ。中学生や俺みたいに高校生になったら、今の大切な友人以外にもたくさん友達ができたり、色んなことに興味を持つようになると思う」

「は、はい。仰ることはわかります」

「だからさ。簡単にこの人と結婚したいとか言わないで、もつと視野を広く持つてゆつくりと色んなことを経験しながら、決めてもいいんじゃないかな？」

「今の智花くらいの年齢だと幼児が『将来お父さんと結婚する』なんて微笑ましい話では済まされなくなってしまうことだっただってあるんだ」

し。

間違つても彼女をそんなことに巻き込むようなことはしたくない。「さすが昴くん、年上として智花ちゃんのことをしっかりと論じてあげてるわね」

「これは本来は母さんの仕事だろ！ なに面白そうに傍観決めてんだよ!?!」

なんで四つしか変わらない若造が、こんな年頃で多感な時期の少女の話に真剣に向き合わなきゃいけないんだよ!?!

俺が話したことだつて、結局はただのガキの持論でしかないから、もしかしたら間違つたことを教えてしまったのかもしれないとメチャクチャ不安なんだぞ!!

「……昴さんはやっぱり優しいです。お母さんやお父さんと同じくらい、私の事を大切に考えて下さっているのが伝わってきます」

「そりゃ年上として頑張ってるつもりだけど、もし間違つてると思つたことがあつたら、遠慮なく指摘してよ。智花だつてすごく立派な考え方ができると思うんだから」

普段は大人しく引つ込み思案だけど、大好きな事や大切な者のためになら、すごい行動力を発揮できるんだしさ。

「それで……その……昴さん……」

「ん？ あ、もしかしてやっぱり何か変なこと言つちやてたかな？」

俯き加減でもじもじと申し訳なさそうに上目づかいでこちらを見ている。

「そうではなくて……ですね……あの」

「うん。言えるようになるまでちゃんと待つてるから、落ち着いてからゆっくりでいいよ」

「ありがとうございます……その、さつき勢いです……いいことを言つてしまいましたので……わ、私の決意が固まりました……あ、改めて伝えさせて頂きますので……どうかそれまで忘れて頂けますと……はうう」

「え？ あ、うん……それじゃ、また聞かせてもらえるの楽しみに待つてるよ?」

よくわからないけど、これで智花も安心するなら頷いておいた方がいいか。

智花もだけど、正直俺の方も母さんのペースに飲まれないように必死に落ち着こうとしているが、あまりにも刺激的過ぎる会話のせいで、そうとう頭が茹で上がってしまったている。

なんか母さんにつられて俺も智花もすごいことを口走ってしまった記憶は幽かにあるが、何を話していたかまでは正直良く覚えてはいない。

ただこの事態を引き起こした張本人である母さんは一人全てを把握した上で、俺達の様子を嬉しそうに眺めているのが気に食わない。すぐく気に食わないがっ。

うん。この状況で俺達が取るべき行動は一つ。さっさとこの出来事を忘れることだ！

「……とりあえずさ、しよ、将来の話で悶々と悩むより、今をいっぱい楽しまないと」

「は、はいっ。そ、そうですねっ。せつかく七夕さんのお手伝いをさせて頂けるのに、このままだと何もできないで終わってしまいますっ」

「二人ともごめんねー。二人がとても仲良しさんだったから、羨ましくなっちゃって、つい変な事言っちゃたわ」

「やっぱりワザとかよ!?!」

「はう!?! 七夕さんまで……うう……恥ずかしいよお……」

これ以上母さんが智花に変な事を吹き込もうと言うのなら、俺は智花を部屋に連れ込んで絶対に部屋から出さないという選択を取ることも辞さないぞ。

智花の大切な純情を母さんに奪われないように俺が全力で護ってやる。

「ごめんね。智花ちゃんに恥ずかしい思いさせちゃったわね。……でもね、多分これは二人だけじゃなくて、私や智花ちゃんのご両親にとっても、きつと大切なことだと思っの」

「どういうことだよ?」

「思わせ振りなこと言っちゃったわね。ううん。今は気にしなくていいわ」

珍しく急に真剣な表情になったかと思うと、いきなり会話を打ち切られてしまった。

まあ、せつかく話がまとまりかけて俺も智花も落ち着き始めたんだし、無理にこの話を続ける必要はないか。

「それじゃ、お料理を手伝いたいって言ってくれてる智花ちゃんには申し訳ないんだけど、お昼は私が作るから、二人は買い物に行つて来てくれるかしら?」

「ん? 買い物なら俺だけでも……どうせなら智花に料理を教えてくださいの方がいいんじゃない?」

「いえつ。私もお付き合ひさせていただきます。何でもお手伝いすると言いましたし、わがままを言うつもりはありませんっ」

わがままっていうか、そもそも買い物も料理も立派なお手伝いだし、荷物持ち位なら俺一人でも十分だと思っただが……

「ありがとう、助かるわあ。やつぱ昂くんよりも智花ちゃんに食材を選んでもらった方がいいからね」

「あまり自信はないですが……一生懸命選ばせて頂きますっ」

あ、納得。確かに俺より智花に選んでもらう方が間違いなく良い物を選んでくれるはずだ。

俺が口を出せるのは、せいぜい彼女が値段を気にして遠慮しないかを確認するくらいだろう。

「晩御飯は一緒に作りましょうね——それじゃ、お買い物のメモを書くから、二人はその間に出かける準備をして来てね」

「あ! 私はいつでも大丈夫ですので、お手伝いしますね。せめてこれくらいはやらせてくださいっ」

「あらそう? それじゃ一緒に洗いましょうね」

「はいっ。えへへ、家でもお母さんとたまに一緒に洗ってるので嬉しいです」

食べ終えた食器を集め台所へ向かう母さんを智花が追いかけて行く。

「なんか朝飯を食べてただけのはずなのに、どっと疲れたな」

くっ……不覚にも終始母さんのペースに振り回されっぱなしだったな。

結婚か……確かに智花をはじめ、みんな俺のところにいるのが考えられないくらいすごく良い子達ばかりだよな——

まさに現代の大和撫子を体現している智花。

側に居てくれるだけで周囲をいつも元気に楽しい気持ちにしてくれる真帆。

とてもしつかり者で、ただ厳しいだけでなく、実はとても優しい紗季。

温かい包容力と誰にでも優しく深い慈愛の心に満ちている愛莉。

庇護欲を掻き立てられるも、決してそれに甘えず、人一倍頑張り屋の小さな天使ひなたちゃん。

——って、ちよつと待て!! なんでナチュラルにみんなを対象として考えてしまっているんだ!?

彼女達小学生は俺なんか手が出していないような存在じゃない。むしろ俺の手なんかじゃ絶対に届かないくらい遥か遠い崇高な存在なんだぞ!!

いかんいかん。気持ちをしつかり切り替えないと!

さつき智花にやらせたように自分でも数回深呼吸をして気持ちを落ち着けながら、自分の部屋に携帯とサイフを取りに行くことにした。

## 智花二回目のお泊り3

—交換日記(SNS)—

まほまほ『もっかん、いまごろすばるんにおっぱいもませてんのかなー?』

ひなた『おーおにーちゃんいいなーひなもおっぱいもみたいなー』

紗季『まだ明るいのにしてるわけないでしょ……きつと夜、一緒に寝る時にどさくさに紛れて

長谷川さんの手を……』

あいり『ええ!? やっぱり智花ちゃんと長谷川さん一緒に寝ちゃうの!? ……それに智花ちゃん

が自分から長谷川さんに……』

まほまほ『もっかんならそれくらいやりかねんな』

ひなた『ねーあいりーこんどひなにあいりのおっぱいもませてー』

あいり『だ、ダメだよお……っていうか、いつも揉んでるよね?』

ひなた『おーそうでしたー』

紗季『ま、本当に一緒に寝たり、胸を揉んでもらったかどうかは明日の朝にトモからしつかり

報告してもらいましょ』

湊智花『だからそんなことしないって言ってるでしょーー?!?』

まほまほ『きししーついにもっかんがきづいたか』

紗季『今回は意外と早かったわね。まあ、携帯がちゃんと手元にあれば気づくか』

ひなた『おーついにもかにはバレてしまいましたな』

湊智花『もうーっ。なんで私がない時に私の話で勝手に盛り上がってるのっ!!』

私も昴さんも絶対にそんなことしないってばっ!!』

あ い り 『えへへ。智花ちゃん、ごめんね。でも、やっぱり少し気になっちゃって』

湊 智花 『うう……気になって確認してみたら、こんなことになっていたなんて……』

紗 季 『ところでいいの？ 長谷川さんが近くにいるんでしょうに私達と連絡しちやって』

湊 智花 『あ、うん。あんまり昴さんを待たせてしまっただけじゃないから、そろそろ行くね』

……お願いだから、これ以上変な話を残さないでね？』

まほまほ 『ほいほい。もっかんもすばるんとたつぷりラブラブおとまりしてこいよー!!』

あ い り 『ラブラブ……智花ちゃん、がんばってねっ!!』

ひ な た 『ともかいいなーおにーちゃんに何回もオトナにしてもらえて』

紗 季 『………反応ないわね。普通に見ないで閉じちやったのか……それとも逃げた』

のかしら？』

まほまほ 『もっかんケータイなのにレスめちやくちやはやかっとな』

\*

俺——長谷川昴は、目の前の湊智花という小学生の超絶技巧に驚愕していた。

携帯をしつかりと固定するために機体の背に回されている左右四本ずつの指は微動だにせず、

実質携帯を操作している彼女の二本の親指が、まるで精密機械さながらに超高速で彼女の携帯の表面を縦横無尽に動き回っていた。

文面を確認しているわけではないが、彼女の性格からして絶対にミスなく操作していることは間違いないだろう。

確かに人によってはパソコンを左右の計十指で操作するよりも、彼女の様に携帯を一、二本の指で操作する方が早い人がいるのも知っている。



だが、今の彼女の速さはかなり異質な領域に達しているのでは——  
彼女が俺にこの超絶技巧を披露してくれるに至った経緯はこんな  
感じだ。

俺と一緒に買い物に松戸駅近くのスーパーを目指していた道中、彼  
女の携帯から頻りに短い振動音と可愛らしい音楽を鳴り響かせ続け  
ていた。

彼女の携帯が何かを受信するたびに——おそらくそこに仕舞われ  
ているのでだろう上着のポケットにチラチラと視線を向けては、ハッ  
とした表情になり俺の顔色を窺っている。

「なあ智花……本当に俺に気にしないで携帯確認してもいいんだよ  
？」

「い、いえ……昴さんがいらっしやるのに、そんな失礼なこと……そ、  
その……すごく気になってしまってますが……」

すでに何度同じやり取りをしたのかもわからない。

確かに授業中に携帯が鳴ってしまったたり、操作して居ようものなら  
担任によつては携帯そのものを没収されてしまうだろうけど、当然今  
は授業中でも病院の中でもない。

側に俺がいるだけの完全に彼女のプライベートな時間だ。

仮に着信なりメールを受信したのが俺の方だったら、彼女は間違  
いなく自分のことは気にせずに、俺に携帯の確認を勧めてくるだろう  
し、俺も特に気にせずに相手との簡単なやり取りくらいはさせてもら  
うことだろう。

相変わらず自分の礼節に厳しい——というか、少し厳しすぎやしな  
いか？

「智花が俺との時間を大切に想ってくれてるのは嬉しいんだけど、智  
花にとって大切な友達とのやり取りだって蔑にはできないことじゃ  
ないのかな？」

「そ、それはそうなんですが……うう……」

少しベクトルを変えてみての説得に、やや手ごたえを感じるものが  
あった。この感じでもうひと押しだな。

「智花が礼儀正しい良い子だって言うのを俺は知ってるし、それなら

大切な友達のためにちよつとくらいわがままを言ってもいいと思うよ?」

「うう……昴さんのお気遣い本当にありがとうございますっ——で、では申し訳ありませんが、ほんの少しだけ確認させてくださいっ」

俺に一度だけ深く頭を下げてから、いそいそと嬉しそうな笑顔を浮かべながら自分の携帯を手に取り始めた。

こんなこと全然『わがまま』の内に入らないんだけどな。

彼女にとってこれが『わがまま』だったり、『はしたないこと』になるんだったら、

もつと『わがまま』を言ってくれたり、彼女の言うすごく『はしたない姿』を見せて欲しいんだけどな。

そんなことを考えながら、俺の目の前で晒されている、彼女のはしたない姿を思う存分堪能させてもらおうと視線を向けると、

彼女は携帯を開いていたまま固まっていた。

ほんの数秒前までの年相応の可愛らしい笑顔も表情はそのままだが、完全に凍り付いてしまっていた。

果たしてそれを彼女の笑顔と言っているものは少し疑問を感じるが、

わずかな間の後に体をぶるぶると震わせながら「な……な……」とか「はうう……」とか、声が零れてしまっている。

彼女の全身の震えがぴたっと止まった（顔は恥ずかしさか怒りで真っ赤になってる）かと思うと、先に話した彼女の超絶技巧が俺の目の前で展開され始めたのだ。

何度か彼女が携帯を操作しているのを見たことはあるし、たまに操作速度が急上昇すること——反対に突然停止してしまうこともあるけど、ここまで速くなったのは見たことがない。

やがて二本の指の高速移動が終わったかと思うと、まるで何かから逃げる様に慌てた様子で携帯を閉じてしまった。

「……………もう、私も昴さんもそんなことしないってばあ……………うう……………」

おそらく無意識に彼女の口から零れてしまった言葉については、こ

れまでの経験上、聞かなかったことにした方が良さそうだな。

「……あ、足を止めさせてしまいました、すみませんでした。確認も終わりましたので、もう大丈夫ですっ」

そう言いながら、彼女の小さな体が前進を開始したので、その隣に並ぶように俺も歩き出す。

「別にそんなに慌てないで、俺の事なんか気にしないせず ゆっくり話してて良かったんだよ？」

「あ、あはは……その……い、色々あつて慌てて書き込んでいたら紗季から私達じゃなくて目の前の昴さんの相手をしなさい。って言われてしまいました……」

「なんか智花の押し付け合いみたいになっちゃったかな？ ごめんね。俺も、もちろんみんなだつて、そんなこと全然思つてないからね」  
「はい。昴さんもみんなも私を本当に大切に扱つてくれてるのがすごく伝わってきてます。それがとても温かくて嬉しいんですが、私だけこんなに気を掛けられてしまつていいのかな？ って、少し不安になつてしまうことがあるんです」

昔ちよつと失敗しちゃつて孤立してしまつた事の不安や恐怖が、今も智花の心の深いところで根付いてしまつているんだろうな。

「大丈夫だよ。智花」

「あ……」

嬉しさと不安が混ざつてしまつているような、どこか儂げな表情をしている少女の頭をできるだけ優しく撫でてやる。

「智花がみんなの事を同じくらい大切に想つてる限りは、絶対にみんな智花を一人になんかさせないよ」

「はい。みんなすごく優しいです……でも、私自身がどこかでまた失敗してしまわないかと思うと、やっぱり不安なんです」

「それも大丈夫だよ。智花が何か間違いをしそうになったら、みんなが止めてくれるし、俺だつて絶対に放つておかない」

「あ……えへへ。前に真帆達も同じことを言つてくれました。もし私がいみんなに無理なことを強要しそうになったら、その時は昴さんが絶対に止めて下さる。って」

少しずつだけど、彼女の笑顔に影を落としていた物が取り払われつつある様感じた。

今はまだ完全には取り去ってあげることができないだろうけど、例えば俺には無理だとしても、これからもみんなと楽しい日々を過ごし続けられるのなら、いつかきつと——

「——ところで、智花の方だつて、いくら大切な友達からの提案だからって律儀に何でも乗らなくてもいいんだよ？ 無理な事やできないことはちゃんと怒って断らないと」

「は、はい……その……本当に無理なことはちゃんと断ってますけど……た、たまにできるか、できないか本当にギリギリの所を攻められちゃうと……」

さすがにみんなも弁えるべきところはしっかりしてるか。

智花に本当に無茶なお願いはしないだろうし、俺が絶対に智花に変な事をしない。っていうくらいには信用してくれてるんだろうな。

……でもそれだと、智花にとって二人つきりで俺の部屋で一緒に寝ることや、風呂で背中を流すのはギリギリできるこ——いや、ダメだ。これ以上はやめておこう。

あの時はお互いに余裕がなかったんだし、今回のお泊りの件だつて、ただバスケを通じて二人の親睦を深めるだけだ。うん。

気づくとスーパーはもう目と鼻の先というところまで来ていた。

「さて、それじゃさっそく智花の力を頼らせてもらおうかな。食材選びお願いします」

「はいっ。七夕さんや昴さんのご期待に応えられるよう精いっぱい選ばせて頂きますっ」

胸の前で両手をぎゅっと握って応えてくれている彼女の気合の入りにように、昼食もまだだだというのに、もう今晚の夕食が楽しみで仕方なくなっちゃった。

俺も手伝わないとな——といつても俺にできることはカートを押すことくらいだが。

まあ、そのカートの主導権すらも危うく智花に奪われてしまいそうになったが、それすらも彼女に任せてしまえば、

本当に自分がここにいる意味が消失してしまうのでは？ という  
危惧から必死の懇願によりなんとか得られた権利だったりする。

「うくん……どっちがいいかなあ？ あまりお金は掛けられないけど、でもこっちの方が昴さん好きだし……」

智花はすでに母さんから預かったメモを一度開いたきり、それ以来見ていない。

と言うのも、母さんのメモがあまりにも智花に頼り切った内容でしかなかったためだった。

献立くらいしか書かれていないようなメモを頼りに、彼女は母さんの無茶振りに対して、その信頼に応えようと真摯な姿勢で臨んでいた。

そんなわけで、この良くできた小さな嫁の邪魔をしないようにと、真剣な表情で食材を選んでる姿を眺めているつもりだったのだが、俺を氣遣ってなのか頻りに確認を求めてくれている。

せっかく俺に意見を求めてくれている彼女に「智花に任せる」の一言で済ませてしまうのは、彼女に頼り過ぎというよりも、どこか突き放してしまっている印象を与えてしまうかもしれない。

「そこまでお金の事を気にしないでいいよ。俺も母さんも智花の判断を信頼してるから、自由に選んでもらっていいよ——あ、強いて言うなら」

「は、はいっ！ なんでもおっしやってくださいっ」

「俺の好みを重視してくれるのはすごく嬉しいけど、ちゃんと自分が好きな物も選ばないとダメだよ？」

「はい。私も……その……一緒にお食事を頂いてる内に、す……昴さんと好みが似てきたと思いますので……」

ほぼ毎朝一緒に朝飯を食べてるんだし……まあそうなるよな。

結局、終始智花に頼り切り切りで買い物を終えたわけだが——レジ袋はしっかりと俺がキープさせてもらった。

「……え、えへへ……いい、色々とおまけして頂けましたね……」

「ま、まあ結果的には良かったんだと思うことにしようか……」

互いに恥ずかしい気持ちを誤魔化すような笑みを浮かべる。

俺達の——主に智花の行動が、新婚の新妻が健気に夫を立てているソレに見えるという人間が多かったようで……

幼な妻という単語を当てはめようにも、さすがに幼すぎるだろうに……

周囲から新婚や幼な妻と言った言葉で囃し立てられる度に、頬を赤らめ恥ずかしそうにはしているが、嫌がつてる様子ではないのが唯一幸いな事だったのかもしれない。

やっぱお嫁さんって女の子の憧れなんだな。

隣にいるのが俺なのが彼女にとって少しかわいそうな事ではあるが。

俺の嫁がこんなに可愛いわけがないしねっ。

——せっかく嬉しそうにしてくれてるんだし、わざわざ水を差すような事を言う必要はないか。

他愛のない会話を繰り返しながら、行きと同様に帰りも二人で仲良く並んで帰るのだった。

## 智花二回目のお泊り4

俺と智花が買い物に行っている間に昼食の用意をしていた母さんは、ちょうど俺達が帰ってくるのを見計らっていたかのようなタイミングで昼食を食卓に並べ俺達を待ってくれていた。

「お昼は簡単なものにしちゃってごめんなさいね。でも、そのかわり晩御飯は気合を入れて作るから楽しみにしててね〜」

「わ、私も七夕さんのお邪魔にならないように精いっぱい頑張りますっ」

母さんは簡単なものとは言っているが、いつもに比べればという程度で、朝食と合わせれば俺や智花が朝練や買い物で消費したカロリーは十分に補われることだろう。

それにしても……相変わらず母さんは智花一人増えただけでも本当に嬉しそうだよな。

まったく分不相応にも智花を自分の娘みたいに思ってしまったているのではないのだろうか？

とはいえ、仲睦まじく微笑みあっている様子は本当に仲の良い母娘のように見えなくもないが、それはそれで彼女の実の母親である花織さんになんか申し訳ない気持ちになってしまう。

「ごちそうさんっ。それで、午後からは何をすればいいんだ？」  
昼食を平らげて一息ついたところで、母さんから次の指令を確認する。

べ、別に母さんと智花が仲良くしてるのを見て羨ましくなったわけではない、礼儀正しく健気な少女が家の手伝いをしてくれるというのに、実の息子である俺が好き勝手にダラダラと過ごすことに居心地の悪さを感じてしまうだけだ。

何より彼女にコーチとしての威厳を保つためにも、彼女の言葉を借りて言うなら『はしたない姿』を見せるわけにもいかないだろう。

俺としては智花の『はしたない姿』をもっと見せてもらいたいところではあるが……さすがに本人に向かつて「智花のはしたない姿をもっと見せて欲しい!!」なんてことは口が裂けても言えないが。

「そうねえ、それじゃあ夕飯の準備をするまで二人とも自由時間」

母さんの言葉に内心面倒事を回避できたと安堵する俺に対して、智花は不満そうな……というよりは申し訳なさと、どこか寂しさを感じる表情になった。

「え……でも、まだ色々家のお仕事があるので……おつしやつて頂ければ、お洗濯でも何でもお手伝いさせて頂きますよ?」

「ううん。お買い物をしてくれただけで十分よ。それにお洗濯は昂くさんが恥ずかしいんじゃないかしら?」

真面目な少女はすぐにでも自分ができないことがないかと必死に考えを巡らせ、母さんに手伝わせて欲しいと懇願している。

ダメだな。智花と比べるとどんどん自分が情けなく思えてきてしまう……とは言え洗濯はマズいよな。

俺が彼女の衣服を手取ることは当然アウトだが、俺の物を彼女の手に触れさせる。というのもできれば避けたい。

母さんの言うとおりでメチャクチャ恥ずかしいし、そもそも智花にそんな物を触らせたくない。

「ふえ? ……はうう?! す、すす昂さんの……」

男の俺が言う訳にもいかず、あえて傍観に徹していたが、一拍遅れて彼女も俺と同じ考えに至ったらしく、顔を両手で抑えて俯いてしまった。

きつと心優しく真面目な彼女は恥ずかしがりながらも、俺の服や下着を手に取り、それはもう丁寧に扱ってくれることだろう。

ここは彼女が変な決意を固めてしまう前にさっさと話題を変えてしまった方がいいな。

「智花、母さんもああ言ってるんだし、良かったら飯の準備まで一緒にバスケに付き合——」

「昂くんには智花ちゃんのお勉強を見て欲しいんだけどなくついでに自分のお勉強も頑張ってくれるともっと嬉しいんだけどなく」

くっ……なかなか痛いところを……確かに来年からのバスケ部活動再開のためにも学業は疎かにはできないが、なにも智花の前で言わなくてもいいじゃないか。



まるで俺が勉強嫌いで成績がいつも赤点ギリギリのダメな学生みたいじゃないか……悔しいが否定はできないけどさっ。

「ふえ？…ええつと……」

俺と母さんから同時に別々の提案を受け、困った表情で交互に見比べながら、どちらを受けるべきか迷っている。

偶然にもタイミングが被ってしまったわけだが、彼女にはなかなか酷な選択を強いる結果となってしまったか。

コーチかその母親か。はたして智花はどちらを選ぶ。

「智花。自由時間なんだから、智花の好きな方でいいんだよ」

本心としては、再び彼女と頭が真っ白になるくらいメチャクチャに激しいバスケがしたい。

彼女の繊細でいて時に激しいボール捌きや綺麗なフォームで『俺を抜きたい』というたつた一つの想いのみを抱きながら一心不乱に彼女が飛ぶ瞬間を何度も目に焼き付けたい。

「で、では……お勉強を見て頂いてもよろしいでしょうか？ 次の授業までにしっかり予習と復習をしておきたいので」

うん。しってた。優等生な彼女が学生の本分である学業を疎かにしてまで大好きなバスケに夢中になるわけないよね。

やるべきことをしっかりとこなして、それではじめて大好きなことを思う存分楽しむ子達だもんね。

あの夏休み以来、真帆も少しずつではあるけれども、ちゃんと自分で宿題を頑張るようにもなってくれたみたいなんだし。

「やっぱり智花ちゃんがお泊りに来てくれて良かったわ〜これを機に昂くんももつと勉強を——」

「——そ、それじゃ、俺の部屋じゃ机も椅子も一個しかないから、今日はリビングで一緒に勉強に励もうか。うん」

もうやめて！ 俺のライフはとっくにゼロよ！ お願いだから智花の前で俺のコーチとしての威厳を揺るがすようなことを言わないで下さい！！

それに……これでも俺、みんなのコーチだと自信を持って言えるように勉強も頑張ってるんだぜ。

それぞれの勉強道具をリビングの小さなテーブルに広げながら、向かい合って座る。

さて二人の勉強会を始めようか。という時に、目の前の少女が俺の顔を窺いながら声をかけてきた。

「あの……昴さん？」

「ん？ ……ああ……ごめんね。みんなの前では偉そうにしてるのに……幻滅しちゃったろ？」

ここで実は勉強もちゃんと頑張ってるよ。とアピールしたい気もあるが、それはそれでなんか情けない気もするし、

そもそも目の前の文武両道を地で行っている少女に、そんなことを言う勇氣はない。

「ふえ？ い、いえっ。その……こう言つては失礼だとは思いますが、なんかちよつとだけ安心したと言いますか……」

「安心？」

「部活の時とか私達が無理をしないように身体の事を本当に良く考えて下さっていたり、試合の時だって、いつも私達じゃ思い付けないようなすごい作戦を考えて下さっています。それに、とても優しくて温かくて……こんなにすごい人のお側に私なんかがいさせてもらっていいのかな？ つて思つてしまいます」

ただバスケットを始めたのが彼女達よりほんの少しだけ早かっただけなんだ。

たったそれだけの事で、彼女達は俺を心から尊敬してくれている。

まあ、彼女達の大切な場所を守るためのわずかばかりの手助けをすることができた。と思うくらいはいいだろうか。

「あはは、実際に蓋を開けてみれば買い被りすぎだっただろ？」

「そんなことないですよっ。愛莉を通じてですけど、万里さんや葵さんも昴さんが勉強をしつかり頑張ってるってお話を聞いてますし……その……前の葵さんの時みたいに私達のコーチを辞めさせられないようにって、すごく真面目に頑張っていらっしゃるって聞きしてますっ」

「俺も最後まで智花達のコーチを続けたいからね」

「来年からはもうお別れ……なんですよね」

言ってから失言に気づいたが、これは避けては通れないことを彼女だっ理解している。

「別にお別れってわけじゃないさ。中学からはちゃんとした部活もあるみたいだから、今度こそ智花達だって色んな試合にも出れるし、思いつきりバスケットを楽しむことができるんだよ」

「はい……」

「智花達が思いつきりバスケットを楽しんでいる姿を見せてもらって、俺もバスケットが大好きなんだって思い出させてもらったし、来年からは俺も自分のバスケットを思いつきり楽しませてもらうよ」

「昴さんのご活躍……本当にお祈りしますね……」

いくら俺が鈍いとは言っても、今にも泣きそうな表情で彼女が本当に口に出したい言葉を必死に我慢して、別の言葉を俺に届けてくれた。ということくらいは気づいている。

どれだけの想いで、その言葉を口に出さないようにしているかは分からなくても、言いたいことくらいは今までの彼女達と過ごした日々を通じて十分伝わっている。

——ダメだな。わがままを言ってもらいたい。とか勝手に思ってたくせに、いざ本当に言われちゃったら、そのわがままを叶えてあげることができないじゃねえかよ。

俺もできることなら、みんなの成長をいつまでも間近で見続けたいけど、俺の本当の目標は別にあるし、彼女達もそれを理解してくれている。

仮に彼女達の口から俺に「中学になってからもコーチを続けて欲しい」なんてわがままを言われても俺は、それに応えてあげることにはできない。

だから、せめてものお詫びにと瞳を潤ませて涙を必死に堪えながらも、俺を激励してくれた少女の気持ちたちが落ち着くまで、何度も優しく撫でて続けてあげた。

「うう……すみません……また泣いてしまって……いつも昴さんにご迷惑かけてしまつてばかりで……自分が情けないです……」

「そんなことないって。みんなのコーチとして過ごさせてもらつている時間は本当に俺にとつてかけがえのない大切な時間になつてるんだ。もちろん今もね」

「ふえ？……今もですか？」

「頼りないとは思うけど、智花が——慧心女バスの誰かがいるなら俺はいつだって君達のコーチだ。バスケット以外のことだつて俺に教えられることは何でも教えてあげるよ」

慧心の授業が意外とハイレベルだったのは、夏休みに智花の宿題を見てあげた時に知つてはいる。

だが、いくら俺でも中学生レベルに踏み込んでいるとはいえ、小学生の勉強を見てあげることくらいはできるはずだ。

すごく情けないとは思うけど、智花達からコーチとしての威厳を保つためなら、使える手はなんだつて使わせてもらう。

「よしつ。それじゃすつかり話し込んでやつたけど、そろそろ学生らしく勉強に励むとしようか。わからないところあつたら、いつでも聞いてくれて構わないからね」

「はいっ。よろしくお願いしますね。昴さんっ」

互いのペンを走らせたり、ノートを捲る音を聞きながら相手の集中が持続しているのを感じ合う。

俺が一息ついて集中の持続を中断した時や、智花がペンを走らせる音を止め、悩ましげな声を上げながら、こちらをチラチラと見つめているような視線を感じたら、微笑みかけながら彼女の勉強をみてる。

こうしてみると、二人で勉強をするという選択も良かったのかもしれないな。

この後、彼女には晩飯の支度という最後の大仕事が控えているのだし、俺とのバスケットで足腰が立たなくなるくらいヘトヘトにさせてしまつていたら、その大仕事に支障をきたすどころかできなくなつてしまつていたかもしれない。

何より、こうしてバスケット以外でも智花にいい恰好ができたというのが一番嬉しい事だったりする。

真面目に頑張っている智花に触発されて……というのは、少々情けなくはあるが、それでも俺自身、自分でも驚くくらい勉強に集中できたという手応えがあった。

「智花ちゃん。そろそろお夕飯の支度を始めようと思うんだけどいいかしら？」

智花の予習のための最後の問題を一緒に解き終えたところで、飲み物を持って来てくれた母さんから遂に声がかかる。

「はいっ。七夕さんのお邪魔にならないように頑張りますので、どうかよろしくお願いしますっ。昴さんも、勉強を見て頂いてありがとうございますっ

「こっちは俺と一緒に片付けておくから、智花は飯の準備お願いね」  
「ありがとうございますっ。昴さんに喜んで頂けるよう頑張りますので……た、楽しみにしててくださいいねっ」

「期待してるよ。それじゃ、俺は大人しく部屋で待ってるから、できたら声をかけてね」

引っ込み思案の彼女が「楽しみにしててください」とまで言ってくれたのだ、これは期待せずにはいられない。

俺は俺で期待を胸にしつつ、ふと思いついたことを、こっそりと実行すべく自分と彼女が使っていた勉強道具を抱えながら自室へ戻るのだった。

## 智花二回目のお泊り5

自室へ戻るなり、俺と智花の勉強道具を机に並べながら椅子に腰を下ろす。

すぐ近くに俺がプレゼントした彼女愛用のスポーツバッグがあるとはいえ、さすがに直接そこに戻すようなことはしない。

いくら俺でも、女の子のプライバシーが詰まりに詰まっている鞆の中を無遠慮に漁るようなことをするわけではないのだ——やむを得ない理由がない限りは。

「よしっ。さっそく始めるか」

智花も母さんも晩飯の支度をしてくれてるだろうから、おそらく晩飯まではこの部屋に誰かが来ることはまずないだろうが、

時間はたっぷりあるとは言え、何か不足な事態が起こらないとも限らない。済ませるなら早いところ済ませた方がいいだろう。

「智花に付き合ってもらおうかと思っただけど……やっぱ一人でする方がいいな」

本当は智花と一緒にやれるのが一番だが、それはまた機会を見てだな。彼女が混じらないにしても、一度俺のやり方を良く見てもらった方がいいだろうし。

ふと机に置いた彼女のノートをちらりと見る。

『湊智花』と、とても綺麗な文字で彼女の名前が書かれている。

つい先ほどまで側に居てくれた少女の儂げな笑顔が思い浮かぶ。

そして、彼女を温かく取り囲む様に、彼女の大切な友人たちの姿が思い浮かび上がってきた。

——そうだな。たまには思いつくままにやってみるのもいいかもしれない。

\*

「うん。一人一人じっくりと見させてもらったけど、みんな良く頑張ってくれたよ」

「はあ……はあ……やっぱ昴さんのすごいよお……」

「あたしも……ここまですげえのは……初めてだ……」

「真帆に……負けられないようにと……頑張ってたけど……何度も頭真っ白になっちゃって……もう全然足腰が立たなくなっちゃってるわ……」

彼女達はみんな全身から汗を滴らせ、火照らせた身体と乱れた息を整えながら、先ほどまで繰り返されてきた行為を振り返っている。

普段から俺に付き合ってくれてることもあり、最も経験値の高い智花や、一人での練習も欠かさず体力に自信のある真帆。

そして、この二人——というか主に真帆に対抗心を燃やして負けじと一緒に頑張ってくれた紗季。

体は動きすぎて疲労困憊といった具合だが、今まさに得られている達成感にとっても満ち足りた表情をしている。

「うう……二人ともすごいよお……私ももつと頑張らないといけないのに……身体が思う様に動かなくて……」

「おー……ひなも、もーげんかいー……みんなといっしょがいいのにー」

残念ながら、最後の最後で一足先に限界を迎えてしまった愛莉とひなたちゃんが、三人と同じく息を荒くしながら、少しだけ悔しさと寂しさが混ざったような表情をしている。

「そんなに落ち込まなくていいって。俺の方が結構無理な要求しちゃってたんだし……二人だつてすごく良かったよ」

「えへへ」  
「おーおにーちゃんにほめられたー」

俺からの直接の励ましに智花達よりも少しだけ辛そうな顔をしていた二人も、ようやく嬉しそうに表情を緩めてくれた。

事実、俺は五人の少女達にかなり厳しい要求をしてしまったわけだが、それでも最後の最後まで健気に頑張り続けてくれたんだから、不満なんてあるわけがない。

むしろこれは彼女達に求めすぎってしまった俺自身の課題が見つかったのかもしれないな。

俺の期待に応えようと必死に頑張り過ぎて、今も「はあはあ」と息を荒くしている少女達の姿を見ると、やはり無理をさせ過ぎてし

まったと自責の念にかられてしまう。

大切な時間や身体を俺に捧げてくれていた彼女達のためにも、もう少し優しくして彼女達にも達成感や満足感を得られるようなものにするべきだったな。

慈しみと労いの意味を込めて一人一人の頭を優しく撫でてから、新たに見つけた課題のために自らを奮い立たせる。

「みんながこんなに頑張ってくれたんだ。今度は俺が頑張る番だよ」

五人が横たわらせた身体をわずかに上げ、期待の眼差しで俺を見つめてくれている。

俺を喜ばせようと必死に頑張ってくれた健気な少女達……

この五人の少女達の期待に応えられるよう、精いっぱい頑張らないとな。

\*

「——って、なんで途中から自分の練習メニューを考え始めてんだよっ」

余計なものをかいてしまった紙をクシャクシャに丸めゴミ箱へ放り投げる。

自分の思考の脱線に気づき妄想を中断する。

途中までは良かったのに、なんでいきなり俺メインになっちゃうんだよ。

確かに智花達に『がんばれ。がんばれ』と応援されたら、きっといくらでも頑張れそうな気がするけど——それは置いといて。

今は智花達だ。

ことの発端は、智花が寂しげに呟いていた「来年からはお別れ」という言葉からだ。

別に俺の方は彼女達から明確に避けられ始めるまではお別れする気なんてさらさらないんだけど、

コーチ業を続けられるかという点、なかなか厳しい物があるだろう。

中学からはちゃんとした顧問もコーチもいるということは、俺が好き勝手に彼女達の練習メニューに口を出すことはできないし、



下手にそんなことをして智花達と他の部員や顧問たちとの関係に溝ができてしまつては目も当てられない。

今俺がしていることは完全に俺のエゴだということはわかっている。

分かっている上で、せめて彼女達が中学生になつた後も、かつて俺がコーチとして彼女達と共にいた証を残したいと勝手に考えているだけなんだから。

仮にこれが完成したとして彼女達に渡すかどうかはまだ決め兼ねているし、渡す時も顧問や他の部員との諍いが起きないように自主練で活用する程度にして欲しいと説明するつもりだ。

「本当は……作るべきでもないんだけどな……やっぱ俺のエゴだよな」

万が一、これが原因で智花達が孤立してしまつたら、俺はまた智花にかつての苦しみを再び味わせてしまい兼ねない。

こんな自己満足のための行為に、心優しく健気な少女を巻き込まずに済んで良かったと心から安堵していた。

——それでも、もしかしたら……と期待してしまう——理想的な未来を。

智花はもう一人じゃない。彼女達と一緒になら、二度と孤立することなくみんな仲良く溶け込めるだろうし、思う存分バスケットを楽しむことができると思っている。

中学からのバスケット部がどういう雰囲気になつているかはわからなけれど、硯谷女学院というライバル校だつてできたんだし、

必要なら俺達と一緒に作つていった全員が楽しんで勝つことを目指せるバスケット部にだつてなれるだろう。

そんな理想の未来を思い描きながら、再び自己満足のための行為を再開する。

「まずは基本メニューをベースにして、それぞれに合わせて微調整を……と」

できる限りみんな一緒にしたいけど、全てを同じくすることが正しい平等とは言えない。

身体の成長はもちろん求められる技術や成長速度だって個々に違うんだから、しつかりとみんなの身体に適したものを宛がってあげたい。……とはいえ、みんな成長著しい時期なんだし、きつと俺の予想なんかよりも全然速いペースでどんどん成長しちゃうんだろうな。

純粋な成長速度という意味ではひなたちゃんの中々なものだろう。女バスメンバー自体、比較的小柄な子が多い中でもひなたちゃんは特に小さいが、すでに成長の片鱗を感じさせるものだってある。

きつとわずかな時間を置いて再び見た時には、みんな見違えるくらいの成長を遂げていることだろうし、

その過程をじっくりと見届けることができなかつたことに寂しさを感じちやいそうだな。

「ふう……。こんなところかな？ あとは今後のみんなの仕上がり具合を確認しながらだな」

俺が自分を満足させるための行為にすっきりしたところで、軽快な足音が階段を駆け上がり俺の部屋に近づいてきた。

がちやり。とドアが開く音と同時にその方向を見ると、待ち望んでいた少女が白いフリフリのエプロン姿で幽かに頬を赤く染め、はにかみながら立っていた。

「昴さんっ。お待たせしましたっ……。……あ、はうう!? ぐ、ごめんなさいっ!! お一人で頑張っついていらっしやっただのにお邪魔してしまいましたっ!!」

はっとしたように口元に手を当てたかと思うと、慌てて深々と頭を下げてしまった。

机に座ってたからもしかしたら、勉強してるとでも思ったのかな？

さすがに今この場で「君達が中学生になってからのことを考えていた」なんて言えないし、せつかくだから勘違いしてもらっておいた方が何かと都合がいいだろう——彼女の中の俺の評価も上がるし。

「ちようど終わったところだから大丈夫だよ——ってか、智花にしては珍しいはしやぎようだったね」

階段を駆け上がったたり、ノックもせずいきなりドアを開けたりと普段お淑やかで礼儀正しい少女にしては珍しいな——むしろ俺とし

ては大歓迎だけど。

「い、家ではこういうことはないんですが……はうう……よりによつて昴さんのお家で、こんな粗相をしてしまうなんて……」

「うっかり気が緩んじやつてた？　なかなか珍しい物が見れて得した気分だよ」

俺の言葉にますます自分の失態が恥ずかしくなつてしまつたのか、頭を下げたまま、ぷるぷると小刻みに震えてしまつていた。

違う。俺が見たいのは年相応に無邪気にはしゃいでいる彼女の姿であつて、自分のミスを重く受け止めてしまつて羞恥心に震えている姿ではないんだ。

「別に見られて困るようなことしてたわけじゃないんだし、晩飯できたんだから？　せつかく作つてくれたんだから早く食べに行こうよ」

まだ申し訳なさそうにしている智花の手を取りながら、そのまま部屋を出る。

「は、はい……本当にごめんなさいでした……」

ごめん、智花。ちよつと嘘ついちゃつた。

実際の所、見られて困ることとしてたし、改めて考えてみると智花達に見られるとメチャクチャ恥ずかしい気がする……

「……昴さんの手……大きくて、温かいな……」

おそらく無意識に呟いたのであろう彼女の一言に、ようやく自分が彼女の小さく柔らかい手を握りしめていたことに気づいた。

慌てて離そうかと思つたが、彼女の方からも握り返してくれていたため、そのまま手を繋がせてもらうことにする。

この小さい手もちよつとずつ大きくなつていくんだらうな。

あと何回、こうやつて手を繋いでもらえる機会があるかわからないけど、

せめて卒業までは、しっかりとみんなの成長を見届けさせてもらおうとしよう。

——そうだ。俺のこの一年は小学生のために身も心も全て捧げるんだ。

お互いの手を通じて伝わる彼女の温もりを感じながら、自分自身に

課した使命を果たすための決意を新たにするのだった。

## 智花二回目のお泊り6

その日の長谷川家の晩飯の食卓はいつもよりも少しだけ豪華で和やかなムードに包まれていた。

まったく来客一人増えただけでここまでの喜びようである。

かくいう俺自身も俺の隣の席に腰を下ろし、にこやかに微笑んでいる少女の存在に嬉しさと居心地の良さを感じているわけだが。

うっかり彼女と手を繋いだままりビングに入り、その姿を母さんに目撃されてしまったが、この気分を味わえるのであれば、そんなものは些細な事だ。

……でも、俺だけでなく巻き込んでしまった智花にまで恥ずかしい思いをさせてしまったことに対してはあとでしつかり謝っておかないと。

今日一日を通して彼女の油断した——はしたない姿を多く目撃してきたことに喜びすぎてしまい、まさか俺自身も油断してしまうとは……

あれ？ 智花がことあるごとに恥ずかしがってしまっているのは、もしかして俺の……せい？

——バスケットでは年上の俺にもひるむどころか、より積極的に向かってくる姿勢

……は、別にいつものことだ。彼女自身がどう思ってるかはともかく。

——俺の言葉足らずな一言で誤解を招いてしまい、それに慌ててしまっていた。

あの忍さんを前にして『娘さんを僕に下さい』なんて言える奴がいるなら、よほどの命知らずか、本気で智花の事を愛しているかのどちらかだろう。勝算はともかくとして。

——俺が側に居るせいで、俺も同じ気持ちだけど、彼女にとってはそれ以上に大切な友人達と連絡を取り合えない息苦しさを感じさせてしまっていた。

いつも通りからかわれていたみたいだけど、女バスのみんなと話を

している時に見せてくれるあの表情こそが、彼女の本当笑顔なのだろう。そんな彼女の笑顔を見られる眼福があるのなら、俺の方から彼女の粗相やほしたくない姿を見せてもらえようお願いしたいくらいだ。

俺と一緒に買い物をしていただけで、新妻、幼な妻と周囲から囃し立てられたり、今まさに俺が智花の手を引いたままマリビングに入ってしまったせいで、母さんのイヤらしい視線に晒され、また彼女は頬を赤らめてしまっている。

やはり俺が原因で彼女が辱められてしまっていて、それを彼女はまるで自分の責任のように振る舞ってしまっているのでは……

今更気づいたところで、真面目な彼女の事だ、俺ではなく自分の責任だと一人で全て背負い込んでしまうことだろう。

その時点で俺の謝罪は一層彼女に責任を感じさせてしまうだけのものになってしまう。

俺にできることは……今までの事を彼女に懺悔するのではなく、今後の彼女の行動を褒めて、『君は間違いなくとても上品でお淑やかな可愛らしい女の子だ』ということを誠心誠意伝えてあげることではないのだろうか？

彼女の一挙手一投足をこと細かく観察し、少しでも日頃の礼儀正しく大人びた雰囲気を感じさせる挙動を見つけたら、すぐに褒めさせてもらおう。

「それじゃ、冷めないうちに頂きましょう」

俺の密かな決意と同時に食事を勧めてくる母さんの言葉で三人で『いただきます』と声を揃えて食事を始める。

まあ、智花という小学生の女の子がどれだけ素晴らしい存在か、なんてほんの少し彼女と寝食を共にすれば、誰だってすぐわかってしまうことだ。

そんな彼女を褒めるといっても簡単な事を一々深く考える必要もないだろう。

まずは彼女が心を込めて作ってくれた手料理を思う存分堪能させてもらうとしよう。

なにかから食べようかとテーブルいっぱいに広げられている二人が

作ってくれた晩飯をじっくりと確認する。

悔しいが真つ先に母さんの得意料理であり、俺の好物である母さん特製のふわとろオムレツに俺の視界と意識の大半を奪われてしまったのは仕方のないことだ。

大好物なだけに、テーブルの中央に大きく陣取るオムレツに自重しろとは言えないのが悔しい。

その隣には色とりどりの新鮮な野菜サラダが、丁寧に盛り付けられ、自らの瑞々しさとドレッシングの輝きで一層鮮やかさが引き立てられている。

三人がそれぞれ座る席の前には主食として一枚の皿の上でライスとカレーがそれぞれの領域で仕切られ、カレー領域側の方には大きなハンバーグが自らの存在をでかでかと主張している。

ハンバーグ+カレー+ライスという多くの子供達が大好きな二大メニューの組み合わせハンバーグカレーである。

……そして、卵焼き？

うーん……オムレツと卵焼きで卵がかぶってしまったな。いや別に構わないけど。

オムレツの方はこの見慣れた且つ完璧な俺好みに仕上がりから、間違ひなく母さんが作ったものだろう。

となると、卵焼きの方は……

この卵焼きは、どちらかというと、テーブルの智花寄りの場所にちよこんと控えめに小さな皿に収められている。

「智花。その卵焼きつてもしかして……」

「うふふ。智花ちゃん。すぐに昴くんに見つかっちゃたわよ」

「はう!? その……私が、作りました……」

俺の問いかけに徐々に声も体も縮こまらせるようにしながらも答えてくれた。

「もしかして智花の家の味付けとか?」

「はい……私もがんばって練習はしているのですが、やっぱり七夕さんのオムレツには絶対に敵わないと言いますか……い、いえつ。そもそも比べさせて頂くのもおこがましいのですが……こ、これは私が責

任をもって処理しますので、昴さんは遠慮せずに七夕さんの方を……」

「良かったら味見させて欲しいな。智花の卵焼き」

「ふええ!? で、でも絶対七夕さんのオムレツの方が美味しいですよっ」

俺が食べたいと言った途端に驚きの表情に変わる。もしかして、自分用で作ったのかな? 確かに普段から自分の家で食べ慣れてる味付けの方が食べやすいかもしれない。

だが、見た所今回の晩飯は智花と母さんの合作がほとんどだろうが、この卵焼きだけは間違いなく智花だけの手で作られたものに違いない。

正真正銘の純度100%の智花の手料理。これを味わえずに終わることなんてできるものか。

「智花のおかずを取ってしまうのは正直心苦しいけど、できれば……うん。どうしても食べてみたい……かも」

「はうう……せめてお母さんくらい美味しくできれば良かったのに……あまり期待しないでくださいね……」

おそろおそるとだが、卵焼きが乗っている小皿を俺に差し出してくれた。

綺麗に六等分された物の一つを有難く受け取り、さつそく口に放り込む。

ふむ。これが智花の味か……悪くない。というか、すごくいい。

オムレツと比べると少し固めにして形をしっかりと整えつつ、中は丁寧に何層にも折り重ねられている。

すごく柔らかいのだが、こうして切り分けられていても断面から外に零れ出ないようにしている絶妙の焼き加減。

確かに花織さんが作る本来の湊家の味と比較してしまうと、どうしても技術的に未熟な部分も出てしまっているのだろうが、これは単純に年季の差だろう——あ、ヤバイ。今、花織さんに、大変失礼な事を思ってしまった気がする。

そもそも花織さんに智花くらいの子供がいること自体驚愕なんだ



よなあ。ほんとお幾つなんだろうか？

と重ね重ね失礼な事を考えつつ、湊家の智花の味を心行くまで噛み締め堪能させてもらった。

「すごく美味しいと思うんだけどなあ……これより上があるの？」

「お母さんのはもつと美味しいですよ。それに昴さんは七夕さんのオムレツみたいな感じなのが好みなのは……」

確かに母さんのオムレツが好きだけど、別にそれ以外の卵料理は食べないってわけじゃないんだけどな。

俺は母さんのオムレツ以外絶対に食べない。なんてマザコンもいといとこじやないか。

……あれ？ もしかして俺、智花にそう思われてたのかな？

「俺の場合は母さんが卵料理はほとんどこれしか作らないからな。だから智花が作ってくれた卵焼きはすごく新鮮な感じだったよ」

「昴くんがオムレツ好きになったのは私の影響よね。私も好きだったから自分で作るようになって、色んな作り方を試してみて、その中で銀河くんが大好きだと言ってくれたのがこのオムレツだったのよ。それでいっつもこのオムレツを作ってたから昴くんも好きになっちゃって」

「はう……すっごく素敵なお話ですっ！」

なんで隙あらば親父との話で勝手に惚気ようとしてんだよ。智花もそんな感動しなくていいのに。

「あの……昴さん……よかったらいいんですが……もつと上手く作れるようになったら、また味見をして頂いてもいいでしょうか？」

「もちろん。っていうか、智花が作ってくれるたびに食べさせて欲しいくらいだよ」

まるで一世一代の告白をしているかのように緊張した様子の彼女の申し出に有難く答えさせてもらうと、頬を赤く染めて恥ずかしそうにしながらも、嬉しそうに微笑んでくれた。

「智花ちゃんを作ってるどころ見させてもらってたけど、こういう調理の仕方もあるんだなあーってすっごく感心しちゃったわ。今度また花織さんと一緒にお料理してみたいわね」

「あ、いいですね。お母さんも七夕さんとお料理できてすごく楽しかったっておっしゃってましたよ。今度またみんなと一緒に食事したいですねっ」

確かに母さんだけでなく花織さんにまでご負担を掛けてしまうのは心苦しいところではあるが、また女バスのみんななどの食事会をできるのなら、是非とも楽しみたいな。

ふむ。この調子だと智花はいずれ湊家と長谷川家両方の味付けを習得し両家の味を自由自在に組み合わせちゃうのだろうか？まさかハイブリット智花さん爆誕か!?

是非とも一家に一人欲し——いやいやいやいや、なんで智花にバスケ以外の事までさせようと考えてんだよ!!

智花だって俺と同じ学生なのに、毎朝激しい運動に付き合わせるだけで飽きたらず食事まで作らせるわけにはいかないだろうに。

さて、一品目の智花の卵焼きを堪能したところで、そろそろ食事を再開しなくては。

正直、一番最初に彼女の手料理を食べてしまったことの是非はなかなか判断が難しいな。

最初に最高の料理を味わえたとも言えるが、楽しみは最後にとっておくべきだったかもとも思えてしまう。

いや、彼女のことだ、きつと少しでも気づくのが遅れたら俺に手を出される前にと、早々と自分で処理してしまったかもしれない。

そう考えれば、やはり最初に彼女の味を堪能できたのは最高のタイミングだったと言える。

純度100%の小学生の味は何度も味あわせてもらったが、その中の一人が最初から最後まで作ってくれたのは……これで二人目か。

二人だけの秘密だから智花にも内緒だけど、十二歳になったばかりの紗季の初めての味。あれも良かったなあと、しみじみ思ってしまう。

本職の跡取りなんだから当然なんだけど、また食べさせて欲しいな——いや、ちゃんとお客としてね。

ま、そこら辺はいつかの楽しみにするとして、引き続き智花の味を

味わい尽くさねば。

次は何を食べようか次の目標を決め兼ねていると、どうやら卵焼き騒動が一段落して安心したのか、彼女も食事を再開しているようだった。

彼女の箸が伸びた先にあつたものは……意外な事にそれはハンバーグだった。

しかも心なしかハンバーグを見つめる彼女の目が輝いているように見える。

上品な彼女らしく丁寧に一口サイズに切っているようだが……え？

そんな大きいのが本当に入るの？

事の成り行きを見守る様にマジマジで見つめてしまっているが、彼女は気づかずに——心なしか嬉しそうにその大きな肉の塊を口に近づけていく。

そして、普段の彼女からは想像もつかないくらい大胆に大きく口を開きそれを頬張り始める。

とても嬉しそうな表情で目を細め、味を堪能しているところで俺の視線に気づいてしまった。

「……んん!? んっ……んん……ごっくっ……はうううう……」

幸福感で満たされていた表情から一転し、とんでもない姿を見られてしまったと思っっているのか目を見開いている。

慌てて口元を手で隠しながら急いで口の中の物を咀嚼すると、それをしっかりと飲み込んでしまった。

俺の方はあまりの慌て振りに喉を詰まらせなくて良かったと安堵するが、彼女の方はそれどころではなかったらしく、顔を真っ赤に染め上げ恥ずかしそうに可愛らしい唸り声を上げながら悶えている。

「ご、ごめん。 智花」

「昂くん。女の子がものを食べてるところをマジマジと見ちゃダメでしょ」

珍しく母さんから叱責を受けるが、これは仕方ないな。

せつかく彼女が美味しそうに食べていたのに、なんかすごく悪いこ

とをしてしまった気がする。

「はうう……す、すみません。お見苦しい姿を……うう……」

どうやら彼女にとって相当恥ずかしい行為に当たるとして、完全に顔を俯かせてしまっている。

俺が余計な事さえしなければ、彼女は気持ちよく食事ができていたというのに……

俺の責任でもあるし、なんとかフォローをしないと。

「智花、失礼な事しちゃって本当にごめん。でもさ、そんなに恥ずかしくないともいいと思うよ。智花はすごく美味しそうに食べてただけなんだからさ」

「そうね、昂くんもオムレツを食べてる時は本当に幸せそうな顔で食べてくれてるわね。そうやって美味しそうに食べてくれると一緒に作った甲斐があるわよ」

ここで俺を引き合いに出されるのは恥ずかしい……というか、俺もそんな顔してるのかと母さんに事実確認を追求したいが、今は智花が第一だ。

俺の恥ずかしい姿を暴露されたのは俺の責任だし。母さんからの辱めは甘んじて受けよう。

「はうう……お氣遣い、ありがとうございます……は、恥ずかしいんですが、実はお肉、大好きなんです……それで思わず……うう」

蚊が泣くような声で本当に恥ずかしそうに呟く。

気分を持ち直すにはまだ時間が必要そうだが、それでも健気にも俺達との会話に応じてくれていて、ただで十分だ。

「智花ちゃんのお家ではあんまりお肉の料理って出ないの？ 花織さんほどの腕前ならいくらでもレパートリーがありそうだけど」

「その……お母さんは私の好きな物を良く作ろうとしてくれてるんですが、お父さんからはあまり肉を食べすぎてはいけないと窘められてしまってます……」

「相変わらず忍さんは厳しいみたいだね。せめて好きなものくらい好きだけ食べさせてもらってもいいと思うんだけどな」

湊家の教育方針は相変わらず厳しいみたいだな。

とはいえ、そこに愛や優しさが無いかと言われれば、当然そんなことではないし、

その教育を受け続けたことでお淑やかで心優しく育った目の前の少女がいる時点で、それがどれだけ素晴らしい物であるかを証明しているようなものだ。

「いえ……その……恥ずかしながら、お父さんも私が食べ過ぎないようにと心配してくれてるんだと思います……」

「それじゃ、今日くらいは遠慮しないでいっぱい食べて行つてね」

母さんの言葉に小さく頷き、ようやく顔を上げてくれたが、頬は真っ赤に染まったままだ。

「あの……七夕さんのお料理は本当に美味しく頂いてますので……どうかあまり見ないで頂きますと……は、恥ずかしいので……」

「わかってるよ。俺の方こそ恥ずかしい思いさせちゃって本当にごめんね」

俺のせいで少しだけ慌ただしくしてしまっただが、彼女の「えへへ、美味しい」という無意識に出た嬉しそうな呟きが俺の耳に届いたことで、ようやく最初の和やかな空気が戻ってきてくれたことを実感する。

でも、肉が好きってのはちょっと意外だったかな。

好み一つとつても、いつの間にかお淑やかな智花は。って勝手なイメージ持っちゃってたのかもしれないと少し反省。

彼女のパートナーを務めさせてもらってる以上、もっともっと彼女の事を良く知らないとな。

今回の事があつた手前口には出せないけど、智花が幸せそうな表情で大好きなお肉を口いっぱい詰め込んで、口の中で溢れ出る肉汁や食感に恍惚としている姿もいつか見てみたいな。

そんなことを考えながら、俺も大好きなオムレツを口に送り込む——うん。美味しい。

「あの……昂さ——ほう……えへへ……はうっ!? し、失礼しましたっ」

「うふふ、いいのよ。智花ちゃんだって昂くんに見られちゃったんだから。好きな物を食べてる時って本当に良い顔するでしょ」

くっ、油断した!! 大の男がオムレツで頬を緩ませてるだらしない顔してたの智花に思いつき見られた。

彼女の事だから俺に何か話し掛けようとして偶然目撃してしまったんだろうけど、

母さんとはもかく智花に見られたのは俺もすごく恥ずかしい感じがするぞ。

「いや、いいんだ。俺だって智花のを見ちやっただから……これでおいこだ。別に恥ずかしがらずに美味しい時は美味そうに食べていいんだっ」

「えへへ。そうですね。昴さんと七夕さんと頂く晩御飯。すっごく美味しいですっ」

照れ隠しにわざと高らかに宣言すると、智花もそれに乗っかってくれる。

お互いに顔を赤くしながらも、ようやく二人で顔を向き合わせて笑い合えたのだった。

## 智花二回目のお泊り7

晩飯をたつぷりと堪能させてもらい、引き続き三人で食後に母さんが用意してくれたお茶を飲みながら疑似的な家族の団欒を続けた。

いつもなら食後は早々に自分の部屋で引き上げてしまうのだが、智花と母さんの会話が妙に弾んでいて、ほぼ聞き手に回りながらもそこに参加させてもらっていたのだった。

やはり女性同士（母さんを智花と同じ『女の子』で分類したくない）だと色々話しやすい事もあるんだろうなあ。

バスケット以外の何気ない日常や彼女の好きな事や習慣など、今までに聞いた事がなかった、彼女の知らない一面を知る事ができ、ささやかな喜びを感じる。

まあ代償として昔の俺の恥ずかしい思い出を智花に暴露されてしまっているわけだが……

彼女から一つ情報を得る度に、母さんは昔の俺のやんちゃな行動を一つ、聞いてもいない彼女に提供するという謎のやりとりが成立してしまっていた。

なぜか智花の方も目を輝かせながら、興味津々にうんうんと頷いているのだが、彼女に昔の俺を知られる事がたまらなく恥ずかしい。

「えへへ、昴さんも意外とやんちゃさんだったんですね」

「ま、まあ否定はしないけど……」

こうして昔の俺の行動一つ一つに律儀に感想を述べてくれているのだが……恥ずかしすぎる。

今の彼女くらいの年齢の当時の俺と彼女を比べると自分が如何に精神的に幼いガキだったのか痛感させられてしまう。

今すぐにでも自室に逃げ出して、傷ついた心を慰めたいが、俺の智花の知らない話も聞きたいジレンマ。

「それに負けず嫌いなよね」

「明らかに父さんとミホ姉のせいだろ。あいつら子供相手にすら全然手加減しねえんだぞ。しかも俺が悔しそうな顔すると余計に勝ち

誇った顔しやがるし」

「もしかして私とする時にいつもハンデを付けて頂いてるのは、そういうのも理由だったりします?」

昔の自分と私を重ねているのかな? と思っっているような苦笑気味な表情で彼女が訪ねてきた。

「そういうつもりはなんだけどね。前にも言ったように俺と智花じゃ身長差がありすぎるから、ゲームを成立させるためのものであって、それ以外には何も無いよ。もし智花が俺を抜けたなら、それは純粋に智花の実力で俺を抜いたって事になるんだから」

だからこそ、俺はまだ智花に抜かれるわけにはいかないんだけどね。とこっさり心の中で付け加える。

「昴さんのお父さんは絶対にそういう事はなさらないですよ?」

「ああ。絶対じゃない」

「銀河くんは何でも本当に楽しそうにしてるから、だからついつい本気になっちゃうんじゃないかしら?」

それもない。あれは毎回、俺が悔しがるのがわかっててやってる目だ。

「やっぱりミミちゃんすごいんだなあ。手加減なしの昴さんのお父さんを抜いちやっただんですよね」

「ああ。そういえば……」

親父相手に唯一初見殺しが通用した最初で最後の一回きりの……だけ間違いなく大金星だろうし、親父にとっても屈辱的な黒星となった事だろう——だからこそ

多分そのあと、その身にたつぷりとオトナゲナイ大人の強さを思う存分味あわされちやっただらうなあ。

親父に一回抜かれる度にどんどん涙目になっていくミミちゃん——智花に負けず劣らずの小柄の銀髪美少女の姿が容易に想像できてしまう……

……………あれ?!

そこである可能性に気づく。



……俺が智花に最初に余計なもの——ハンデを付けるなんて言わなければ、最初やった時に智花に抜かれてたんじゃ……

明らかに格上ぶってる相手に、本気を出さずに様子見をしてやる。みたいな態度で挑まれれば、相手だってこっちの実力を見定める様に動いてしまうだろう。

何よりも一番重要なのは、俺がジャンプ禁止だと言ってしまった時点で、智花は自分の最大の武器であるジャンプシュートを封じてしまった事だ。

本来なら彼女がほんの少しだけこちらの予想を超えたタイミングでジャンプシュートを放ってしまえば、それで俺の負けが決まっていただろう。

ハンデは智花ではなく俺に有利に働いていたのでは……

確かに仮に抜かれたとしても最初の一回だけで、それ以降は今までの通りの戦績をキープできていた自信はある。

だけど、そんな些細な事なんかよりも見逃せないもつともつと重大な問題が浮かび上がってきてしまった。

——もしかして俺は知らない間に智花の大切な初めてを奪ってしまったのではないのだろうか。

以前彼女が不運なアクシデントのせいで逃してしまった初勝利以上に決定的な勝利を、それよりももっと早く手にする事ができたはずなのに、

俺の下らない拘りのせいで、彼女は初勝利の可能性を完全に摘み取られてしまっていたのだ。

それなのに彼女は今でも俺を遠い目標だと言って尊敬の眼差しを向けてくれている——向けてしまっている。

ヤバイ……なんか智花にすごく申し訳ない気がしてきた……

い、いやっ大丈夫だ。智花ならいつか絶対に俺を抜いてくれる。成長期なんだから身体だつてどんどん大きくなってくるし、テクニクだつて日に日に上達してる。

毎日相手をさせてもらってる俺が言うんだから間違いないっ。うん。

それにお互いの全てを曝け出しあった今になって、下手に手加減して抜かせるような事したって、絶対智花に気づかれるし、何より俺も彼女もそんな不本意な初体験を望んでいるわけがない。

智花にとっては当然だが俺にだって智花の初めては本当に大切なものになるんだから、ちゃんとお互いが納得できるものでなくてはならない。

きつと、そう遠くない未来に正真正銘の彼女の大切な初めてが訪れてくれる事を信じている。

がんばれ智花。俺、智花の事、信じてるから。

芽生えてしまった罪悪感を誤魔化すように、何も知らぬ純粋な少女にそつと心の中でエールを送る。

「それじゃ、そろそろお腹も落ち着いた頃でしょうし、お風呂に入りましょうか」

頃合いを見てポンと両手を合わせながら提案してくる。

確かにとても自然な流れのように見えるし、初見ならきつと騙されてしまうかもしれない。

「そうですね。それでは私が最後に——」

案の定、何も知らない智花はあっさりとお母さんの提案に乗ってしまっただが——俺は絶対に騙されないぞ!!

自然体を装いながら、こちらをその思惑に乗せようとしてくる言動を何度も見てきたが、俺はその全てを見破ってきたんだ。

「今日は智花ちゃんも泊りに来てくれたんだし、三人で一緒に入りましょうか」

「あついいんですかっ。……………ふえ？ さ、さん……………に……………ん？ ふ、ふええええええ!! す、すす昴さんもですかっ!？」

自分自身を指で指し、続いて目線で母さんを見ながら人数を数えていく、

なかなか見つからない三人目の姿を探し、俺と視線が合うと予想通

り悲鳴混じりの驚愕の声を上げる。

「却下だ!!」

当然母さんのふざけた提案なんぞ受け入れられるわけがない——  
—つてか、だから人様の大切な一人娘になんて扱いしてんだよ!!

「どうしても? 智花ちゃんも一緒なら昴くんも入ってくれると思っ  
たんだけどなあ」

「わ……私が一緒だと入るんですかっ!?!」

「そんなわけあるかっ!!」

この母は普通に考えたら、なぜそれだと余計入らないという発想に  
至らないのだ。

俺と智花の組み合わせは考えうる限りで最大の禁忌だろうがっ。

だからと言って母さんと入るといふ選択もさらさらないが。

彼女を通じて女バスのみんなに俺と母さんが一緒に風呂に入る関  
係だと誤解されてしまったら、

これまでに俺が必死になって築きあげた彼女達との清く正しい交  
際関係が一気に破綻してしまう。

こんなくだらない理由で小学生達との関係を壊されてたまるかっ

!!

しかし、状況は悪いな。

俺は母さんをあしらうのは慣れているが、心優しい彼女の方は母さ  
んの扱いに慣れてもないし、下手をすると母さんの方に加わってし  
まうかもしれない。

それこそ無意識に人との触れ合いに飢えてしまっているところも  
あるし、彼女が一時の気の迷いで取り返しのつかない選択をする前  
に、なんとしてもこちらから妥協点を提案しなくてはならないな。

——すまない智花。俺のために犠牲になってくれっ。

「……智花。悪いんだけど、母さんと一緒に入ってやってくれないか  
? 俺は一人で入るから安心してくれていい」

心を鬼にして、もっとも被害が少ないであろう苦渋の決断を口にす  
る。

「は、はい……それなら、大丈夫……です」

「本当は昴くんも一緒だと嬉しんだけどなあ……でも、あんまりわがまま言っちゃいけないわね」

よし。これなら俺と智花が一緒に入るといふ最悪の結末だけは回避できる。

無理に断る事もできるだろうけど、それだと間違いなく智花は母さんに対して負い目を抱いてしまう事だろう。

それに彼女も一度はその提案に乗りかけてしまったのだから、一人で入るよりは誰かと一緒の方が気も楽だろう——たとえ相手が母さんであろうと。

「母さん。絶対に智花に変な事すんじゃねえぞ」

俺の無責任な提案の被害をモロに被ってしまった彼女のためにも最低限の釘だけは打っておく。

「わかってるわよ。昴くんは心配性ねえ。それなら一緒に入ってくればいいのに」

だからそれは絶対にできんというのに、この母はなぜわからんのか——もしかしてわざとか？

からかうにしても、彼女を巻きこんじゃ駄目だろうに。

「それじゃ、智花ちゃん。お話の続きいっぱいしましょうね」

「は、はいっ！ 昔の昴さんのお話いっぱい聞かせて頂けるのすっごく楽しみですっ！」

あれ？ もしかして俺、判断を見誤っちゃったのか？

俺は智花の話を聞きそびれた挙句、母さんに俺の恥ずかしい過去を智花にたっぷりと垂れ流されちまうんじゃ……

……いや、いいんだ。これは彼女を利用した代償と名誉の負傷だ。大切な智花の事を守る事ができるのなら、俺の恥ずかしい秘密くらい大した問題じゃないんだっ。

「ゆっくり温まっておいで……」

「あまりお待たせしないようにしますので、少しだけお待ちくださいね」

「あらあら。ダメよ、智花ちゃん。女の子なんだから、ちゃんと綺麗にしないと。背中とか洗いっこしましょうね」

和気あいあいとしている二人を送り出しながら、俺は傷ついた心を  
ひっそりと癒すべく自室へ戻るのだった。

## 智花二回目のお泊り8

智花の風呂上りを待ちながら、これから過ごすであろう二人の長く熱い夜のための準備を再チェックだ。

と言ってもお互いの事を良く知り尽くしている俺達だから、最低限の準備だけですぐ始められるだろう。

智花を初めて誘う時は、本当はお互いに大好きだっというのがかつてるのに、変に緊張してしまって、なかなか回りくどい誘い方になってしまったのが懐かしいな。

今となっては始める前に少し会話を交わすだけで、お互いにすぐにその気になれるくらいの関係になれたんだから、前に思う存分する智花とするつもりだったことを今日こそいっぱい楽しませてもらうでしょう。

——智花が眠くなるまでずっとずっとバスケットの試合映像を見ながら、バスケット談義だ!!

ちやうど確認が終わったのを見計らったかのように、控えめにドアをノックする音と待ち望んでいた少女の声が聞こえてくる。

「昴さん。お待たせしました」

「ああ。遠慮しないで入っておいで」

残念。できれば今回も満面の笑みを浮かべながらドアを開け放つて欲しかったのだが……

いや、確かに突然勢いよくドアを開けられればびっくりするし、これがミホ姉だったら即戦闘開始の合図となるが、

普段はとても礼儀正しく物静かでお淑やかな少女がするのであれば、そのギャップがまたなんとも微笑ましく思えてしまう。

「失礼しますねっ」

彼女が俺の部屋に踏み入れると、いつものように彼女愛用のミルクとせっけんの混ざったような甘い香りが部屋中に漂い始める。

そして、これもまたよく見る機会が増えてしまっているが、未だに見慣れない——というか、極力意識しないようにしている彼女の寝巻姿。

彼女がシャワーを浴びること自体はいつも通りなのだが、夜という普段とは異なった環境のせいなのか、火照りで赤く染まった頬や首回りが普段から見慣れているはずの少女を強く意識させようとしているかのようだった。

当の本人もおそろおそろる部屋に入って来たものの、どうしようかと迷っている感じだが。

まあ、それもそうだよな。湯上り直後の女の子が俺の部屋に入ってくることで自体がそもそもの間違いだし。

「とりあえず、ベッドにでも座っててよ。今日はここが智花の寝床なんだからさ」

「は、はいっ……なんだか緊張してしまいます」

俺の言うとおりにベッドに腰を下ろしたが、まだまだガチガチに固まっちゃてるな。

「俺も風呂に入ったらすぐに戻ってくるから、それまでゆっくりしててよ。テレビとか観たいものがあつたら自由に観ていいし、俺の部屋にあるものだったら、なんでも自由に使っていていいよ」

別に智花ならガサ入れみたいなことをするわけがないし、見られて困る物も別にならないから大丈夫だろう。

強いて言うなら、晩飯前に作った俺の若気の至りが書き記されたノートがあるが、それこそ夏休みの頃の真帆みたいに興味本位であちこち調べまわさない限り、見つけることも興味を引くこともないだろう。

「ふえ!? い、いいんですか? ありがとうございますっ! それでは、お待ちしてますねっ」

俺の言葉に直前までの緊張を忘れ去ってしまったかのような反応の速さだ。

驚くくらい目が輝いて活き活きとしてるけど、もしかして俺の部屋の物でそこまで興味を引くものがあつたのだろうか?

とは言え真帆やひなたちゃんみたいに突飛な思いつきや行動で無茶な事をするわけもないかと判断し「それじゃ入ってくるね」と言いながら、部屋を後にした。

「昂くん、お待たせ。ゆつくり入ってきてね」

「はいはい。ってか、なんかすごい嬉しそうだな」

風呂場に向かう途中で母さんとぼったりと遭遇してしまったが……どうやら思う存分智花との入浴タイムを満喫していたみたいだな。

普段からやたらと誰かと一緒に入りたがってるし、智花のおかげでその欲求がようやく解消されて満足したのだろう。

「智花ちゃんのお風呂。本当に楽しかったわあ。やっぱり若い子って良いわよねー。すごい柔らかくてふわふわのプニプニでお肌もすべすべ。私も若返った気分だったわあ」

「それは良かったな」

ってか、いちいち感想を言わないでくれ。思わず智花で変な想像をしてしまいそうになってしまったじゃないか。

「あ、智花ちゃん大丈夫だった？ 長湯させちゃってなければいいんだけど……」

「んー？ 別にいつも通りだったと思うぞ。特に疲れてそうな感じでもなかったし」

もしそうだったとしても部屋でゆつくり休んでもらってるから大丈夫だろう。

「それなら良かったわ。つい話に夢中になっちゃったから」

「ずいぶんとお楽しみだったようで……いったいそんなに何を話していたんだ？」

あまり女の子の話にズカズカと踏み込むのもどうかとは思ったが、母さんと話す程度の事だったら別にそれくらいならいいだろう。

散々俺の恥ずかしい過去を暴露して手に入れた情報なんだ、俺にだって少しくらいは彼女の事を知る権利があるはずだ。

「昂くんには内緒。きつとヤキモチ焼いちやうわよ」

「なんだよそれ」

ヤキモチって、何を言ってるんだか……相変わらず感覚がずれていくというか、まあ問い詰めたところで望んだ答えが返ってくることは



なさそうだな。

「昴くんがどうしても知りたいなら、ちゃんと智花ちゃんから聞いてあげてね」

「はいはい。そうさせてもらおうよ」

早々に会話を打ち切り、そのまま風呂場へ。

あ……どうせなら、先に母さんに智花と楽しい夜を過ごすために飲み物とかお菓子の用意を頼んどけば良かったな。ま、上がってからでいいか。

「はい。せっかくだから智花ちゃんから頂いたお菓子もいれちゃったから、これ持って行ってあげて二人で仲良く食べてね」

風呂を済ませて、一度リビングに寄るとまるで俺の考えがわかっていたかのように、準備してくれていたわけだが。こういうところは本当に察しが良いよなあ。

「智花。入るよ」

飲み物とお菓子を乗せたお盆を手に、声を掛けながら数回ドアをノック。

自分の部屋だから必要はないとは思っただけど、やはり智花がいると思うと無意識に一応確認しなくてはと思ってしまう。

彼女の事だから、例えいきなりドアを開けたところで油断している姿を拝めるとは思っていないが。

「ふええ!? す、すみませんっ! い、今は……あ、いえっ。ど、どうぞ!!」

入ることを許可してくれたものの、なにやらひどく慌てているような……ほ、本当に入っているのだろうか?

わずかな逡巡の末に、入っていいと言われたのにいつまでもこのまま棒立ちしていても埒が明かないと、意を決してドアを開ける。

俺のワイシャツを羽織ながら怯えた瞳で俺を見つめる智花がいた。

俺に怒られるのではないかと、ひどく怯えてしまっている彼女になんて声を掛けようか考えつつ、とりあえず持ってきた二人の夜を盛り

上げるための品々を並べていく。

「す、すみませんっ。私、また昴さんのワイシャツを勝手に……はうう……」

「せっかくだからさ、ネクタイとかも付けてみる？」

「ふええ!? あ、あの……お、怒ってないんですか？ 私、昴さんのワイシャツを勝手に着てしまったのに……」

なんか前にも似たようなやり取りしたような……ああ、智花を抱かせてもらった時か。

慎ましやかな少女が勝手に人の衣服を着るといのは確かに意外な事ではあったが、別段怒るような事でもない。

むしろ大人びて見えている少女が年相応に背伸びしたがる仕草に微笑ましささえ感じてしまう。

もう少しで中学生なのに、俺の制服を着て一気に高校生気分か。

「かわいい智花に男の格好をさせるのはちよつとなあ……っと思うけど俺の制服しかないからね」

「か、かわっ!? ……その……いい、いいんですか？」

「俺ので良ければね。本当は女子の制服の方が智花には似合うんだろうけど……今度葵に相談してみようか？」

「い、いえっ。昴さんの制服を着させて頂けるだけで十分ですっ。私はきつとみんなとずつと慧心の方へ進んでいくと思いますので」

となると、彼女がワイシャツに袖を通す機会があったとしても当然先の話かな。

それならワイシャツに憧れるのも無理もない。男には堅苦しいイメージしかないが、何故か女の子には不思議な魅力を感じさせてしまう物らしいし。

「それじゃ、ボタンを留めていつてくれるかな。ネクタイは俺が付けてあげるからさ」

「は、はいっ」

恥ずかしそうにしながらも、しつかりと返事をしてくれたことに、やはり彼女は高校の制服を着たかったのだ。という自分の判断が正しかったと安堵する。

彼女がしつかりとワイシャツのボタンを留め終わったところで、しゃがんで目線を彼女と同じ高さに合わせてネクタイを首に回している。

あれ？ 正面からだと上手く結べないな。

自分でするのは慣れてるけど人にしてあげるのって意外と難しいな。

「ごめん智花、ちょっと後ろに回るね——っと、どうかな？ 苦しくない？」

「ふあつ、ふあい!!」

やっぱ初めてのネクタイで緊張してるのかな？ 声が少し上擦ってしまっているな。

俺も初めてネクタイを締めた時は、なんか大人の仲間入りをしたみたいなのがして、生意気にも誇らしげに感じちやっただけなあ。

「よしっ。それじゃ、はい。最後にこれを着てね」

俺から手渡された上着を羽織ったところで、七芝高校の湊智花（男子制服版）の完成だ——下は履いてない。

ワイシャツも上着も肩幅が大きすぎたり、袖がかなり余ってしまった手が隠れてしまっているが、ちゃんと首元から上はしつかり着込んでいるから写真を取ればそれっぽく見えることだろう。

「は、はうう……わ、私、昴さんの制服着ちやってるよお」

顔を真っ赤にして照れちゃって、すごくかわいいな。

「それじゃ、智花こっち向いて」

「ふえ？ ……ふええ!?! だ、ダメですつ!! お願いしますつ。しゃ、写真は撮らないでくださいっ!!」

「でも、それだと智花が自分の姿確認できないだろ」

「だ、ダメですつ! 私、今、絶対すごく変な顔しちやってますからっ!! だ、だから、撮らないで下さいっ!!」

本音を言うと、智花に見せるだけじゃなくて俺がいつまでも彼女のこの姿を楽しめるように残しておきたかったという欲望もあったのだが、

さすがに本人が嫌がってるのに、無理矢理撮るのもかわいそうだよ

な。

彼女の気持ちが悪くなり着いた後、一通り高校生気分を堪能してもらったところで、はにかみながら彼女が俺の制服を脱ぎ始めたわけだが……

まずは上着を受け取りハンガーに掛け、続いてネクタイを解いてあげたところで——とつさに目を逸らす。

ワイシャツのボタンを一つ一つ丁寧に外していく度に、少しずつ彼女の白い柔肌が曝け出されていく。

脱ぎ終わったワイシャツを丁寧に畳んで俺に返してくれる薄桃色のキヤミソールとショートパンツのみを身に纏った少女。

彼女からしたら、普段通りの寝巻姿に戻っただけなんだが……

あえて意識しないようにしてたけど……やっぱりこれ、男が見ちゃいけない姿なんじゃ……

正確には違うのかもしれないけど、男から見たらほとんど下着同然のような姿に思えてしまう。

無自覚に晒されてしまっている彼女のそんな姿を見てしまったいいのだろうか？

——いや深くは考えないようにしよう！ 何も知らない男が女の子の服装についてとやかく言うわけにもいかないし!!

ここで変な事を口走ってしまい、不本意に彼女に身の危険を感じさせ怖がらせてしまったのは元も子もない。

もしかしたら、このあまりにも男に対して無防備すぎる彼女達に少しは警戒心を持ってもらうためにはいいのかもしれないが、

わざわざ好き好んで彼女達に嫌われるような事をする覚悟は俺にはない。

まだ俺、大好きな小学生に嫌われるような事はしたくないしな。

「智花。見た感じ大丈夫そうだと思うけど、まだ眠くないよね？」

「はい。大丈夫です……そ、その、色々あって余計に目が冴えてしまったと言いますか……」

よし、それなら今日一日色々あったけど、そろそろ俺と智花らしいことを始めさせてもらおうとしよう。

## 智花二回目のお泊り9 (完)

失礼にも抱いてしまった智花に対しての不埒な想いを自分の中でしっかり払拭する。

今もなお、先ほどまでの行為に頬を染めながらも、俺を信用し純粋な好意と笑顔を向けてくれる少女を、自分の中で好き勝手に穢すような事はしたくない。

「今回は俺もしっかり観た事がない物も多いんだけど、もしかしたら智花は観た事あるかもしれないかな？ それでも良かったら付き合って欲しいんだ。」

「はいっ。……でも、少し意外です。昴さんだったら、私よりも詳しいと思うんですが？」

「うーん、今までは男子のバスケの試合はいっぱい見てたんだけど、女子のはほとんど見たことがなくてね……智花は多分両方いっぱい見てると思うんだけど」

今でこそ、智花達のおかげで異性——特に年下の子に対して抵抗を感じる事もなくなったけど、昔は我ながら苦手意識を強く持ちすぎだよな。

まあ、あの頃は中学のチームをまとめあげる事を第一に考えてた時期だから、色々と有力な男子のデータをかき集めるのに必死だったし、

葵に無理やり付き添わされた時に偶然目についた麻奈佳先輩のプレイに魅せられて、高校からも心機一転して頑張るぞ……って時にあれだからな。

——おっと。せっかくこれから智花と楽しい夜を過ごそうというのに一人で辛気臭い感じになってちゃダメだよな。

「そうだったんですか？ えへへ、でも昴さんと一緒に見れるのなら、多分私じゃ気づけないところも色々教えて頂けるかと思うと、すごく楽しみですっ」

「はは。そう言ってもらえるとありがたいんだけど、俺も初見ばかりだと、いっぱい見落とすちゃうと思うよ」

ベッドに置いていた飲み物とお菓子が乗ったトレイを移動しながら床に腰を下ろすと、彼女も俺の隣に座ってくれる。

「よし、それじゃ智花から貰ったお菓子を頂きながら、一緒に楽しむとしようか」

「え？ でも…それは、お詫びの品で…：昂さんと七夕さんにお二人に召し上がって頂いた方が…：」

ま、確かに彼女ならそう考えるよな。相手にお詫びとして渡した物に自分が手を付けてしまうわけにはいかない。

「ちゃんと母さんにも食べてもらおうし、きつと花織さんは智花にも混ぜて食べてもらうために今日持つて行くようにしたんじゃないのかな？」

「そ、そうでしょうか？」

本当のところはどうかはわからない。

もしかしたら彼女なら最低限の礼節を弁えているから、そんな粗相をするわけがないと思つての事かもしれない。

忍さんや花織さんの思惑を裏切つてしまう行動を彼女にさせてしまう事になるかもしれないが、それでも俺は――

「できれば、俺は智花と一緒に食べたいな。もちろん苦手だったら無理強いはいないけど…：もしかして、家では行儀悪いからダメとか言われてたり？」

「い、いえ…：自分の部屋ではよくお菓子をいっぱい食べてしまう事もあるので…：」

「それなら、せっかく美味しくそんな物をもらったんだし、智花と一緒に食べた方がもつと美味しく食べられるに決まつてる」

完全な球状や半円、四角や釣鐘型にハート型。様々な形の一口大のチョコが皿の上に散りばめられている。

俺が先に手を出しちやえば、智花だつて食べやすくなるだろうと、さつそく頂いたチョコの一つを口に放り込む。

きつと高価なものなんだろうし、美味しいのは間違いないんだけど…：うーん、あまり味の違いはよくわからないな。

「そ、それでは…：少しだけ頂きますね。えへへ…：昂さんとバスケ

の試合を観ながら、お菓子まで頂いて……すごく贅沢な事をしてしまっている気分ですっ」

彼女も一つを手にとって小さな口の中に放り込んでくれた事に嬉しきを感じる。

こんな事が彼女にとって——いや、俺にとっても、すごく贅沢な事だよな。

「今度はさ。みんなと一緒にこうやって過ごしてみたいな」

「はいっ。きつとすごく楽しそうですっ！ あ、でも……もしかしたらみんなには少し退屈な思いをさせてしまうかも……」

「大丈夫だって。鑑賞時間は少し短めにして気分が盛り上がったところで、今度はみんなで本番を始めればすごく楽しめるに決まってる！」

さっそく影響を受けて真似をしようとした真帆やひなたちゃんが紗季に窘められる光景が思い浮かんできた。

どうやら彼女も同じ光景が浮かんだようで、俺と同じく困った様な苦笑を浮かべているが、どこか楽しそうな表情のように感じられた。

さて、先ほどからテレビの向こうで数々のスーパープレイを繰り広げてくれている選手たちにも申し訳ないので、そろそろ本格的にそのプレイを思う存分堪能させてもらおう事にしよう。

「ほら。んんんっ」

「あっ本当ですっ！ 私全然気づきませんでした」

少しだけ映像を巻き戻し、コマ送りから目的の瞬間で停止させる。

一人のフォワードがフェイントを織り交ぜながら上手くディフェンスを躲したところだ。

ここから先の映像はマッチアップを制したオフエンス側の選手が、そのままシュートを決めている。

この二人の対決に注目してしまいがちだが、バスケはチーム戦だ。両チームの他の選手達も鎬を削り合い、少しでも自分たちに有利な環境を作り出そうとしている。

ヘルプに回ろうとしている者を止めたり、それぞれの持ち場で行わ

れている細かなサインやフェイントの数々。

そういったものを、多分に自分の推測交じりにではあるが、各選手ごとの心理や思惑等を説明していくと、興味津々に何度もうんうんと頷いてくれる。

「やっぱ、私ってまだまだなんだなあ……もつと良く見て動けるようにならないとっ」

「そんな事ないって。みんなボール持つてる選手に注目が集まるのは自然な事だし、俺は自分のポジション柄、全体の把握とか分析するのが癖みたいになってるだけだよ」

いくら鍛えても俺の体質ではフィジカル面ではどうしても及ばない場面に遭遇し、そのたびに苦渋を味わわれ続けてきた。

だからこそ、どうしようもない部分を仲間や理論的に組み立てた戦術によって補う事で、やつとの想いで、徐々にか細い勝機の糸を紡ぎ出す事ができてきたし、これからだってそのつもりだ。

まあ、最近では理想以上に恵まれた体を持っている少女や、決して恵まれているわけではないのに、純粋な努力や有り余る才能で全てをひっくり返してしまうような規格外な少女達を数多く見つけ出してしまったが……

「やっぱり私、昴さんにバスケットを教えて頂けて本当に良かったですっ」  
そんな規格外な少女の一人がいきなり俺に向かって感謝の言葉を告げてくれているわけだが……

「智花だったら、一人でもどんどん上手くなってたと思うよ」

「そんな事ないですよ。昴さんに教えて頂かなければ、私は本当のバスケットの楽しみ方を知る事も、みんなに教えてあげる事もできませんでしたから……」

「これからは、みんなでいっぱい教え合ったり、気づき合える楽しみが待ってるよ」

「はいっ！……その、ご、ご迷惑でなければ、昴さんにももつと色々な事を教えて頂けたら……」と思います」

「俺で良ければいっただって構わないよ。俺の方だって智花達から教えてもらえた事がいっぱいあったんだし、これからもたくさん気づかせ



てもらえると信じてる」

俺はまだ目の前の少女が今までにどれだけの物を一人で背負い込んできてしまっているのかを全て把握しているわけではない。

せめて彼女の友人達と同じくらいは背負わせて欲しいのだが、そこは彼女達に敵わないし譲ろう。

そのかわり彼女達では背負えない部分を俺に背負わせてもらえたら、それ以上に嬉しいことはないだろう。

「んんっ!? な、なに……これ?」

「どうかした?」

少しだけ偉そうな解説をやめて、純粹に一バスケットファンとして試合映像を眺めていると、不意に隣に座っている少女から呻き声のようなものが上がる。

「あ、すみません……その、頂いていたチョコの中から、なんかドロっとしたものが突然出てきて驚いてしまいました……」

「大丈夫? 無理しないで変だと思ったら出していいんだよ」

少女の驚きの声に何事かと思ったが、どうやら大した事ではなく一安心。

確かに、俺も何個か食べてて苺やココアの味がするクリームを固めたようなものが入っていたりしたから、それに少し驚いてしまっただけだろう。

「ん……んんくっ。だ、大丈夫です」

口元に手を当てながら、一度ごくりと喉を動かしたところを見ると……どうやら飲み込んでしまったようだ。

「すみません、お見苦しい姿を見せてしまいました」

「なんか苦手な物あったら遠慮なく言ってよ。別に無理に全部食べなかつたっていいんだし」

「い、いえ。本当に少し驚いてしまっただけです。……なんか熱くてドロっとして少し苦かったです。それに喉に絡みつくような感じがして……でも、ちよつと癖になつてしまえばもうそんな味でした……」

ん？ ……それって……まさか……

まだまだ数多くのチョコが乗っている皿を確認する——智花が食べると思ってあまり手を出していなかったハート型がやたら多く残っている気がする。

「それってどれだかわかる？」

「えーと……これだったかな？ あ、もう一つ頂きますねっ」

彼女が指さしたチョコと同じ形の物——釣鐘型を一つ取ると同時に彼女も同じ物を一つ取り、同時に口に放り込む。

咀嚼。

直後に彼女の言葉通り少し苦く熱いような液体が口の中に流れ込んでくる。

確信。

もしかしたら、俺に変な感じがするものを食べさせないようにと、夕飯の卵焼き同様に自分が少しでも多く担当しようとしてしまっているのかもしれない。

だがダメだ。これは智花が食べちゃいけないやつだ!!

法律的には一応問題はないのだが、彼女の体質的に例え少量でも極力摂取を避けるべき物が含まれていた。

「智花っ。本当に無理に食べてなくいいんだっ！」

「ふえ？ ……大丈夫ですよ。苦いのも気にならなくなってきまひたし……それになんだか体もぽかぽかしてきましたあ」

彼女に声を掛けると同時にぎっと彼女の全身を軽く見渡してみたが、特に柔らかかそうな頬もだが、体中が全体的にほんのりと朱に染まってきてしまっていた。

俺が確認しただけでも、彼女はすでに二個も食べてしまっている。

「昂さーん。そんなに見つめられてしまうと照れてしまいますよお……」

「あ、ああ。ごめんね。それより、体の調子は大丈夫？」

「ふあい。別に変なところはないですよお？ でもなんだか、ふあう……ふわふわしてきましたあ」

大丈夫だ。少し不安定な感じがするが、まだ彼女は理性を保つてく

れている。

このままの状態を維持して時間を掛けて行けば、彼女の自然回復も期待できるかもしれない。

「はうう……昴さんの前で、はしたないことなのに……手が止められないよお……」

再び彼女の手が件のチョコへと伸びてしまっている。

ダメだ。これ以上彼女に食べさせるのは危険すぎる！

「と、智花っ！」

「はう!? うう……すみません昴さん。このチョコすごく美味しくて……」

頬を赤く染め、瞳を潤ませながら、俺に欲しいとねだられてしまっている。

引つ込み思案な少女がしてくれる数少ないおねだり……

しかも俺が呼び止めてしまったせいで、このままだとまるで俺が彼女の粗相を叱責してしまったような終わり方になってしまう。

「ほらっ。後二つ残ってるから、一個ずつ食べよっか」

「あーん……えへへ。昴さんに食べさせてもらっちゃった……ふあう……美味しいよお……」

これは仕方ないよな。まだこれで彼女がああ状態になると決まったわけじゃないんだ。

わざわざ俺が掴まんだやつを彼女の口元まで運んで食べさせてしまったのは、間違いなく俺の責任だが。

危うく俺の指先が彼女に口に触れてしまいそうになったが、とつさに指を離して避けられたからセーフだろう。

「えへへ。昴さんに食べさせてもらったのが一番美味しかったれすっ」

両手で赤く染まった自分の頬をおさえながら、幸せそうな笑顔を浮かべている。

どうやら、危惧していた事態も杞憂で終わりそうな事に安堵し、一度彼女から視線を外す。

さて、残った最後の危険物の処理に掛かるとしよう——え？

突然、がしつと腰のあたりに子供一人分くらいの重みと衝撃が走る。

「すばるふあんっ。すばるふあんっ。すばるふあんっ!!」

「と、智花!」

俺の一瞬の隙を突き、少女が全身でしがみつくように抱き着いてきた——いや、慌てる事はない。これはもう攻略済みだ。

今までは普段の彼女からは想像もできない行動に、こちらも激しく動揺してしまっただが、俺はもう彼女の抱き癖を知っている。

力いっぱい俺を抱きしめてくれる少女を、俺の方からも優しく抱き返してやる。

たったそれだけで彼女は安心し、すぐに大人しくなってくれる。

これまでの経験上この状態の智花の持久力はそんなに長くはない。

このまま優しく抑え込んでいけば、すぐに活動限界を迎えて安らかな寝息を立てて事なきを得るはずだ。

「えへへ。すばるふあん、やっとわたしのこころに来てくれましたー。うれしーれふー」

俺に抱き返された事を喜び、彼女は全身をこすり付けるように甘えてくる。

まだ色々未成熟な少女の柔らかさや、酔いによる火照りのせいとか抱きしめている少女の体温がなんとも心地良い感じに温まっている。

見下ろす少女のうなじがほんのりと紅く染まり、年相応以上の色つぼさが醸し出されている少女の姿に、なんとも目のやり場に困るといふ多少の誤算はあったが、問題ない。

ここから先に展開される、より大きな誤算に比べれば。

「すばるふあん、わたし、すばるふあんにお願いしたいことがあるんれすよー」

「ああ、いいよ。いくらでも抱きしめてあげるし、頭だつて撫でてあげるよ」

その程度なら——いや、冷静に考えると思考状態が正常とは言いがたい少女の体を抱きしめるといふ行為は、正直我ながらどうかとは思いますが、普段の智花自身が俺に望んでくれている事だ。

「それは、お願いしまふ〜」

突然俺の両肩を掴むと、智花の方から俺と体をぐつと引き離す。

一度俺から離れたがっている事を察し、俺も彼女の背中に回していた手を解き彼女の体を解放する。

しかし、上半身だけ引き離しただけで彼女の下半身は相変わらず俺の上に乗ったままだ。

何が始まるのだろうか？

彼女の様子を窺っていると、彼女が不意に両手を伸ばし、俺の行き場を無くしだらりと垂らされていた左右の手首をしっかりと掴んできた。

「すばるふあん。私のお胸をいーいっばい揉んでおーいっばいきつくしてくらさいっ」

「……えっ？」

呆然としてしていると突然、両手が彼女の胸部めがけて力強く引っ張られた。

「とっ智花!! それは絶対だめーっ!!」

あと一瞬我に返るのが遅かったら、俺は彼女に取り返しのがつかない事をしてしまっていただろう。

俺の両手が彼女の胸に触れるか触れないかギリギリのところ奇跡的に踏み留める事ができた。

確かに偶発的に彼女のささやかな胸部に触れてしまう事は、これまでも何度かあった。

申し訳ない事に、その柔らかさを意識してしまう事も……

だが、これは違う。

これは偶然ではなく、故意だ。

なら、たとえどんな理由があろうと、俺は触ることを目的として、彼女の胸に触れる事は絶対にできない。してはいけない事だ。

俺は離すように、彼女は自分の胸元へ引き寄せるように互いに強く逆の方向に引っ張り合い、力は拮抗する。

——って、どんだけ力強いんだよ!?

彼女の意外な力強さは、俺を虜にしたあの綺麗なワンハンドシュー

トや、身を以て体験したマッサージでよく知っている。

「むう〜恥ずかしがらなくてもいいんれすよ〜私はすばるふあんならかまわなれすから……ふあうう〜」

決して負けられない勝負の結末は、こちらの目論見通りあつけなく訪れる。

かなり不安になる一言を俺の耳に残すように眩きながら、彼女の体は崩れるように俺に倒れ込んでくると、すぐにすうすうと穏やかな寝息が聞こえてきた。

「時間切れ……か。気持ちは嬉しいけど、俺は智花にはそういう事できないよ」

何故か少しだけ心がチクリと痛み、切ないような悲しい気持ちが胸の中で渦巻き出していく不快な感覚が湧き上がるが、すぐにその気持ちを振り払う。

智花は大切な恩人なんだし、俺だって二度と同じ事で躓くわけにはいかないんだ。

不測の事態により、二人のお楽しみみの時間が強制終了してしまった事は残念だけど、それ以上に大切な彼女の身に何事も起きなくて良かったと心から安堵する。

穏やかな寝息を立てている少女を起こさないようにそっと抱きかかえ、ベッドに寝かしつけてやる。

空いた二人分のグラスや何故かハートばかり残ってしまったチョコの残りを台所へ片付けに行き、再び戻ってみたが彼女はベッドで熟睡してくれている。

「おやすみ。智花」

赤みが抜けない頬に幸せそうな寝顔と穏やかな寝息を立てている少女に声を掛け、電気を消し布団に就いた。

翌朝、どうやら昨晚の記憶が曖昧になっているが、きつと俺に何か迷惑を掛けてしまったのだらうと頭を下げる少女を朝練に誘ったところで、俺達の変わらない一日が始まる。

「智花ちゃん、いっぱい食べてね」

「わあーまたお赤飯炊いて下さったんですかっ」

頼むから事あるごとに赤飯を炊くのをやめてくれ。

「いっぱい作ったから良かったら花織さんたちにも持って帰ってあげてね」

「いいんですかっ。ありがとうございますっ!!」

いくら智花が好きだからって、頼むからおすそ分けについて智花に持ち帰らせないでくれっ!!

とは言え俺の口から説明することは憚れるわけで……結局、俺は幸せいっぱいに赤飯を抱えながら自宅に帰っていく少女の背中をただ見送る事しかできないのだった。

どうか、変な誤解が起こりませんように!!

## 長谷川家お泊り報告 (SNS)

—交換日記 (SNS) —

まほまほ『よし。ヌケガケですばるんにまたオトナにしてもらったもっかんのホーコクカイ』

はじめるぞー!!』

ひなた 『おーぱちぱちぱちー』

湊 智花『ご、ごめんね……いつも私ばかり……みんなだって昂さんと居たいのに……』

紗季 『こら真帆。トモだって気にしてんだから、冗談でもあんまりそういうこと言わないの』

まほまほ『だって羨ましいじゃんか。ま、もっかとすばるんのあいだにあたしらがはいりこめる』

ヨチはねーからな』

あいり 『気にしないでね智花ちゃん。私は智花ちゃんのお話を聞かせてもらえるだけで、すごく』

嬉しいから』

ひなた 『おーひなもうらやましいけど、ひなおはなしするのヘタだし、ともかのおはなしだと』

いっぱいおにーちゃんのことでてくるからたのしみー』

湊 智花『うう……みんなごめんね』

紗季 『というわけだから、今回のお泊りの件も包み隠さず全部話すのよ』

湊 智花『今回もいっぱい失敗しちゃったから、あんまり話したくないんだけど……う、うん』

まほまほ『んじや、まずすばるんにちゃんとおっぱい揉ませてあげたか?』

紗季 『あ、バカ。それは一番最後の楽しみにとっておかなきゃダメじゃない』

湊 智花『だからそんなことしてませんっ!!』



あいり 『良かった。やっぱり二人はそんなことしてないよね。もし本当にそんなことしてたら』

どうしようって心配しちゃってたんだ』

ひなた 『ぶー。きつとおにーちゃんだって、ともかのおっぱい、もみたかったとおもうのにー』

紗季 『あーあ。いきなりネタバレされちゃったじゃない。ま、さすがにするわけないか』

まほまほ 『だつてきかねーといつまでもきになっちゃうじゃんかーあたしはたのしみはシヨツパナ』

にあじわうタイプなんだっ！』

湊 智花『もう……どうしてそんなに昴さんに私の胸をも……触らせたがるの?』

紗季 『トモだつて長谷川さんに揉んでもらった方が大きくなるし都合いいんじゃないの?』

まほまほ 『だよなー』

ひなた 『ひなだったら、おにーちゃんにならないよー』

あいり 『ひ、ひなちゃん! だからそんなこと言っちゃダメだよっ!』

まほまほ 『そうだぞヒナ! すばるんにそんなこと言ったら、もっかんが激オコすんぞっ!!』

湊 智花『怒りませんっ!! ……あ、でも、昴さんにそんなこと言ったら絶対ダメだからねっ』

紗季 『はいはい。それじゃ、残念ながらトモの胸の成長チャンスは延期されちゃったことが』

判明したわけだし、本題の報告会を始めてもらいましょうか』

まほまほ 『おー!』

ひなた 『おー!』

湊 智花『うう……なんか色々納得できないけど、あんまり話してるともつと変な事を言われそう』

……わかりました』

あいら 『智花ちゃん、お願いしますっ』

紗季 『朝はいつも通りよね?』

湊 智花『うん。いつもの時間に昴さんのお家へお邪魔させて頂いて、一緒に朝練にも参加させて

もらってるよ』

まほまほ『まだすばるんのこと又ケねーの? もっかんならホンキでやればイツカイくらいなら

いけんだろ?』

湊 智花『そんなことないよっ。私なんかじゃまだまだ全然敵わなくて……私、ちゃんと昴さんの

練習相手になれてるのかなあ……』

あいら 『智花ちゃんでも敵わないなんて……やっぱ長谷川さんすぐ上手いんだなあ』

ひなた 『おー? ともかすっごくうまいよ』

紗季 『少なくとも私達の中じゃ一番よね。長谷川さんもトモとする時が一番楽しそうだし』

湊 智花『みんなありがとう……そうだね。もっともっと上手くなればきつと昴さんのお役に

だって立てるはずだよねっ』

まほまほ『すばるんにチョーセンすんには、まずもっかんにかたねーとダメだな。よし、もっかん

こんどサーサードードーショウブだっ!!』

湊 智花『ふええ!! ベ、別に私に勝たなくても昴さんだったらお願いしたら、いつでもお相手

して下さると思うよ? ……でも、うんっ。私だって真帆に負けないよっ』

ひなた 『おーひなもおにーちゃんにおあいてオネガイしてみようかな?』

あいら 『わ、私もお願いしてみようかな? きつと全然敵わないと思うけど、でも色々動き方を

アドバイスして頂けたら、すごく嬉しいし』

紗季 『ふふ。誰が最初に長谷川さんを抜けるかの勝負。面白そうね』

まほまほ 『そんじやつぎーのホウコクいつてみよーっ!』

紗季 『しっかりお手伝いして長谷川さんのお母さんのポイントもちゃんと稼げた?』

湊 智花『ほ、ポイントって、そんなつもりじゃないもんっ! ……

でも、七夕さんからは花よ』

まほまほ 『はなよ?』

ひなた 『おはな?』

あいら 『お花のお世話? 智花ちゃんお花係だもんね』

湊 智花『ううん。ごめんねっ。ちよつと打ち間違えちゃっただけだから気にしないでっ。できる

範囲でちゃんとお手伝いもさせて頂けたからっ』

紗季 『花嫁修業?』

あいら 『長谷川さんの!?』

まほまほ 『さすがもっかんヌケメねーな』

ひなた 『おーおにーちゃんのはなよめしゅぎよー』

湊 智花『はう!?! ち、違うのっ!! な、七夕さんには昴さんに花嫁修業振りを見てもらってね。

……って仰って頂けたけど、私はそんなつもりは……』

紗季 『語るに落ちたわね』

まほまほ 『んでんでんでーすばるんのハナヨメになるためになにみてもらったの?』

湊 智花 『本当にそんなつもりないのに……』

あいら 『私もちよつと知りたいかも』

ひなた 『おーひなもー』

湊 智花『……一緒にお買い物に付き合っ頂きました。お料理は晩御飯だけ七夕さんと一緒に

作らせてもらいました。……あ、それとお手伝いじやないけど、逆に昴さんに勉強を

見て頂いちゃった』

まほまほ『うえ……ベンキョーもしねーとダメなのか……』

紗季『当たり前でしょ！ まったく……いつか本当に留年しちゃっても知らないわよっ！』

あいら『長谷川さんと一緒にお買い物……私も一回してみたいかも』

ひなた『おーいっしょのおでかけいいなー』

紗季『ふむ。前みたいにな、ちゃんと周囲に新婚振りをアピールか。これでご近所さんにも

しっかり伝わるわね』

湊 智花『もう……そんなこと言っちゃって、私とけ、結婚するにはお父さんを説得できないと

駄目だから難しい。って昴さん言ってたもんっ』

紗季『え』

あいら『ええ!』

まほまほ『すばるんマジなの?』

ひなた『おーともかとおにーちゃんけっこんするの? おめでとー』

湊 智花『くくく!?! ち、違うよ!! 昴さんがじゃなくて、私と結婚する人がって事だよっ!』

お父さんすごく厳しいからそんな人がいたら苦労しそうだね。ってことだよお』

まほまほ『あーもっパパすげえーキビシーだろーなー』

あいら『う、うん。そうだよね』

ひなた『ぶーともかとおにーちゃんケツコンできないの?』

紗季『そこは長谷川さんの頑張り次第じゃない? トモもちゃんとサポートしないとダメよ』

湊 智花『だから、ちが……うう……イジワル……』

あいり 『私も最近はお兄ちゃんと一緒にいる時間が増えたと思うけど、同じくらい智花ちゃんも』

長谷川さんというみたいだね』

紗季 『朝練から始まって一緒に買い物や勉強して……って、本当に一日中ずつと長谷川さんと』

いるわね』

まほまほ 『もっかん、ずっとすばるんにくつついてたんだな』

ひなた 『おーともかとおにーちゃんとってもなかよしー』

湊 智花 『ふええ!? ば、晩御飯を作る時は七夕さんと一緒だよっ！ 昴さんには自分のお部屋で』

過ごして頂いてるし』

紗季 『そんなに慌てて否定しなくても。それで、ちゃんと昴さんに食べて頂けてたの?』

ひなた 『おーともかのたまごやき。まえにたべさせてもらったけどおいしかったよー』

まほまほ 『なゆつちのメチャうまオムレツにマッコーからいどむとかすげえーよな』

あいり 『うん。本当にすごいと思うよ。私もそれくらい勇気があつたらなあ……智花ちゃんも』

いっぱい練習してきたんだよね?』

湊 智花 『う、うん。本当は自分で全部食べちゃうつもりだったんだけど……』

紗季 『ごらごら。せつかく作っておいてそれはないでしょ』

まほまほ 『そーだぞーもっかん！ ハジメちゃったんなら、さいごまでしねーとゼツテーコーカイ』

すんぞっ!』

湊 智花 『あはは……結局、昴さんにすぐに見つけられちゃった。それで、ぜひ味見させて欲しい』

って言うて下さって……』

紗季 『で、どうだったの?』

ひなた 『おーおにーちゃんのハンターわー?』

あいら 『ドキドキ』

湊 智花『昴さんも七夕さんも美味しいって言って下さったけど、まだまだ七夕さんにもお母さん

にも全然敵わないから……もっと頑張らないとっ』

紗季 『良かったじゃない。そりゃ、あの二人は別格だし。鉄板上だったら私も張り合いたい

けど……普通の料理じゃね』

まほまほ 『うむ。ひびショージンだなっ』

ひなた 『おーひなもがんばるー』

あいら 『私もいつかお兄ちゃんに何か作ってあげたいな……喜んでもらえるか不安だけど……』

智花ちゃんを見習わないとっ！』

まほまほ 『バンリンだったら、ないてよろこぶんじゃない？』

紗季 『そうね。絶対喜ぶと思うわ……多分私達が引くくらいに』

湊 智花『そ、そこまでは……でも絶対喜んで頂けると思うよっ。

愛莉、頑張つてねっ！』

ひなた 『おーあいらーがんばれー！』

紗季 『さて、夕飯の時間が終わったということはいよいよあの時間ね』

湊 智花『あの時間？』

あいら 『なんだろう？』

ひなた 『おーついにあのじかんがやってきてしまいましたなー

……あのじかんってなに？』

まほまほ 『いちいちもったいぶらずにいえよー！ まったくこれだ

からサキさんは……』

紗季 『はいはい。お風呂よ。お風呂。みんな大好きな』

まほまほ 『お風呂!!』

ひなた 『おーお風呂ーひなもだいすきー!』

あいら 『お風呂……』

湊 智花『うう……いい、言わないとダメ?』

紗季 『当然でしょ！　もしかして、その反応だと上手く一緒に入ることができたの!?!』

まほまほ 『ガタツ!!』

あいり 『く、詳しくお願いしますっ!!』

ひなた 『おーくわしくー』

湊 智花『その……一緒にには入らせて頂いたんだけど……とても大きくて私はまだまだ子供なんだ

なあって思い知らされちゃった。うう……なんで私のはこんなに小さいんだろう……』

紗季 『え!?!　ちよつと待って！　も、もしかして二人で試しちゃったの!?!』

まほまほ『ほえ？　なんでひとりでそんなテンションあげあげなの?』

あいり 『試すって前にみんなで言ってたマッサージの事?』

ひなた 『おーおっぱいおつきくするまつさーじー』

紗季 『そうじゃなくて!　……あ、いや。もしかしたら、それもしてもらったのかも……』

トモ、どうなの?』

湊 智花『ふえ？　む、胸のマッサージはしてもらってないよ?』

男の人は好きな人も多いけど

おっぱいはいずれできる私の大切な赤ちゃんのための物なのよ。……って優しく教えて

下さって。それに、愛情をいっぱい込めればちゃんと大きく育ってくれるから大丈夫。

……って、七夕さんが言って下さったんだから絶対大丈夫だよねっ』

紗季 『確かにね。私達は小さい事ばかりを気にしすぎていて、信じてあげるといふ大事な事を

忘れていたわ』

まほまほ『だからいつつもいつてんだろーあたしはゼツテーキョニューになるって。しんじてれば

ダイジョービなんだよっ!!』

ひなた 『おーみんなであいりみたいになるぞー』

あいり 『私みたいになって……そんなにいらないよお……でも、みんなが一緒になってくれるのは』

嬉しいかも』

湊 智花 『それに私にバスケットを教えてくださいました男の子の話をしたり、七夕さんから、昴さんが私達と』

同じくらいの頃の話もいっぱい聞かせてもらっちゃった』  
まほまほ 『あーなつかしーな。ちよーど、もっかんとバスケットのメンバ―あつめしてるときにきいた』

やつだよな』

紗季 『集めてたっというか、あんたが私達を無理やり引つ張ってきただけでしろうがっ!』

あいり 『結局、男の子もだけど智花ちゃんの前の学校のバスケットの人達とも会えなかったよね』

湊 智花 『大会に出られたら、もしかしたら会えるかな? っと思っただけけど……』

ひなた 『おーひなもみつけれなかった』

まほまほ 『ま、そっちはいーんじゃねーか? もっかんはソイツらにあやまりたいんだろーけどさ』

ソイツらだってもっかんをイジメてたんだからオタガイサマジヤン』

湊 智花 『でも、いつかきちんと謝りたいな。私だって悪かったんだから』

紗季 『ま、お互いにバスケットを続けてたらいずれ会えるでしょーっつて、ちよつと待って!!』

まほまほ 『なんだよーせっかくあたしがイイはなししてたのに』

あいり 『紗季ちゃん、何か気になることあったの?』

紗季 『一緒に入ったのって七夕さんなの!? 長谷川さんの方じゃなくて!? そのところを』

はつきり!!』



まほまほ『……はっ!! そーだった!! アブねーあやうくもつかんにごまかされるとこだった!!』

ひなた 『おーハッキリー!』

あいら 『コクコク』

湊 智花 『当たり前でしょ!! 昴さんと一緒に入れるわけないでしょ!! ……七夕さんは三人で

入りましょう。って言ってたけど……』

紗季 『そのまま便乗しちやえば良かったのにもったいない』

まほまほ 『なーせっつかくのチャンスだったのに』

ひなた 『おーおにーちゃんとなゆっちの三人いいなー』

湊 智花 『恥ずかしすぎて無理だよっ!! わ、私の体なんか見せられるものでもないんだし……』

あいら 『う、うん……一緒になんてすごく恥ずかしいもんね』

紗季 『ま、普通に考えたらそうよね。てつきりトモが長谷川さんから男の人のアレを見せて

もらっちゃったのかと……』

まほまほ 『ここでこのサキさんである』

紗季 『うっさいわねっ!! 気になるに決まってんでしょ!!』

湊 智花 『ふえ? 男の人のアレ? なんだろう?』

ひなた 『おー? おへそ? ちっちゃいくぼみかわいいよね』

紗季 『ひなはともかくトモも気づかないのはちよつと意外ね』

あいら 『お、男の人のアレって……あ! う、うん。私もたまにお願いしてお兄ちゃんに見せて

もらってるんだ』

まほまほ 『うおお!! アイリーンが気づいたか。いいだしっぺのサキさんはともかくアイリーンも

いがいとムツツリだなあ〜』

湊 智花 『うーん……本当に何の事だろう?』

ひなた 『おー。なんもんですなー』

あいら 『えへへ……ついマジマジと見ちやうから、お兄ちゃんも

少しだけ恥ずかしそうにしている

けど、やっぱりちよつぱり得意そうなお顔になってるよ……すごいよね。とても大きく

なつて逞しいなあつて思つちやう』

紗季 『ええ!? 愛莉のお兄さんに何度も見せてもらつてるの!』

まほまほ 『すげーアイリーン。マジスゲーよ!』

あいり 『でもいっぱい見せてもらった後に、今度は私のも見せてみるよ。つて言われちゃつて

……私のなんて全然大したことないのに、すつごく嬉しそうに見てくれるんだ』

紗季 『愛莉のは十分大したことあると思うんだけど……つて兄妹で見せ合つてんの!』

まほまほ 『やはりアイリーンはあなどれんな』

湊 智花 『三人とも何の話してるんだらう?』

ひなた 『おーあいりいいなあーひなもおへそみたいー』

紗季 『いや、おへその話じゃないぞ? 愛莉、続きをどうぞ』

あいり 『え? 別にそんな続きなんてないよ? たまにお兄ちゃんとスポーツジムで一緒に

筋トレしてる時の話だよ。何回もお願いして力こぶを作つて見せてくれるんだけど

本当にカッコいいつて思つちやうんだ』

ひなた 『おーそれはいいだったーでもおつきくてかっこいいよねー』

紗季 『なんだ……結局愛莉は無罪だったか。ま、当然よね』

湊 智花 『あ、私も昴さんと一緒にトレーニングさせて頂いてる時とか、たまに……ちらつと

見せてもらつてるよ……ほ、本当にちらつとだけだよ?』  
まほまほ 『そう言いながらマジマジと覗いている智花さんであつた』

紗季 『はいはい。どうせ穴が開くくらい凝視しちやつてんでしょ』

湊 智花『してないもん!! うう……二人で同じような事を……』  
紗季『ところで、無実だった愛莉をムツツリと言った真帆は当然何なのか知ってるのよね?』

紗季『ストープ!! 書き込まなくていいから!!』

紗季『絶対書き込んだじゃ駄目よ!!』

まほまほ『そんなの決まってんじゃん! 男の人のアレなんておち』

湊 智花『おち?』

あいら『おち?』

ひなた『おち?』

まほまほ『なんだよービックリして、まちがえてとちゅーで書きこんじゃったじゃんかー!』

紗季『ちゃんと合ってるから書き込まなくていい』

まほまほ『につししー。ムツツリなサキさんのクイズにみごとセーカイしたのはあたしだけかー』

みんなまだまだコドモだなー』

ひなた『おーひなわかったー!』

———Error:保存容量を超えたためこのログはこれ以上表示できません。———

## お兄ちゃんと愛の秘密特訓 棺よさらば1

○月○日

俺——香椎万里はいつもと変わることなく、あらかじめ寝る前にセツトしておいた携帯のアラーム音により眠りから目を覚ます。

布団を跳ね除けながら起き上がると、今もなお止まることなく成長を続ける自慢の体を大きく伸ばしながら、携帯を手に取りアラームを止める。

窓に向かいカーテンを開け放つと、遮光カーテンにより遮られていた日光が差し込み、部屋中に明かりが満たされる。

「うしっ！ 今日も気合入れて行くぜ!!」

全身でたつぷりと日光を浴びながら、両手で自分の顔をぱんぱんと叩き、しっかりと脳も体も覚醒させる。

これも朝に最初に起きた時に行っている今まで通り慣れ親しんだ動作だ。

その後も自分の部屋でいつも通り、いつもと変わらぬように、身支度を整えてから空腹を伝える本能に従い、朝食を求め居間を目指す。

部屋のドアを開けると、つい最近になって起きた一大変化が現れた。

「あつ。おはよう。お兄ちゃんっ」

「あ、ああ……お、おはよう……愛莉」

せつかく愛莉の方から俺に挨拶を掛けてくれたというのに、いまだに俺は大切な妹に挨拶を返す事さえも緊張してしまっている。

ちようと俺がドアを開けると同時に、廊下を挟んで向かい側の妹の部屋も開き、朝一番にお互いに顔を合わさせるのが自分達ということが最近増えてきている。

……というか、ヤバイ。もしかして俺は今日一日の運を全て使い果たしてしまったのでは!?

……いや、そうじゃないっ。逆に考えるんだ。朝一に愛莉が俺に声

を掛けてくれたんだ。ならば今日は紛れもなく最高の日だ!!

——直後その想いが真実となって具現化する。

「お兄ちゃん……良かったらでいいんだけど、これ受け取ってくれるかな?」

「ん? ……これって、ストラップか?」

俺に向けて差し出された妹の手の上には小さなカメのストラップが乗っかっていた。

「お兄ちゃんの今週の運勢を調べてみたら、これがラッキーアイテムだったんだけど……い、嫌なら無理しないで全然いいんだよっ!」

「お……俺が……ほ、本当に俺が受け取っていいのか?」

ダメだ。何も考えられない。妹の事しか考えられない。妹の声しか聞こえない。

「あ、ありがとう……愛莉、本当にありがとう!!」

俺の手にそつと置かれた小さなカメを両手でしっかりと包み込み掲げる。

思わず涙がこみ上げてくるが、ダメだ! 愛莉に泣いているところなんか見せられるものか!!

「そ、そんなに喜ばなくてもいいよお。喜び過ぎだよ、お兄ちゃん」  
いかん。どうやら照れさせてしまったようだが、これが喜ばずにいられるか。

妹からのプレゼント以上に嬉しい物なんてあるか。

本当はもつともつと喜びたいし、思いつきり吠えたいんだ。

だが、叫んでしまうと絶対に妹を驚かせてしまうため、それはあとで自分の部屋で一人でさせてもらうとしよう。

「えへへ。良かった。勇気を出してお兄ちゃんに話した甲斐があったよ。お兄ちゃん、受け取ってくれてありがとうございますっ」

歡喜の感動に全身が震わせている間に、目的を果たした妹は一足先に居間へ向かってしまった。

くそつ。なんて不甲斐ないんだ。せっかく愛莉から俺に話しかけてくれたというのに……

急いで愛莉の後を追いかけて、一緒に朝食の時間を過ごしたが、や

はりまだまだ上手く話しかける事ができなかった。

「それじゃ、愛莉。気をつけて行って来いよ。バスケもしつかりな」

「うん。お兄ちゃんも気をつけてね」

見送りの挨拶くらいはと、必死に頭の中で何度も復唱した言葉をやつとの想いで絞り出す。

……良かった伝えることができたし、愛莉からも返してもらえた。今まではたとえ心の中で思っけていても、どうしても伝えられなかった言葉を掛けてやれる事の幸せを身をもって実感する。

本当に気をつけて楽しんで来いよ。

学校へ向かう途中に何度も大切な妹からもらったカメのストラップを確認する。

愛莉からもらった以上、ちゃんと携帯に結び付けてはいるが、落したり無くしてしまわないかと心配になってしまい、そのたびに携帯を確認し安堵する。

さて、学校に到着したわけだが、まず何よりもこの喜びを他の人間とも分かち合いたいな。

そんな事を考えていたら、さっそく俺の喜びをしつかりと理解してくれる打ってつけの人物の顔が思い浮かぶ。

時々、もしかしたら俺以上に愛莉の事を知っているかもしれないし、親しくなってしまうかもしれないと思えてしまうくらい、妬ましい事この上ないが。

おそらくすでに登校しているであろう、そいつの姿を確認しに目的の教室へと向かう。

「うつつ。昴。今日も湊さんと朝練してきたのか？」

「ああ、まあな。なんか今日はご機嫌だな？ いい事でもあったのか？」

「おう。聞いてくれよ。実は愛莉がな——」

今日の朝の出来事をたっぷりと自慢させてもらった。

すごく羨ましそうにしてくれるのはいいが、さすがに大切なスト

ラップにまで手を伸ばそうとしたのは死守させてもらったがな。

「そっか。良かったな。すっかり愛莉と仲直りできてたみたいで」

「おう。これも全て愛莉の友達のおかげだな」

正直口に出したくはないが、目の前にいる男のおかげである事も理解している。

こいつの事だからあり得ないとは思うが、万一この事を笠に愛莉を狙ってくるとも限らない。

さすがに後ろから俺を襲ってくるような卑怯な事をするような奴ではないだろうが。もし、正面から堂々と受けてくるようなら俺もしっかりと受け止めてやる。

まあ、受け止めてやった上で、俺という男の大きさと強さをしっかりとその身に味あわせた上で、愛莉の事はきっぱりと忘れさせてもらうがな。

お前だって、今後の将来を考えたら愛莉よりも俺とより親密な関係になる事の方が重要だろう。

「そういえば、万里は愛莉のお兄さんだったんだよな……万里、俺はお前に謝らなければならぬ事がある」

「なんだ？ 言ってみろ」

不穏な気配を感じたが、こいつに限って、絶対に俺を裏切るような事はしないと信じている。

まずはしっかりと話を聞いてみるべきだな。

「俺は昔、何も知らない愛莉を騙して、その恵まれた体をたつぷりと利用させてもらった事があるんだ。無知な愛莉は俺の言う通りに従って、その小学生離れた大きな――」

突如、ゴンという鈍い音が教室中に響き渡った。

別になんて事はない。ただ俺が思い切り長谷川の机に拳を振り下ろしただけだ。

本当だったら、また昴をぶん殴ってしまったかもしれない事に比べれば、だいぶ自制できた方だと思う。

スポーツ推薦で入った教室のためか、クラスメイトの大半がまだ朝練中で教室には幸いな事に俺達以外の生徒はいない。

たとえ俺とこの男の間で何か起きたとしても、それはきつと不幸な事故として処理されることだろう。

「……なあ、昴。お前がバカで、どうしようもないバスケバカだったのは、今までの付き合いでわかっている。だから今の失言については一回だけは聞き流してやる。言葉に気をつける。誤解の無いように正確に伝える努力をしろ。二度目はないぞ。いいな？」

今もなお机に振り下ろされてる俺の拳と、決して表に出したり込めてはいけない方に分類される強い意志が含まれた視線に、恐怖に引き攣った表情と青筋を浮かべながら、コクコクと頷く。

「す、すまなかった。実はだな、俺が彼女達のコーチになるきっかけになった話なんだけど、女バスの存続を掛けて男バスで試合をする事になって——」

「ああ。その話なら、愛莉に聞いた。愛莉にセンターをやらせるためにスマールフォワードって言ったって奴だろ」

「……。最初からそう言えってんだ。なんで事あるごとにわざわざ誤解を生むような話し方をするんだ。」

「なんだ知ってたのか。ま、そりやそうか。愛莉もお前にバスケ教わるようになったんだし、色々話してるよな」

「ああ。騙されたと知った時は驚いたけど、でもみんなの役にしつかりと立つ事ができていたんだと喜んでた」

今では立派なセンターになれるように俺も教えられる事をどんどん教えているところだしな。

「……で、愛莉を騙したっていうのはそれだけか？」

「……もしかああるなら、直接体に聞いてやってもいいんだぜ。と言外に含めて問い詰める。」

「ん？ ああ。他にはしてないよ。俺や智花だって勝つためとはいえ、あんなに良い子を騙す事に、すごく心痛めてたんだぜ」

「それも聞いた。愛莉がお前を許したんだったら、俺からは別に何も言う事はねえよ」

「……どうやら本当にそれだけだったみたいだな。変に律儀なくせにバカだから余計に誤解を生むってのを理解してねえな。」





それとなくお前に聞いて欲しいって頼まれて」

こいつやっぱりバカだ。

俺にそれとなく聞いて欲しいって言われてんのに、なんではずきり聞いてんだよ。

確かに直接聞きづらいなら、誰かに頼るのも手だが、よりにもよって長谷川を選ぶのは悪いが湊さん達の人選ミスだろ。

バスケット以外に何も考えてないようなバカだぞ。

まあ、湊さん達が頼れそうなのが他にいないのも事実か。

「なんだその隣れむような目は」

「いや、気にするな。それで、愛莉の身長についてか。なかなか難しいな」

「確かにな。バスケットをやる者としてはいくらでも欲しいくらいだが、普通の女の子として考えると、なかなかデリカシーに配慮が必要な問題だ」

本当にただのバスケットバカかと思ったが、意外にもちゃんと愛莉の事を考えてくれてたのか。

……いや、違うな。おそらく湊さん達の受け売りだ。こいつにそんな発想ができるわけがない。

「ま、俺達の視点で考えれば身長なんていくらでも欲しいし、バスケット手としての愛莉を見るなら答えは決まってる」

……だけど、愛莉の兄である万里としてはどう思ってる？　と言外に聞いてきている。

「過去に愛莉を深く傷つけてしまった俺には何も言う資格はない……だけど、俺は愛莉の自然のまままでいて欲しいと思ってる。このまま止まっても、例えさらに大きくなっても。きっと大切な友人達がいるから、愛莉はもう大丈夫だ」

「そうだな……それに優しいお兄ちゃんも帰ってきてくれたしな」

目の前のバカの一言にひどく動揺させられてしまった。

「な!?　何言ってるんだよっ!？」

「智花達じゃカバーしきれない事がでてきたとしても、今はお前がいるんだ。妹をしつかり支えてやれよ」

「当たり前だっ!! 大切な妹との絆を。もう二度と無くしてたまるかってんだ!!」

「そうだよな。俺だつてせっかく出会えた大切な小学生達との関係。このままずっとずっと大切に繋がっていききたいもんな——ぐはっ!」  
すまん昂。今度はマジで殴っちまった——だが、言ったよな。二度目は無いって。

「だからお前はもう少し言葉を選べって、言っただらうがっ!!」  
「なんで……俺はただ自分の気持ちを正直に口にしただけなのに……」

俺に殴られて突っ伏している目の前の大バカに吐き捨てる。

せっかくお前のおかげで自分の心をしっかりと決めることができたつてのに、なんでテメーがそれを台無しにしやがってんだよ!!

さすがに殴り倒してそのまま放置するのもあまりに不義理を感じたため、目を回しているバカの回復を待ってやってから、謝罪と礼を伝えてから自分の教室へと引き上げた。

## 棺よさらば2 (完)

「ねえねえ昂。最近は色んな器具や道具を使ってやってみるのいいみたいよ。すごく盛り上がるって聞くし」

「うーん。俺はやっぱりあまり不必要に道具は使いたくないかな」

「そうかなあ？ 私は結構面白そうだと思うんだけど……」

「確かに新しい刺激や興奮を得られるだろうけど、そればかりに頼り過ぎちゃうと本来の楽しみ方が疎かになっちゃうんじゃないか？」

この二人の会話は相変わらずというか、なんとというか……すごく反応に困る。

困惑する俺を無視して二人はなおも続けて行く。

「そこは昂の腕の見せどころじゃない？ ……それとも自信ない？」

「なっ!? ふざけんよ。確かに興味を引いたり、一人でする時にもちよつとくらいなら寂しさを紛らわせる事もできるだろうけど、一番いいのは相性抜群の相手がいる事に決まってるんだろっ！」

「それはそうだけど……あーあ。ちよつとくらい新しい刺激を求めてみるのもいいかなあって思ったんだけどなあ」

「そこら辺はせめて軽く調べてからだな。興味本位で持ち出して思わぬ失敗をして恥かきたくないだろ」

……なあ、いつもどおりバスケの話だよな？

いや、決して他の意味になんて聞こえないし考えもつかないんだが。

普段は疎ましく思うあの二人の存在が今この場においては非常にいて欲しいと思えてしまう。

好き勝手に場を乱すが、それでもこういういった類の会話のストッパーとしては、かなり重要な存在なのだと認識させられる。

いない時になって初めてわかるそいつらの価値ってやつか……

「万里はどう思う？ お前が一番色んな道具使ってるし、そういう経験も豊富だろ？」

「ごめんね。いつも私と昂だけで白熱しちゃって……万里君も遠慮なく混ざってくれて構わないんだよ？」

「俺に聞くなっ!? 経験豊富なんかじゃねえよ!! ……ってか、お前らの会話に混ざれるかーっ!!」

予想外の不意打ちに、思わず声を荒げてしまうと元凶の二人が勝手に驚きやがった。

なかなか納得いかないが、なんとかこれで会話の軌道修正はできたことだろう。

変な想像をさせられてすごい恥ずかしい思いをさせられたが……

……ったく、一成の奴がいる時は暗黙の了解みたいに話題選びにも慎重になつてる癖に、いないとすぐこれだ。

まあ俺もあいつの前で妹達の話をするのは、なんとなく危険とか時期尚早な気もするから、それに関しては同意だが。

「でも、お前ん家ジムだし、いつも器具使つて筋トレしてんだろ?」

「ああ、それはしてるけど、あくまで筋トレだけで、バスケの練習では特に活用してねえよ」

「まあそうだよな。下手に愛莉が万里の真似をして無理な負荷掛けちゃつて体壊しちゃ元も子もないか」

「あーそっか。私達ならともかくみんなまだまだ成長期だもんね。私と昴が実演して興味持たせちゃつても、まだみんなには早いからやつちやダメなんて言つたらかわいそうか」

道具を使つて小学生達の前で何を実演する気なんだよこいつらは。

「……頼むから愛莉に変な事を教えないでくれよな」

二人にそんな気がないのはわかつてるが、どうしても心配になり、ついそんな言葉が出てしまったのは仕方ない事だ。

「変な事つてなんだよ。愛莉に関してはもうお前が専門だろ。お前がしっかり愛莉に体の使い方を教えてやれよ」

「私も最近は五年生の子達の方に付きっ切りになつてるし、それに純粹に愛莉ちゃんに求められる技術なら私よりも、万里君の方がしっかり相手もできるもんね」

珍しく昴が悔しそうな表情で、愛莉に関しては俺が一番だと言つてくれたのは嬉しい——嬉しいが……

俺達のバスケの話なら問題なく会話ができるはずなのに、なんで愛

莉達のバスケの話になると、この二人はこうも……

「——でも、昴。あの子達を変な目で見るのは絶対に許さないからね」  
「葵まで何言ってるんだよ？ 俺はただみんなが、すすくと成長している様子を眺める事ができるのがすごく嬉しいだけだ。まあ、そこにほんのちよつとだけでも俺の手が加わっていると思うと喜びもひとしおだが」

「なに言ってるんだか……それよりあんまり変な事言わないでよね。いらない誤解受けても知らないんだから」

思わず「お前が言うな」という言葉が出そうになつたが必死にそれを飲みこむ。

……というか、やっぱり荻山も一応は警戒してるんだな？

その割には毎朝こいつの家に湊さんが朝練に行くのは容認してるのは少し不思議な気もするが。

俺も確かに休部騒動のせいで心配ではあるが、俺よりも付き合ひの長い荻山が大丈夫だと判断してんだつたら、わざわざ俺が蒸し返す事でもないか。

まさか愛莉から聞いた俺の方だけが知っていて、実は荻山は知らないなんてことは——

——さすがに……ないよな？

結局何度か変な想像を駆り立てられそうな単語が飛び交いつつも、二人の間で今後の練習方針がまとまり始めたようだ。

どうやら明日の部活に備えて更に煮詰めて行くつもりらしいが、愛莉の件もあるため俺は放課後になると同時に、昴と荻山に別れを告げて早々と帰路を急ぐ。

いつでも愛莉が帰ってきて、俺に相談を持ちかける事ができるよう  
に心の準備を整えておかなくてはな。

日課の筋トレに行く時間までまだまだたつぷりとあるし、それが終わってからでも一緒に来るか誘ってみるのもいいだろう。

——自宅に着くのとほぼ同じタイミングで家のすぐ近くに慧心学園のスクールバスも停車し、愛莉も降りてきた。

「お。おかえり愛莉。早かったな」

「えへへ。ただいま。お兄ちゃんもおかえりなさい」

「いいのか？ 友達とゆっくり話してからでも良かったんだぞ？」

「う、うん。みんなからも早い方がいいって言ってもらえて」

色々積もる話もあるのだろうが、いつまでも妹を外で立たせるわけにもいかないな。

「んじや、俺の部屋で話すか。ジムに行くのもどうせ営業時間が終わってからなんだし、着替えたらいつでも来ていいぞ」

「うんっ。ありがとうお兄ちゃん」

……妹と自然に話せるこの幸せ。

すごく当たり前のはずなのに、どうして俺はこんな身近な幸せを手にする事を恐れてしまったのだろうか。

絶対に手離さないためにも、しっかりと頼れるお兄ちゃんぶりをアピールしなくては!!

「お兄ちゃん、失礼しますね」

「おう。いつでもいいぞ」

控えめなノックと遠慮気味な妹の声に気楽に入れるように声をかけたつもりだったが……少し乱暴な言葉過ぎたか？

おずおずとだが、ゆっくりと開くドアにその心配が杞憂だったと安堵する。

「えへへ、お兄ちゃんのお部屋入るの、すごく久しぶりだなあ」

「空いてる場所ならどこでもてきとうに掛けていいぞ」

……別に何も無いよな？

周囲を見渡す妹の姿にやましいものなんてないのに思わず自分も部屋を確認してしまう。

俺の部屋にも自分と同じくバスケットボールが置いてある事に喜びを感じてくれたのはすごく嬉しかった。

「……男の人の部屋もやっぱり色々違うんだなあ……は、長谷川さんの部屋とは少し違う雰囲気」

「あいつの部屋に入ったことがあるのか!？」

「う、うん。みんなで遊びに行かせて頂いた時とかに少しだけ……」

「まあ。そりやそうだよな……愛莉達のコーチだもんな……」

愛莉がすでに他の男の部屋を知っているなんて……

なんでだろうな……なんかお兄ちゃんすごく悲しい気持ちになってきたよ。

「お兄ちゃん？」

「あ……ああ、いや。なんでもないんだっ。そ、そうだ。それより相談事ってなんだ？」

「その、背の事なんだけど……わ、私って……やっぱり大きいよね」

「……ああ。愛莉を傷つけてしまうのは心苦しいけど、今のお前にならはずきり言える。確かに大きい方だ。俺も人の事は言えないけどな」

兄妹揃ってバスケット選手として見ても十分に通用するくらいにな。

「そうだよな。うん。はずきり言ってくれてありがとう」

「悪いな。気にしてる事なのに……」

「そんな事ないよ。ちよつと前の私なら、すごく気にしてたし、すぐに泣いちゃってたと思う」

それは間違いなく俺が原因だ。

自分の罪悪感を誤魔化すために心無い事を言ってしまったのは今だって後悔している。

「——でも、泣いてる私を守ってくれたみんなや、同じ悩みを持つてる人がいる事や、大きい事を誇りに思ってる人もいるって知ることができた」

「そうか。本当に強くなったな」

「強くなんかないよ。ただ私を温かく見守ってくれたみんなのために役立ちたい。弱虫だった私から変わりたいって思ったから」

「その友達のために怖い俺にも勇気を持って話しかけてくれたんだろ。十分立派だよ」

腫れ物に触れないようにと避け続けてしまってた俺なんかと比べて、友達のためや俺と仲直りをするためにバスケットを始めようって決意して。

その勇気のおかげで俺もお前と数年振りに仲が良かった頃の兄妹



に戻れたんだ。

「もう。またそんな事言つて。お兄ちゃんは本当は優しいんだってわかつてからは全然怖くないよ……たまにちよつとびっくりしちゃうけど」

「はは。悪いな」

こうやって妹と本心を気兼ねなく打ち明けられ、時に冗談交じりの会話を続けられる素晴らしい日々。

ああ。こんなにも幸せな日常がほんの少し手を伸ばすだけで届くところにあつたなんて……

「それで、お兄ちゃんに聞きたいんだけど……やっぱり身長つてあれはあるだけ……お、大きくなれるなら、もつと大きくなつた方が……いいのかな？」

「俺だつたら、そうだな。身長なんていくらあつても足りないくらいだし……ただ上背があるだけのひよろい奴じゃ話になんねーけどな。どんな相手にも力負けせずと思いつきりぶつかりあうためにもしっかり鍛えねえとな」

バカな俺はバスケくらいしか自分の特徴を活かせる手段を知らなかったし、競技は違うが親父に負けたくない和张り合つてたら、こういうプレイスタイルになつた。ただそれだけの話だ。

高校でバスケ部が休部になつた時にバレー部の奴らからスカウトを受けてやってみたが、もしかしたらこういう出会いもあつたのかもしれないと浮気しちまつた事もあるけどな。

「そつか……そうだよね」

「でも、それは俺の考えであつて、愛莉に押し付けるつもりはない」「え?」

「俺の場合はバスケを第一に考えてるからだけど、愛莉はそういうわけじゃないだろ? バスケから離れた時すら自分の背を注目されるのはあんまり好きじゃないだろう?」

今は友達とのバスケがあるからいい。だけど、もしバスケやスポーツから離れた時に、背の高い自分を少し考えて欲しい。そんな想いを込めて伝える。

「う、うん。やっぱりあんまり目立つのは苦手かな……でも、私もみんなとのバスケットが好きだし、みんなの役に立てるなら、無理に背を縮めようとしたり、大きくならないようにする必要はないのかな？　つて思うようになってきたんだ」

「愛莉はそれでいいのか？」

「うんっ。かげつちゃんや、硯谷の久美ちゃんに綾ちゃん。それにもしかしたら、私よりも大きい子だっているかもしれないから、そんな人達に負けないために、お兄ちゃんやみんなを見習わないとな。つて思いましたっ」

でも、やっぱりちよつと恥ずかしいから自分からは伸ばしたいとは思えないんだけどね。と照れ笑いをしながら続ける。

「俺もだけど親父達も聞いたら喜ぶぞ。やっぱり愛莉も俺達の家系だなつてさ」

「えへへ。それで……その、もし私が、自分の背の事で心細くなつちやつた時とか……ほんのちよつとでいいんだけど……お兄ちゃんに甘えさせてもらつちやつてもいいかな？」

——!?　愛莉が……愛莉が……俺を……俺に甘えてくれるだつとっ!?

「ご、ごめんなさいっ！　やっぱりご迷惑かな？　み、みんなからは私達に泣きつくくらいならお兄ちゃんに行つた方がきつと喜ぶつて言つてくれてたんだけど……」

「そんな事ないぞっ！　いつだつて……今すぐでもいいぞっ！　さあ来い!!　いくらでも思いつきり来いっ!!　俺が全力でしつかり受け止めてやる!!」

愛莉の友達ナイスだ!!　本当はみんなだつて愛莉の事をいくらでも慰めてやりたいはずなのに、その役目を俺に譲ってくれるなんてっ!!

うう……本当に優しい良い子達に恵まれやがつて。お兄ちゃんすごく嬉しいぞ。

「ひっ!?　あ、え……えーと……それで、その……相談の事もあつて少しお兄ちゃんにお願いしたい事があるんだけど」

「おうっ！ なんでも言ってくれて構わないぞっ！」

なんか一瞬愛莉が顔を引き攣らせたような気がしたが……気のせいだよな？

「自分が頑張って決めたことを少しずつでも始めようと思って……それで、お父さんをお願いして私のベッドを元に戻してもらおうかなって。なんかすごく渋ってる感じだったのに、私が無理をお願いして作ってもらったから、今更元に戻してっってお願ひするの一人だと心苦しくて……」

「ああ。あれか。なんだったら、さっそく戻しちまうか？」

「え？ あ、あれっってお父さんが作ってくれたんじや……」

「実は俺も無理矢理付き合わされたんだ。でも、あの頃だと下手に俺がお前の物関わったと知れたら色々マズい気がして黙ってたんだ」  
当然俺は関わることを断固拒否してたが、親父が「なんで父親の俺が娘の棺桶なんて縁起の悪い物作らなけりやいけななんだ。お前も兄貴なら妹のために一緒に俺と同じ思いを味わえ」なんて無理矢理付き合わせやがって。

まあ、棺なんかと考えなければ、俺が作った物で愛莉を囲ってやれて、側にいられない俺の代わりに愛莉の事を守ってやれてる気はしたかな。

「そ、そうだったんだ……お兄ちゃんにも私の面倒な事やらせちゃってたんだね。ごめんなさい」

「気にすんなって。親父には後で話しておけばいいだろう。きっと親父だっって喜ぶぜ」

「う、うん……ごめんね。せっかく作ってくれた物だったのに、どっちも私のわがままで……」

「だから気にすんなって。あんな狭いところに大切な妹が押し込められてる方が、兄貴としてはよっほど辛かったんだ」

愛莉が気弱なまま育ててしまったのだから、ほとんど俺のせいだと自覚してる。

だからせめて自分の部屋や友達と過ごしてる間くらいは、そんなに体を縮こまらせる事なく、もっと自由にのびのびと過ごして欲しい。

「ありがとう。お兄ちゃんっ……私、少しずつだけど、きつと、もつと  
もつとバスケットが上手くなるから、だから私にいっぱい教えてくださ  
いっ！」

「おうっ。任せとけ。なんなら、女バスの中でも愛莉にしかできない  
とっておきを教えてやるぜ」

「私だけ？ ……智花ちゃんでも？」

「ああ。湊さんでも無理だ。間違いなく愛莉にしかできないし、め  
ちゃくちゃ注目されるぜ？」

自信満々に、にやりと不敵に笑いかけてやる。

俺にはそう言い切れるだけの確信——というよりも絶対的な事実  
がある。慧心学園初等部において少なくともバスケットをやる者の中  
では、絶対に愛莉にしかできないことがある。

「うう……ちゅ、注目されるのはちよつと……で、でも、私に意識が集  
めるなら、その分きつとみんなが動きやすくなるんだよね？」

「ああ。いいぞ。センターとしての在り方がわかってきてるな。初め  
の内は緊張するかもしれないけど、慣れてくればどんどん快感に変  
わってくるぜ」

できることなら、愛莉にもその快感を味わってもらいたい。きつと  
残り僅かな今しか味わうことができない体験だが、それでも絶対に愛  
莉の自信にだって繋がると思ってる。

「でも……そうだな。仮に試合中にいきなりやって注目集めちまっ  
ても、その後ガチガチになっちまったら、試合どころじゃなくなっちま  
うか。せめて後半の最後辺りに狙えそうな機会があつたらやってみ  
るくらいで、少しずつ慣らしにく程度の気持ちでいいと思うぞ」

「そ、それくらいなら……う、うんっ。お兄ちゃんのとっておき私に教  
えてくださいっ」

強い決意を宿した瞳で俺を見つめてくれる妹に、ますますの成長を  
期待せずにはいられない。

いつまでもずっと大切な妹の成長を見届けながら、一緒に同じ道を  
歩んでいきたい。

「うしっ。まずはベッドから始めるか」

「うん……あ、私も、お手伝いさせてもらってもいいかな？ お別れは寂しいけど、今まで私の事を守ってくれた気がするから。ちゃんと今までありがとう。って伝えたいんだけど……いい？」

「そ、そうか……おうっ。それじゃ、一緒にやるか。手伝ってくれ」俺の独り善がりかもしれないと思っていたけど、ほんの少しでもお兄ちゃんとして、愛莉の事、守ってやれてたんだな……

俺は二度と求めるように伸ばされた手を突き放すような事は絶対にしないと心に誓うのだった。

「ちくしょーっ！ なに兄妹だけでせつかくの一大イベントを終わらせやがってんだよっ!! 俺も混ぜろよな!!」

そして、全てが終わり、二人でジムから帰ってきた時に親父に報告すると、心底悔しそうな親父の声が帰ってきた。

日々力関係をはっきりさせてやると挑まれては辛酸を味あわされ続けていた相手である親父を俺が初めて出し抜けた瞬間だった。

最高のイベントに完全に出遅れてしまった事にめちやくちや悔しそうにしてるのがすごい痛快だったぜ。

## 三度目の決戦とこれからの少女たち マツチアツプ1

「はあ？　またあの子らと試合がしたい？　そもそも小笠原先生にとつてはあの子らのバスケはお遊戯なんですよ？　そのお遊戯の時間を奪ってまで自分達の事を優先しようとしてたくせに、今更何言つてんの？」

「あの時の私の判断が間違つているとは今でも思っていない。だが、今の女バスのレベルに対しては評価を改めざるを得ない。もし私が彼女達の指導に当たっていたのであればと思うと悔しくて仕方がない」

「はっ！　ずいぶんと好き勝手な事を言つてくれてるわね。子供達の大切な時間を潰そうとしてたくせに、あいつらの価値に気づいた途端に手の平クルーですかっ？」

「笹先生の言い分も、もつともだと思えますが、私自身の考えも改める気はありません。……ですので、これは純粹に私からのお願いです。地区予選優勝を決めた我が男バスチームが次の県大会に備えて、少しでもよりベストな状態で挑めるための」

「……ま、子供達が受けても言いつていうなら、別に細かい事に口出すつもりはねーけど、お願いつて言うからには、当然そつちの部活の時間でやらせてもらうわよ？　こつちだって残り少ない大切な時間をあの子達に悔い無く過ごしてもらいたいんだからさ」

\*

もしかしたら、二人の間にそんな会話があつたのかもしれない。いや、実際はもつとミホ姉が過激な事を言つてカマキリを煽つていたのかもしれないが、

まあ、俺としても心情的にはミホ姉に同意せざるを得ない。

危うく小学生達——中でも智花にとつて本当に大切な物を奪われかけてしまったのだから、こればかりは許せそうにない。

彼女たちが頭の中が真っ白になるくらいの気持ちの中で何度も飛

んだり、体中を突き抜ける快感や悦びに心を躍らせている、あの愛くるしい表情を見る事ができなかつたかもしれないのだ。

たとえどれだけバスケに情熱を注いでいようと、だからといって、他の人がバスケをする権利を奪う理由にはならないのだ。

そんな事もあつてか、それ以来、多少は個人同士での付き合いはあつたものの、基本的に男バス女バス共に互いに——主に両顧問の不仲が原因で干渉を貫き続けていたわけだが、

男バスが地区予選優勝を決めてすぐに、何故かカマキリの方から男バスと女バスで再試合をしたい。と試合を申し込まれた。

最初は、初戦敗退した女バスは勝ち残っている男バスにコート明け渡せ。みたいな事を勘ぐつたが、どうやら違うらしい。

純粹にこちらのレベルを評価したうえで、交流戦を行つて欲しい。と、なんとミホ姉に頭を下げてまでお願いをしてきたそうだった。

「——で、昴としてはどう思う?」

「う〜ん、俺は別に受けてもいいんじゃないかな? っと思うけど

……別に今回は何も賭けていないんだろ?」

カマキリから出された試合条件は、本当に一番最初の時のものそのままだった。

強いて言うなら、勝敗の勝ち負けでこちらの練習時間を男バスに明け渡す。みたいな部分だが、当然そこは削除されている。

・途中交代なしの五人対五人の前後半を六分ずつの計十二分間。

・ファールの取り決めも以前のままでけど、これはもうみんなもルールを熟知してるから抵触する事もないだろう。

「だけど、もし向こうが勝つた時に、いきなり変な要求突きつけられたりしたら、イヤじゃん?」

「そんなミホ姉みたいな事しないと思……いでっ!」

うつかり口を滑らせてしまったら、耳を思い切り抓られた。

「すばるうくなかなか愉快な事抜かしやがんなあ〜ああん?」

「でででっ!! ち、ちぎれるっ!! マジ千切れるから離せ……離して下さいっ!!」

「ま、あいつがそこまで姑息な事するとは思えんし、あいつもあいつな

りに男子共の事を考えてんだろうな」

「つゝつゝ　そう思ってたんなら、変な事言うなよ」

危うく今後、俺の心の癒しと日々の活力となる小学生達の甘い声を半分しか聴く事しかできなくなってしまう体にされるところだった。激痛を発し続けている耳を抑えつつ、俺の中では少しだけカマキリの印象が変わってきていた。

バスケに対しての情熱はもちろんの事、竹中の話によるところだが、男バスの子達からの信頼も厚いし、監督としてもすごく優秀だと思う。変則的な搦め手を使う相手は苦手そうだったが。

そして、俺と同じく小学生——どちらかというとかマキリは男の子の方が大好きなんだろうな。

「とりあえず、昴としては試合を受けるのは賛成と思ってるんだ」

「別に断る理由はないだろ。カマキリの本心はわからないけど、多分、試合前に今までの雪辱を果たして竹中達に自信をつけさせたいんじゃないのかな？　確か前の県大会で初戦敗退したって言ってたし」

お互いにベストコンディションで、というわけではないけど、これまで行われた男バス対女バスは二回とも女バス側が勝利している。

でも、それは男バスは慢心や油断があつたり、球技大会ではエースや監督不在という不利な状況での二度の敗北。

こちら側も、まだチーム全体のプレイスタイルを確立する前の、はったりや奇策ばかりに頼っている状況だったし、正面を切つての全力勝負となると、どうなるかわからない。

正直かなりいい勝負になりそうだと思うし、俺自身も彼女たちが純粹な実力で地区優勝したチームとどれだけ渡り合えるか見てみたくもある。

もちろんこちらだって、初戦敗退とはいえ優勝候補と言つていい硯谷女学院とギリギリの接戦を演じる事ができたのだから、負ける気はない。

きつと智花達の事だから答えは決まっているだろうけど、まずはちゃんと確認してからだな。



「男バスと試合ですか？」

「いーじゃんっ!! 受けてやるーぜっ! ゼッター今回だつて勝つて、ナツヒにホエヅラかかせてやる!!」

「面白そうね。今の私達なら、きつと正面からぶつかつても負けないわよ」

「男の子とするのは、ちよつと怖いけど……ううん。きつと大丈夫っ」  
「おーたけなかたちと、しあいひさしぶりーひなもやりたいかもー」

男バスから試合を持ちかけられた事を話してみたが、五人とも驚いた様子ではあつたけど、みんな乗り気のようだ。

「うん。男バスからは君達六年のレギュラー五人との試合をご所望のようだ。問題なさそうだし、受けるけどいいかな？」

「あの……本当に試合だけでしようか？」

すぐに紗季がそれ以外を懸念した様子で俺に確認を求める。

同時にみんなも気づいたのか、息を飲むように俺の言葉を待つ。

「それは大丈夫。この試合の勝ち負けで俺達の大切な時間も場所も奪われる事は絶対じゃないよ。いつも通り思いつきり楽しんでくるといい」

安心させるように告げると五人は安堵すると同時に輝かんばかりの笑顔が溢れ出す。

「うっしやーっ!! ゼッター勝つぞー!!」

『おー……!!』

五人の心から楽しそうな声が体育館中に響き渡る。

「まったく……また五人だけで盛り上がっちゃって」

「アホ達だけ、にーたんと試合するなんてするいよなあーひー」

「だよねーっばー!」

「あはは、ごめんね。でもあの子達にとつて、きつとすごく大切な試合になると思うから……それに、もしかしたら、これからはあなたたちも一緒に混ざつてやる事になるかもしれないだよ」

「ウイ。シシヨーたちのゴカツヤクしつかりとこの目に焼き付けさせていただきマス」

「私も、姉様の大切な試合。ちゃんと最後まで応援しなくてはっ」

五年生達の少しばかり不満そうな声とそれを宥めている葵に申し訳なさを感じつつも、俺自身が五人の試合を楽しみで仕方ないくらい心が躍っているのを自覚していた。

慧心学園女子ミニバスケ部が本当の意味で初めての一步を踏み出す事になった対戦相手だ。

今度だって絶対に負けるわけにはいかない!!

## マッチアップ2

男バスとの試合当日。

慧心学園初等部の体育館では、すでに両チームが共に試合開始に備えてゆつくりとそろそろでウォームアップを行っている。

五年生達は葵と万里がしっかりとまとめあげてくれて、一足早くこちら側のベンチで観戦モードになっていた。

試合前に集中を乱さないようにと気を利かせてくれたのだろう。

きっと彼女達だって色々と思うところはあるのだろうし、試合後は彼女達も混ぜての反省会をしないとな。

試合には参加できなくても観戦してるだけで、たくさん得られる物もあるのだから、六年生達の試合を観てしっかりと吸収してもらいたい。

来年は君達が慧心学園の女バスを引っ張っていくんだから。

「トモ。今日も期待してるわよ」

「うん。紗季のおかげでみんな気持ち良く動けてる事いつも感謝してるよ。今日も私達の事しっかりと支えてね」

「よーしっ。アイリーン！ ヒナ！ 今日もあたしらのバスケットでガン取りまくるぞー！」

「おー！ ひなもがんばらざるをえないっ！」

「私もしつかり止めてみせるし、きつとシュートだってがんばるかっ」

智花と紗季はお互いに交代で背中を押しながらストレッチを行い、真帆と愛莉とひなたちゃんの三人はパス回しをしている。

うん。みんな気負い過ぎてる様子もないし、かと言って気が抜けているわけでもない、いつも通りベストな状態だ。

「驚きましたよ。まさか君がああ桐原中の元エースだったとはね。知将という字名は伊達ではなかったという事ですか」

「どうも……俺をご存知頂けたとは意外でしたね。でも、今回だって

負けるつもりはありません」

「おいこら！ 教師の癖に何試合前に相手のコーチに挑発仕掛けてんだ」

いや、どうみても挑発してんのはミホ姉の方だろ。

少女達が本番に備えて各自で念入りに準備をしている様子を確認していると、男バス監督のカマキリが歩み寄ってきていた。

「いつもの事だから気にすんな。そんな事よりウオームアップしつかり続けるぞ」

ミホ姉とカマキリが対峙した事で男バス側もウオームアップを止めて遠くから事の成り行きを見守っていたが、キャプテンの竹中がすぐに再開を促す。

やっぱあいつもちやんとキャプテンやってんだな。

気の入りようといい、竹中も今日の試合、本気で挑んでくれるってわけか。

「りよーかい。にーたん」

「うるせえよ！ 深田！」

「あ、王子のが良かったか」

「だからうるせえつての。真面目にやれ。和久井！」

……なんか軽口をたたき合つてるといふか、一方的に竹中がからかわれているような感じだな。

椿ちゃんと柊ちゃんのお兄ちゃんだから、『にーたん』はなんとなくわかるが……『王子』？ まあなんでもいいか。

一度だけ竹中と視線が合ったと思つたら、不機嫌そうにそつぽを向かれてしまったので、こちらもカマキリと向き合う。

「……少しだけ君や高校の事を調べましたが、なかなか同情を禁じ得ない事情があったようで……」

「それに関しては、俺ももう割り切ってますし、今はあの子達のコーチですから。残り僅かな期間も全力で彼女達を指導していきます」

「……つたく、なに二人してスポコンみたいな会話して盛り上がって

んだか、ま、いいけどさ……小笠原先生！ あんたが切り捨てようとした、あの子達の成長しつかり見せつけてやるからねっ」

「笠先生はともかく……君とはもう少し違う出会い方ができれば良かったですね」

「同感です……日ごろからミホ姉が色々ご迷惑をお掛けしているみたいで」

互いに溜め息と一礼をしてから、カマキリは背中を向けると、シュート練習をしている男バスの方へと歩いて行った。

つてか、小笠原先生つて言うのか。みんなしてカマキリつて呼んでるし、雰囲気がそれっぽかったから、気にしてなかったけど。

「——にしても、なんであんなこと言ったんだ？ 今更、わだかまりなんてないんだろ？」

「まー普段からできるだけ顔合わせねーようにしてっからな。あたしは可愛い甥の気持ちを代弁してやっただけだけだぜ？」

「そりやどーも」

それを言われるとなかなか反論しづらい。ほとんどミホ姉の私情だけのような気もするが。

確かに話してみた感じや、今まさに男バスのメンバーと向き合ってる様子からも、以前ほどの嫌悪感を感じない。

まあ、当時は完全に格下だと見てびられていた事もあるのだろう——それはそれで純粹無垢な小学生達の健全な成長を促す教育者として如何なものかと、やや首を傾げたくもあるが。

だからと言って、俺にとつてもだが、それ以上に彼女達にとって最も大切な物を奪われそうになった過去の全てを水に流せるかと言われると……複雑だな。

確かにそのおかげで彼女達の大切な物を絶対に護り抜く事と新たに見つけた自分の大切な目標と決意を固める事にもなったわけだし。

カマキリ（本人の前以外ではこのままでいいか）が言う通り、もう少し出合い方が違っていれば、あまり羽田野先生の言葉を借りたくはないが、間違いなく『同志』になれただろう。

バスケットと小学生（対象が男の子という点が違うけど）が大好きで熱い情熱を注いでいる姿はまさに俺と同じはずだ。

「よしっ。それじゃ、みんな集合ー」

『はーいっ』

俺の呼びかけにすぐに集まってくれる。うん。みんな本当に良い子だ。

みんなとの大切な絆であるこの場所を護る事ができた後だって……いや、その後だからこそ、彼女達は本気でバスケット向き合うようになつてくれたんだ。

「これから試合だけど、俺が教えられることはほとんど教えられたと思うし、みんなは今まで通り自分達のバスケットを精いっぱい楽しんで来てくれればいい。きつとそれだけでとても良い試合ができると信じているから」

「はいっ。昴さんのこれまでの教えを全部出し尽くしていきますっ」

「あたしはいっつもすっげえー楽しんでるっ。それで男バスにもゼツテー勝つてやるんだっ」

「だからって、あんまり飛ばし過ぎていきなりバテないでよね。ま、私もすぐくワクワクしてるんだけどねっ」

「うん。私も、あの時の私のままじゃないって、みんなにしつかり見てもらいたいっ」

「おーひなも。ひなだって、前よりもちよつと離れたところからのシュートだつて入るようになったところ、みんなに見てもらいたいー」

そうさ。男バスがどれだけ更に実力を付けているかわからないけど、こつちだつて、みんなあの頃とは比べ物にならないくらいに成長しているんだ。

「そろそろ試合開始だ。それじゃ、試合前に――」

輪の形に集まったみんなの中心に手を前に出すと、智花、真帆、紗季、愛莉、ひなたちゃんの順に五人の小さな手が一斉に重ねられる。

智花に視線を送ると、小さく頷く。

「みんなっ行くよー!!」

『おー!!』

円陣を組んで気持ちの一つにした五人がコートに入っていく。男バスの選手達からは以前のような険悪な雰囲気は感じられないが、それ以上にこれから強敵に挑むような強い闘争心を燃やしているようだ。

十人の選手が整列し一礼を交わしたところで試合開始だ。

四人は間隔を開けつつ、センターサークルへ入っていた愛莉を見守っている。

そして、愛莉がジャンパーになった事で、男バス側が息を飲む様子が伝わってきた。

そうさ。向こうにとってはこの時点で、脅威となるはずだ。

すでに事前情報として知ってても、実際にこの状況に直面してしまえば、動揺を抑え切れるわけがない。

絶対的アドバンテージを持ちつつも、それを活かし切れていなかった頃の愛莉はもういない。

彼女のいくつもの蕾はすでに開花し、更に新たな可能性の蕾を作り続けているんだ。

審判のホイッスルが鳴り響くと同時に手からボールが真上に高く上げられる。

案の定、ジャンプボールはあっさり愛莉が制し、ひなたへとボールを弾いた。

「おー。ないすあいりー」

よし、愛莉も誰にボールを送るべきかしっかり見えている。

男バス側も、もうこちら側にフリーにしていい選手なんて誰もいない事はわかっている。特に智花への警戒を緩める事はできない。

一人一人にしっかりマークを付けていても、今までに散々苦渋を味あわせれ続けていた智花に意識が向きすぎている。

そして、その分だけ警戒を怠ってはいけなさとわかっているはずなのに、その天使のような——というか、天使そのものであるひなたちゃんへのマークが緩んでしまっている。

二つ名である無垢なる魔性——イノセント・チャームはどうやら竹中以外にも一定の効果を上げていているのかもしれない。

ボールを奪われる事を見越していたのか男バス側はいち早く駆け出しデیفエンス陣形を敷こう駆け出している。

追いかけるように智花と真帆と愛莉も敵コートへ走り出していた。

「ひな。一回こっちに戻して」

「おー。やぎー」

紗季が自分とひなたへのマークが完全に着く前にボールを戻すように指示を出す。

これまでに何度も練習を繰り返した慧心女バスの定石の流れは淀みなく行われ——

「うっしやー！ 狙い通りだぜ!!」

「夏陽?」

——竹中が二人の間を駆け抜け、ひなたちゃんから紗季へのパスをインターセプトする。

慌ててひなたと紗季が振り返り竹中を止めようとするも、最初に虚を突かれ反応が遅れたのが致命的だった。

すでにスピードが乗ってしまったている竹中は誰にも追いつかれる事なく一気に攻め込みレイアップを決めてしまった。

こつちが最初にボールを制したのに、まさかこうもあっさり先制点を許してしまうとは。

「しやーっ！ 先制点ゲットー!」

ゴールを決め、仲間が待っている自軍へとガッツポーズを決めながら悠々と戻っていく竹中。

「へっ。今までお前らの練習にどんだけ付き合ってたってきたと思っただ。そのパターンは読めてんだよ」

やろー。途中で俺の方を見ると憎まれ口を叩いていきやがった。

なるほど。竹中にはこちらのやり方が筒抜けになってる事が多いってわけか。

おそらく加速力の高い智花と真帆にボールが渡り、そのまま速攻を決められないようにしっかりとマークを固めつつ、ひなたちゃんへの



マークを意図的に緩めていたのだろう。

ひなたちゃんを完全にフリーにしなかったのは、受け取ったひなたちゃんがパスを回さず攻め込まないようにしたためか。

そして、狙い通りひなたちゃんがボールを受けた瞬間から、紗季にボールが渡る事を確信してタイミングを計って一気に飛び込んだのだ。

加えて男バス側が急いで守りに走っていくのに釣られてしまい、虎視眈々と隙を窺っていた竹中への意識を外されてしまっていた。というところか。

——やってくれたな竹中。

こつちがジャンプボールを制したのなら、紗季がボールをキープするまでが言わばヒーローやヒロインが変身を完了し戦闘態勢に入るようなものだろう。

そこを狙ってくるとは、まさに変身中のヒロインを攻撃するようなものではないのか？

変身前のダメージが致命傷になって脱落してしまう主人公や悪役だっているんだぞ。

——余談だが、前に智花と一緒にぶにきゅあを見ていた時に変身シーンが始まったら、途端に気まづくなった事も思い出してしまった。

彼女と同年代くらいの子が全身から謎の光を放ち、長々と肌を晒しながら少しずつ変身コスチュームに身を包んで行く姿を見せ続けられるのは中々の苦痛だった。

恥ずかしそうに俺の様子を横目でチラチラと窺っている智花の視線が……いや、今はそんな事はどうでもいいんだ。

「おー……ひなのせいで、みんなごめんねー」

「気にすんなつ。ナツヒめーヒキョーな手を使いやがってー」

「どんまい、ひなた。しっかり取り返していこうっ」

「気にしないで、ひなたちゃん」

「あれは仕方ないって。私もひなにボールもらうのに集中しすぎて、夏陽の警戒を怠っていたんだから」

自分のミスだとしょんぼりと落ち込んでしまっている一人の天使を慰める天使達。

初手で出鼻を挫かれてしまったが、この程度で崩れる彼女達ではない——むしろ一気に燃え上がった事だろう。

取られたら、取り返すまでだ。

たっぷりと倍返しだな。

## マッチアップ3

女バス 0―2 男バス

竹中とカマキリどちらの策略か……いや、そんな事は関係ない。試合開始早々の奇襲に先制を許してしまったが、これはこちらの手の内のほとんどが知られてしまっている以上仕方ないと割り切るしかないんだ。

みんながすでに気持ちを切り替えているんだし、コーチである俺がいつまでも引きずってはいけないな。

むしろ竹中に一発かまされた事で彼に対して人一倍対抗心が強い真帆がヒートアップし過ぎてしまわないかが少し心配だけど——どうやら大丈夫そうだ。

「むーっ。ナツヒめー、絶対に取り返してやるからなっ」

「まだ始まったばかりなんだから、いきなり飛ばしすぎてバテても知らないわよ」

紗季がエンドラインの真帆からボールを受け、緩やかなドリブルを続け周囲を見渡しながらハーフラインまでボールを運ぶ。

誰に反撃の狼煙を上げてもらうかの選定をしているが——まあ、これは言うまでもないな。

男バス側としては今までの試合経験から智花と愛莉に人数を割いてしっかりと抑えたいだろうが、もはやそんな余裕はない。

智花のワンマンチームと言われていた頃が嘘だと思っくらしいに全員が大きな成長を遂げている。

男バス同様に圧倒的な大差で地区優勝を決めた硯谷にこのチームにフリーにしている選手はいないとまで言わしめたのだから。

それなら現状、せっかくこっちが抑えている最高の制空権を利用しない手はない。

「愛莉ー」

「はいっ」

ローポストに陣取った愛莉が紗季からの高めのパスを受け取り、五番（戸嶋）にポストプレーで挑む。

背を向け、中へあと一步深く踏み込むべくパワードリブルを仕掛ける愛莉に対して、侵入を許すまいと必死に食い止めようとしているが、やはり分はこちらにあるようだ。

パワー勝負を制しゴール下へと入り込んだ愛莉が、シュートを決めてまず一本取り返す。

「こりや前みたいな手はもう使えそうにねーな。前はビビらせちまっ  
て悪かったな」

「ううん。あの時の事は気にしないで戸嶋君。私も負けないうようにがんばるから、遠慮なくどんどん勝負してきてね」

愛莉にもう以前のような脅しは通じないことも十分伝わった事だろうし、ここからは純粹な真っ向勝負となるだろう。

「おいっ。長谷川。誰だあいつは!! なんて試合中に愛莉と親しげに話をしてやがんだっ!」

戸嶋と愛莉が一言二言を会話を交わしていたが、その様子に憤慨している兄が突然、俺の肩を掴んで怒りを露わにしながら説明を求めた。

仕方なく、過去の球技大会の話を聞かせてやると、「怖がりだった愛莉になんて手段を!!」と更に怒り出した。めんどくせえ。

ってか、愛莉の怖がりもコンプレックスも半分以上はお前が原因だろうに。

「愛莉。ナイツシユ」

「よっしやあ。ナイスだアイリーン!」

ベンチサイドで激昂している兄の様子に不思議そうに首を傾げながらも、コート内の仲間達からの賞賛の声を受けると表情を綻ばせ笑顔を向けながら、仲間達の元へと向かっていく。

そんな彼女の後姿を闘志を燃やした瞳で見送っていく戸嶋と男バスメンバー。

体格差があるとはいえ男子がこのまま女子に負けるわけにはいき  
まい。

センター対決は戸嶋がどこまで男の意地で食らいついてくるかと、それを愛莉がどこまで抑えられるかだな。

女バス 2―2 男バス

「タケツ」

「うーし。しつかり決めて行くぞっ」

攻守交代し、エンドラインからのパスを受け突っ込んできたのは男バス側ポイントゲッターのエース竹中。

迎え撃つはこちらも女バスのエース智花だ。

ハーラインを越えた辺りでドリブルを続けながら、智花を抜く機を狙っているようだが、すでに根付いてしまっている苦手意識を取り除くのは厳しいだろう。

「タケツ！ 無理すんな。パス回せっ」

「……ちっ」

逡巡の末、まだ流れが悪いと判断し智花との対決を保留し、パスを要求した六番（深田）にボールを預ける。

竹中からボールが離れた後もしつかりマークし牽制を続ける智花。

おそらくいざれ直接対決を挑んでくると思うが、竹中がいつまでも腹を決められずに智花との勝負を避け続けてしまえば……バスケット手として少々厄介な傷を負ってしまうかもしれない。

……いや。俺や葵に気後れする事なく全力で挑んでくるような奴に限って、そんな事はないな。

むしろ爪を研ぎながら、ここぞという時に獲物に飛び掛かってくる獣みたいな男だ。警戒するのはこちらの方だろう。

竹中からボールを託された深田にすぐに真帆が駆け寄りマッチアップする。

「フカちゃんが、あたしの相手か」

「深田だっ！ ったく、だれかれ構わず変なアダ名付けんよなっ」

フカちゃん……なんかオフェンス能力に特化してそんな人に付けられそうなアダ名に似てる気がする。いやそんな気がするだけだ。

そんなよくわからない俺の予感が的中したのか、フカちゃんは竹中

に準じる程の突破力を発揮し単身で真帆を抜き去る事に成功する。

続いてスクリーン役となった戸嶋と連携し愛莉を躲し、シユートを決められてしまった。

「しゃあっ！ このまましっかり守っていくぞっ」

「ぐぬぬっ。フカちゃんもアナドレナイな」

「おー。たけなかもだけど、フカちゃんもケーカイしなくては」

「だから深田だつてのっ!!」

真帆に『フカちゃん』とアダ名を付けられてしまっている深田には若干同情を禁じ得ない。

あの年で女の子にちゃん付けで呼ばれるのは恥ずかしいだろうし……本気で嫌そうにしてるなら、あとで真帆にちゃんと言い聞かせておかないと。

代替案として……例えば『フツキー』とか。うん、こつちもきつとオフENS能力が高そうだ。そんな気がするだけだけど。

それにしても真帆のあの様子だと男バスのみんなにも色んなアダ名を付けてそうだな。

過去のイザコザがあつたにしても、結局はミホ姉とカマキリが原因だっただけだし、なんだかんだでやっぱみんな仲良いのかな？

女バス 2ー4 男バス

点差が戻ってしまったが、こちらも攻めの手札はまだまだいくらでもある。

どこまでそれが通じるかもだけど、何よりみんなに自分達の成長を肌で感じてもらえたらと思っていたのだが、

……ひよつとして、これは男バスにはなかなか厳しい展開じゃないかな？

智花や愛莉へのデイフェENSを意識しすぎてしまい、フリーの選手が出てしまうと、最初の時に翻弄された真帆と紗季の高精度のシユートが狙ってくる。

しかも今回はひなたちゃんもしっかりと攻守共に参加し、ひなたちゃんマスターを目指す俺ですら予想が付かない思いもよらない行動で男バスを翻弄してくれることだろう。

これまで通りじつくりと確実に攻めて行くだけで、少なくともこちらが点差を離される事はないだろう。

そして、女バスの課題としてはやはりディフェンス面か。

竹中を智花が抑える事で相手の速攻の足を止めて、こちらもしつかりとディフェンスを敷けているが、やはり個々の技量を考えると総合力ではまだ男バスに分があるように思える。

こればかりは純粋な経験の差だろうけど、今後のみんなの努力次第かな。

まあ今回に限って言えば、愛莉がほぼ確実にリバウンドを抑えてしまえるだろうから、男バスにとってシュートミスは致命的になりかねない。

それだけでもかなりのプレッシャーになるだろうし、その上シュートを打つまでも隙あらば、こちらがスティールを狙ってくるのだ。

以前のように智花さえ抑えれば抜き放題、打ち放題とは行かないぞ。

強いて言うなら愛莉以外は男バスの方がわずかに上背はあるのだが、智花や真帆達の身体能力の高さの前ではほぼ誤差と言ってしまっても構わないだろう。

「やっぱり男バスのみんなもすごく上手いね」

「ちくしよーっ。なかなか逆転できねーぞっ」

「仕方ないでしょ。悔しいけど純粋な技術じゃまだまだ私達は追いつけてないみたいなんだし——でも、このまま行けばきつと勝てると思うわよ」

「竹中君がまだ積極的に動いてきてないのが気になるけど……うん。みんなで最後まで頑張っていこうね」

「おー。しっかり攻めてしっかり守るぞーっ」

男バスがこちらの実力を認めているのと同様に彼女達も男バスが自分達よりも優れている部分がある事をしっかりと理解している。

むしろ最初の頃の智花におんぶに抱っこのような状況に比べて自分達が男バス相手にしっかりと渡り合えている事に成長の手応えを感じてくれている事だろう。

この調子なら試合中に個人としてもチームとしても更なる成長を遂げる事ができるはずだ。

女バス 6―6 男バス

ここから徐々に均衡が崩れ始める。

「しまったっ!？」

ミドルレンジからのシュートを放った七番(菊池)が悲痛な声を上げる。

紗季のマークを躲してシュートを放ったが、わずかにフォームが乱れてしまっていたのだ。

遂に男バス側のシュートがリングに弾かれる。

『愛莉っ!!』

女バスサイドのメンバーが一斉に声を上げ、それに呼応するように愛莉が高く跳躍し、ボールを捉えた。

——この絶好のチャンスを逃さない手はない!

「愛莉っ!」

「智花ちゃんっ!」

愛莉が絶対にリバウンドを制すると確信し、すでに走り出していた智花に愛莉のパスが通る。

追いかけて来ている竹中を引き離すようにギアを一段階上げさらに加速する——が、竹中も負けじと追い抜こうと速度を上げる。

「あっ……くそっ!!」

いよいよ竹中が追い付くかというところで、急停止——竹中がオーバランしてしまっている隙に、その場で数回ドリブルを付きながら自分のリズムを整え、スリーポイントライン寄りのロングレンジからシュートを放つ。

目に焼き付き、夢にまで出てしまうくらいに今までに何度も見続けた物と変わらない完璧なフォームから放たれたシュートは、見慣れた放物線を描きながらゴールへと収まったのだった。

「よっしゃーっ!! 逆転だっ!! ナイスだもっかんっ!!」

「ナイツシュトモっ」

女バス 8―6 男バス



「にひひっ。ワクワクさんの相手があたしだけだと思ふなよ」

「和久井だつてのっ!! —— あっ!？」

「とー。ひなさんじょー」

敵も味方もスクリーンとして利用し、死角から急接近する小さな影。

まるで、多くの人々が行き交う雑踏の中、人と人との隙間を縫うように楽しそうに駆け回る小さな天使。

奇跡の象徴とも言える存在を捕えようと幾千幾万の手が伸びてきたとしても、そのことごとくをすり抜け、代わりに伸ばした手には彼女が直前までは、確実にその場にいたという証の一枚の羽根が残されているのみ。

そんな幻想を幻覚を魅せてくれた天使——ひなたちゃんが8番（ワクワクさん）へのステイルに成功する。

遂に逆転された事に焦りを感じた男バスが、再び大切なボールを女バスに許してしまった瞬間だった。

「湊っ—」

「させるかっ—」

先程と同様にカウンターに走り出す素振りを見せた智花を止めようと竹中と菊池がダブルチームで進路を塞ぐ。

直前に見せつけられてしまったため、嫌でも智花への意識が高まってしまっているのだろうが……残念だが彼女は同じ手を使う気はないらしいぞ。

「おー。きゃっ」

「よし。今度はちゃんともらったわよヒナ」

智花が二人を引き連れてくれた事でフリーになった紗季がひなたちゃんからのパスをもらおうとすぐにコートを駆け出す。

さあどうする？

いつまでも智花相手に二人掛かりだとフリーの紗季が射程距離まで辿り着いてしまうぞ。

「菊池。湊は俺が抑えるから紗季に着け」

「お、おう。頼むぞタケツ」

智花へのダブルチームを解除し、菊池が先のマークへ動き出すのほぼ同時に智花と竹中もポジション争いを開始する。

この時点で紗季は自分が攻めるよりも智花へパスを回す選択肢を取る事も視野に入れただろう。

注目のエース対決の初戦は智花攻めの竹中受けとなるか……いや、ちがうな。

菊池が進路上で待ち構えている状況で紗季は左サイドヘドリブルを続ける。

紗季の進路を塞ぐように同じ方向に動いた菊池が上手く釣れた事を確信しボールを後ろへ送ると、そこに真帆がいた。

「頼んだわよ真帆」

「任せろサキッ」

すぐに反転し紗季がスクリーンとなり、パスを受けた真帆も速度を上げて紗季が確保した進路を一気に駆け抜けて、そこ——リングから右斜め四五度のミドルレンジに辿り着く。

大切な友人——智花を理想に毎日欠かさずに練習を続けているシュートは当然のように淀みなくゴールへと吸い込まれていった。

「よっしゃー！ さすがあたしだっ！ シュートは任せろー!!」

さすが智花を目指してるだけあってフォームもどんどん良くなってきたるな。

でも、ゴールに入るのを確認する前にガッツポーズなんかして、万が一外したらすぐくカッコ悪い事になっちゃうぞ。

勝負強い真帆に限ってそんな事はそうそうないだろうけど。

なんにせよ、このゴールで確実なリードを手にする事ができたし、こちらの士気も一気跳ね上がったな。

女バス 10ー6 男バス

ここで審判から男バス側のタイムアウトが告げられる。

今すぐにでもみんなを褒めまくり、撫でまくりたいが、それは試合が終わってから思う存分すればいい事だ。

みんなが呼び寄せ、真帆が遂に引き込んだこの良い流れをしつかりと維持したまま試合を終えるためにも、みんなにはしつかりと休憩に

専念してもらわないとな。

## マッチアップ4

——6—D唯一のバスケット経験者だった少年の回想——

仲間でありライバルである多くの部員達との厳しい練習と激しい争いの末、初参加だった春に続き今回も無事にレギュラー入りを決めた大きな大会が間近に迫っていた。

春の大会では思うような成果を上げる事ができなかつた事と自身の不甲斐なさに部活外でも秘密特訓に明け暮れていた。

そんな時、美星先生が突然バスケットをやろうと言い出したのだ。

シロート共相手じゃ練習になんねーだろうけど、大会も近いから少しでもバスケットしたいって思っていたし、ちよーどいいか。

ひなたにも俺のカッコいいところをたつぷりと見せてやれるし。

そんな軽い気持ちで始めたが、案の定ラクシヨ。

必死に食らいついてくる真帆をからかうようにあしらってやる。いくらやってもこれだけはお前には負けねーよ。

このクラスにまともなバスケット経験者なんて俺一人だから、いくらでも相手を抜けるし、シユートだって決め放題だ。

俺がボールを奪うたび、シユートを決める度に巻き起こる歓声が心地良かった。

すっかり気を良くした俺がフリーになった状態からもう一本決めようかと思つて、ちよーどボールを持っていた女子にパスを超越せと指示を出す。

だが、その女子は俺の指示を無視して、あろうことかでたらめなフォームでシユートを打ち……当然だけど外しやがった。

その様子を見て思わず怒りが爆発してしまった。

——へたくそがシユート打つな!!

思わず言ってしまった瞬間やっちゃったと思った。

これは体育のバスケットで試合じゃないってわかっていたはずなのに。俺にとつてもただの息抜きのはずだったのに、思わず自分の思い通りにならなかつたことにイラついてしまったんだと思う。

その子が泣き出してしまい、慌てて謝ろうとしたのに、おせっかい

焼きのせいで思わず謝りそびれてしまった。

そのまま話は大きくこじれてしまい、結局男子と女子で別れて試合をする事になり、俺も自分の意地を通す事を決めてしまった。

仕方ない。真帆をコテンパンに打ちのめした後に、あの子にしっかりと謝ろう。そう思つて試合に臨んだはずだったのに……

——なんでこんな事が起きてんだよ!!　　こんな完全にケーサンガイだよ!!

女子の中でもやる気に満ち溢れている連中の中に巻き込まれるように、おどおどしながら入ってきた奴が。

香椎並みに大人しくて完全にノーマークだった湊が。

ガチのバスケ経験者で……しかも、認めたくないが俺よりも上手かった。

『へたくそがシュート打つな!!』と言つてしまった俺以上に上手くて、俺以上にシュートを決めやがんだよ!?

この時点で俺のプライドはボロボロだった。

こんなのつてあるかよ……なんでこんなに上手い奴が今までコソコソとしてやがったんだよ。

真帆みたいに悪知恵やひきよーな手を使わずに、純粋にバスケの実力だけで俺を簡単に抜きやがる奴がどうして……

何度味方からパスを受けても、何度ボールを渡された湊を止めようと挑んでも……

悔しいけど、今の俺の実力じゃ一対一で湊に勝つのは無理だと心底思い知らされた。

——くそっ。せめて……せめてあいつらがここにいてくれたら……

激しいレギュラー争いを必死に勝ち取り合う事ができたあいつらがいってくれたら、こんな惨めな結果で終わらなかつたはずなのに……勝つつもりだった勝負に惨敗し、その日の授業は終わってしまった。

悔しさと惨めさと情けない気持ちがいっぺんに押し寄せてきて、

結局俺はあの子には謝る事もできないまま、逃げる様にその場から

走り去ってしまった。

\*

うらむ。困ったぞ。

すぐく撫でたい。めちやくちや撫で回したい。

なんとなく真帆やひなたちゃんも、うずうずしてるように見えるけど、やっぱりここはそういう事をしてはいけない場面だと自重してくれているのだろう。

ならば、せつかくの良い感じの緊張感をコーチ自らがぶち壊してしまおうわけにもいかない。

「みんなもうすぐ前半が終わるけど、この短い休憩もしっかりと休んで最後まで気を抜かずに頑張ってるねっ」

「よっしゃっ。気合入れて休むぜー」

「気合入れたら休めないでしょーが。少しは大人しく休んでなさいっ」

ゴールを決めて気分が高揚したところで中断されたからか、やる気の矛先を見失っている真帆を窘める紗季。

上手く灯った火を燃やしすぎず、かと言って消さないようにと絶妙の火加減に調整してくれているようだ。

「俺の教えをしっかりと実践してくれてるな。いいぞ。どんどん上手くなってるぞっ」

「おー。あいりのおかげでひなも上手くボールが取れましたー」

「そ、そうかな？ えへへ……ひなちゃんの、みんなのお役に立てたのなら良かった」

兄からの手放しの賞賛と嬉しそうに自分達の活躍を話しながら手を握るひなたちゃんに表情を綻ばせる愛莉。

実際、男バス側は目の前の相手だけでなく、嫌でもゴール下で立ちはだかる愛莉の存在を意識してしまっているはずだ。

意識を向けすぎてしまえば今回の様に隙をついた奇襲を受けたり、残り時間を焦るあまりシュートミスを犯してしまう。

「竹中君ほとんど動いてきませんね」

「もしかしたら、ここから動き出すか、後半に備えているのかもね」

智花だったら竹中をしつかりと抑えてくれると信じているが、決して過信してはいけない。

いつまでもこちらがリードを作れなかったら、一時的に智花に頼る事も考えたが、それは信頼と言うよりは依存になってしまうだろう。何より男バスの切り札が動く前にこちらの切り札の体力を無駄に消費させてしまう事はしたくなかった。

向こうもこちらと同じく少しでもエースの体力を減らしたいと考えていたはずだ。

結果的にお互いのエースが動かないまま、こちら側へ均衡が崩れ始めてしまったから慌ててタイムアウトを取り、巻き直しを図っているのだろう。

悪いがこのリードはこのまま維持させてもらうぜ。

タイムアウト終了の合図とともに、表情を引き締めながらコート内へ戻っていく五人の背中には、いつの間にかとても頼もしさを感じるようになっていた。

男バスボールから試合再開。

カマキリの叱咤激励でどれだけ落ち着きを取り戻せたか、新たな策を講じてくるかをコーチとしてしつかり見極めなくてはな。

前半終了まで残り約2分。

やはり智花にマークされている竹中は大きな動きを見せずに、パス回しをメインにこちらの穴が開くのを待ち構えているようだ。

シュートミスが致命的となる事を身を持って体験したためか、時間を掛けてより慎重に攻めてきている。

その様子からもどうやら平常心を取り戻すことに成功したようだ。

男バス、女バス共に交互にゴールを決め合う展開が続く。

そして、前半終了間際に遂に竹中が動き出したが、智花もすぐに反応する。

「——くそっ!?!」

ここで少しでも点差を縮めておきたい。そんな竹中の焦りを見抜いたように、智花が冷静に対処する。

竹中のチェンジオブペースに反応し進路を塞ぎ、足が止まったところでステイールを決めると、そのままコートを一気に駆け抜けレイアップシュートが相手ゴールネットを揺らすのだった。

注目のエース対決、初戦は概ね予想通り智花が取ったか。

女バス 14―8 男バス

女バスが6点差で前半終了となった。

「ナイツシユームつかんっ!」

「さすがトモっ」

「智花ちゃん、すごくかっこ良かったよ」

「おー。ともかナイスシュート」

「えへへ。みんなありがとうっ」

鮮やかなゴールを決めた智花が自分側のコートへ戻ってくるのに対して、四人も彼女の方へ向かって行き労いながら彼女を取り囲んでいく。

これが智花やみんながずっと望んでいた光景で、いつまでも守りたかった場所なんだよな。

ふとそんな事を思いながら、五人揃って嬉しそうに笑い合いながら俺達が待つベンチへと戻ってきてくれた彼女達を優しく迎え入れる。

「すばるんすばるんっ。あたしのカツヤク見てくれてたっ!」

「こらっ。あんまり時間ないんだから、しっかり休みながら長谷川さんの指示を仰がないと」

真帆が褒めて褒めてと俺にじやれるように抱き着いてくるのを困り顔で窘める紗季。

「あはは。真帆だけじゃなくて、みんなすごく良く動いてくれてるよ。この調子で後半もしっかり頑張っついでいこう!」

無意識に真帆の頭を優しく撫でつつ、みんなを一瞥する。よし。それほど疲労が溜まっていない様子もないな。

体力方面ではもう公式戦をこなせるだけの持久力も十分備わっているのはわかっているんだけど、やっぱり男バス相手だと最初の頃の事を思い出してしまう。



みんなの強い意志と友情でギリギリのところまで勝ち取れた勝利。その勝利の末に守られた俺と小学生達との安息の地。

この場所で俺と小学生達が深めた絆とその成果を。

俺が彼女達に余すことなく注ぎ込んだ熱い情熱の結晶が、彼女達の中でしつかりと根付き、実を結んだ証をしつかりと見せつけてやろうぜ。

「おー。おにーちゃん。ひなもひなもー」

気づくとひなたちちゃんも俺の側により、小さな頭を俺に差し出していた。

「ひなたちちゃんも、さっきのステイール良かったよ」

「わーい。もつともつとがんばるぞー」

まるで天使が（いや、実際に天使そのものだけど）羽を休めるように純粹無垢な笑顔で俺に寄り添ってくれる少女。

空いている手でひなたちちゃんの撫で心地の良いふわふわの髪を撫でていると、

「じー……はっ!? うう……」

「……………いいなあ……………」

「ダ、ダメよつ。今は試合中なんだから……………」

遠巻きに羨ましそうに眺めている三人の姿が——少しくらいなら……………いいよな?」

「智花。今日もすごく良いよ。この調子でみんなを引っ張っていったね」

「ふあう……………は、はいっ!」

「愛莉。君は慧心女バス自慢のセンターだ。自信持ってバンバンリバウンドやシュートしちゃったっていいんだよ」

「あ……………ありがとうございますつ。わ、私、もつともつと自信持てるよ うにがんばりますつ」

「ほらほら。遠慮してるとあつという間に時間無くなっちゃうよ?」

——後半も紗季の活躍期待してるよつ」

「す、すみません……………それではお言葉に甘えて少しだけ——ありがとうございますつ。みんなと力を合わせて、きつと長谷川さんのご期待に

応えて見せますっ」

結局三人も呼び寄せ一人一人丁寧に撫でつつ、背後から感じる複数の冷ややかな視線を浴びながら残りわずかなハーフタイムを過ごす事となったのだった。

## マッチアツプ5

「ふあう……」

「にしし……」

「んっ……」

「えへへ……」

「お……」

言葉なんていらぬ。

ただこうして寄り添って、互いの柔らかな感触を、肌の温もりを確かめ合ってさえいられば、それだけで十分なんだ。

「——いつまでもこの子達を撫で回してないで、コーチらしく気の利いた指示とかなんか出さなさいよっ!!」

「——もう我慢できんっ!! 昂っ!! さっきから調子こいて、大切な妹に触りまくってんじゃねえっ!!」

「ふう……やっぱり、小学生はさいこ——ぐはあ!?!」

突如鋭くキレのある一撃と、ズシンと体の奥底に響くような重い一撃が俺の身に襲い掛かる。

咄嗟の事に反応できず、俺は先ほどまで肌を寄せ合っていた小学生達から引き離されるように吹き飛ばされてしまったのだった。

どういうわけか五年生組と愛莉専属のそれぞれのコーチ二人組の不満を買ってしまったようだ……何故だ?

いや、愛莉に関しては兄が見ている前でどこの輩とも知れない馬の骨が、目の前で大切な妹の頭を撫でるのは少々無神経だったかもしれない。

ちよつと端の方に視線を向けると、ひなたちゃん妹であるかげつちちゃんも心配そうにこつちを見てるし。反省。

今の騒動で注目を集めてしまったせいかな、竹中もなんかこつちをすごい睨んでるが——あ、カマキリに怒られてやんの。

「——で、この大切な時間に、この子達をイヤらしく撫で回すだけで、コーチとして後半に向けて何か伝えるべき事はないんでしょうか?」

慧心学園女子ミニバス部の長谷川コーチは?」

葵の方の不満はこれか。ただみんなと気持ちを一つにしていただけで、別にイヤらしい事なんて何もしてないだろうに。

それにこの子達にとつて、こうしていられる時間がどれだけ大切かを全く分かっていないな。

何も言葉だけがコミュニケーションの取り方じゃないんだ。

身を寄せ合ってお互いの存在を感じ合う事で、固い結束の元に気持ちを一つにする事ができる。

それは、高い集中状態の維持や、チームとしての連携の向上にだって繋がるんだぞ。

……とはいえ、怒気を孕んだ瞳で睨みつけて来る彼女相手にそんな事を説明しても、きつとまた蹴り返されてしまう事だろう。

さすがに俺も、決して自分からは抱きしめてはいないんだけど、五人が一斉に俺のところに来るもんだから、その……肌の密着感がちよつと危険な感じもしてたし……

——それはともかく。

「理想はこのままの展開で進んでリードを維持するなり、さらに広げられる事だろうけど——」

当然仕掛けてくるだろうな。

互いに点を取り合ってるだけじゃ、いつまでも点差は縮まらないし、そんなんじや残り六分なんてあつという間だ。

おそらく最初から前半同様に得意のマンツーマンを、今度はオールコートで仕掛けてきて積極的にこちらのボールを狙ってくるだろう。

「——向こうがどんな手を仕掛けてきたとしても、向こうに合わせて張り合う必要はないよ。こっちがリードしてるんだから、ボールを取られないようにしっかりと守って確実に攻めて行くんだ」

『はいっ!!』

試合再開直前には、全員緩み切った表情から一転さえ、気持ちを引き締める。

後半戦開始のブザーが鳴ると、試合モードへ気持ちを切り替えコートへ戻っていく五人の背中を温かく見送った。

「女バスのやつらに絶対に勝つぞっ!!」

『おーっ!!』

男バス側も円陣を組みしっかりと気合を入れ直したようだ。ほら  
みる葵。やっぱり肌と肌の触れ合いってとつても大切な事じゃない  
か。

竹中を中心に他の四人も瞳の中に熱い闘志を燃やしている。

そこに油断や慢心といった緩みは一切ない。

かつては智花一人を警戒していたが、今となつては女バス一人一人  
をライバルとして、越えるべき——越えなくてはいけない壁として認  
識し、考えられる限りの策と己の力を振り絞り全力で挑んでくること  
だろう。

女バス 14―8 男バス

男バスボールで後半戦が開始された。

前半同様に速いパス回しを意識した攻めを展開してこちらのゴ  
ールを狙ってきている。

もしかしたら、竹中を信用していないというわけではないだろう  
が、これまでの女バスとの試合や遠征で男バスそのもののプレイスタ  
イルを変えたのかもしれないという印象を受けた。

手堅いマンツーマンディフェンスはともかく、オフセンスに関しては竹  
中がほぼ一手に背負っていたため、結果的に智花以外が素人だった最  
初の頃も竹中を抑える事で大量得点される展開を防ぐ事ができたの  
もかつての勝因の一つだろう。

そして、球技大会では点取り屋だった竹中不在の男バスは智花を抑  
える事はできても、智花を抑えるために割いた人手の分だけ、女バス  
側は常に誰がフリーになれる状況ができ、それが最終的に決定力の差  
となつて現れた。

当時は女バスを智花一人のワンマンチームと評価していたが、実は  
男バスもオフセンス面では竹中のワンマンチームとなつてしまつて  
いた事に竹中自身が気づいたのかもしれないな。

確かに最初は、ただの仲良しグループのお遊びチームだったので

う。

だが、結果的にそのおかげで得られた固い絆と信頼が地区大会優勝チームを凌駕する程の強いチームプレイを可能にさせたのだ。

女バスと試合したおかげでお前達もたくさん得られる物があつただろう？

ならそれらをしっかりとぶつけてこい。

彼女達は正面から受けて立って、きつと今度だつてお前達に勝つて見せるからさ。

男バスがこちらのディフェンスを掻い潜り、こちらのゴールネットを揺らしターンオーバー。

女バス 14―10 男バス

これでリードは2ゴール差か。

予想通り、智花と紗季に着いていた竹中と菊池に加え、ワクワクさんもひなたちゃんをマークしながら、こちら側のコートに留まるとプレッシャーを掛けながら追加点を狙ってきている。

智花達が三人でアイコンタクトを取りあつた直後に、左サイドの紗季が下に逆サイドのひなたちゃんが上へと同時に走り出す。

「紗季っ」

「はいっつと。――夏陽にトモのすゞさ見せつけてやりなさいっ」

智花から紗季へスローインをし、パスコースを塞がれる前にすぐに智花へリターン。

「あ!? くそっ!!」

素早いクロスオーバーからのバックロールで竹中をあつさりときき去る。

これで攻守共に智花が勝利しているが、多分気にしてるのは竹中達だけで智花自身は気にしてないんだろうな。

竹中自身も智花を意識して相当練習を積んでいるのは認めるが、1 On1ではまだまだ智花に分があるようだ。

コーチである俺がかつて竹中に無様に抜かれまくった事もあるが、元々俺は須賀のようなタイプとは相性が悪いしあの時はスランプだつたんだから仕方がない。

怜那さんのドライブを再現してもらった時に小学生相手に万全の状態でガチで抜かれてしまった事は認めるが、初見殺しだったあの一回だけで、それ以降の戦績はしっかり守り切っているんだ。

だが、今も思い出すたびに悔しさが込み上げてくる。俺の小学生相手の初めては智花のためにとっておきたかったのに。

まあいいさ。何も本当の意味での初めてってわけじゃないし、いつかきっと智花が竹中以上にすごい方法で俺を完膚なきまでに完璧に抜いてくれる事だろう。

それも一度や二度どころではなく、智花がきつと満足するまで何度も何度もたくさん相手をしてあげる事になるんだ……

何度も抜きたがる智花相手に俺も必死に抵抗すると、思う様に抜けなく事に悔しそうに可愛らしく頬をふくらませながら、ムキになってより激しい動きや俺との実践で身に着けたテクニックを駆使して、俺を満足させてくれる事は間違いない。

ヤバい。考えただけで、なんかすごいいうずうずしてきた。

智花とすごくしたい。

とはいえ、さすがに試合後はヘトヘトだろうし、俺のわがままで智花に無理をさせるわけにもいくまい。

こんなもはやした気分そのまま明日の朝までお預けかよ……

なんてことだ。大好きな小学生と大好きな事ができないのがこれほど辛いなんて夢にも追わなかったぞ。

俺と智花の近い将来の事(他人から見たら下らない事のように思えるかもしれないが)を考えつつも、しっかりと試合を見届ける事は決して怠らない。

今や将来有望株なみんなが汗水を流しながら本気でバスケットを楽しんでくれているんだ。

そんな彼女達の活躍を一秒たりとも見逃す事なんてできるものか。

コート内では何度となく挑んでくる竹中相手にボールをキープしつつ、彼女は何を考えているだろうか？

マンツーマンアップ相手を抜いているなら、このまま単身で

突っ切ってしまったもいい。

マンツールでは絶対に止められないエースの実力をしつかりとアピールする事で、仲間との連携を繋ぐ布石にもなる。

慌てて智花を抑えに他がヘルプに回ったのなら、そこでフリーになった仲間に彼女ならあつさりボールを託してしまうだろう。

負けず嫌いではあるが、彼女は自分よりもチームが勝つ事——大切な仲間が活躍する事を優先し望んでいる子だ。

内心では、もう少し普段俺と100%をやっている時みたいに彼女本来の攻撃的なオフエンスを發揮してもいいと思うんだけどな。

お互いにライバルと認め合った未有ちゃんとの時みたいに、磨き続けた個人技のぶつけ合いみたいな展開も智花だったらきつと誰にだって負けないと信じてる。

そんな俺の想いの中、彼女がとった選択は——

「愛莉っ」

信頼している仲間へと繋ぐパスだった。

さすがに後半開始直後から智花を走らせ続けるわけにはいかないし、絶対的な制空権は変わらずにこちらが握っている事には変わらない。

それなら通用してる間は、そこを起点に徹底的に攻めてやればいい。

自然と愛莉への負担が増えてしまう事になるが、当然みんなだって愛莉にだけ負担を押し付けるようなまねはしない。

愛莉以外には絶対に届きようなないパスを、愛莉が高く跳躍ししっかりと受け取る。

——直後、下からの戸島のステイールによって愛莉が託されたボールを掠め取られてしまった。

「きゃっ」

「っしやあ!! 行くぞっ!」

愛莉の手元を離れたボールを戸島がキープし走り出す。

そして、右のエンドライン近くでひなたちゃんとマツチアップしていたワクワクさんにパスを送った。



くそっ。最初に愛莉以外の高さはほぼ誤差のようなものとタカを括っていた自分を呪いたくなる。

ひなたちゃん自身のトリツキーかつ、天才——いや、天使的な感性から繰り広げられる立ち回りから錯覚していたが、こうした純粋な高さ勝負を挑まれてしまう展開では20cm程の身長差がネックとなってしまうっていた。

ワクワクさんがボールを手にした後も、ひなたちゃんが懸命なマークに着くが、ひなたちゃんやんの天使の抱擁（いや、ファールになるので本当に掴もうとはしていないが）の誘惑を、鮮やかなハンドリングとドリブルであっさりとは振り切られレイアップを決められてしまった。

これは完璧に俺の失策だな。みんなに本当に申し訳なく感じてしまう。

上は完全に愛莉が抑えているから大丈夫と慢心した挙句、今度は逆にその高さを相手に利用されてしまうとは……

女バス 14—12 男バス

「みんな、ごめんね。お兄ちゃんからもボールを取った直後が一番狙われやすいつて言われてたのに……」

「おー。ひなもまもれなかった」

「どんまい。愛莉っひなたっ」

「ヒナもアイリーンも気にすんなっ」

「まだこっちがリードしてるんだし、ここからしっかり取り返していきましょ」

誰も二人を責める事はせずに、落ち込んだ二人に優しく声を掛けている。

なんとかこの試合中に二人が気持ちを持ち直せるようなチャンスが来ればいいが。

当然みんなも無理な活躍を要求せずに、ここぞというタイミングで彼女達にパスを回す事を狙っているだろう。

思ったよりも、なかなか厳しい展開になってきたな。

男バスのデイフェンスを突破するには智花に頼らざるを得ない状況となってしまうている。

男バス相手に智花が未だに絶対的なアドバンテージとなっているのなら、本来ならそれを最大限有効活用できる展開なのだから、望ましいはずなのだが……

「湊ならともかく、まだお前ら相手に止められる気はしねーんだよっ!!」

「ちきしょーっ。ナツヒめーっ!!」

「落ち着きなさいっ！　せつかくトモが取り返してくれてるんだから、その分私達がしっかりと守らないと！」

智花が点数を取れば、当然竹中もカウンターを決めてくる。

しかも男バスの方がコートを使い方が抜群に上手いな。

こっちはオフエンスの際に戦場を拡大してしまったせいで広いコートで個々に分断されてしまっていて、上手く連携を繋ぎきれていない。

現状では互角の展開になっているが、流れは間違いなく男バス側に傾きつつある。

せめてこちらのデイフェンスの時に竹中を抑える事ができれば……

智花も対抗して竹中にオールコートで竹中をマークしてくれれば、それで解決するだろう。

だが、それだと結局智花のワンマンチームか。と思われてしまうのではないのだろうか？

……もしかして、彼女——彼女達はそんな事を考えていやしないか？

そんな考えを巡らすのとはほぼ同時に智花が遂に竹中にオールコートで着く決意をしたようだ。

しかし、竹中にマッチアップしているものの、その動きにどこかぎこちなさを感じてしまう。

きつと周りから見てもそう感じてしまうくらい、今の彼女は目の前の相手に集中しきれていないのだろう。

体力を消費しすぎたわけではないだろう。もしそうだとするならば、先にガス欠するのは最初から激しく動き続けてる男バス側の方だ。

「どうした湊？ そんなに周りばかり見て目の前の相手に集中してないよ——」

「あつ……」

智花の意識がわずかに外へ向いてしまったのを見計らい、竹中が動いた。

「簡単に抜かれちゃうぜっ！」

「——させないっ！」

ほとんど反射的に動いたようなものであるが、なんとかそのおかげで完全に抜かれきれず、すぐに並走しブロックを続ける。

早い段階でレイアップの体制に入った竹中の前に回り込むと、追いかける用に飛び上がり、シュートブロックを試みるが——

「まさか」

竹中が放ったボールはレイアップシュートの軌道よりも遙かに高く打ち上げられている。

「おらーっ！ 入り……やがれってんだ!!」

「そんな……」

彼女の手は高く放り上げられたボールに触れられず、虚しく空を切る。

智花も着地後、すぐに振り返り目でボールを追っている。

たとえばもう間に合わないとしても、すぐにでも駆け出して竹中のスクープショットを止めたい。

おそらく彼女も俺と同じ事を考えたはずだろう

描かれた放物線はゴールを通過するラインからわずかに外れ、リングに弾かれた。

直後、愛莉がりバウンドを取り、先ほどのステイールを警戒しすぐにボールを上に掲げ、周囲を警戒している。

試合中だというのに、俺——おそらくコート内の智花もほっと安堵の息をつく。

「ちっ。やっぱりそう簡単にはいかねえか」

「……当たり前だよ。昴さんだつてすぐ練習してから、私に教えて下さったんだから」

「へっ。だけど、お前がいつまでもその調子だといつか決められちゃうぜっ」

「——!! 絶対にさせないっ!」

彼女の動きが一段階上がったてきたような気がするが、まだだ。

まだどうしても動きにぎこちなさが感じられる。

本来の智花の実力はまだまだこんなものではないはずだ。

常にどんな相手にも負けないように時には限界すらも越えて、みんなを魅了するバスケを繰り広げてくれているのに。

「……長谷川さん、いいですか?」

やはり同じコート内にいる彼女達は俺よりもとくに彼女の変化に気づいていたようだ。

当然だよな。俺なんかよりも智花の事をよく知ってる彼女達がこんな分かりやすい変化を見逃すわけがない。

紗季は智花の原因に気づき、遂に解決策となるものを見つけ出したのかもしれない。

「すみません、次タイムで」

彼女の判断を信じ審判にタイムアウトを申告する。

女バス 20—20 男バス

程なくして、女バスがゴールを決めた直後に竹中が再び不調の智花を抜き去ると、ついに同点へと追いつくカウンターのゴールを決めた後にこちらのタイムアウトとなったのだった。

## マッチアップ6 (完)

「トモ。実は調子悪いとかってわけじゃないわよね?」

「う、うん。大丈夫だよ」

さすがに不調を隠してっていう事はないよな。後半開始前のハーフタイムだってみんな抱き合ってベストコンディションで後半戦に臨めてたんだし。

ケガや病気といった万一の懸念要素もないとなると、やっぱり……俺も予想はついてはいたけど、まずはみんなにお任せかな。

コーチの俺が言うよりも、大切な友達の言葉の方がよっぽど心に届くし信用できるだろうしな。

「もつかん。あたしらにエンリヨする必要なんかねーぜ? 思いつきり動きまくって、なつひ達、負かしちゃえよ」

「うん。私達じゃ男バスの子達にはまだ敵わない事も多くて、智花ちゃんに迷惑掛けちゃってるけど、智花ちゃんなら、絶対に竹中君達に負けないと思う。」

「おー。ひな、ともかのすごいバスケみるの好きだよ。ひなはまだまだヘタツピだから、あまりお役に立てないけれど、それでも頑張ってるよかのお手伝いするよ」

「どーせトモのことだから、せつかく試合してるのに自分ばかりボール持ってるのが気になっちゃったんでしょ」

「う、うん……みんなごめんね。大事な試合中にこんなこと考えちゃうなんて変だよな? みんなが教えてくれて、昴さんが育ててくれた私達のいつものバスケで勝ちたい。って思ってたのに、気づいたら私ばかりボールを持って一人で勝負を挑んでばかりで……」

智花に頼らざるを得ないこの状況が、智花自身に昔の自分を思い出させちゃったか。

敵も味方も振り回しながら、自分一人で強引に勝利をもぎ取るバスケ。

確かに智花の個人技に頼ったバスケを作戦として組み込んだり、彼女自身もそれを望んだこともあったけど、あくまでも意識を自分に向

けさせた状況で仲間との連携をするための伏線として活用するくらいだったからな。

たとえボールを持っていなくても絶対に彼女をフリーにさせてはいけない。

相手にそんな意識を植え付ける事で、他のみんなが動きやすくなる。

うん、やっぱり智花はみんなのためのバスケットを大切にしてくれてる。

「そんなの気にしなくていいのに。トモが活躍するせつかくのチャンスが減らしてまで、わざわざ私達の見せ場を作ろうとしなくなっちゃったよ？」

「そうだぞーもつかんっ。あたしらはあたしらでチヨー楽しんでるし、思いつき盛り上げてやるから、もつかんもエンリョしねーで、ダイカツヤクしちゃえ!!」

「おー。ともか、がんばれーっ。たけなかに負けるなーっ」

「智花ちゃんが私達にパスをくれたように私達もがんばって智花ちゃんに繋いでみせるよ。だから、智花ちゃんも私達の事、引っ張っていつてくれるかな?」

聞いたろ、智花。みんなの気持ち、ちゃんと伝わっただろ。

智花が好き勝手に個人プレーをしたって誰も文句は言わない。そりや目に余るくらいだったら、さすがに注意するけど、智花がそんな事するわけないだろ。

この場で昔を思い出して引け目を感じる必要なんてないんだ。

……とは言っても、まだ決心し切れないよな。だから、俺がその小さな背中をもうひと押しだけさせてもらおうよ。

「智花」

「す、昴さんっ!?!」

「長谷川さん。最後の一押しお願いしますね」

「すばるん、おせーぞ。はやくもつかんをその気にさせちゃえよ」

はは。別に俺が言わなくなっちゃって、みんなが気持ち伝えるだけで、もう十分智花はその気になってるだろうに。

ま、せつかくみんながお膳立てしてくれたんだし、ちやんとコーチらしく……いや、大切なパートナーのために俺の想いをしっかりと伝えさせてもらおうでしょう。

「智花達は本当にすごいと思うよ。みんなに教えさせてもらった俺の支え合うバスケットがどれだけ強くて素晴らしいものかをみんなが証明してくれて、すごく感謝してる。——だからさ、そろそろいいんじゃないかな？ 智花にとっては辛い事を思い出させるものかもしれないけどさ、智花が元々持っていた、智花本来のバスケットも同じくらいすごいものだっていうのも智花自身が認めてもいいんじゃないかな？」  
「……でも、私は……あの頃の私は勝手にバスケットを知った気になってたせいで……」

そのバスケットのせいで一人ぼっちになってしまった辛い過去があるのも聞いた。でも——

「智花は、もう一人じゃないよ。たとえ智花がどんなに一人で突っ走ろうとも、絶対にみんな着いてきてくれる」

「あ……」

智花の瞳が見開かれる。

確かに個人プレーが過ぎるのは、俺はあまり好きじゃないと思ってた。

他人を自分が活躍するための道具みたいに扱っている須賀のようなプレーは。

きつと昔の智花はそんなプレーをしてしまったり、どこまでも一人で突き進もうと頑なになってしまっていたのだろう。

でも、智花はもうみんなを裏切るような事もしないし、みんなだつて智花の事をどこまで信じられるだろう。

「さっきまで智花がみんなを活躍させようと一生懸命にがんばってるんだからさ、同じくらいみんなも智花が思いっきり伸び伸びと自分のバスケットができるように手伝いたいって思ってるよ」

「トーゼンじゃん!!」

真帆の元気な声と同時に俺と智花を囲んでいた四人が優しく智花に頷きかける。

「だからさ、ちよつとくらいみんなにわがまま言ってもいいと思うし、みんなだつてそれを望んでると思うよ。せつかく智花が頼つてくれるんだ。しかも智花が得意なバスケットでだぜ？ みんな乗り気で手伝つてくれるに決まつてるだろ——それでもまだ決心が固まらないつていうなら、コーチ権限でちよつとだけズルい事しちゃおうかな？」

「ふえ？」

とつくに智花の決意が固まったのはわかつてる。

でもさ、ちよつと相手が男バスで、しかも後半の最終決戦間近のこのタイミングなんだぜ。

これはもうやれ。つてことだろ。

「智花。このサイン覚えてる？」

「——!! あはは。すごく懐かしい気がします。……でも、昴さんにこのサイン見せてもらった瞬間すごいドキドキしてきちゃいました」  
智花の個人技解放。

あの時は土壇場で体力が尽きてしまつて、それだけでは勝てないところだったし、球技大会では開幕早々完全に封じられちゃったよな。

それなら、みんなや俺としつかりと練習を積んで、体力も技術もある時以上の今ならどうだ？

コートの外で見てる俺ですら考えただけで、めちやくちや興奮するんだから、智花本人なんて、もうそれ以上だろ？

智花のすごいところを俺だけが知ってる。つていう優越感に浸りたい気持ちもあるけど、それ以上に智花のすごさをみんなに知って欲しいしさ。

そのうえで、こんなにすごい子と毎日いっぱい気持ちいい事してんだぜ。つて自慢できるしな。

「よし。それじゃ、タイムアウトの時間がもう終わっちゃうから手短かに伝えるよ」

『はいっ!!』

「まずは智花。言った通り、智花の判断で自由に全力で動いていい。でも、全て自分一人でプレイし続ける必要はない。智花は自分が動き



やすい様にみんなにパスを出したり、パスを求めればいいんだ。きつとみんな応えてくれるし、もしかしたら智花の予想以上の動きを見せてくれるかもしれないからね」

「はいっ!!」

もう迷いのない瞳と力強い返事を返してくれる。

「次に真帆とひなたちゃん。君達はフォワードの要だ。別にコートが広くなったり、マンツーマンで着かれたとしても一対一に拘る必要はない。二人のコンビプレーだったらきつと男バスにだって通用するはずだから、ガンガン勝負を挑んだっていい。その上で智花のサポートをするんだ」

「おっしやーっ! やってやるぜ。ヒナっ。もっかんにもガンガンパス回すぞー!」

「おー。オフセンスも、ともかのサポートもまかせろー」

真帆とひなたちゃんは変わらずにやる気十分だな。期待してるよ。「紗季は、いつもより広い範囲でコートのみんなを見渡さないといけないから大変だと思うけど……紗季だったら、みんな事をまとめられると信じてるから。しっかりね」

「私にまで期待をかけて頂けるなんて、ありがとうございます。ようやく少しずつ周囲の見方がわかってきた感じですので、これからはきつと長谷川さんのご期待通りの働きをしてみせます」

「愛莉もこれまでと同じく両方のゴール下をしっかりと抑えて欲しい。愛莉がいてくれるおかげで、みんな積極的に攻められるし、相手にもプレッシャーを与えられるんだ。愛莉にいつぱい負担を掛けちゃうけど、なんとか最後までゴール下を守り切って欲しい」

「はいっ。最後まで絶対に諦めませんし、ボールだって、しっかりと守り切りますっ」

紗季がチームをまとめあげてくれて、そのまとめたチームを愛莉が全体を支える支柱となってくれてるおかげでみんな安心して自分のプレーに集中できている。

そして、強い意志と強固な結束で結ばれたチームを――  
「うん。みんな、ありがとうっ。みんなが私を信じてくれてるんだっ

たら、私も自分を信じるよ。だから……どうか、みんな着いて来てねっ!!」

「智花の最高のプレイに、みんなもそれ以上のプレイを見せてくれるかもしれない。そう考えたらさ、もっともっとみんなとするバスケが楽しくなると思うよ」

最高のエースが全力で引っ張って行ってくれるんだ。  
そんなチームが弱いわけないだろ。

タイムアウトが終了し、後半残り3分で試合再開。

悪いな竹中。智花が本気になっちまった以上、またお前は惨めに負けちまう——だから、その悔しさでもっともっと強くなれよ!

「へっ……なつひ一人でもつかんに敵うと思ってるのか?」

「つたりめーだろっ! 湊がタケを抜けるってんなら、タケだって湊を抜けるに決まってる! タケはどこまで食らいついて行くし、最後には絶対にタケが勝つに決まってるだろっ!」

トラッシュトークを交わし虎視眈々と互いの隙を狙い合う真帆と深田。

はは。自分だって目の前の相手を抜く事に燃えてるじゃないか。

「ぶー。ともかのところに行きたいのに、ぜんぜん通してもらえないー」

「タケにはわりいけど、まだお前を会いに行かせるわけにはいかないんでな。……試合後ならいくらでも会わせてやるぜ?」

「ぶー。それだと意味ないー」

すぐ隣でひなたちゃんも和久井相手に同じ事をしていたのだが……竹中お前は泣いていい。

真帆とひなたちゃんによる、静と動というよりは、動と動のあまりにも落差が激しいドタバタコンビプレイ。

片やトップスピードに達するまでの加速力の高さで、相手を一気に抜き去ろうとする真帆。

片や独特な感性や間を持ち、一つ一つの挙動のタイミングや動きを徹底的に読ませないひなたちゃん。

正直俺から見ても二人が好き勝手に動いているようにしか見えな  
いし、実際そうなのだろうけど、二人は確かに繋がっていた。

そうじゃなければ、対極的な動きをするこの二人が、パツと見、一  
切の合図なしで絶妙なタイミングで連携するなんて無理だろう。

「香椎。気にしてること言っちゃまって悪いとは思うけどさ、お前ほど  
高い奴じゃねえけど、俺達だって自分より高い奴らを今まで何度だっ  
て経験してんだ」

「うん。氣遣ってくれてありがとう。戸嶋君の今までの動き見てれば  
よくわかるよ……でも、私だって負けないからねっ」

男子相手にも挑まれた勝負に一切ひるむことなく受けて立ち続け  
ている愛莉。

初めて出会った頃の愛莉を想うと、その成長に思わず目頭が熱くな  
る。

「あい——」

「うおー!! 愛莉ーっ! そんな奴なんか絶対負けんな!! 思  
いっきりすごい奴ぶちかましてやれーっ!!」

……ってか、嬉しいのはわかったから、俺の肩を掴みながら耳元で  
騒ぐな。薄れてしまった俺の感動を返せ。

「俺達が他の四人を抑えればタケは絶対に相手のエースを抜いて  
シユートを決めてくれる! それが俺たちのバスケなんだ!」

「ふふっ……それなら、しつかり私達の事を抑えなさいよ。私達は別  
にあんた達の拘りになんて付き合う義理なんてないんだから!」

周りが熱くなっている状況にも関わらず、どこまでも冷静に全体を  
俯瞰するように見渡す紗季。

そうだ。例え戦場が広がったとしても、ならその分だけ自分も知覚  
領域を広げればいい。

自分自身も含めて全体の動きを一つ一つ丁寧に見極めた上で、どう  
動くかを決めればいい。

再び試合の流れは完全にこちら側へと傾いていた。

エース対決どころか、試合そのものを完全に智花が制してしまっていた。

試合を引つ掻き回し滅茶苦茶にする？

そりゃ相手側からしたらそんな印象を受けちまっても仕方がない。

だけど、今の智花は暴走なんかしてない。

それを負けず嫌いの闘志に満ちた瞳と、どこまでも楽しそうに生き活きとしている彼女のプレイが何よりも雄弁に物語っていた。

仲間との絆の糸を引き千切る事無く、力強く引つ張り続け、みんなも決して智花が一人にならないようにと彼女の隣を走り続けていた。

この日竹中率いる男バスは、俺に新たな可能性を見出させてくれた女バスに再び大敗を喫する事となるのだった。

——だが、例えば大局が決してもなお、せめて一矢報いようと男バスのエース竹中が動き出す。

「へっ。最後の最後で体力切れまで同じか。だらしねえな。ま、お前にぼろ負けしてる俺も人の事言えねえけどさ。でも、せめて最後までいはお前に勝たせてもらおうぜっ」

誰よりも激しい運動量で動き続けた結果としては必然だが、試合終了間際に遂に、智花の体力が底を尽いてしまったようだ。

すでに女バス側の勝利は揺るぎない状況ではあるが、負けず嫌いの彼女にとっては最後の最後に負けるのは手痛い授業料になっちゃうかもな。

もはや竹中を抜くはおろか、例えばシュートを打ったとしてもゴールに届かせる事もできないくらい彼女は疲弊していた。

「はあ……はあ……。私に勝ちたいのなら、別に構わないよ。勝ち負けなんて些細な事だもん。——でも、最後まで絶対に諦めないからっ!!」

智花がシュートモーションに入ると、すぐに竹中が今の彼女には無理だとフェイクの可能性を完全に捨ててブロック体制に入る。

智花自身も竹中のブロックは予想していたのだろう、最後の力を振

り絞り後方に飛ぶフェイダウェイシュートで竹中のブロックをかわす事に成功する。

だが、普段の彼女からは考えられないくらい弱々しく打ち上げられたボールは、竹中の上を飛び越える事が精々で決してゴールへ届く事は叶わないだろう。

「――！・香椎をマークしろっ！！ 絶対にシュートを打たせるなっ！！」

すぐに振り返り自分の頭上を越えて行ったシュートを眼で追いながら、愛莉を警戒するよう指示を飛ばす。

おそらく竹中も仮に自分がブロックに失敗しても、このシュートが絶対にゴールに入る事はないと確信していたからこそその仲間への指示だろう。

智花から放たれたシュートはゴールに届くよりも前に、すでに高さがゴールよりも低くなってしまっている。

そこへ誰よりも早く落下地点に辿り着いた愛莉が跳躍し、ボールを捕える。

ボールを取った愛莉がゴールを決めるか、戸嶋が防ぎきるかが、最後の勝負だな。

——そんな俺の予想は大きく裏切られる事になるのだった。

「え？ まさか……」

「うっしやーっ！！ 愛莉ーっ！ ぶちかませーっ！！」

空中でボールを捕えた愛莉の手が、ボールに掴んだ後もまだ上へと上昇を続けていた。

そして、再びボールがゴールの高さを超えた直後、愛莉の腕が一気に振り下ろされた。

愛莉から放たれたガンという音が体育館中に響き渡ると同時に全てが静まり返る。

ははっ。マジかよ……

「うおおおおーっ！！ アイリーンすっげえーっぞ！！」

「えっ？ ……マジっ？」

俺が心の中でそんな呟きを漏らすと同時に、誰かがいち早く叫び出

し、それに釣られて周囲も思い出したように大歓声を上げる。

アリウープダーク。確かに愛莉なら可能だって思ってたけど、本当にやっちまうなんてな。

「どうだ昂っ!! 俺の妹は最高だろっ!!」

こいつ。俺に内緒で愛莉に仕込みやがったな。マジで最高すぎるだろ!! よくやったぞ!

「愛莉……すごいよっ!!」

「智花ちゃん。えへへ……」

直前までの智花一色だった空気を愛莉が根こそぎ奪い去ってしまっていた。

どうだ智花。自分ばかり注目されるのがイヤだなんて言っていたら、友達に集めてた視線全部持ってかれちまったぞ。

「和久井っ!! すぐ戻せっ!」

「——!! おうっ!」

愛莉が見せてくれたダークの余韻に浸っていると、空気を読まずに突っ込んできた男が一人。

ここまで決定的なものを見せつけられても、決してその場の空気に飲まれずに己を貫き続ける姿勢は賞賛しよう。

そう。まだ試合終了間際であって、終了ではないのだ。

全員が直前の出来事に完全に浮き足立ってしまい、思考が止まってしまっている。

だからこそ、例えばチームとしての勝利は無理でも、自分の拘りと相手チームに一矢報いる事ができる最高のチャンスをもにしようと思っ駆け出していた。

竹中からすれば、ひどく簡単な事だっただろう。

相手は突然の出来事に対応する事ができず、ほとんど棒立ちしているだけの案山子と同じだ。

その案山子を避けながら、最短距離でゴールを目指せばいい。

辛うじて体勢を立て直せた智花もすでに体力が枯渇しているため、ほんの少し大きめに避けるだけで簡単に抜けてしまう。

そのため、竹中は速度を最優先で突っ込んでいった。

そして、抵抗らしい抵抗ができない智花とすれ違う瞬間に、竹中が持っていたボールは、不自然に浮き上がりあっさりと彼の手から離れてしまった。

「……は？」

「……え？」

続けざまに起こる予想外の出来事に、二人が慌てて誰からの制御も受けていないボールの行く末を目線で追いかけると――

「やったー。たけなかからボール取れたー」

竹中からステイルしたボールを両手でしっかりと受け止め、無邪気な笑顔で掲げるひなたちゃんの姿があった。

直後、試合終了を告げるブザーが鳴ると、竹中がその場で尻餅をつくように座り込んでしまう。

「はは。こんなん勝てるわけねーって」

これはもう笑うしかないよな。

ここまで完璧に智花以外に決められて、防がれちまうと、負けを認めるしかないよな。

なんて事はない。油断大敵とばかりに奇襲を仕掛けた竹中自身もまた、奇襲が成功したとで油断してしまったのだ。

でも、ちよつと意外だったな。ひなたちゃんもすぐに真帆と一緒に愛莉に駆け寄るかと思ってたのに、しっかりとカウンターに備えていたなんて。

なんにしても竹中からボールを取るなんて大金屋だぞ!! さすがひなたちゃん。マジ天使!!

『ありがとうございましたっ!!』

試合終了後、整列した十人に体育館中から大きな拍手と歓声を送られる。

女バス対男バスの試合は、今回も女バス側の勝利で幕を閉じた。

あれ？

五人が男子達と健闘称え合っているのだろうか？ なかなかコー

トからこつちに戻ってきてくれない。

俺も万里も、みんなの事をいっぱい労いたくてうずうずしてるのに……

お、真帆とひなたちゃん達は戻ってきてくれた。愛莉は……万里がいるんだし、仕方ないな。あとで万里がいない時にいっぱい褒めてあげよう。

智花と紗季はまだ込み入った話でもしてるのかな？

\*

「竹中君もスクープ練習してたんだね」

「ま、まあな。あのロリコン野郎の真似すんのはシヤクだったけど、できないよりはできた方がいいし。ま、肝心なところで外しちまっちゃ意味ねーけどな。下手くそがシュート打つな。なんてよく俺が言えたもんだぜ……」

「そのことだけど、後で真帆にお礼と、あの子に謝りにいきなさいよ。まだ言っていないでしょ？」

「なんで真帆に礼を言わなきゃいけないーんだよ」

「真帆の奴。あんたの事フォローしてたのよ。『なつひの奴。バスケットにチョーシンケンで前に初めてレギュラーになったらいいんだけど、思うように活躍できなかったみたいなんだ。それでまた大会が近付いてきたからピリピリしてたんだと思う。だから悪く思わないでやってくれ』って」

「なっ!?!」

「真帆ってみんなの事、本当に良く見てくれてるよね。私の事だつてすごく気に掛けてくれてたし」

「……ったく。普段はバカなくせして……あーもうっ！ 情けなき過ぎてホント泣きたくなってるぜっ」

「——あつ！ ごめんね。みんな呼んでるから、そろそろ戻るねっ。

……県大会頑張ってるね。私達も応援してるから」

「行っちゃったか。……お前らだって、もっと早く真面目に練習してたら、全国だって目指せたんじゃないかよ？ ま、今更そんな事言っても仕方ねーか。湊……いつか絶対にお前に勝ってやるからな」



\*

その後、長谷川家で祝賀会を行ったのだが、結局参加者は六年生五人組とみほ姉というお馴染みのメンバーだけとなった。

葵はどうやら早くもやる気に火がついてしまったらしい五年生組を引き連れて秘密特訓に行ってしまった。

ちよつとだけこつちに参加したそうに見えたけど、多分気のせいだろう。……というか、もう敵も味方もないんだし、五年生達も少しくらいは一緒に行動してくれてもいい気がするんだけどな。

万里は愛莉の友人との水入らずを邪魔したくないという理由で辞退してしまった。

遠慮しなくてもいいのに……っていうか、辞退するくらいなら、『絶対に妹に手を出すなよ』と、無意味な釘を刺すんじゃねえ。お前に睨まれるとマジで怖いからっ。

ま、何にしてもみんなお疲れ様。本当に良くがんばってくれたよ。いつまでもこんな風に小学生達に囲まれた生活を送り続けたいな。

そんな事を願いながら、俺は夜遅くまで小学生達と楽しいひと時を過ごさせてもらう事となったのだった。

祝 男バスとの対抗試合三連勝達成！ (SNS)

—交換日記 (SNS)—

まほまほ『よっしゃーっ！ あたしがいちばんのりだーっ！』

紗季『お疲れ様。……つて、真帆、あんた早いわね』

湊 智花『みんなお疲れ様。今日はいっぱい迷惑かけちゃってごめんね。みんなの気持ち、すごく

嬉しかったよっ』

ひなた『おー。みんなはやいー。ひな、まだみほしのくるまのなかだよー』

まほまほ『なんだ。ヒナはまだウチにかえってなかったのかー』

紗季『みーたんが私たちを一人一人送ってくれてるんだから仕方ないでしょ。愛莉の方もまだ

みたいね。……多分、お兄さんと一足早く反省会でもしてるのかしらね』

湊 智花『ひなた。慌てなくていいから、ゆつくり準備してきてね』

ひなた『おー。りょーかいー。しっかりじゅんびばんたんになったら、またごれんらく

するよー』

まほまほ『んじゃ。ヒナとアイリーンがくるまでかくじでたいきだー』

紗季『私も少し読書でもしてようかな、ちよつと前に良さげな良い本を見つけちゃったし』

湊 智花『紗季つて読書家だよ。今はどんな本を読んでるの？

……良かったら、私も紗季の

おすすめの本を教えて欲しいんだけど……』

紗季『ええい!? た、ただの小説よ? ……ま、まあ強いて言うなら、ちよつとだけ男同士の

深い友情が強調されてる感じのやつだから、トモやみんなにはあまり合わないかもしれ

ないわよ?』

まほまほ『まえみたのなんかゲームのぶきっぽいやつだったけど、字ばっかであんまおもしろそー

じゃなかったしな』

湊 智花『ふえ？ 前に昴さんが手に取ってたみたいなの？ 確か……二人の男の人が聖剣……？』

とかエクスカリバーとかだっけ？ を突きつけ合ってお互いの友情を確認し合うみたい

なのだったかな？』

紗季 『ま、まあそんな感じなやつね。みんなにはまだ早いというか、あまりみんなを巻き込み

たくないというか……』

まほまほ『まーたすぐそうやってオトナぶろーとするーっ。ショーガクセーなのにチューニビョー

みたいなことゆるーな！』

湊 智花『私は友達とか友情って言葉、大好きだよっ。みんなが友達になってくれたおかげで、

本当に今がすごく楽しい。だから私がまだ知らない、紗季が知ってる友情の形っていう

のもちよつと興味があるかな』

紗季 『う、うん。そうね……機会があったら、いつか教えてあげるわ』

湊 智花『ありがとう紗季っ。約束だよっ！』

紗季 『ごめんねトモ。長谷川さん……もしトモが変わってしまったら私の責任です……本当に

ごめんなさいっ』

まほまほ『あーっもつかんばっかりずりーぞっ。あたしにもおしえろーっ!!』

紗季 『はいはい。真帆にもその内教えてあげるから、まずはマンガ以外の本を読みなさい』

あいら 『みんな遅くなってごめんね。お兄ちゃんとお話するのに夢中になって……』

ひなた 『おー。みんなおまたせしましたー。ひなもじゅんびぼんたんー。あ、みほしがみんなに

あんまり夜更かししないで早く寝ろよ。だってー』

まほまほ 『アイリーンもヒナもきたな』

湊 智花 『愛莉、ひなた。お疲れ様』

紗季 『そんなに慌てて来なくても、万里さんとゆっくり話してても良かったのに』

あいり 『えへへ。ありがとう、紗季ちゃん。実はお兄ちゃんもちようどこれからジムに行く時間

だったから、お見送りして来たんだ』

まほまほ 『うしっ。それじゃモンダイなしだなっ』

紗季 『さっきの話はまた後でにして、さっそく今日の反省会を始めちゃいましょうっ!!』

まほまほ 『おー！ だからいつもサキがしきんなっ!!』

湊 智花 『おー！ 私にはまだ難しそうなお話だったら、紗季の都合が良い時でいいからね』

あいり 『おー!』

ひなた 『おー!』

紗季 『それじゃ、まずはみんな改めてお疲れ様。今回も無事に男バスに勝つ事ができたわね』

まほまほ 『おっつー！ こんかいもあたしはダイカツヤクだぜっ!!』

湊 智花 『みんなお疲れ様でした。みんなのおかげでもっともつとバスケットが大好きになれたよっ』

あいり 『お疲れ様でしたっ。今回はみんなのお役に立てたかな？ お兄ちゃんもいっぱい褒めて

くれたよ』

ひなた 『おー。おつかれさまでしたー。ともかとあいり。ふたりともすぐくかつこよかったー』

湊 智花 『本当は昴さんにもここに来て頂ければ良かったんだけど

な……』

まほまほ『だよなー』

紗季 『さすがにここまで長谷川さんを付き合わせてしまうのはご迷惑になっちゃうわよ。前に

長谷川さんだつて『ここは君たちの本当に大切な場所なんだから、俺や他の人が無暗に

入ったり入れたりしちやいけないよ』って仰つて、私たちのことを気遣つてご遠慮して

下さつたんだし』

あいら 『長谷川さん。本当に私たちのことを気に掛けてくれてるもんね』

まほまほ『まーたしかにタイセツなバシヨだけどさ。べつにすばるんならいくらでもはいつたり

ジューにつかってもいいじゃん。アタシらのナカマだしさっ』

ひなた 『おー。ひなもおにーちゃんになら、ご自由につかつてほしいよ?』

湊 智花『……でも、さすがにあんまり私たちのお相手をして頂くのもご迷惑だよな。すごく気を

遣つてしまわれそうだし』

紗季 『いくら長谷川さんでも夜も私たち五人の相手は疲れるでしょ。特に真帆とひなた』

まほまほ『なんだよー。別にすばるんにメーワクかけてねーじゃんっ!!』

ひなた 『おー? ひないいこだよ?』

紗季 『ま、何よりも——』

あいら 『あ、でも私もちよつと恥ずかしいかも。長谷川さんがここに來るつてことは、昔の日記

も見られちゃうかも……』

湊 智花『——!? そ、それは……ちよつと……う、ううん。かなり恥ずかしい……かも』

紗季 『そうよねー。トモの長谷川さんへの溢れんばかりの熱い想いが、ゼーんぶ長谷川さんに』

知られちゃうもんねー』

湊 智花 『~~~~~!!!』

まほまほ 『あー。あたしはいいけどもつかんにはイチダイジだなっ』

ひなた 『おー。ともかのきもちが、おにーちゃんにバレバレになっちゃうー』

あいり 『や、やっぱり長谷川さんには来て頂くのはダメかも。長谷川さんに全部見られちゃう』

って考えただけですごく恥ずかしいし』

湊 智花 『み、みんなが好き勝手に書いてるだけで、わたしはまだ書いたことないもんっ!!』

まほまほ 『そーいや。もつかん。まだこの日記ですばるんが好きって書いた事なかったっけ?』

湊 智花 『はう!?!』

紗季 『もうみんなにも知れ渡っちゃってるし、知らないの長谷川さんくらいじゃないの?』

あいり 『えへへ。なんか竹中くんみたいだね』

ひなた 『おー? たけなかもおんなじ?』

まほまほ 『よしっ。もつかん。ナツヒよりももつかんのほーが上だってことをショーメイする』

ために、ここにはつきり書くんだ!!』

紗季 『いいわね。トモ。いい機会だからせつかくだし、『私は昴さんが大好きですっ』って』

書きちやったら?』

湊 智花 『書きませんっ!! もう。またそんな事言っつて、あんまり私をからかわないでよお……!』

ひなた 『おー? ともか、おにーちゃんのこときらい?』

湊 智花 『嫌いななんてこと、絶対にないっ!! 私がみんなとずっと笑顔でいられる場所を』

守って下さって、その後だって私たちのわがままなのに  
コーチとして側にいて下さって

……そんな昴さんを嫌いになるなんてこと絶対にないっ  
!!』

まほまほ『よーするに。やっぱりすばるのことだいすきってこと  
じゃんっ』

紗季『やっぱり長谷川さんの事、好きで好きでたまらないんで  
しょ』

湊 智花『はうう……まだ恥ずかしいよお……』

紗季『ふふ。まだ早いかもね。まだまだ時間はあるし、ゆっくり  
と気持ちを整理していくと

いいと思うわ』

まほまほ『でも、ちゃんとケツシンしねーとダメだぞっ』

あいら『自分の気持ちを他の人にはつきり伝えるのってすごく勇  
気がいるもんね。智花ちゃんも

がんばってっ!』

ひなた『おー。ともかがんばれー』

紗季『——って、ごめんね、トモ。いきなり脱線させちゃって』  
まほまほ『今日はこのぐらいにしといてやるから、これからもすば  
るんにアピールすんだぞっ』

あいら『ごめんね。智花ちゃん。でも、応援したいっていう気持  
ちは本当だよ』

ひなた『おー。ひなもともかとおにーちゃんがもつとなかよしに  
なっってほしいよ』

湊 智花『うう……う、ううん。みんなも私のことを思ってくれて  
るんだよね。……私の方こそ

みんなの気持ちに答えられなくてごめんね』

紗季『それじゃ、そろそろ本題に戻るわよ』

まほまほ『おー! ……って、だからサキがしきんなっ!!』

湊 智花『お、おー! 今度は大丈夫だよね?』

あいら『おー! 最初のテーマお願いしますっ』

ひなた 『おー！ おねがいますー』

紗季 『今回のMVPはトモか愛莉のどっちかよね』

まほまほ 『だよなー。アイリーンもエンリョなんかしねーでさー。しよっぱなからガンガンきめ』

ちやえばよかつたのに』

あいら 『ええ!?! 智花ちゃんだけじゃなくて私も候補なの!?!』

ひなた 『おー。あいらかっこよかったー』

湊 智花『うんっ。初めて愛莉に会った時はすごく失礼なことを言って泣かせちゃったけど、

やっぱり愛莉はすごいよっ!! 私がいくら背伸びをしたってできない事が簡単にでき

ちやうんだから、すごく羨ましかったな』

あいら 『本当はお兄ちゃんからも、早い段階で自分に注目を集めさせた方がみんなが動きやすく

なるって言われてただけど。やろうとしても、なかなか覚悟が決められなくて……』

ひなた 『おー。あいらのことみんないっぱいちゅーもくしてたよ』

紗季 『全力全開のトモもすごかったけど、最後の最後に愛莉がみんなの視線や注目を全部

持っていったもんな』

まほまほ 『あたしもだけど、みんなおもつきしビックリして、とまっちゃったもんなー』

湊 智花 『あの空気に飲まれなかった竹中くんもすごいよね。』

紗季 『まあ、トモとの勝負もあったし、試合もこっちがリードしてたから、夏陽もとつくに

吹っ切れてたんじゃない?』

まほまほ 『にしし……サイシユウテキには、もっかんぬいてヒナにとめられたんなら、ナツヒも

ホンモーだったんじゃねえか?』

あいら 『ひなたちゃんも、よく竹中くんを止められたよね。すご



いよっ』

ひなた 『おー。ひなもあいらのダンクみてカッコいい。つておもったけど。まだしあいちゆう

だったから、あいらにすごいー。つてきもちをおつたえするのはいあいがおわるまで

ガマンしてたー』

紗季 『試合が終わるまで油断もしないし、絶対に諦めないつていう長谷川さんの言葉を忠実に

守ってたのね。その結果の大金星か……納得』

まほまほ 『あたしもヒナをみならつてユダンしねーようにきをつけねーとな』

あいら 『智花ちゃん、ごめんね。本当はもっと早く私が決心したら、きつと智花ちゃんに変に

気負わずにすんだかもしれないのに……智花ちゃんが迷っちゃった時になって、

ようやく自分の中で決心ができたから……だから、ごめんね』

湊 智花『ううん。そんなことないよっ。みんなが本当に私が動きやすいようにつてサポートして

くれたし、最後だつて愛莉が絶対にボールを取つてくれるつて信じたら、それ以上の

ものを見せてくれたし、ひなただつて疲れ切つて動けなかつた私の代わりに竹中くんを

止めてくれた』

湊 智花『だからみんな。改めて言わせてもらうね。みんな本当にありがとうっ。みんなの気持ち

すごく嬉しかったよっ』

まほまほ 『もつかんもすつげえカッコよかったぞっ』

紗季 『私たちにバスケットを教えてください、引っ張つてくれて本当に感謝してるわよっ』

あいら 『私も、自分に自信が持てるようになって、お兄ちゃんとも

仲直りもできたし、みんなと

このチームでバスケットができて本当に良かった!!』

ひなた 『おー。ひなもみんなにかんしゃー。ありがとうー!』

紗季 『今回の事で思い出したんだけど、トモって一番最初の頃に練習メニュー考えてくれて

たんだよね。長谷川さんも悪くないって言ってってくれてたやつ』

まほまほ 『あつたなー。もっかんごめんな。あんどきはめんどうちーとかいつちやつて』

あいり 『私もごめんね。あの頃は今よりもみんなにいっぱい迷惑掛けちゃってた……』

ひなた 『おー。ひなもごめんねー』

湊 智花 『そ、そんなつ。みんな気にしないでつ。あの時から私はみんなとできるバスケットが本当に

楽しかったんだからつ』

紗季 『……あのメニューを最初からやってれば、きつとトモが私たちとやりたかったバスケットを

もつと早くからできたのよね……それに、もう少し真面目に練習してたら、そもそも

男バスとも部の存続をかけた試合になることもなかったかもね』

まほまほ 『どーだろうな。カマキリのことだからシンヨーできねーし』

あいり 『もし試合をするとなつたとしたら、長谷川さん抜きで勝てたのかなあ?』

ひなた 『むー。たぶんひなはへたつびなままで、みんなにいつぱいごめーわくかけちゃつてた

ままだつたかもー』

湊 智花 『正直、昴さんがコーチをして下さつてなかつたら、ダメだつたかも……あ、みんなを

信用してなかつたわけじゃないよつ。多分、私が一人で必

死になってみんなのことを

振り回しちやつてたと思う……』

紗季 『まあ、結果的に長谷川さんがコーチに来て下さったおかげで試合にも勝てたんだし、

なにより私たちも本気でバスケットを教わりたいて思えるようになったのよね』

まほまほ 『もつかんが、かんがえてくれてたメニューをアレンジしてすつげえたのしくして

メチャクチャバスケットをおもしろくしてくれた』

あいり 『智花ちゃんと、長谷川さんで私たちにバスケットを教えてくださいよね』

ひなた 『おー。ひなたちは、ともかとおにーちゃんにいつぱいよくしてもらえたー』

紗季 『まさにトモと長谷川さん、二人の愛の共同作業ね』

あいり 『愛……すぐドキドキするね』

ひなた 『おー。ともかがおかあさんで、おにーちゃんがおとうさん?』

湊 智花 『も、もー。またそんなことって』

まほまほ 『そう思いながらもニヤニヤをおさえられない智花さんであつた』

紗季 『これからお父さんと一緒に私たちを育ててね。智花お母さん』

湊 智花 『はう!? ……うう、お、おねがいだから、もう許してえ……』

紗季 『ま、冗談はさておき。これからは五年生たちとミニゲームをするくらいしか試合をする

機会はないかもしれないけど、しっかりと練習しないとね』

湊 智花 『うんっ。ミミちゃんたちも葵さんのコーチですごい勢いで上達してるもんねっ』

まほまほ 『つばひーに、げつたん。おすしやミミミミにもまけらん

ねーなっ』

あいり 『最近だとどんどん僅差まで迫られちゃうことも増えてきちゃったもんね』

ひなた 『おー。まけられないし。ひなもかけたたちにもっといっばいバスケおしえてあげたいー』

紗季 『まずは当面の目標はこのまま下級生たちに全勝をキープすることね』

まほまほ 『ったりめーだっ。……ってか、なにげにサキもマケズギリイだよなっ』

湊 智花『あはは……私も人のこと言えないけど。結構みんなそうだったりするよね』

あいり 『私も少しだけそうなってきちやっただかも……でも、それだけ自分に自信が持てるように

なってきたってことだよねっ』

ひなた 『おー。ひなもいっばいしようぶしたいかも。いっばいすればするだけみんななかよしに

なれるきがするー』

紗季 『長谷川さんも仰ってたけど、卒業まで長谷川さんのコーチの下でしっかりと学ばせて

頂いて、中学に上がってもみんなでバスケができるように頑張りましょうっ』

まほまほ『これからもガンガンれんしゅうしまくってメチャクチャうまくなってやるぜーっ!!』

あいり 『うんっ。いっばい練習して、センターとしてみんなの役に立ちたいっ』

ひなた 『おー。ひなもみんなにまけないよーにいっばいがんばるぞー!』

湊 智花『中学生になっても、大好きなみんなとバスケが続けられるんだね……すごく嬉しいよ』

まほまほ『泣くなもっかんっ! みえてなくてもないてんのバレバレだぞっ』

あいら 『えへへ。私も智花ちゃんの書き込みでちよつとうるうるしてきちやった』

ひなた 『おー。ちゆうがくになってもみんないっしょだよー』

紗季 『今まではトモと長谷川さんに私たちのバスケットを作ってもらったけど、中学からは私たち

五人で私たちのバスケットを作らしましょうね』

湊 智花 『私たちのバスケット……うんっ。みんななら絶対にすごいバスケットができるよっ!!』

まほまほ 『うおおおー!! なんかつげえもえてきたぞーっ!!』

あいら 『うんっ。みんななら、私も頑張れるっ!!』

ひなた 『おー! みんなのバスケットくるぞーっ!』

## みんなの憧れの初体験

「ねーすばるん。一回だけでいいからさー」

「おー。ひなもひなもー。おにいちちゃんにしてほしいなー」

それぞれで俺の手を左右に引きながら、俺にして欲しいと甘えるようにおねだりをしてくる真帆とひなたちゃん。

「こらっ。二人とも、長谷川さんにそんなことお願いしたってご迷惑でしょうが。何よりトモが怒るわよっ」

「ふええ!? なんで私が!? べ、別に怒らないよ!」

紗季が二人を窘めつつ、なぜか引き合いに出され戸惑う智花。

「みんなケンカしちやだめだよお」

困り気味に苦笑をしながら、事の成り行きを見守る愛莉。

それぞれで主張が異なってしまうているものの、慧心学園女子ミニバスケット部の六年生五人組みのいつもの風景だ。

当然みんな本気でケンカをしているわけでもないのです、コーチとしても、この場の年長者の立場としても、少女たちに深く干渉する気もない。

ただ彼女たちを微笑ましく見守りながら、この場が平穏に収まるのを待っていたい。というのが本音だ。

——とはいえ、二人の少女が俺の身体を求めているのが今回の原因なのだ。さすがに無干渉を貫くわけにもいくまい。

「別に俺は構わないよ。ちゃんと仲良く順番を守れるなら何回でもしてあげるよ」

「やったー! ほらみろサキ。すばるんだっていいって言ってんじやんかっ」

「おー。やったー。ひな、おにーちゃんにいつぱいして欲しいー」

「もう。長谷川さんは少し甘すぎですよ。すぐに調子に乗るんですから」

両手を上げて大喜びの真帆とひなたちゃんに対して、両手を組んで諦めつつ俺に申し訳なさそうな表情をしている紗季。

紗季には甘いと言われてしまったが、それでもこの二人がここまで

喜んでくれるのなら、この二人のおねだりに負けてしまつて正解だと思つてしまえるのは、やはり甘いのだろうか？

特に理由もなく俺の方から彼女たちにしてあげるよ。なんて持ちかけるのは確かに問題かもしれないが、彼女たちの方からして欲しいとねだつてくる分には問題ないだろう。むしろ大歓迎だ。

俺だつて小学生と触れ合える数少ない機会は大切にしたい。

「そんなこと言つてサキだつて、ホントはすばるんにして欲しいくせに」

「なつ!? ……わ、私は、別に……して欲しいだなんて……それに、トモの目の前で……」

「だからどうして私にふるの!? そ、それは私も、前に初めてしてもらつて以来して頂いてないけど——はう!? い、いえつ! 昴さんのご迷惑になりますし、さすがにわがままなんて言えませんつ」

「え!? 智花ちゃんもしてもらつたことがあるの!? ……いいなあ」

「おー。ともか、おかおまつかー」

あれ? もしかして真帆とひなたちゃんだけじゃなくて、実はみんなもして欲しかつたのかな？

真帆とひなたちゃんはやつぱり大好きみたいだから、可愛らしくねだられてしまふ度に、ついついやつちやうんだよな。

智花にも初めてした時は、どうしても俺がお願いしちやつたんだけど——慎ましやかな少女に両足を広げさせ男の上に跨らせるなんて、今考えると彼女には中々ハードルが高いことを要求してしまつた気がする。

拳句、離さないといけない場面で、緊張していた彼女にしつかりとしがみ付かれてしまい、離すタイミングを逸してしまつた時は本気で焦つたよな。

幸い何事もなく済んだのは本当に運が良かったとしか言いようがない。

もし方が一彼女の身に取り返しのつかないことが起きてしまつていたら、俺を信じて預けて下さつているご両親に顔向けもできないし、俺も大切な恩人を傷つけてしまったことに対して、自分自身を許

せなくなってしまうていたことだろう。

顔を真っ赤に染め上げてしまっているのも、おそらくその時の失敗を思い出してしまったのが原因なのだろう。

そんな過去の失敗を思い返しつつ、ふと気づく。

ふむ。この場で俺がしたことがないのは紗季と愛莉か。

俺からはあまり積極的に誘うことは憚られるが、もしかしたら、俺が他の子たちに行っているのを見て、実は羨ましがっていたのかもしれない。

この二人も智花と同様に、なかなか自分のわがままを俺に言ってくれないし、もし二人が望むのなら是非とも経験させてあげたいな。

しかし少々問題があるのも、また事実……

紗季ならば他の経験済みの子たち同様に俺もすぐに立つことができるだろうが、愛莉が相手となると、他の小柄な子たちと比べて立つのが難しいかもしれない。

当然、愛莉だって他の子たちと同じく可愛い大切な教え子だ。

男としてのプライドもあるし、できることならみんなと一緒にの方法でしてあげたいのだが、俺としても不本意ながらやり方を変える必要があるかもしれない。

実際、他のやり方でなら愛莉だろうと誰であろうと簡単に立てるところか、余裕で立ちつぱなしでいられる自信はあるのだ。

さすがに二人以上同時はきびしいが、一人ずつならいくらだって、俺の体力が持つ限りは付き合ってあげられることだろう。

……まあ、そもそも愛莉は一人でも。というか、多分一人の方がすごく綺麗にいけるんだよな。

前に偶然目にした時も、すごかったし……正直、小学生であそこまでいけるのは、さすがとしか言いようがない。

それに下手に俺が男の意地だ。とか言っつて愛莉に無理矢理したら、後で万里にメチャクチャ怒られそうだな。

とりあえず一人ずつ順番にしていけばいいか。と楽観的に考えながら、みんなに提案してみる。

「それじゃ、最初は真帆からで、次にひなたちゃん。それで智花と紗季



と、最後に愛莉の順番で一回ずつでいいかな？」

名乗り出てくれた順番と、口ぶりからして実はして欲しそうな気がした三人も勝手に加えてしまったが、どうだろうか？

すでに俺と経験済みの三人がしているのを見れば、今回が初めての紗季と愛莉もいくらかは緊張も薄れるはずだ。

この二人は真帆やひなたちゃんみたいは何事にも物怖じしないタイプというよりは、いざ始めるとなると、不安や緊張を感じてしまう智花と同じタイプだろう。

それでも、どうしても怖い。と感じてしまうのであれば、別に無理強いする必要はない。

今回は見学に回ってもらって、いつか俺におねだりしてくれた時に笑顔でお相手をさせてもらえばいいし。

「やったーっ。あたしが一番だーっ！」

「おー。ひなもおにーちゃんにしてもらえるー」

そんなに喜んでもらえるなら、俺もやりがいがあるってもんだ。

「ふええ!? ……その、い、いいんですか?」

「もし智花がイヤじゃないなら、俺はしてあげたいな。久しぶりにさ。せっかくの機会だし智花だってやりたいだろ?」

まだ遠慮しようと考えていたのか、伏し目がちになっている少女に優しく話しかけると、控えめながらも嬉しそうにこくりと小さく頷いてくれる。

「ええ!? わ、私は別に……」

「はいはい。そーゆーのはいいから。最後には自分から喜んですばるんにお願ひするくせに」

「おー。そーだそーだー。さきもひなたたちといっしょにおにーちゃんにしてもらおう?」

「ああ。もう……わかったわよ。私も長谷川さんにして欲しいわよっ!」

俺が智花の説得に成功するのとはほぼ同時に二人も紗季の籠絡に成功してくれたようだ。

いいぞ、これであと一人で完全攻略達成だ。

「愛莉はどうかかな？」

「わ、私は……その……」

「ぶっちゃけ、アイリーンはひとりでもよくね？」

あ、みんながあえて思っても言わなかったことをあつさり口に出しちやっただよ。

確かに今回みんなにするのは手段であって、あくまで目的は別にあるのだ。

「そ、そう……だよ。私も長谷川さんにして頂ければと思ったけど……危ないもんね……」

そして、愛莉はすでにできているので、わざわざリスクを冒して俺がする必要はないのだ。

「でも、アイリーンだけ仲間外れにすんのもイヤだしな……」

「おー。ひなもみんないっしょがいいー」

「だけど、長谷川さんに相当無理をさせてしまうかもしれないわよ？」

「昴さん……」

一人寂しそうにしている愛莉と、俺ならきつとできる。と淡い期待を込めた視線を送る四人。

こんな状況で、できない。なんて言えるわけないよな。

俺がそんなことを言えるような奴だったら、ここで大切な彼女たちのコーチする意味なんてないも同然だ。

だが、事前に考えていた妥協点の提案はお互いの信頼関係を維持するためにも必要だろう。

いくら俺がつまらない意地を張って無理をしたところで、お互いが深く傷ついてしまうだけで終わるようなことがあってはならない。

俺と愛莉だけでなく、俺たちを見守ってくれているみんなのためにも、そんな最悪な結果だけは絶対に避けなくてはならない。

なにより変な強がりや誤魔化しで、愛莉を騙すようなことは、二度と言いたくないんだ。

「……愛莉。もしかしたら、君を肩車することは俺には無理かもしれない。——でもおんぶならいくらだってしてあげられるよ」

「長谷川さんっ」

「もちろん最初から肩車を諦める気はない。だけどお互いの安全のためには、無理だと判断したらおんぶで我慢してくれるかな？」

「はいっ！ 私、長谷川さんにして頂けるのでしたら、肩車でもおんぶでもなんでもいいですっ。私もみんなと一緒に長谷川さんにして欲しいですっ」

なら決まりだ。

「良かったね。愛莉っ」

「ま、そこらへんが妥当なところよね」

「さすがすぎるんっ。あたしが見込んだ男だっ！」

「おー。かたぐるまもいいけど、おんぶもいいなー」

「ありがとうございますっ。長谷川さんっ」

そして、俺は少女たちを一人一人順番に肩車をして彼女たちに初めてのダンクシュートを決めさせてあげることになったのだった。

## 時期ネタ単発物

### 智花の出張スイーツ教室

「ごめんね。変なこと頼んじゃって」

「いえ。昴さんのお役に立つことができてうれしいです」

俺の情けない頼みごとにも彼女はイヤな顔一つせず嬉しそうに笑顔を浮かべている。

その表情からも純粹に俺の力になれることを喜んでくれているのがわかるのだが……我ながら情けない。

「——でも、お返しなんて本当にお気になさらなくてよかったのに」「そういうわけにはいかないだろう？ みんなからバレンタインのチョコを貰えてすごく嬉しかったんだから。俺もちゃんとその気持ちを返さない」と

現在、俺は湊智花という非常に優秀で頼もしい最高のパートナーの力を借りて、手作りクッキーの製作に取り組んでいた。

彼女自身も、俺にバレンタインの贈り物を届けてくれた人物なのに。

あろうことか、そんな彼女の手を借りてホワイトデーのお返しをしようとしているのだから……正直、これってどーよ？

弁明させてもらおうと、間違っても俺から彼女に協力を要請したわけではない。

いつもの朝練が終わった後のほのぼのとした団欒の中で、うっかり口を滑らせてしまったのだ。

「そろそろホワイトデーも近いし、手作りのチョコをくれたみんなにお返しで俺も手作りの物を贈りたいんだけど、どんなものかいいと思う？」

「ふええ!?! す、昴さんの手作りですかっ!?!」

「ごめん。自分のことだが、どうも眞面目に見てもただのバカだった。

つい先日、ひなたちゃん誕生パーティーが開催され、僭越ながら参加させて頂いた。

パンツと動物をこよなく愛する小さな天使にどんな物を贈らせてもらえば喜んでもらえるだろうかと悩みに悩み続ける日々。

結局、ひなたちゃんに贈らせてもらう誕生日プレゼントを智花に相談したのだった。

ちなみに真帆からのプレゼントである彼女曰く『オトナパンツ』なるものを渡されると、すぐにその場で嬉しそうに広げるひなたちゃんから目を逸らしたの言うまでもない。

しかもあるうことか、その場で今履いていたパンツを脱ぎ、その『オトナパンツ』を履こうとして智花たちと一悶着あったらしいが、俺は何も見えない。何か聞こえた気もするけど、気のせいにきまつてる。

その感覚で今回の件まで智花に相談してしまったのだ。

話しやすく普段から何かと相談を持ちかけてしまっているけど、さすがにこれはないだろ。

お礼をしたい相手に、どんなお礼をしたらい？　なんて、多分、今までだってやらなかったことがないくらい、最大級の誤爆だ。

結局、ネタバレしてしまった時点で、もはやサプライズも何もないと開き直り、相談の末、以前彼女達に作ってもらった手作りクッキーを参考にホワイトデーのお返しとして贈らせてもらう計画が立てられたのだった。

そして、ホワイトデー前日を迎えた今日。

奇しくも女バスの部活が休みの日だったため、放課後に予定があると早々に友人たちと別れ、長谷川家へと来てくれた彼女と合流し、さっそく事を始めるに至ったのだった。

まあ、作業開始早々に俺と智花の立場が完全に逆転してしまったわけだが……

ドヤ顔で卵を割ってボウルに入れたら、メチャクチャ申し訳なさそうに卵白と卵黄を分けなさいといけなさいと指摘してくれたり、気合を入れ過ぎてあれこれ混ぜすぎてしまいそうになったり……

二人の初めての共同作業において、のっけから失敗をやらかしく俺を優しくフォローしてくれる智花。

だめだ。年下の女の子にここまでリードされ続けている状況が非常に情けなくなってくる……

なんとか挽回をしようと思っても、先走ってまた新たなミスを犯して彼女に迷惑をかけてしまうのではないかと不安になってくる。

「二人ともがんばってねー。昴くん。あんまり智花ちゃんのジヤマしちゃダメよ」

「そう思うなら手伝ってくれよ!」

「そ、そんなつ。昴さんすごく一生懸命がんばって下さってますよ」

そもそも母さんはなんで俺の相手を智花に任せて、端の方で楽しそうに傍観してんだよ!!?

母さんがもつと協力的だったら、俺だって智花の前でそう何度も醜態を晒さずに済んでいるはずなのに……

紆余曲折の末に、俺と智花の試作第一号が完成する——のだが……

「なんか甘すぎるし……粉っぽいな」

「は、初めてなら、こういうものですよ。わ、私は好きですよ」

精いっぱいのおフォローをしてきているが、そんな彼女を持つてしてもお世辞にも『美味しい』と口にできないあたり、悲しいがそれが事実なのであろう。

かつて八栗ドレッドノートスの監督さんが俺に天啓を授けるべくうどんを打たせてくれたことがあったが、あの時の監督さんが先に打ってくれた生地のように参考にすべき明確な基準があれば、こんな結果にはならなかったのではないだろうか？

いや、さすがにそこまで智花にさせてしまったら、もはや智花のマネをしただけで俺の手作りとは言えないものになってしまう気がする。

とりあえず、作り方や気をつける点は彼女からレクチャーを受けたのだから、次からはもう少しマシな物が作れるはずだ。

確かに理想は美味しくだが、せめて俺の彼女たちへの感謝と口では伝えきれない程の熱い気持ちが伝わってくれさえすればいいし、それ

が一番の目的だ。

「よしっ。智花のおかげでやり方はわかったし。今のは練習で次が本番だ」

「あの……本番でしたら、私は離れていた方がいいでしょうか？」

「うーん……俺一人に任せて欲しい。って言えたらカッコいいんだけどね。まだ一人ではできないと思うし、良かったら智花に手伝って欲しいかな？ もちろん迷惑じゃなければね」

「迷惑だなんてっ。——えへへ、喜んでお付き合いさせて頂きますねっ」

俺のわがままな申し出にも関わらず、彼女は笑顔で応えてくれた。

——互いに見つめながら、小さく頷き合うと俺と智花はごく自然な流れで二回戦を始めた。

「ふう……これくらいなら及第点かな？」

「えへへ。昴さんどんどん上手くなってますっ」

ずっと俺を指導してくれていた彼女も上達を認めてくれたのだから間違いない。

「本当にありがとうな。変なことお願いしちゃったのに、結局最後まで付き合ってくれてさ」

「いえっ。昴さんには普段からいっぱいお世話になってますし、こんなものでは全然足りなくらいです。それに——」  
「それに？」

「私も昴さんと同じで。みんなにお返しがしたいな。って思っ」

焼きあがったクッキーを小袋に詰めていた手を止めると、それを胸に抱きながら彼女は温かい笑みを浮かべながら続ける。

「みんなが私を誘ってくれたおかげで、昴さんにバレンタインのチョコをお渡しできました。きつと私一人じゃ渡すことなんて絶対にできませんでしたよ」

「俺は正直みんなからもらえるなんて思ってたから、すごく嬉しかったよ。チョコもすぐ食べちゃうのがもったいないくらいすごく美味しかった」

「はう……えへへ、それなら良かったです。やっぱりみんなのおかげ

です。みんながいなければ、昴さんからこんな嬉しい感想を頂けませんでした」

「それじゃ、俺と一緒にみんなにお礼の気持ちを込めてお返ししないとね。もちろん俺は智花にも今回のことを含めてしっかりと感謝してるよ」

みんなの分の袋分けが終わったところで、特に装飾されていない一つの小袋を彼女が手に取る。

「昴さん。その……凶々しいですが、私が頂ける分として、こちらを頂いてもいいでしょうか？」

「え？ でも、それって……」

一番最初の失敗作だ。

確かに智花が側にくれたおかげで食べられない程ではないが……さすがにそれをお返しとして渡すのはあんまりな気がする。

「……これがいいです。昴さんが一番最初に作って下さったもの。――昴さんだつて、前にまだ練習中なのに私の卵焼きを味見したんですからお互い様ですよっ」

照れたようにはにかみながらも、どうやら彼女にしては珍しく自己主張をして絶対に引いてはくれないことを悟る。

「わかつたけど、無理に食べなくていいんだよ？ できれば智花にもちゃんとしたやつを食べて欲しいんだしさ」

「はい。そちらも味見させて頂きました。みんなだつて昴さんからもらえるって知ったらすごく喜びますよっ」

彼女が両手で大切そうに抱えている物はともかく、他は彼女のお墨付きをもらったのだから、きつと大丈夫だろう。

翌日。部活後にバレンタインのお返しの手作りクッキーをみんなに渡すと大歓声に包まれた。

事前に智花に約束した通り、渡すときまで内緒にしてくれていたようだけど……みんな喜びすぎだろ!？」

もしかしたら、これがみんなに贈る最後のプレゼントになるかもしれないと思うと、一人で勝手にしんみりとしてしまったが、あえて口



に出すようなことはしない。

できれば智花にもみんなと同じ気持ちで受け取ってもらいたかったのだが、多分彼女が協力してくれてなければ、ここまで上手くは行かなかっただろう。

彼女に感謝を想いながら、楽しそうな笑い声が絶えることなく更衣室へ向かっていく小さな五人の背中を見送るのだった。

\*

「昨日早く帰ったのはこれのためだったのね。トモは一日早く長谷川さんとホワイトデーを満喫したってわけね」

「なんだよー知ってたんなら、先に言えよなーもっかんっ」

「はう！ ごめんね。昴さんに恥ずかしいから渡す時まで内緒にしていて欲しいって言われちゃったから……」

「長谷川さんからお返しを頂けるなんて……すごく嬉しいね」

「おー。おにーちゃんのでづくり、ひなもうれしー」

「それで、昴さんに内緒で、これも持ってきちゃったんだ」

「ん？ ……なんか私たちにくれた物より包装がシンプルね」

「うん。昴さんが一番最初に作ったものだよ。昴さんは失敗作って仰ってたけど……」

「すばるんのハジメテ!!」

「長谷川さんの!?!」

「おー。おにーちゃんのはじめてー」

「ふーん。確かにトモにとっては、こっちの方が貴重かもねー。一番長谷川さんの想いが込められてるものね」

「はうう……そ、それで、良かったら……みんなも食べてみない？ す、昴さんの初めてのの」

「え!? 私たちも？ トモ、本当にいいの?」

「いいの!?! あ、でも智花ちゃんに悪い気もするかな……」

「ううん。みんなだって昴さんのことが好きなのに、いつも私だけ独り占めなんてイヤだよ」

「おー。ひなたべてみたいー」

「さっすがもっかんっ」

「それじゃ、みんなで頂きましょうか。——あ、代わりに私たちが頂いた分をちよつとずつトモに分けてあげるわね」

「えへへ、みんなありがとう。私みんなのこと大好きだよっ!!」

「そんじゃ、いただきまーす……………甘っ!? しかもすっげー粉っぽいぞコレ!?!」

「おー。あまくてざらざらしてるーどくどくなおあじですなー」

「笑っちゃったら失礼だけど…………長谷川さんって、何でもできそうなイメージだったけど、なんかすごく安心しちゃった」

「にししー。まだまだシユギョーがたりんな。すばるんもっ」

「ま、初めてなら、こんなもんよね。食べられるだけマシでしょ。真帆のに比べたら」

「なんだとー!」

「あはは、ケンカしちやダメだよー」

\*

更衣室から出てきた五人は変わることなく——むしろ入って行った時以上にみんな満面の笑みで出てきた。

そして、俺と目が合うと、なんとなく申し訳なさそうに困った様な笑顔でこちらを見ている智花と、他の四人に何やら俺をからかうようなニヤニヤとした視線を向けられているような気がする。

うーん。もしかして何か失敗してしまったのだろうか？

ま、みんなが仲良くしてくれてるなら、特に気にする必要はないか。

俺に大切なことや情熱を思い出させてくれた五人の少女が、変わることなく、いつまでもずっと仲良くしていて欲しい。という俺の想いは確かに届いてくれたのだろうか。

## 未分類・最新投稿物

### おにーちゃんとHの秘密特訓

「実はね。ずっと前から君の身体に興味があつたんだ。ひなたちゃん」

「おー？ そうなのー？」

「うん。これからちよつとずつ確かめさせてもらいたいんだけど、いいかな？」

「おー。いいよー」

これから俺に何をされるのかを全く疑うことなく、天使のような笑顔を向け、その幼くも俺の心を強く惹きつける小さな身体を差し出してくれる少女。

イノセントチャーム——無垢なる魅了の二つ名の通り、何も知らない彼女に自分がどれだけ魅力的な体の持ち主であるのかをたつぷりと教えてあげないとな。

ほんの少し触れただけで折れてしまうのではないかと心配になつてしまうくらい、か細く小さな体に俺の両手が触れる。

彼女の体の感触を確かめるようにゆっくりと彼女に触れている手の平や指先を動かしていく。

「おー。おにーちゃんになでなでされるの気持ちいいよー」

無遠慮に伸ばし、その未熟な体を一つ一つ確かめるように撫でまわしている俺の手を振り払うことなく、彼女はかわいらしく天使のような笑顔と期待に満ちた眼差しを俺に向けながら受け入れてしまつている。

どうやら彼女はまだ俺の目的に気づいていないのだろう。

まあ、たとえ本人が気づいていない間にも、体の方は順調に準備が整いつつあるようだ。

ひなたちゃんが驚いたり、痛みを感じないように細心の注意を払いながら、優しく手を動かしていた成果もあり、彼女の体はすっかりと解れてきている。

「よし、そろそろひなたちゃんらの体も良い具合になってきたみたいだし、さっそく始めよっか」

「おー。おにーちゃん。はやくはやくー」

「あはは。そんなに慌てなくても、時間はたくさんあるんだから大丈夫だよ」

あまりにも無邪気にせがんでくるその様子に思わずこちらの頬も緩んでしまう。

やはり初体験以来、すっかりあの快感にハマってしまったのだから。

強いて言うなら、彼女の初体験は竹中の手によってもたらされてしまったのは、少々悔しい気がしないわけでもないが、

まあ、あいつにも少しくらいは想い人との甘いひとときを過ごさせてやるくらいはいいだろう。とか思ってたんだし。

なにより、俺の知らないところで「いっぱい上手くなっておにーちゃんにほめてもらいたい」という彼女の健気で可愛らしい目標を聞かせてもらった時には思わず胸が熱くなったものだ。

これからは俺がたっぷりと手取り足取り色んなことを教えてあげるからね。

そんな想いを胸に、少女に両足を開かせながら身体をゆつくりと自分の方へと引き寄せて行く。

「ひなたちゃん、大丈夫？」

「おー。ぜんぜんへいきー」

まだ始めたばかりではあるが、もしかしたら痛がってしまっているのではないか？ そんな俺の心配をよそに、ひなたちゃんは余裕の笑顔だ。「もう少しだけ強くしてみるけど、痛かったり、ビリって感じたら、すぐに止めるから絶対に無理しちゃダメだよ」

「おー。とっても気持ちいいよー。おにーちゃんのおすきなようにどうぞー」

他の子たちの中には痛みを感じたり、これ以上は無理だと思うくらいには強くしてしまっていると思うのだが……やはり彼女には素質があるのだろう。

ひなたちゃんの様子を確認するのだけは決して怠らず、徐々に力強く少女の身体を引き寄せていったのだが、驚くくらいあっさり最後まで到達してしまった。

確かめるようにお互いの体位を変えながら、何度か試させてもらったのだが、ひなたちゃんのは最高だった。

求めている俺自身ですら、多少無茶なことを言ってしまったのではないか？　と思うような要求すらも彼女は笑顔で応じてくれて、そのたびに俺を喜ばせてくれた。

俺が驚きや喜びの声を上げるたびに、彼女も俺に自分の体が褒められていることに輝かんばかりの嬉しそうな笑顔を見せ、俺に自分の体をもっと見て欲しい。もっといっぱい体を使わせて欲しいと逆にせがまれてしまうくらいだった。

「本当にすごいよっ。ひなたちゃん！　まさかここまで体が柔らかいなんて想像以上だったよっ」

「わーい。おにーちゃんにほめられたー」

俺の驚き混じりの心からの賞賛に両手を上げて無邪気な笑顔を浮かべながら喜んでる。

そんな可愛らしい天使の姿に、思わず手を出してしまったが、撫でられるのが大好きな彼女にとっては俺からのご褒美だと思いき喜んでくれているようだ。

正直、あまりにも無防備すぎる少女の身体を男がベタベタと触れ回ってしまうのもどうかと思うところもあるのだが……イノセントチャームに抗うにはまだまだ俺のレベルが足りないようだ。

さて、そんなわけで彼女には左右や前後開脚からの前屈等と色々なストレッチを行ってみてもらったわけだが、この高い柔軟性は間違いなくひなたちゃんの才能の一つだと確信する。

しかも、彼女はただ体が柔らかいだけではない。

ブリッジやY字開脚など柔軟性だけではなく、高度なバランス感覚も要求されるような体位を見せてもらった時も、彼女の体幹が決してぶれることがなかった。

初めて彼女と出会った頃は、自分は足が遅かったり、シューズが届かないなどと自身を卑下するようなことを話していたが、彼女自身は決して運動に不向きな体ではないのだ。

みんなと楽しそうにバスケットをしている姿から見ても別に運動嫌いというわけでもなさそうだし、ただ純粹にスポーツと触れ合う機会が少なかったのであろう。

真帆にバスケットに誘われたことがきっかけとなり、少しずつだけ彼女が確実に成長している。

……ヤバイ。ほんの少し触れただけで、増々ひなたちゃんの体に興味が湧いてきてしまったぞ。

誰も見たことがないような、ひなたちゃんの隠された部分が見たい。

もつともつとこの小さな体に秘められている隠れた素質を知り尽くしたい。

もしかしたら、ひなたちゃんの体を知ってしまったこの瞬間から俺は『ひなたちゃんマスター』を志すようになったのかもしれない。

こういうと少々語弊があるかもしれないので、はっきり断言しておくが、別に俺はひなたちゃんの体だけが目的ではない。

当然、『ひなたちゃんマスター』を志す者として、ひなたちゃんの魅力的な体に興味深々なのは認めるが、ひなたちゃんのその優しくも強い心に惹かれてもいるのだ。

ひなたちゃんは庇護欲を掻き立てられる愛くるしい天使というだけではないのだ。

どんな時でもごく自然体で周囲を幸せにする笑顔を振りまいてくれているが、悲しいことに彼女だって天使である前に一人の小さな天使なのだ。——ん？　なんだやっぱり天使じゃないか。それなら何の問題もないな。

……いやいやいやいや、ひなたちゃんが天使なのは紛うことなき事実だが、彼女は自分自身のことに対して危うさを感じてしまうくらい、あまりにも無自覚すぎる。

耐え切れないほどの負荷に体が必死に悲鳴を上げて脳に本能が休

息を求めているにも関わらず「ちよつと疲れてきたけど、もつとみんなといたいからがんばろう」くらいにしか考えていないのかもしれない。

俺以上に彼女を理解している大切な友人たちでさえ気づけないくらいに笑顔のポーカーフェイスで無理をしてしまうことがあるのだ。おそらく彼女自身も自分が無理をしている。といった自覚がほとんどないのかもしれない。

智花たちが気づくことができない時点で、まだまだ付き合いの浅い俺なんかじゃ、もの役にも立てないかもしれないが、それでも俺だつて彼女たちのコーチなんだ。

彼女たちの身も心も全てを知り尽くして、絶対に護つてやる。

みんなの大切な場所を護るためなら、なんだつてやる。あの時の覚悟が偽物じゃないつてこと、証明してみせるんだ。

「ひなたちゃん。まだ頑張れるかな？　もう少しだけひなたちゃんのことをよく知りたいんだ」

「おー。ひな、おにーちゃんのためにいっぱいがんばるよー。だから、ひなにいっぱいバスケ教えてくださいー」

——この時、俺の中で彼女のプレイスタイルの一つが沸々と浮かび上がりつつあった。

汗を流しながらも俺の要求した動きを繰り返しては、こちらの反応を窺い、大丈夫だよと頷くと嬉しそうに満面の笑顔を向けてくれる。

何も知らない無垢な少女を自分の理想通りの姿に成長できるように育成する。

……改めて考えてみるとすごく責任重大なことしてるんだよな、俺。

みんなのこと大切に育ててあげないと——

変わらず純粹無垢な笑顔をこちらに向け続けてくれる少女にこちらからも微笑み返しながら、決意を新たに自分の責任を全うすることを強く心に誓うのだった。

「ひなたちゃん……もう少しだけ早く、それに大きく動けるかな？」

も、もう少しで、良い感じのものが出そうなんだ」

「おー？ っうー？」

「あつ！ いいよ。今のすごく良かった。他にもやってみてくれる？」

「おー。がつてんー。いっぱい動くよー」

基本的な動きは大切にしつつ、彼女の個性を活かしたスタイルを創り上げていく。

あえて具体的な細かい動きは指示せずに、ひなたちゃんの感性の赴くままに自由に動いてみてもらい、ありのままの彼女の姿をじっくりと眺めさせてもらう。

あまりにもフォームが乱れてしまいそうになったら、そこだけはしっかりと矯正してあげないと。と思ったのだが、独特で不規則ながらも基本的な体の使い方を大きく逸脱した動きをすることはなかった。

ほんの少しだけ体の使い方を教えてあげる程度にとどめて、あとはひなたちゃんの本能のままに動いてもらった方が、きつと俺なんかじゃ、想像がつかないくらいのごい成長を遂げてしまいそうだな。「……ふう。少し休憩しようか。ひなたちゃんがいっぱいがんばってくれたおかげで、俺もたくさん色んなイメージを出すことができたよ」

「おー。ひなもけっこう疲れてきてたかもー」

「あはは。あんまり無理しちやダメだよ。ひなたちゃんが頑張り屋さんなのは良く知ってるから、休むときはしっかりと休まないとね」

「おー。しっかりと休んだら、またがんばるー」

体育館の床に腰を下ろし、思い浮かんだイメージを少しずつ整理していく。

隣にひなたちゃんがちよこんと座って来たかと思うと、俺の膝に小さな頭を乗せてきてくれた。

俺の膝に淡い重みと温かな体温と柔らかな感触が伝わってくる。

「おー。おにーちゃんのひざまくらもゼツピンですなー。ひな、とっても気に入りましたー」



すりすりと柔らかな頬が俺の膝に摺り寄せられ、その感触がむず痒さを感じさせる。

思わず空いているもう片方のほっぺたを触りたい衝動に駆られてしまい、手を伸ばしてしまったが、彼女の頬に触れる直前で背筋に悪寒が走る。

触れてしまったら、きつと取り返しのつかない何かが起きてしまう予感がする。

そんな気がするだけで、はつきりと何が起きるかはわからないが、俺の生存本能が全力で訴えかけてくるのだ。

「おー？ ひなのお顔になにかついてたー？」

「ああ、ごめんね。ちよつと考え事をしてただけだよ」

自分の顔の前でぴたりと止まっている俺の手と顔を交互に見比べて不思議そうにしている。

「そういえば、ひなたちゃんと愛莉って、よく一緒にいる気がするけど、二人って特に仲良しだったりするのかな？」

「おー。ひな、あいりのことだいすきー。おっぱいおつきいよねー。うらやましいですなー」

咄嗟に誤魔化す感じに話題を振ってしまったが、俺の膝の上でこやかに質問に答えてくれた。おっぱいに関しては俺からのコメントは差し控えさせて頂く。

「ちよつとだけ不思議かな？ って思ったことがあってね」

「おー？」

「こういつたら二人に悪いとは思っただけど、愛莉とひなたちゃんって結構身長差があるよね」

自分の背を気にしている愛莉からしたら、一番小さいひなたちゃんが隣に並んでしまうと、いつそう自分の背を引き立てられてしまうとは考えないのだろうか？

いや、心優しい愛莉がこんなにかわいいひなたちゃんをぞんざいに扱えるわけないのはよくわかるし、誰だってこんなにかわいい子が自分に近寄ってきてくれるのを嫌がるわけがないだろう。

「ぶー。おにーちゃんもあいりをいじめるっ？」

いかん。ひなたちゃんが、俺の上で頬をふくらませてご機嫌を損なわれてしまっている。

こんな無垢な子に嫌われてしまうなんてことがあったら、今後の俺の人生は間違いないくどん底どころか、さらにその奥の地獄まで一直線だ。

「ご、ごめんっ。本当にただちよつと気になったただけなんだ。気に障ったんなら謝るよっ」

「おー。おにーちゃん、あいりにもきようみしんしんー?」

必死の弁明の甲斐あつてか、すぐに相好を崩し機嫌を直してくれた様子に心の底から安堵する。

やはりまだ愛莉自身を含めて、彼女たちに身長の話題を出すのはNGなのだろう。

いずれは切り出さなくてはならないことかもしれないが、ようやく少しずつでも向き合うことを考え始めてくれたんだから、急かすようなことしちやいけないよな。

「できればもつとみんなのことを知りたいとは思ってたんだけど……さすがに失礼だったよね。ごめんね。変なこと聞いちゃって」

「んーんー。ひな、お話するのへタだけど、あいりとトモダチになった時のお話するー?」

「うん。もしよかつたら、聞かせて欲しいかな」

「おー。ひなとあいりはおなかまなの。——んしよ……と」

そう言いながら、ひなたちゃんは俺の膝を枕にしていた小さな顔を起こすと、今度は俺の膝の上に座り直す。一度だけ小首を傾げながら「ごめいわく?」と振り返り俺に確認を求めてくる。

全然そんなことはない。むしろ大歓迎だよ。と、にこやかに返してあげると、すぐに俺の膝の上で小さな体を左右に揺すり出し、ベストポジションを探し始める。

その動きや、ひなたちゃんのほとんど重さを感じさせない、小さな体の感触になんとも言えない心地良さとかすぐったさを感じさせる。

今この瞬間、俺はひなたちゃん専用の椅子となった。

この最高の特等席で俺は彼女の話の聞けるという無上の喜びを味

わうことができる権利を独占できたのだ。

さあ、ひなたちゃん、俺の上でいっぱい色んな話を聞かせて俺を喜ばせてくれ。

昔話を語っている間もひなたちゃんは、楽しそうに俺の上で小刻みに左右にゆらゆらと揺れて、俺に心地よい刺激を与えてくれる。

小柄な少女が俺の上で動いたたびに、俺は彼女との繋がりを強く意識させられた。

当然、ひなたちゃんの体にばかり夢中になって、彼女の口から楽しそうに歌を歌うように発せられる甘く優しい声を一音たりとも聞き逃がすような愚を冒すことは絶対にしない。

しばしの間、身も心も俺に許してくれている少女と幸せな時間を過ごさせてもらおうとしよう。

「あいりもだけど、ともかも初めてひなが、ごあいさつしたとき少しビックリしてた。さきには誰にでも近づきすぎ。って少しおこられちゃったけど、すぐにトモダチになってくれたー」

自分よりも小さな子があまりにも無防備に近寄ってくるのだ、愛莉じゃなくても困惑するに決まってる——ってか、紗季さんさすがだな。イノセントチャームに惑わされることなく、ひなたちゃんを制御するなんて。

昔を懐かしみ、そして今を楽しむように少女は話を続けてくれる。

「あいり、ひなたにあいりのことこわくないの？ 聞いてきたんだよ。あいり、とってもやさしいのにへんだよねー」

大きすぎる自分と違って、とても小さく可愛らしい少女。まさに愛莉にとって理想の姿だったんだろうな。

人より大きい身体を疎ましく思っている自分に、どこまでも純粹に無邪気に懐いてくれる少女に愛莉は何を思ったのだろうか？

おそらくは当人にしかわからないことを漠然と考えていると、愛莉とひなたちゃんの関係だからこそ言える魔法の言葉で、あっさりとして愛莉と友達になってしまったことを知る。

「ひな、あいりもまほにお助けしてもらった仲間同士だから、ひなとあいりは同じだよ。って言ったたら、うん。って言ってひなのこと

ぎゅーっつてしてくれた」

「あはは。確かにそれならひなたちゃんと愛莉は同じ仲間同士だね」

愛莉には悪いと感じつつも、その時の光景——はっとした瞬間、ひなたちゃんにしがみつこうように抱き着く愛莉の姿が思い浮かび笑みが零れてしまった。

背の高さを気にしている愛莉が、一番小さなひなたちゃんに、同じと言われてしまえば、嬉しくて仕方ないだろう。

確かにきつかけは思い込みからかもしれない。でも、この二人も間違いなく最高の友達と巡り合うことができた関係なんだと思う。

あつさりと愛莉の心の中にするりと入りこんでしまい、もしかしたら誰よりも愛莉を理解しているのかもしれないし、愛莉の方もきつと自分の心を護ってくれたひなたちゃんを護ろうとしてくれているのだろう。

「ひなたちゃんはすごいな」

「んーんー。ひなはまだまだだよ？ もっともつとバスケうまくならないと、みんなに追いつけない。だから、おにーちゃん。ひなにいっぱい教えてください」

思ったことをそのまま呟いてしまっていた言葉に、今の自分の想いと目標を乗せてはつきりと答えてくれた。

彼女は甘え上手だけど、決して甘えるだけの子ではないことは、付き合いの浅い俺でももう知っている。

よし、ここはひなたちゃんにあやかかって俺も自分の直感を信じてみよう。

「よしてきた。練習、大変だと思うけど、ひなたちゃんなら必ず習得できるから、本当に辛い時は絶対に無理しちゃダメだよ」

「おー。りょうかいー。ひながムリしちやったら、みんな悲しいお顔になっちゃうから、絶対にムリしないけど、いっぱいがんばるねー」  
ひなたちゃんの強い決意が込められた答えを聞いた時、俺の中で遂に一つのイメージがはつきりとした形となったのを感じる。

それと同時に体育館のドアが開け放たれ、四人の少女が額から流れる汗を輝かせながら、とても活き活きとした表情で入ってきた

「すばるーんっ。走り込み終わったよー。次は何をすればいい?」

「あれ? ひなたちゃん、疲れちゃったの? 大丈夫?」

「ふふ。あんまり長谷川さんに甘えてると、トモに怒られるわよ?」

「怒りませんっ! ——ひなた。あんまり無理しちゃダメだよっ」

「おー。へいきー。おにーちゃんにひなの体のこといっぱい調べてもらったー」

「——!? ひ、ひなたちゃんって、想像以上に体が柔らかくてびっくりしたよっ。これは絶対にバスケに活かせるよ。うんっ」

確かに事実ではあるんだけど、ひなたちゃんの口からみんなにそのまま伝えられてしまうと、何かとんでもない誤解が生み出されてしまいそうな予感がし、すぐさま補足をさせてもらう。

「ひなたって、すっごく体が柔らかいもんね。羨ましいな」

「おー。おにーちゃんもいっぱいほめてくれたー」  
「なんかあらぬ誤解を掛けられることなく、軌道修正できたことに安堵する。」

「私も柔軟がんばってるのに、なかなか柔らかくならないのよねー」

「サキはカラダだけじゃなくてアタマもかてーだろ」

「あんだだっってガチガチのくせに何言ってるのよっ」

「あたしの方がやわらかいもんねーっ」

「二人ともケンカしちゃダメだよお」

「はいはい。そこまでだ。これから大事な話があるんだから」

軽口をたたき合いながら、前屈を始め競い合う二人と、それを宥めようとする愛莉に俺も加わると、仲裁をするために出た俺の言葉に、真帆と紗季だけでなく、他の三人の視線も向けられる。

「そろそろ基礎練習だけじゃなくて、みんなの個性に合わせた個人練習も初めてみようかな? って思うんだけど、どうかな?」

その分だけ、今までの練習よりも少しきつくなっちゃうけど。と付け加えたが、少女たちは怯むことなく、大喜びで俺の考えに賛同してくれた。

嬉しそうにはしゃぎ回っている四人を、俺と同じくほんの少しだけ離れた場所で温かく見つめている少女と目が合う。

「智花はもう満足してるかもしれないけどさ。もう少しだけ本格的なバスケを、みんなに教えてあげたいから、いつも頼らせてもらって悪いんだけど協力してくれるかな？」

「はいっ。私たちのこと、いっぱい鍛えてくださいっ。もっともっと昂さんのバスケ教えて欲しいですっ」

数日後、まるで狙ったかのようなタイムミングで、みほ姉から硯谷女学院との合同合宿の話が持ちかけられたのだった。

## ラストインターバル

「俺はスパッツがいいと思うな」

「……お前はいつたい何を言っているんだ？」

俺の素直な考えを伝えたというのに何故か呆れた顔をする万里。

そもそも最初に意見を求めてきたのはお前だろうに。

「何って、みんなへの進学祝いのプレゼントの話だろ」

先日、彼女たちについてはいに卒業式を迎え慧心学園初等部を卒業し、数日後には新たな舞台となる中等部への入学式を控えている身だ。

彼女たちが卒業した時点ですでに俺は彼女たちのコーチの任と解かれ、現在はバスケットと小学生が大好きなごく普通の高校生に戻っている。

立場上は、彼女たちとの関係は終わってしまったているのだが、心優しい少女たちは変わらずに俺をコーチとして扱ってくれているように、数日後に開催される愛莉の誕生日会へのお誘いを届けてくれたのだ。

ちなみに愛莉個人への誕生日プレゼントは例によって智花の助力のもと、準備が完了しているが、この進学祝いは今度こそ彼女にも秘密で進行中の計画だ。

さすがにホワイトデーのミスを繰り返すようなことはしない。うっかり口が滑りそうになったけど、今回は俺だけじゃなくて万里もかんでいるのだから、迷惑はかけられないしな。

俺の方はただ学年が一つ上がるだけだが、彼女たちは中等部への進学だ。

今の彼女たちは小学生でも、中学生でもない。いわば奇跡のような存在となっているのだ。

そんな中で、今までとは全く異なる、新たな環境に刻々と近づいているのだから、期待や不安で胸がいっぱいになっていることだろう。

もしかしたら、ふとした拍子に小学生の頃を思い出し、心細さや寂しさを感じてしまうかもしれない……いや、それは大丈夫か。彼女たち五人の友情はきつといつまでも変わらないことは、近くでみんなの

成長を見守らせてもらった俺が知っている。

「それで、お前は進学祝いにスパッツを贈られてみんなが喜ぶと本気で思っているのか？」

確かに万里の指摘はもつともだと思う。

俺の大切な小学生たち——数日後には中学生になる五人の中でひなたちやんだけはブルマ派だ。

できるだけみんなとお揃いがいいとは思いますが、だからといって中学生になった途端、慣れ親しんだブルマからスパッツになることを強要するのは良くないことだろう。

いくら友達同士だからといって——むしろ友達同士だからこそ、お互いの好みや意志は尊重されて然るべきはずだ。

みんながそれぞれの慣れ親しんだ格好になる分には問題ないが、俺がみんなにプレゼントをするのに、四人にはスパッツ、一人だけブルマをプレゼントするというのもなんか違う気もする。

せっかくみんなにプレゼントするんだから、これからも五人の友情が変わることなく育まれることを願う意味も込めて、同じ物をそれぞれに贈りたい。

「とりあえず、長谷川。お前に一言だけ言っておく」

「ん？ なんかいい案でも浮かんだのか？」

もしかしたら俺以上に悩み過ぎてしまっているのか、心なしか怒っているような厳しい表情になっている。

「もしお前が本気で愛莉の誕生日会で愛莉たちにスパッツを渡すつもりなら、俺は殴ってでも本気でお前を止めなくてはならない。……言ってる意味わかるな？」

「……おーけい。再考の余地ありだな」

どうやら勘違いではなく本気で怒りを露わにしていたようだ。

そうだな。俺もどうかしていたよ。

——やっぱひなたちやん一人だけブルマをプレゼントするのはダメだよな。なにより慧心学園中等部の学校指定物となると、そもそも入手自体が困難を極めそうだ。

彼女たちが中学生になってからは、俺もほとんど会うことができな



くなってしまうだろうが、それでも俺は今後も彼女たちが願ってくれている限りは、心の中では変わらずに彼女たちのコーチでありたい。せめて俺がない間も俺の代わりに少女たちのすぐ側で見守ってやりたい。そんな想いがあったの提案だったのだが、さすが万里だ。俺の考えの甘さをすぐに見抜いてきたか。

とはいえ、なかなか難しいんだよなあ。

「リストバンドは以前、智花が初めて俺を抜きそうになった時の記念であげちゃったしな」

「……バスケットだよな？ いや、わかってるんだが、一応な。湊さんがお前を抜きそうになったの」

「それ以外に何かあるんだ？」

「いや、なんでもない……」

なんか微妙な顔してるけど、何か気になることでもあったのだろうか？ まあ、万里はたまによくわからんし、別に気にすることでもないか。

残念ながらギリギリで未遂だったけど、あとほんの少しだけ深いところまで入れてれば、間違いなく俺と智花の記念すべき初体験となっていただろう。

「でも、智花一人にあげちゃったのは少し失敗だったかなあ。すごい大事に扱ってくれてるのは嬉しいんだけど、あまり使ってくれなくてな」

軽い気持ちで渡したのに彼女は『俺の力を本当に借りたい時だけ使わせてもらおう』というその言葉通り、俺にとっても彼女たちにとっても大切な試合の時には、それを着けてくれているのだが、まだ数回しかその姿を見せてもらったことがない。

それだけ大切な物として扱ってくれてることに不満はないのだが、できればもっと気軽に普段から使ってくれた方が良かったな。という気持ちがあるのも事実だ。

「だからと言って、今更みんなにお揃いのリストバンドを改めてプレゼントしたところで、智花に最初にあげたやつは余計使われなくなってしまうかもしれない」

みんなが仲良くお揃いの物を使ってくれるのなら、それが一番だとは思うんだけど、それはそれでちよつと悲しい。俺と智花の初めての記念だし。

激しい練習に必死に耐え、辛い時も苦しい時も、仲間たちと励まし合う最中、五人が揃った時にふと俺を思い出してもらえるような、そんなアイテムはないだろうか？ ——できるだけ彼女たちの肌に密着できるやつで。

そんな考えの末に辿り着いた答えがスパッツだった。

リストバンドのようにバスケで大切な手首の保護をするように、スポーツ全般で基本であり、もつとも重要な足腰を保護する意味でも、やはり彼女たちを守る役目としてこれは非常に有効なアイテムだろう。

「……っーか、お前は女の子にスパッツを渡すのに抵抗とか羞恥心はないのかよっ!？」

「……？ 別にパンツじゃないから恥ずかしくないだろう？」

「それ、荻山にも言ってみる勇氣あるか？」

「さつきから言ってる意味がよくわからないんだが……まあこの際、葵にも相談してみた方がいいかもな。——じゃ、ちよつと聞いてくる」

「バツカじゃないのっ!! 女の子にそんなこと言うなんて、いくらなんでもデリカシーなさすぎでしょーがっ!!」

メチャクチャ怒られたうえ、思いつき蹴り飛ばされた。

もしかして葵も本当はブルマ派だったのだろうか？

その後、男二人で悶々としていたところに、何故か俺だけを憐れむような目で見えてくる葵も加わってくれたおかげで、一気に捗った。

やはりこういうことはむき苦しい男同士よりも、女の子一人いるだけで全然違うな。

「そこまで部活で使って欲しいなら、あんたの大好きなタオルでもいいでしょうが。なんでよりによって、そんなものを女の子に送りつけ

ようとすんのよ」

「そうかつ!! なんて気づかなかったんだ俺は。すまん葵、マジでどうかしてたよっ」

どうやら俺は、『彼女たちに身に付けてもらおうことで俺の代わりにすぐ側で見守りたい』という考えに固執し過ぎてしまっていたようだ。

答えはすでにあの時——俺の誕生日に葵が教えてくれていたんだな。

激しい運動に火照った少女たちの体を柔らかな素材で優しく包み込み、抑えきれない程に溢れ出る玉のような汗の悉くを吸い尽くし、癒してあげることができるんだ。

むしろこれはタオルにしかできない。間違っても俺がやるわけには絶対に行かない。特に彼女たちの汗を吸い尽くすあたりが。

そして、何より俺の提案に致命的な欠陥があったことに気づいたのだ。

彼女たちは成長期なのだから、たとえ今はジャストフィットしたとしても、すぐにサイズが合わなくなってしまいう可能性が極めて高いのだ。

下手をするとひと月も持たずに使ってもらえなくなってしまうかもしれないし、サイズの合っていない物を無理に履こうとして体を壊してしまつては元も子もない。

少しでも彼女たちと離れずにいたいという無意識の欲求が、危うく俺に取り返しをつかないミスを冒させようとしていたことに気づくと、思わず背筋がゾツとした。

なんにしても、これで決まりだな。

「ありがとう葵。相談に乗ってくれて本当に助かったよ! やっぱり今治タオルは最高だぜっ」

「そんな感謝のされ方、初めてされたわよ……っっていうか、万里君ももう少し頑張りなさいよね。危うく愛莉ちゃんにまで変なものを鼻に押し付けられそうだったのよ」

「面目ない……荻山が来てくれて本当に良かった」

無事、数日後に控えた愛莉の誕生日会の時に、中等部に進学するみんなへのサプライズ計画が完成したことに安堵するのだった。

## 初めてのダンク（前）

「すばるん、すばるん。はやくはやくー」

「おー。ひなもひなもー。まほの次はひなのばんー」

「それじゃ一人一回ずつだからね。悔いのないようしっかりね」

日頃から文句も言わずに真面目に頑張ってくれてるんだ。

この後に控えている部活のこともみんなわかっているだろうし、あまり時間は掛けられないが、これくらいはいいだろう。

真帆に背中を向けながらしやがみ込むと、すぐに俺の上に跨る少女の重みが肩から首に掛けて伝わってくる。

しっかりと俺の上で安定した状態で乗ってくれたのを確認してから、両足を掴ませてもらい、ゆつくりと立ち上がる。

スベスベの生地越しに少女の柔らかな両方の太腿に顔を挟まれている感触からは極力意識を背けつつ、智花が差し出してくれたボールを受け取り、それを頭上の真帆へ。

「うおおおーっ。でっけーっ!! アイリーンよりたけえーぞっ!!」

一瞬おいおいと思ったが、周りどころかどうやら愛莉本人すら困り気味に苦笑をしているだけで、それ以上は特に気にしていない様子だ。

初対面するときには不躰にいきなりコンプレックスを指摘してしまい泣かせてしまった彼女も、今は身長を自分の長所として大切な友達とのチームを支えてくれている。

俺だけでなく、彼女たちも愛莉の成長を心から喜んでくれているに違いない。

そう感じたからだろうか？ どうやら俺もほんの少しだけテンションが上がってしまったのかもしれない。

「よし。ハーフラインから少し走るから、真帆。バランス崩さないようにしっかり掴まってろよ」

「おっけーっ！ あたしがバッチリ決めてやるから任せろすばるんっ」

真帆の両足首をしっかりと掴み、重心がずれないように気をつけなが

ら、軽く駆け出す。

俺の上にいる真帆もわずかに触れている彼女の体を通じて、程よい緊張状態でタイミングを計っているのが伝わってくる。

一定の速度、リズムで徐々にゴールまで接近して行き、遂にベストポジションへ最接近した。

——今だっ真帆!!

『いつけええええーっ!!』

今この瞬間、俺と真帆は確かに繋がっていた。

みんなが息を飲みながら見守ってくれている中、二人の掛け声に合わせるように真帆が持っていたボールを掴んでいた両手を高く上げると、そのまま思い切りリングに叩き付ける。

どん。と真帆の両手が力強くリングにぶつかる音と勢いよくゴールネットを潜り抜けたボールが床にぶつかる。

二度三度と高くバウンドした後、ころころと床を転がりやがて止まった。

「やったな。真帆っ」

「くくくくっ!! すっげえーっキモチいいーっ!!」

よほど気持ち良かったのだろう。俺に全身で抱き着き喜びを伝えてくれる。

両手で俺の頭をかき抱くように強く締め付けられて、ほんの少しだけ苦しかったが、無粋なことを言って彼女の感動に水を差すような真似はしない。

「いつか自力でできるようにならないとな。真帆だったら絶対にできるって信じてるよ」

「うんっ。ありがとうっすばるんっ!! ——よ……っつと。よし、着地もせーこーだっ」

彼女を下ろそうとゆつくりしゃがもうとすると、途中で先に彼女の方から飛び降りてしまった。

まだ興奮が収まり切らないといった様子の紅潮させた顔で俺に礼を言った後、急いでひなたちゃんの前へ駆け出したかと思うと彼女の手を引きながら戻ってきた。

次はひなたちゃんだな。

小柄な子が多い女バスの中でも彼女は特に小さいが、なんとしても彼女にもしつかりと経験させてあげたいところだ。

「ヒナっ。すばるんにまかせておけばゼツテーだいじよびだっ。メチャクチャ気持ちいいぞっ」

「おー。それはとつても楽しみー。おにーちゃん、よろしくおねがいしますー」

片手を上げながら俺に期待の眼差しと無垢な笑顔を向けてくれる少女に、こちらからも一度微笑みを返し「どうぞ」と背を向けしやがむ。

小さな手が俺の肩に添えられる。

続いて小さな体がぴたりと俺の背中にくっつけられ……!?」

真帆のように勢いよく飛び付かずにはまずはゆっくりと体を密着させてから、よじ登るつもりなのだろうか？

お互いの体操着越しに彼女の発育途上ながらも、とても柔らかかなものを背中に感じ……てなんかないぞ。絶対に。

この状況で下手に体を動かすわけにもいかず、ひなたちゃんには早く俺の上に乗って欲しいのだが、なぜか俺の背中に抱き着いたままなかなか動かない。

「ひな。それだとおんぶになっちゃうから、多分ゴールに届かないぞ」

「おー。そうだったー今はおんぶじゃなくて肩車をしてもらうんだったー。ひなうっかりー」

彼女の両手は変わらず俺の肩に置かれたままだが、彼女の体との密着状態から解放されたことに安堵す……全然できなかった。

直後に俺の肩の方から、するりとひなたちゃんの生足が現れて度肝を抜かれたからだ。

そう。ひなたちゃんはこの女バスの中でただ一人ブルマだ。

スパッツ越しでもドキドキしていたのに、今度は俺たちを隔てる物が一切なくダイレクトに小学生の太腿が首や肩に押し当てられてしまっているのだ。

このあらゆる意味で危険な状況に背筋が凍る想いを押し隠し平常

心に努める。

ポイントガードはどんな時でも冷静に落ち着いて対処せねばならないのだ。

彼女たちのコーチとしても、ひなたちゃんはブルマだから肩車できない。なんて酷い差別できるわけもない。

スパッツもブルマも機能性を重視しながらも、発育途上の彼女達のをしっかりと守る大切な存在なのだ。そこになんの違いもない。

そうだ。俺はただひなたちゃんを肩車してあげるだけなんだ。やましいことなど何も無い。

ならばと俺の両肩に掛けられた細い足首をがっしりと掴み、彼女の一気に突き上げるように立ち上がる。

「あつ。ごめんね。急に立ち上がっちゃったから、驚かせちゃったよね」

自分の羞恥心を誤魔化すためとはいえ、いくらなんでも何も言わずにいきなり動いたら、さすがにビツクリしちゃうよな。

彼女のことを考えずに行動してしまったことを詫びる。  
「ううん。いま、ぐんつ。ってきて、きもちよかったー」

どうやらひなたちゃんからしたら、遊園地のアトラクションのような感覚だったらしく、むしろご満悦だったようだ。

それならいつそもつと上下に大きく動いて喜ばせてあげるのも悪くないか？ などと考え始めてしまったが、すぐに考えを改める。

ちがう。今はそんなことをしている場合ではない。上下運動による一時の快樂なんかよりも、ひなたちゃんには Dank の快感の方を味わってもらいたいんだ。

「おー。すつごいたかーい。あいりよりもたかいよー」

俺が気の迷いを起こしそうになっていた最中もひなたちゃんは俺の上で楽しそうに周囲を見回して高い視点を満喫中のようなだ。

「はう……もう、ひなちゃんまで……みんなだつてすぐに私くらいになるんだよっ」

「あいつら愛莉が自信持ったと思つたら、すぐこれだな。……愛莉、本当に嫌だつたら私から言つてやろうか？」



「ううん。ありがとう紗季ちゃん。大丈夫だよ。これ以上大きくなるのは、まだちよつとイヤかもだけど、これからこの身長を活かしてみんなの役に立ちたいからっ」

「私も早く愛莉くらしいになりたいな。それくらいあればバスケットもだけど……う、ううん。なんでもないよっ」

何やら智花が頬を赤らめている。そしてそれを見つけた紗季がにやにやとからかうような視線を彼女に向けていた。

もしかして何か言いづらいことでもあったのだろうか？ と思っただが、せつかくの女の子同士の会話に混ざるわけにも行かず聞き役に徹する。

愛莉もすっかり頼りがいのあるセンターになってくれたな。この身長は中学になってからも強い武器になってくれるぞ。

さて、高い視点で満足してもらってるけど、ひなたちゃんにはこれからもっと気持ちいい体験をしてもらわないとな。二本目行くか。

「ひなたちゃん準備はいい？ 一発勝負だから真剣にいくよっ」

「おー。どんとこーいっ」

ひなたちゃんも気合十分だな。

雑念——白く柔らかな太腿の感触を極力意識から排除し、心を鎮める。

スポーツマンたるもの、たとえどんなに心を揺さぶられるような状況であろうと、ここ一番の勝負をものできるかどうかは、持ち前の勝負強さとそれを発揮するための強い自制心が不可欠だ。

ひなたちゃんも俺から受け取ったボールを両手で強く抱き締めるように抑え込み、真っ直ぐゴールを見据えている。

ほとんど感じないが、ほんの少し意識を向ければ確かに俺の上に存在している天使の淡く尊い重みを感じる。

この小さな天使を絶頂の瞬間へ導くため俺は大きく一步を踏み出し、真帆の時と同様にハーブラインから一気にゴールリング目指し駆け出す。

そこから先はひなたちゃんに全てを託すだけだ。大丈夫、俺とひなたちゃんならできる。

「とーとーっ！」

「やったぞっ!! ひなたちゃんの優勝だーっ!!」

「わーいっ」

俺には試合終了ラスト数秒の瞬間。最後の最後まで自分のチームの勝利を信じ、仲間から繋げられたパスを受けたひなたちゃんがラストアタックを見事決め、奇跡の大逆転を果たす光景がはつきりと見えた。

さすがひなたちゃん、マジ天使!!

「……すばるんって、なんだかんだ言って、ヒナにイチバンあまいよな」

「長谷川さんもすっかりイノセント・チャームに掛かっちゃってるわね。まあ本当に大事なときはちゃんとして下さっているから構わないのだけれど……トモも油断してるひなに長谷川さん取られちゃうかも知れないわよ」

「ふええ!? ベ、ベべ別に昴さんは私のものってわけじゃ………はうう、でも、ちよつと羨ましいかも……」

「ひなちゃん、かわいいもんね。私もひなちゃんみたい……ううん。私は私だもんね。長谷川さんも今の私でいいって言って下さったし。もつともつと自信持たないっ」

あれ? なんか真帆がちよつとだけ不機嫌そうにしてるし、紗季も心なしか呆れた顔で俺を見ている気がする……。

智花と愛莉は、俺ではなく、ひなたちゃんに対してどこか羨望の眼差しを向けているみたいだ。心配しなくても君たちだつて俺にとつて大切な天使だ。

とは言うものの日頃から不平等がないようにと気を掛けてるつもりなんだけど、ちよつとはしやぎ過ぎてしまったかも……。イノセント・チャームおそるべしっ。

「……よ、よし。ひなたちゃん、一人一回ずつだから、次の人に交代しようね」

気まづさを感じつつ、そそくさとひなたちゃんに降りてくれるよう促す。

これからはもつとみんなに平等に接するように気をつけなければ。  
「おー。名残おいしいけど、おやくそくだし、みんななかよしがいいよねー」

うん。さすがひなたちゃんだ。ちゃんと他の子たちのことも気に掛けられるいい子だ。

「おにーちゃん。またこんども肩車とかおんぶやだっこもしてくれる？」

「もちろんっ！ いったってしてあげるよっ!!」

去り際の可愛らしいおねだりに思わず全力で答えてしまった。

い、いや、これはひなたちゃんだけじゃなく、みんなにもしてあげるからね。と周囲へのフォローも忘れない。

ひなたちゃんだけを特別扱いするわけにはいかないんだ。

「良かったわね、トモ。長谷川さんに抱っこしてください。って頼んでみたら？」

「ふええ!? そ、そそそんなの恥ずかしすぎるよおーっ!!」

ごめん。ちよつと訂正。さすがに俺もよほどの事情がない限りは抱っこは無理だ。どう考えても恥ずかしすぎる。

ってか、誰かに目撃されたら俺の身が危ない。

さすがに自分の命と引き換えに小学生を抱っこするだけの覚悟はまだ持ち合わせてない。

「と、智花。抱っこは無理だけど肩車なら、約束通り今するけど……どうする？」

紗季の無茶振りにひどく狼狽している智花に救いの手を差し伸べる。いや、本当にこれが救いの手となっているのかは甚だ疑問ではあるが。

順番的にはちよつと智花の番になったのだし、彼女が望むのならば非とも俺の手で初体験を迎えさせてあげたい。

「そ、それでは……す、昴さん……お、お願いしますっ」

「そんなに畏まらなくてもいいって。智花さえ良かったら、いくらでもしてあげるよ」

……とはいっても、さすがに何度もこういう格好をするのは恥ずか

しいかな？

男の上に跨るなんて彼女からしたら、とんでもないくら恥ずかしい行為だろうし。

余計なサービズなど考えず手早く済ませてあげた方がきつと彼女のためになるだろう。

そう考えながら、できるだけ彼女をあまり刺激しないように優しく準備を進めて行き、彼女が俺の上に跨ってくれたのを確認したところで、ゆっくりと立ち上がる。

「良かったわね、トモ。長谷川さん、トモにならいくらでもして下さるって」

「そ、そんなこと言ってないでしょっ!? わ、私だけじゃなくてみんなにもって意味で——はう!? す、すみません、私が勝手に決めてしまっただけじゃないですよねっ!?」

「にししー。もっかん、そんなテレんなよー」

「おー。ともかお顔まっかー」

智花の表情は見えないが、おそらくみんなにからかわれて真っ赤になってしまっているだろうことくらいは今までの付き合いから十分察することができる。

奥ゆかしい少女は慌てて俺に勝手なことを言ってしまったと謝罪を口にしていたが、別にそんな必要はない。概ね彼女の言うとおりだ。

まあ、今日は練習に影響が出ない程度で我慢してもらおうけど。

気持ちの上では、みんなが望む限り俺はいくらでも何度だって、彼女たちが満足いくまでしてあげるつもりだ。

さすがにいくら小学生相手でも無尽蔵と言うわけにはいかないだろうけど、それでも体力が完全に枯渇するまで続ける自信がある。

ただ、その……なんというか、頼むからこれ以上智花を恥ずかしがらせないでくれないかな？ みんな、ホント頼むから——

「……と、とも……か……その、少しだけ力を、ゆ……緩めてくれないか……な？ かなりき、きつくなってきた……」

出ちやいけない物が出そう……

彼女は小柄な見た目からは考えられないくらい、その……なんていうか、決して筋肉質ではない細く繊細な柔肌のどこにそれだけのパワーが秘められているのだろうと思うくらい生命力に満ち溢れている。

そんな彼女の太腿が今俺の首に絡みついているのだ。細い太腿が正確に俺の頸動脈を締め上げるようにギリギリと彼女の制御を離れ徐々に出力を高めている。

「え？……はあう!? ご、ごめんなさいっ!! 大丈夫ですか、昂さんっ!」

ようやく彼女の太腿の締め付けから解放され、体が求めていた酸素を大量に取り込みながら、生を実感する。

あやうく小学生の太腿に締め上げられて昇天する男子高校生という情けない姿を晒さずに済んだことに心底安堵する。

「トモ。いくら長谷川さんが大好きだからって、そんなに強くしがみ付きちゃったら長谷川さんだって苦しいわよ」

「——!? ち、ちがつ……うう……うううう……」

「さ、紗季……頼むから、もうその辺にしてくれ」

息を整えるのに必死だったせいで、よく聞こえなかったが紗季の一言で再び智花の太腿が俺の首を徐々に締め付けようとしていく気配を感じ咄嗟に自重を求める。

互いに準備——俺は呼吸を、智花は心を整えた後に、ようやく行方を再開する。

「ふあう……こ、このまま飛んでいってしまいそうです……」

「大丈夫だよ。俺がしっかり智花のこと捕まえてるから、どこにだつて行かせるものか」

さっきの失敗を気にしているのか両足に力を入れないようにしているが、代わりに両手を回し俺に抱き付くように掴まってしまうている。

真帆以上ひなたちゃん未満の幽かな——いや、なんでもない。

とにかくこれ以上、無自覚な少女との密着状態を続けるのは、あまりよろしくない気がする。

やはり彼女のためにもさっさと終わらせてしまおう。

「智花、行くよ」

「はいっ。お願いしますっ」

俺から渡されたボールを受け取ると、おそらく真帆にも負けなくらいの力強いダンクシュートを決めてくれたようだ。

みんなの感嘆とした表情や繋がったままの彼女の体を通じて伝わってきた振動から察するに、相当見事なものだったのだろう。

俺の視界からはほとんど彼女のフォームを見ることができなかったのが悔しい限りだ。

いつかきつと俺が見たことがない智花の部分をしっかりと見せて欲しい。と、ただ純粹にそう思ってしまった。

「二人の共同作業も無事成功ね」

「もう……そういうのはもういいよっ。本当に恥ずかしかったんだからね」

共同作業って……別に俺は智花の下で動いていただけで、最後にしっかりと決めてくれたのは彼女の力だ。

珍しく頬を膨らませるくらいに怒ってしまっている。嫌と言うわけではないだろうと思いたいが、相当恥ずかしい思いをさせてしまったようだ。

「でも嬉しかったんでしょ？」

「はう!? そ、それは………うん」

紗季の何気ない一言が羞恥心で頬が真っ赤に染めあげられている智花から、とても幽かな声でだが確かに彼女の口から肯定の言葉を引き出してくれた。

この言葉を聞けただけでも、俺の行為は間違ってたか確信できさる。

ダンクは花形なんだ。バスケットが大好きな智花がそれに興味がないなんてことありえない。

「あの……昂さんご迷惑だったにも関わらず、私のわがままを聞いて下さり、本当にありがとうございましたっ」

「迷惑だなんて思ってないよ。この経験が少しでも智花にとってプラ

スになってくれるのなら、これ以上に嬉しいことはないからね」

行為後に俺の上から降りると丁寧に頭を下げてくれた。

あまりにも純粹に嬉しそうな笑顔を浮かべながら俺に礼を述べる少女に不純な感情を抱いてしまったことに罪悪感を感じながら、彼女を下ろしつつ、速やかに脳裏に焼き付いてしまいそうになっている少女の柔肌の感触を記憶から排除していく。

いつか智花が一人でできるようになったところを是非俺に見せて欲しい。そんな想いをこっそり胸に秘めながら彼女の頭を優しく撫でると嬉しそうに目を細めてくれた。

多少のトラブルはあったものの、俺との経験済みの子たちとの行為は滞りなく済ませることができたし、この調子で二人にもしてあげないとな。

これまでの光景を目の当たりにして、すっかり俺とする気分になってくれているはずなのに、まだどこか戸惑い気味な表情で素直になれていない恥ずかしがり屋な少女に俺は優しく微笑みかけるのだった。

## 初めてのダンク（後）

「それじゃ、次はサキの番だなっ」

「え!? わ、私は別に……」

「そーゆーのはもういいからっ。さっさとすばるんに気持ち良くしてもらってこいよっ!!」

「おー。おにーちゃんのはとっても気持ちいいよー」

真帆とひなたちゃんの二人掛かりで両手をひかれ戸惑っている紗季がどんどん俺の前まで引っ張られてくる。

まあせっかくだし二人にあやかかって俺も少し強引に誘ってみてもいいかもな。

抵抗しようと思えばできるはずなのに、しないってことは多分恥ずかしいだけなんだろう。

俺は下で動いてるだけだから、あまりみんなの最高の瞬間を目にすることはできないけど、あれだけ何度も見てれば紗季だって興奮が抑えられなくなっているに違いない。

「紗季だって本当は興味あるんだろ? ……だったら、ちよつとくらい自分の気持ちに正直なってもいいんじゃないかな?」

「は、長谷川さんっ!? で、ですが……その……」

まさか俺まで真帆たち側に加わるとは思ってたのだろうか、彼女にしては珍しいくらい動揺している。

嫌なら控えめながらもきっぱりと答えてくれる紗季が、答えずらそうにしているということは、やはり本当はしたい。と思っっているはずだ。

だったら俺だって、コーチとして最後のもうひと押しをやるだけだ。

すごく真面目でいつだってみんなをまとめようと尽力してくれているんだ。そんな子がほんの少しだけハメを外してはしゃいだってバチは当たらないだろう。

「大丈夫だよ。紗季にとっては少し恥ずかしいことかもしれないけど、俺と紗季がこれからすることは、俺たちしか知らない秘密だ。ほ



んの少しだけ俺を信じて身を任せてくれないか？」

「ええええつ長谷川さんっ!? と、トモもいいのっ!?」

「ど、どうして私が出てくるのっ!? え、ええつと……う、うんっ。ちよつと恥ずかしかったけど、昴さんすごくお上手だったから、紗季にも昴さんの良さ。知ってもらいたいな」

はは。確かに（俺は見れなかったけど）智花の後じゃ、尻込みしちまうかもな。

ってか、智花が絶賛してくれるほど俺は（肩車が）上手かったのか？

それなら、いっそ毎日みんなにしてあげるのも悪くないかもな。

……いや、葵やミホ姉に見つかったら、なに遊んでるんだと怒られるか。

「ほら、紗季。早くしないと時間なくなっちゃうぞ」

「そ、そうですね……それでは、失礼しますっ」

背中を向けて早く俺に乗ってくれと促す。どうやらこちらが折れる気がないことを察すると観念したようだ。

俺にあまり重さをかけないようにしているのか、かなり慎重に肩に両足を掛けてくれた。

「お、重くないですか？」

「全然。ちよつと軽すぎて心配になっちゃうくらいだ」

俺の上ですっかりしおらしくなってしまう、どこか居心地悪そうにしている。

「くふふ。紗季もすばるんにしてもらうの大好きなくせに、スナオじゃないな」

「うっさいわねっ！ 嬉しいに決まってるでしょうがっ!!」

「おー。さきもお顔まっかー」

「ちよつと恥ずかしいけど、昴さんすごく優しくしてくれるから大丈夫だよっ」

「えへへ、良かったね。紗季ちゃん」

もしかしたら無理強いをしすぎてしまったかと思ったが、どうやらそれも杞憂だったようだ。

自身の羞恥心を誤魔化すためか、確かめるように俺の肩や首回りを触っているが、それが少しくすぐったくもあり、どこか心地良さを感じる。

「……こう言うっては失礼なんですが、は、長谷川さんも意外ととても大きくてたくましいんですね。触らせて頂いてちよつと驚きました」

「これでも毎日筋トレを欠かしてないからね。だから絶対に紗季を落としたりもしないから、安心していいよ」

「あつ。いえ、そういうつもりで言ったわけでは……その、男の人の体をこんなに触らせて頂いたのは、初めてでして……」

「はは。男の体を触ってみた感想は？」

うっかり思ったことをそのまま口に出してしまうと、紗季はたちまち言葉を詰まらせて自分の顔をおさえてしまったようだ。

「ああ、ごめん。変なこと聞いちゃったね」

「い、いえっ……その、ど、ドキドキしまし——」

「サキ、あんまりすばるんにベタベタしてつと、もっかんがおこんぞー」

「そ、そうねっ。ごめんねトモ。早く終わらせるからねっ」

「怒りませんっ!! ——って、お願いだから紗季まで変なこと言わないでえーっ!?!」

俺の失言が何故か智花にまで飛び火してしまったようで、彼女まで悶え始めてしまっている。

どうやら紗季もあまり経験がないみたいだし、これ以上慣れないことをさせちゃうのもかわいそうだな。

「長谷川さん、その不躰で申し訳ないのですが……そろそろお願いしてもよろしいでしょうか？」

「もちろんっ。智花のを見て尻込みしちゃったかもしれないけどさ、紗季には紗季の良さがあるんだ。だから智花に負けないつもりで思い切りやってみるといいよ」

そんな言葉を掛けながらボールを渡すと、小さく頷きながらボールを受け取った紗季の気配に変化を感じた。

何度か深呼吸をしていく度に彼女の羞恥心や緊張が徐々に解れ、彼

女をよりベストな状態へと近づいていく。

その様子を見て、みんなが心からバスケが大好きなバスケ選手へと成長してくれたのだと強く感じられ、それがとても嬉しかった。

「行くよ、紗季っ」

「はいっ。今の私の思い全てを込めさせて頂きますっ」

彼女の力強い意志を体で感じながら、俺もまた彼女と繋がれたことに心から喜びを感じながら、俺たちのゴールへと駆けだした――

「――ど、どうだったでしょうか？」

「うん。紗季の強い思いがしっかりと込められていた最高のプレーだったよっ」

確かに力強さという点では智花や真帆と比べると勢いでは劣ってしまうかもしれないが、紗季の動作の一つ一つに込められた強い意志は彼女たちにだって負けないくらい確かな思いが込められていた。

彼女の躍動を肌で感じた俺が言うんだからそれだけは間違いない。

ここまで開放的になった紗季を見ることができたのはなかなかの収穫だったのだが、行為後はちよつとだけバツが悪そうにすぐに俺から離れてしまったのが少し残念……いや、決して終わった後も紗季をずっとこのまま離さないでいたかったというわけではない。

俺が勝手に紗季との行為後の余韻に浸っていたかと思っているだけで、そんな俺の都合でただでさえも慣れないことをさせてしまった紗季をこれ以上辱めるわけにもいくまい。

「とても貴重な経験をさせて頂き、本当にありがとうございますっ」

「そう言ってもらえるなら俺もした甲斐があったよ。この経験は絶対に関後の紗季にとっても、いい影響になってくれるって信じてるよっ」

――さて、これで四人の初体験は無事に迎えさせてあげられることができたわけだが……

俺との行為を終えた四人を慈愛に満ちたとても温かな瞳で優しく見つめている少女を見る。

「お待たせ、愛莉。今度は君の番だよ」

他の子たちとした時点で、すでに俺の覚悟も決まっている。

愛莉一人だけ仲間外れにすることなんて絶対にできない。

いつだって俺を信じ、その大切な体を委ねてくれてる五人の少女たちには返しても返し切れないくらいの恩があるんだ。

愛莉にも同じ経験をさせてあげたい。

あ、わかってると思うけど、一応はつきり明言させてもらうが、愛莉は決して重いわけではない。彼女を何度も抱いてる俺が言うのだから間違いない。

確かに他の子たちと比べれば体が大きいのだから、その体格差分の体重はあるが、あくまでもそれは彼女が自分の身体を維持するのに必要な分だ。

他の子たちもだが、みんなはつきりいつてそれぞれの身長に対してウェイトが逆に少なすぎるのではないかと心配してしまうくらいなのだ。

「その……長谷川さんからのお願いはすごく嬉しいですけど……よ、良かったら私が一人でするところを見ていてくださいっ」

「え？ でも、愛莉だって——」

本当はして欲しいのはわかっている。俺が他の子たちにしていない間も、彼女たちに羨望の眼差しを向けていたことにも気づいている。

「は、はい。本当は私もして欲しいです。……でも、気づいたんです。長谷川さんにしてもらうよりも、長谷川さんに私が成長したところをしっかりと見て欲しい。って、だからお願いします。私のするところ……ちゃんと見ていて下さいっ」

「そっか。うん、わかったよ。愛莉が綺麗に飛ぶところ、最後までしっかりと見せてもらうから、思いつきりいくんだよっ」

「はいっ。せっかく長谷川さんに見て頂けるんだから、私の全部出し切れるように……精いっぱいがんばりますねっ」

愛莉は胸の前で両手を強く握り、強い意志の宿った双眸でしっかりと俺の目を見つめながら頷いてくれた。

——おっと、そっか。

「今回は愛莉が俺を気遣ってくれたけど、いつか絶対に愛莉のことも

肩車してあげるからね」

「え？ わ、私そういうつもりじゃ……」

「そういうことにしておいてよ。俺のためにさ」

「あ……えへへ。ありがとうございますっ長谷川さん！」

もちろん今だつて愛莉を肩車することぐらいでは思うが、さすがに無茶をしてケガをしたり彼女の大切な体に傷をつけては元も子もない。

俺の体質的に万里並みは無理かもしれないが、それでも大切な女の子一人くらい、簡単に抱え上げられるようにならないとな。

これからは日課の筋トレに『愛莉を安全に肩車するため』という新たな大きな目的も加わり、いつそう身が入るものとなることに喜びを感じていた。

「愛莉っ。——ここでしつかりと見せてもらおうよ」

「はいっ。——えへへ、まだみんなの前でするのは、ちよっぴり恥ずかしいけど、私が飛ぶところみんなに見て欲しいから……行きますっ！」

俺からのパスを胸の前でしつかりと受け止め、一度だけ照れたような表情でみんなの方へと振り返る。が、それも一瞬。

目指すべきゴールを見据えると、表情を引き締め、力強いドリブルを始めながらハーフラインから一気に駆け出した。

おそらく部活が終わった後も、兄である万里の指導のもと何度も何度も繰り返し練習を続けたのだろう。

フリースローラインを越えた辺りで、ボールをしつかりと両手で抱え込むと更に二歩分の加速を付けて一気に跳躍する。

両手で高く抱え上げたボールがリングの高さを超え、目前まで迫ったところで両手で叩き付けるように振り下ろした。

があんとゴールリングを叩く音と、ネットを潜り抜けたボールが力強く床に叩きつけられた音が、しんと静まり返った体育館中に響き渡る。

流れるようにダンクシュートモーションへ移行していく愛莉の姿に目を、心を奪われた。

俺も智花も、今までずっと愛莉のこれが見たかったのだ。そう確信させるだけの、完璧なまでのダンクが俺たちの目の前で繰り広げられたのだった。

両膝を曲げてしっかりと着地の衝撃を流してから立ち上がり、照れくさそうな表情をしながら、ゆっくりとこちらを振り返る愛莉。

「すつつつ上げええええええーっ!! アイリーンマジですげえーぞっ!!」

そんな姿を見て真っ先に真帆が賞賛の声を上げながら、興奮そのままに彼女に駆け寄る。

「おーっ。あいらカッコいいー」

ひなたちゃんも全身で彼女の雄姿を称えるように両手を大きく広げている。

「こんなにすごいことができるのなんて愛莉くらいよね」

「愛莉すごいよっ。私じゃ絶対にできないから、すつごくすつごく羨ましいし、愛莉がダンクを見せてくれたこと……とっても嬉しかったよっ!!」

気づくと愛莉はすっかり彼女の大切な仲間たちに取り囲まれ、賞賛の嵐に包まれていた。

恥ずかしそうに頬を染めながらも、一人一人に頷き返し、五人の温かな笑顔がみんなを包み込んでいた。

五年生たちには申し訳ないが、この五人がやはり女バスのベストメンバーのように思えた。

こんな些細な余興にだってみんな全力で向かい合い、喜び合うことができるのだから。

ここまで固い結束で結ばれたチームなんてそうそうあるもんじやないぞ。

「ほんじゃ、次はすばるんねっ」

「え？ 俺もやるの？」

真帆からの思いもよらない発言に間抜けな声を出してしまった。

「昴さんのダンク、見せて欲しいですっ」

「私たちにはまだ早いかもしれませんが、後学のために是非」

「私も長谷川さんのダンクを参考にしたい、もっともっと上手くなりた  
いですっ」

「おー。ひなもおにーちゃんのダンクみたいー」

正直愛莉のダンクでみんなも満足しただろうと思っていたのだが、  
どうやらみんなの中では最後に俺が実演するまでが予定に組み込ま  
れていたようだ。

ふむ。みんながみたいというのなら、やらないわけにもいくまい。

ダンクって、何気にただゴールに直接ボールを叩き込めばいいって  
もんじゃなかったんだよな。意外と難しかったし。

一人の時にこっそり何度も練習したことがあるから多分ミスはし  
ないだろうけど、あとはどれだけ勢いを乗せて決められるかだ。

ただ、まあ……問題があるとしたら、ミニバスのゴールに高校生が  
小学生たちの前でドヤ顔でダンクを決める。という他の人間には絶  
対に見せられない恥ずかしい醜態を晒すことになるが、幸い今は俺と  
彼女たちしかいない。

やるなら今しかない。

「それじゃ、一回だけね」

『やったーっ!!』

期待の眼差しを向けていた五人の少女たちも俺が了承すると一斉  
に喜びはしやぎ出す。これは絶対に失敗できないな。

ある意味試合中のフリースローのとき以上のプレッシャーを感じな  
がら、ハーフラインでボールを突き、感触を確かめる。

息を飲みながら見守ってくれてる少女たちの視線を感じながら、目  
測とタイミングを計り、ゆっくりと動き出す。

徐々に加速させていき、事前にそこ決めていた跳躍ポイント手前  
でボールを片手で持ち、一気に踏み切り——跳ぶ。

肩を基点に背中側から腕で半円を描きながら、ボールを思い切り

ゴールに叩き付ける。

——よし、無事成功。やっぱり見られてると恥ずかしいけどすごい気持ちいいな。

一瞬ゴールリングがぎしりと鈍い音を立てたことに本気で焦ったのは内緒にしておこう。

さすがに学校の備品を壊してしまうのはマズいし、その原因を聞かれたときに俺が憤死する。

「どうだったかな？」

「すつげえー……」

「ふあう……昴さん……」

「意外な一面を見せて頂いちゃったかも……」

「長谷川さん……すごいなあ……」

「おー。おにーちゃん、とつてもかっこいいー」

さて、みんなの評価はどんなものかな？ と、ゆっくりと彼女たちの方を振り返るとみんな目を丸くし、感嘆の声を上げていた。

もしこの場に他のコーチやオトナがいたら、何ムキになってんだ。絶対に冷ややかな視線を向けられていたに違いない。

そりゃ俺だって愛莉のあんなすごいものを見せられちゃ、張り合わずにはいられないって。

俺の体格や体質的にパワープレイは分が悪い場面が多いことくらいわかってるんだ。

だからこそ無い物ねだりってわけじゃないけど、こういうプレイにだって憧れを感じてしまう。

俺にとつての一つの理想みたいな動きを目指してやってみただけが、彼女達からも予想以上に好評だったようだなにより。

「ふふ。トモも長谷川さんに惚れ直しちゃったんじゃない？」

「もつかんはずつとほれつぱなしだろ」

「ふええ!?! そ、そそそんなこと……はううう……」

「私も長谷川さんの動き方……真似できるようがんばろうかな」

「おー。ひなもいつか絶対に Dank するぞー」

何故か智花が一人だけ頬を染め恥ずかしそうにしているが、前に俺



が智花のスクープショットを見たときに自分の姿を重ねてしまったけど、もしかしたら彼女も自分が Dank してる気分になれたのかな？  
内心ドキドキものだったが、結果的にみんなのやる気に火がつくいい着火剤になれたようだ。

「よしっ。みんなのやる気も十分みたいだから、さっそく始めるよっ!!」

『はいっ！ よろしくお願ひしますっ!!』

今日も俺たちは大好きなバスケットを思う存分楽しむのだった。

## 耳掃除

「それじゃ、ジツとしててね」

「は、はい。……少しだけ……ううん、すぐドキドキします……」

幽かに火照らせた顔からも彼女が緊張している様子が窺える。

俺の言葉に従うように静かに体を横たわらせ、俺がよく見えるように彼女の大切な小さな穴を向けてくれる。

俺と智花は今まきにお互いの初体験を迎えようとしているのだ。

「こんなにマジマジと見せてもらったのは初めてなんだけど……智花のはとても綺麗な形だね」

「ふええ!? は、恥ずかしいので……あまり見ないで頂けると……」

思わず零れ出てしまった俺の素直な感想に一層頬を染めてしまい手で覆い隠されてしまった。

「恥ずかしがらせちゃったのは悪かったけどさ、手をどけてくれないと始められないよ? それにしっかりと見せてくれないと俺もちゃんとできるか不安だしさ」

「はうう……それは、そうですね……やっぱりちよつと恥ずかしいですよ……」

どうやら俺の余計なひと言で決意が鈍ってしまったのだろう。

確かに普段はあまり注視して見ることがないような場所を俺にじっくり見られてしまっているのだから、変に緊張もしてしまっているのだろう。

「ほら。俺の方はもう準備できてるんだし、智花だつて早くすつきりしたいだろ? 大丈夫だよ、ちゃんと痛くないように優しくするから。……俺を信じて欲しい」

なかなか覚悟を決められず申し訳なさそうな表情をしながら、小刻みに震えている少女に優しく声を掛けつつ、安心させるように頭を撫でてやる。

手触りのいいミドルショートの髪に指を絡めるように優しく撫で続けていると、彼女の方もその感触が心地よいのか、徐々に表情を緩ませ、身体の余計な力も抜けてきているように感じられた。

やがて、意を決したのだろう。彼女の小さな手によって覆い隠されていた少女の大切な穴が再び俺の目の前に曝け出された。

やはり何度見てもすごく綺麗な形だと思ったが、また声に出してしまふと再び彼女が恥ずかしがらせてしまふな。と、その想いは胸の中に留めておくことにした。

「あ、あまり見てもいいものではないといいますが……お見苦しいものですので、その……」

……この反応は羞恥心や緊張ではなく遠慮だな。相変わらず慎み深い礼儀正しい子だけど、俺の前ではもつと遠慮なんかしないでいいのに。

「智花の体で見苦しい部分なんてあるわけないだろ。もつとよく見せてもらおうよ」

俺たちが出会ってから過ぎた時間なんてまだ一年にも満たないが、それでもこれまでの付き合いから彼女がどんな性格なのかは少しは理解できているつもりだ。

彼女が気にしているようなことを俺は全然気にしてないということとを伝える意味で多少強引な行動をさせてもらおう。

少女の小さな穴の近くに指を当て、軽く動かしながら良く見えやすいよう位置を調整させてもらった。うん、これならすごくよく見えるな。

「それじゃ、入れるからね。もし痛かったり、怖かったらすぐ教えてね」

「は、はいっ。お、お願いしまふ……」

緊張のあまり思わず噛んでしまった少女を可愛らしく思いながら、ゆっくりと彼女の穴に棒を挿入していく。

大丈夫だよ。始めちやえばすぐに気持ち良くなれるんだ。

それに俺だってあんなのを見ちゃったんだから、早く智花の中に入れたくてたまらないんだ。

「んう……はうう………んっ」

「ご、ごめんっ。痛かった!？」

中に入れてすぐの浅い場所の壁を擦っていたら、一瞬彼女の体がびくりとわずかに跳ねたので、慌てて動きを止め声をかける。

「い、いえ……その……今の場所……すぐく気持ち良かったので………も、もう少しして頂けますか？」

「ああ、そういうことか。俺も擦られるとすぐく気持ちいいからわかるよ。それじゃ、もうちよつと動かしていくよ」

苦痛を与えたわけではないことがわかり安堵すると同時に、智花の気持ちいい場所を知れたことに喜びを感じつつ、棒を上下に動かす行為を再開する。

彼女の表情を確かめながら、強く擦り過ぎないようにだけ気をつけ、何度も智花のイイ場所に棒を擦りつけるように往復させる。

「ふあううう……んっ………はあううう……き、気持ち………いいですよ………」

とはいえ、いくら智花の気持ちいい場所でも、あまり同じ場所を擦りすぎると痛めてしまうかもしれないな。

始める前の最初の緊張もだいぶ和らいだみたいだし、そろそろ次のステップへ。

重点的に攻めていた場所から、もう少しだけ深い場所に入り込み、こちらにも目的を果たすための動きへと変化を始める。

「と、智花、そのままちよつとジツとしててね……も、もう少しで……出そうなんだ………」

「は………はいっ。……んあ………は、恥ずかしいですけど………昴さんに………し、しつかり出して頂けると………私も嬉しいですよっ」

彼女の中で小刻みに動かしながら、あと少しで得ることができるところ最高達成感が徐々に込み上げてくる。

智花。君を悩ませ続けていた、この耐え難いまでの身体の疼きから解放してあげるからね。

「んう………ふあ、ふあうう………だ、ダメ………気持ち良くて………へ、変な声出ちやう………」

「智花っ。外に出すよっ！」

「ん………あ………はあああああううううっ!?!」

俺が出すのと同時に彼女も小さな体を仰け反らせている。

必死に声を押し殺している様子に、何故か妙な色つぼさのようなものを感じてしまったが、間違ってもそんなことは口に出せないな。

心の中で彼女に抱いてしまった不純な感情を詫びつつ、申し訳なきを感じたついでに少女の艶めかしさを感じてしまった少女の表情を速やかに記憶から消去する。

何にしても智花も気持ち良く終わることができたのだから、これでもミッシヨンコンプリートだ。

「ふう……気になってたやつが取れて良かった」

「——!! あっ。わ、私がちゃんと捨てますので、耳かきを貸してくださいっ」

智花にずっとむず痒い思いをさせていた元凶を無事耳かき棒で回収できて満足していると、膝枕をしていた彼女が慌てて飛び起きる。

「別に気にしなくていいって、ちゃんと捨てるまでが耳掃除だし——あっ……」

「はああうううっ!!」

まるで奪い取るかのように飛び掛かってきた智花から反射的に耳かき棒を守るように大きく横に逃がしてしまったら、元凶がぼろっと床に落ちてしまった。

「ど、どごおっ!!? どごおっ!!? 昴さんのお部屋を汚しちゃうなんてええっ!!」

「べ、別に気にしなくていいって。後でちゃんと掃除するから」

母さんが。ってか、ここまで取り乱す智花を見るなんて久しぶりだな。

半狂乱になりながら、涙目で大慌てで落ちてしまったと思われる床の周辺をティッシュで拭きまくってる智花を宥めつつ、思わずそんなことを思ってしまった。

とりあえずそんなに床を拭きまくってくれたんだったら、多分無事回収できたと思うよ。

「はうう……本当にすみませんでした。せつかくの昴さんのお部屋を私のあんなもので汚してしまうなんて……」

「別にそんな汚いものじゃないって。それより、智花。ちゃんとすつきりできた？　まだ耳が痒いとか違和感あったりとかは？」

「だ、大丈夫です……すみません、まさか昴さんにこんなことまでさせてしまうなんて……」

「いいって。俺からやろうか？　って持ちかけたんだし。……実は俺も他人のなんて初めてだから少し緊張してたけど、大丈夫だった？」

「は、はい。昴さん、とてもお上手で……すごく気持ち良かったです……」

恥ずかしそうに頬を真っ赤に染め俯きながらも、丁寧にお礼を告げてくれる少女を微笑ましく見つつ、やはり相当恥ずかしい想いをさせてしまったらしいことを悟る。

確かにいくらかそれなりに親しい関係になったとはいえ、男の膝に頭を乗せるのはやっぱり抵抗あったんだろうな。

それでも大人しく俺に膝枕をされてくれて、最終的にはちゃんと智花もすつきりできたみたいだし、これで良かったよな。

自分の選択に過ちはなかったに違いないと一人で勝手に頷きながら確信していると――、

「……………今度は私の番ですね」

「え？」

——気のせいかな、なんかさりととんでもないことを言われたような気が……

「もしご迷惑でなければ、私もお返しに昴さんの耳掃除をさせて頂きたい、です」

それはとても嬉しい提案ではあるのだけれども……

「いいの？」

俺の短い問いに小さくだが、しっかりと首を縦に振ると、

「ど、どうぞぞっ」

綺麗な姿勢でしつかりと正座をしながら、片手には耳かき棒を携えて俺を待つ少女。

本来なら彼女のご両親のために自重するべきなのかもしれないが、ここまで覚悟を決めてしまっている少女の好意を跳ね除けるような

勇気は俺にはない。

「そ、それじゃ失礼するよ」

言ってから気づいたが、今日の智花はミニスカートだった。

間違っても俺の頭が彼女の素肌が露出している部分に触れてしまわないよう細心の注意を払わねばならない。

前に自分の耳掃除をしたのいつだっけ？ などと別のことに思考

を回し智花への意識を誤魔化しながら目測を誤らないよう、智花と自分の距離を測りながらゆっくりと慎重に頭を下ろして行——

「はあうっ!? す、すす昂さんっ!? こ、こっち向きですかあっ!?」

「——!? ご、ごめんっ!? 反対だった!!」

バカか俺は!! なんて智花の方を向いて膝枕されようとしてんだよっ!

あろうことか考える限りで最悪な行動を取ってしまったていた。

目の前まで迫っていた純白のブラウスの壁から、慌てて寝返りを打つように体を反転させる。

「…………、ここは大丈夫?」

「んう!? す、すみません…………も、もう少し奥の方まで…………ひやうんっ

!? ご、ごめんなさいっ! 反対ですっ!」

「ごめんっ!! こっちななっ!」

「ふあう。…………は、はい。そこなら…………すみません、何度も細かく注文してしまつて…………」

彼女の太腿に頭を乗せたまま動いてしまったせいで、彼女のスカートを太腿半ばまで捲り上げてしまいそうになったり、後頭部を小さく温かい腹部に押し当ててしまつたりと、危険な状況に陥りかけてしまつたが、

何度も彼女の柔らかな太腿の上を俺の頭を何度も這いずり回つた末に、ようやくよくお互いが安心できる定位置が見つかり心の底から安堵する。

俺の初体験よりも智花の初体験の方が想像以上に難航してしまつたな。

やっぱ男なんかよりも女の子の方が色々と気に掛けないといけな

いことが多く大変なのだと身を持って実感できたし、今回の経験を今後に活かさないと。

いや、別に他の子たちにもしてもらいたいなんて思っていないけど、好奇心旺盛な子が多いから、もし興味を持ってやりたい。って思っちゃった時に備えての心構えとしてね。

「え、えつと……そ、それでは失礼しますね。粗相がないよう気をつけますが、何かありましたら教えてくださいくださいね」

「う、うん。簡単にぎつとだけでいいからね。そこまで丁寧にしなくても」

謝罪とか色々言いたいことはお互いにあるだろうが、とりあえずそれは今は保留だ。

いつまでも彼女の膝枕を強いるわけにもいかない。

少しでも早く目的を果たし、俺の頭の戒めから彼女の大切な体を解放しなくてはならない。

終わった後で、今回の埋め合わせにはまるで足りないだろうけど、この後の行動でお返しをすればいい。

そう思いながら、目の端にちらちらと入ってしまう少女の白く小さな膝から視線を外すために目を閉じ、彼女に身を委ねることにした。

目を閉じると、今度は封じられた視覚を補うためか、他の感覚器官が研ぎ澄まされてしまった。

頭を乗せている彼女の柔らかな太腿を通じて伝わってくる温かな体温やスカート生地のスベスベした感触。

おそらく言葉通り粗相がないようにと緊張しているのであろう、少女の視線や呼吸。

まるで俺の気持ちいい場所を理解し尽くしているかのような巧みな棒捌き。

否応なく俺は智花を強く意識させられてしまっていた。

「うっ……く……く……」

「あつ。だ、大丈夫ですかっ?」

彼女から送り続けられる快感に必死に耐えようとしても、快感混じ



りのくぐもった声が漏れたり、わずかに身じろぎしてしまう。

そんな俺の様子に目敏く気づき、責任感の強い少女はすぐに自分に至らないところがあつたのでは。と確認を求めてくる。

「だ、大丈夫。智花も初めてとは思えないくらいすごく上手だよ」

「えへへ。それなら良かったですつ。いっぱいすつきりしてくださいねっ」

俺の言葉が嬉しかったのか、気を良くした少女はさらに素早く巧みな棒捌きを駆使して俺を攻め立ててくる。

優しい手つきで上下に擦り上げられ、むず痒さやもつと強くして欲しいというもどかしさを感じていると、

「あつ。ここを、もうちよつと強く擦った方がいいですよね。……ふふ。こうされるのが気持ちいいんですか?」

「う、うん……よ、よくわかつたね。めちやくちや気持ちいいよ」

「えへへ。なんとなくてですけど、ちよつとずつ昴さんの気持ちいい場所がわかつてきましたつ。いっぱい気持ち良くして、たくさん出して綺麗に上げてますねっ」

智花にこんなことをさせてしまうなんて、正直かなり気が引けてしまっただけど、この際だ。

この絶妙な刺激に抗うなんて無理だ。変に我慢するくらいなら、いつそ全て白状してしまおう。それだけ智花が上手すぎるんだ。

「ごめん、智花。本当に気持ち良すぎて……もしかしたら、すぐくぐらない姿見せちゃうかもしれないけど………げ、幻滅しないでくれると嬉しい……」

「ふえ? そんなのするわけじゃないですよ。……わ、私だって、さつき昴さんにいっぱい頂いちゃいましたし、恥ずかしかったけど、嬉しくて……とても気持ち良かったです……」

それなら良かったな。せつかくだし俺もしばらく智花の膝枕を堪能させてもらうか。

「えへへ。昴さん、終わりましたよ……ふっ」

「——うわあっ!?!」

不意に耳に息を吹きかけられ、夢見心地気分から一気に現実に引き

戻される。現実も智花の膝の上という極楽世界なんだが。

「ご、ごごごめんなさいっ!! その……み、耳掃除が終わったら、ふ。って息を吹きかけるのが作法だ。と言われてたもので……変なことをしてしまつてごめんなさいっ!!」

俺のあまりの驚きのように、智花が悪いことをしてしまつたと罪悪感を感じさせてしまつたようだ。

気を抜いていたとはいえ、確かにちよつと驚きすぎちゃつたよな。今もめちやくちやドキドキしてるけど……

「ああ、いや。俺の方も驚きすぎちゃつてごめんね。急だつたから驚いただけで……別に変なことではない……と思うよ?」

いや、実際はよくわからないが。まあやられたことがないわけでもないし、作法かどうかはともかくとして。

とりあえず、油断し切つていた状態で耳に智花の吐息を送り込まれるという行為には、ものすごい破壊力があつたのは間違いなかつた。

「ふう……智花のおかげですつきりさせてもらつたけど、智花は大丈夫だつた?」

氣づくとかかなり長いこと彼女に膝枕をしてもらつているのだ、足が痺れてたり痛くなつたりしていないだろうかと心配になる。

「はいっ。大丈夫ですよ。と、とても貴重な経験をさせて頂いて、すごく嬉しかったです。……ま、まるで、恋び——いえっ。なんでもありませんっ!」

何か言いかけたようだけど慌てて口を噤んでしまつたが何を言おうとしていたのだろうか?

少し気になつたものの、彼女の言うように俺も小学生に耳掃除付きの膝枕をしてもらうなんて貴重な経験をさせてもらつたことのインパクトが強すぎて、すぐにそのことも意識の奥深くへと沈んでしまつていた。

また一つ俺なんか智花に大切な初めての経験をしたり、させちやつたけど、本当に良かったのだろうか?

一瞬そんな想いがよぎつたが、二人ではにかみながら笑い合つてい

る内に、そんな葛藤なんてすごく些細なことのように思えた。

せつかくだし、また一つ彼女と大切な思い出を作ることができたことを素直に喜ばせてもらおうとしよう。

## 少女たちの初めて争奪戦

「ふう……うん。愛莉も自分の体の使い方が良くわかって来たみたいだね。すごく良かったよ」

「えへへ、ありがとうございますっ。長谷川さんにそう言っ頂けると、なんだか自信が持てそうな気がしますっ」

俺の率直な感想に、愛莉はとても嬉しそうに目を輝かせ表情を綻ばせた。

まだお互いの体を軽く温めあつた程度だが、この感触ならおそらく本番もさぞ楽しめるに違いない。

「智花ちゃんが少し羨ましいな……」  
「え？」

愛莉が俯き加減にポツリと呟いた言葉に思わず聞き返す。

「……長谷川さんといつもこんなに楽しいことしてるんだな。って思ってしまったって……えへへ、ちよつとだけヤキモチ妬いちゃいましたっ」

「ヤキモチなんかじゃないよ。……そうだな。愛莉が望んでくれるんだったら、俺で良ければいつでも相手をさせてもらうよ」

照れたようにはにかむ少女の頭に手を置き、さらさらの手触りの良いショートヘアを優しく撫でると嬉しそうに目を細めてくれた。

「……いいんですか？ 私、智花ちゃんみたい慣れてもないし上手くもないから、いっぱいご迷惑を掛けてしまうかもしれないし」「俺だって愛莉の成長をしつかり確かめさせて欲しいからね」

ここで智花を引き合いに出す少女がおかしくて思わず笑みが零れてしまった。

やはり智花は愛莉の中でも大きな存在となっているのだろう。

そして、愛莉はその彼女に幾ばくかの対抗心を燃やすようになるまでに成長していたのだ。

初めて出会った頃の気弱な少女は、自分の恵まれた体の魅力を自覚しつつある。

ならば、もつともつと彼女の魅力を引き出してあげながら、俺もそ

のおこぼれに、その体を思う存分堪能させてもらおうとしよう。

「あ……」

少女の肩にそつと手を置くと、小さく声を上げる。

触れている指先や手の平からは先程まで二人でやってた本番前の軽い前戯で火照った体の熱がじんわりと感じられる。

期待に満ち、強い意志が感じられる双眸からも、彼女がその気になつてくれていることが十分に伝わってくる。

「それじゃ、さつそく今日でいいから始めていこうか。……ほらつ。みんなもすつかりその気みたいだしね」

お互いに絡め合っていた視線を外す。

そこで愛莉も、この場にいるのが俺たち二人だけじゃないということに気づいたようだ。

俺たちの視線の先には、先ほどまでの俺と愛莉と同様に今もなお、少女たちが互いの小さな体を絡め合わせるように肌を温め合う光景が繰り広げられていた。

「んっ。……よかつたのか、もつかん。アイリーンにすばるん譲っちゃってさっ」

「ふええ!? へ、へんなこと言わないでよつ。べ、別に私がいつも昂さんのお相手をするわけじゃ……」

「くふふ。でも、こことか、こことか。すばるんに触って欲しかったんじゃないのか?」

「ひゃうんっ!? そ、そそそんなところ。すばるさんにだつて触られたことないよっ!」

智花にしては珍しいくらい素っ頓狂な声がこちらにまで届いてきた。

会話の流れから察するにどうやら真帆が、智花のかなり敏感な部分に触れてしまったのだろうか。

普段物静かで、我慢強い彼女があそこまで大きな声を出してしまうほどの部位……気になる。

「お? そーだったの? ごめんなーもつかん。あたしがもつかんの

ハジメテ奪っちゃったか」

「もうっ。変ないたずらして……真帆だつてここが弱いくせにつ」

少しだけ二人に近寄つて、新たな発見ができないかと思つていたところで、今度は智花が反撃に出たようだ。

「うひゃあっ!? ちよつちよちよちよつ!? もつかんっ! ごっごめんっ!? ほんとにアヤマルから、マジでそこやめてーっ!!」

「……………」

聞く耳持たずといった感じで頬をぷっくりと膨らませているのが、なんとも微笑ましい。

無言で悶える真帆を押さえつけ、彼女の弱点を責め立てている。

……そういえば真帆はうなじが弱点とか言つてたっけな。

ふとそんなことを思い出している間に、どうやら仲直りも済んだよううで、仲睦まじく行為の続きが再開される。

「少しずつしていくからね。痛いところで一回止めるから教えてね」

「あたしはそんなヤワじゃねーっ。いーから、おもつきしやっつていいよーっ」

「もう……ダメだよ。昴さんだつて、やる時はゆっくり優しくね。つと言つてたんだし、私だつて、大切な真帆に痛いことなんてできないよ」

「うーっ。……きゅ、急に恥ずかしくなるこというなよなー」

思いのほか予想外の不意打ちだったのだろう。

ぶつきらぼうに答えているが頬が真っ赤に染まってしまっている。

背中を向けている智花には真帆の表情が見えていないだろうけど、優しく微笑んでいる様子からきつと彼女も気配で察していることだろう。

さて、俺たちがいることを忘れてすっかり二人きりの世界に入ってしまったようだが、もう少しだけこのままそつとしておいてあげよう。

残りの二人の少女たちの様子を確認しようと思つて振り返ると、途中で背中の方から「ぎゃーっ!!」という悲鳴が聞こえてきたが、まあこればかりは仕方ないだろう。

誰もが通る道だから。

初めの内は痛いけど、ちよつとずつ慣れて行つて、最後までできるよようになるよ、それが快感にも自信にもなるのだから。

心の中で真帆にエールを送りつつ、改めて未確認少女二名の姿を確認する。

うーん。これはこれでなかなか。

当然頭の中では理解していたのだが。

実際にその光景を目の当たりにすると、すごく新鮮だった。

紗季とひなたちゃんという、これまたかなりレアな組み合わせ。

この組み合わせを見ただけでも眼福なのだが、この二人がこれからどんな絡みを俺に見せてくれるのか、まるで想像できない。

紗季がひなたちゃんの行動を読み切り、いいように御し切れるかはたまた、ひなたちゃんが紗季の予想を裏切り続け翻弄するか。

期待に胸を躍らせながら、息を弾ませ対峙している二人の観戦を始めたのだが……残念。どうやら少し遅かったようだ。

「はあ……はあ……まだ本番も控えてるんだし、このくらいにしておくぞ、ひな」

「ふうううー……おー。そうだったー、このあとはおにーちゃんが、いっぱいオアイテしてくれるんだった」

「まったく……やっぱり、忘れてたか。いいのか、長谷川さんに見られちゃったかもしれないぞ?」

「おー。おにーちゃんに、まだ見せちゃいけなかったのに、見られちゃったかも? ひな、うっかりー」

なにそれ!?

すごい気になるぞっ!?

くそっ。もつと早く二人の様子を良く見ておくべきだったか。

ひなたちゃんの俺には見せちゃいけないもの。

いやいや、ひなたちゃんは『まだ』と言ったのだから、もしかしたら

このあとじっくりと見せてくれるかもしれない。

ひなたちゃんの『見せちゃいけないもの』か……。早く見せて欲し

いな。

なんだかんだで、ひなたちゃんは意外と色んな物を無意識に隠しちゃう子だからな。

本当なら余すことなく俺に曝け出して欲しいのに、上手く頼まないとか見せてくれないし。

ちようどいい機会だ。ひなたちゃんの全てを俺に見せてもらえるようがんばるか。

さて、みんなもいい具合になってきたみただし、そろそろいいだろう。

あんまり焦らしすぎると、今の相手に燃え上がり過ぎて俺とする前に果てちゃうかもしれないし。

「よしっ。みんな集合ーっ」

『はいっ！』

俺の号令に声を揃えながら集まる五人の小学生たち。

全員が息を弾ませ、わずかながら頬を紅潮させていた。

そんな中、一際期待で胸いっぱいになっている様子の少女が目につく。

「ふふっ。気合十分みたいだねっ。真帆」

「あつたりまえじゃんっ！ あたしがゼッターすばるんのハジメテになつてやるんだっ」

やる気満々の真帆の姿に智花も嬉しそうに微笑んでいた。

確かに、普段から自分だけが独り占めしてしまっているようでズルい気がする。と、どこか負い目を感じていたようだが、今回はそんなこと気にする必要は一切ない。

今回はこうして五人一緒に参加しているのだ。

この日、俺はもうすぐ卒業間近の小学生五人を引き連れて総合アミューズメント施設『オールグリーン』屋上まで来ていた。

目的は俺と彼女たちとの超真剣勝負。

超が付くくらいなのだから、ガチンコ以上に本気だ。言うならばガチガチンコだ。



目の前の五人の少女たちが、ガチガチの俺の相手となるのだ。

彼女たちは俺への初勝利を目標に、そして俺は彼女たちの成長を直に肌で感じ取れる。

まさに最高のレクリエーションと言っても過言ではないだろう。

「いいの？ トモ。あんまりうかうかしてると本当に長谷川さんの初めて取られちゃうかもしれないわよ？ 当然、私も狙ってるんだし」

「……わ、私も、がんばってみたいな。自信ないけど、でも、精いっぱいできるところまでは、やってみたいな」

「おー。ひなもひなもー。おにーちゃんの初めて、がんばっていただいちやうぞーっ」

「ふええ!? そ、その私も昴さんの……は、初めてになりたいけど………うんっ。みんなだって同じ気持ちなんだし。それなら、みんなといっしょにがんばりたいっ。みんなで昴さんの初めてになろうよっ!!」

うんうん。みんなのやる気がひしひしと伝わってくる。

正直、俺なんかの初めてを景品にすること自体、バカバカしいと思っていたのだが、ここまで彼女たちが本気になってくれるとは思わなかった。

一人一人で、あるいはお互いに体を重ね合わせながら、念入りに体と心の準備を整え、今か今かと待ちわび続け、そして遂にその時が来たと胸を躍らせているのだ。

俺自身もまた、彼女たちのそんな姿を見て、高まる気分を抑えずにどんどんと解放していく。

彼女たちの期待とやる気に満ちた表情を目の当たりにして、俺自身もそろそろ覚悟を決める時かも知れないと感じたからだ。

少女たちは今から、俺と共にまた一步大人の階段を昇るのだから、ちゃんと優しくリードしてあげないとな。

—— だけど、俺だってそう簡単に初めてをあげるつもりはないぞ。

一度深呼吸をし、昂らせ続けていた感情の波を心の奥底へ深く沈めて行くのだが……

……はは。なんか試合の時以上に感情をコントロールするのが難しいな。

可能な限り自分の感情をフラットにしようとしているのに、ワクワクする気持ちが全然おさまらない。

オトナゲないと言われそうだけど、彼女たちとガチガチの状態でありたくてやりたくて仕方ないのだ。

今回の小学生たちとの連戦という経験が、長谷川昂という男をまた一歩成長させてくれるに違いない。

そんな確信めいた期待を胸に、俺は一人コート内に残った少女とゆっくり対峙するのだった。

## 二人で打ち上げる開幕の花火

「もっかんだと思った？ 残念まほまほでしたーっ!!」

清々しいまでの笑顔と両手にピースを決める真帆。

天真爛漫な彼女らしさが出ていてとても可愛らしいと感じたのだが、

「あー長谷川さん。いきなりこいつでウザかったらチェンジでいいですよ」

「おいこらっ」

どうやら彼女の幼馴染には少々不評だったようだ。

まあ、人によつては『あざとい』と感じてしまうものかもしれないか。

柿園や御庄寺あたりならわかかってやりそうな気もする。

まあ、その時ならばこちらも遠慮なく言える。チェンジ。

もちろん今回はノーチェンジ。一発勝負だ。

「最初は……真帆か」

「くふふ。あたしがトップバッターだよんっ。すばるんっ!」

対峙した少女はどこまでも楽しそうに笑っていた。

俺とオトナのゴールを使つて、オトナの勝負をするのが楽しみで楽しみで仕方ないのだろう。

俺だつて同じ気持ちだ。

さて、まずはじっくりと真帆の成長具合を確かめさせてもらおうとしよう。

「真帆から攻めたいよな?」

「もちろんっ。あたしが攻めでっ! センテヒツショーだっ!!」

お互いのスタート位置に付くと、すぐに飛んできたボールを返し、試合開始。

手足を広げながら、軽く腰を落とし構える。

その場でドリブルをしながら隙を窺っている真帆をこちらからも俯瞰的に観察する。

やや落ち着きなくキョロキョロとした視線をこちらに送っている

ものの、ドリブルを継続している手元には全く乱れがない。若干攻めに急ぎ過ぎている感じもする——だがそれがいい。真帆の瞳がぎりりと輝き、気配が変わる。導火線に火が付いたようだ。

彼女の二つ名はファイヤー・ワークス——打ち上げ花火。下手に足を止めて悩むよりも、一度打ち上げたのならあとはそのまま一気に咲き誇るだけ。

自分よりも大きな相手に怯むことなく果敢に攻めてくるその姿に、やはり真帆が最初の相手で良かったという自分の思いが確信に変わる。

弾け飛ぶような爆発的な加速力で一気に距離を詰めてくる。

彼女のテンションは今まさに最高潮まで上り詰めようとしている。ベストコンディションで会心のドライブを繰り出してきたのだ。

どこまでも真っ直ぐで、思い切りの良い、彼女らしさがすごく良く出ている。

——故に。

「あ……」

「よっ……と。うん、なかなか速くて正確な動きだったよ」  
その軌道が読みやすい……が、そんなのは些細なことだ。

あくまでも俺が日頃からコーチと言う立場で真帆の動きを傍からよく見させてもらっているから対応できるのであって、これを初見でやられる側からしたら中々辛い物があっただろう。

まあ今回は癖や動きを良く知られてる俺が相手だったから、見切られてしまったわけだが。

何にしても、わずか一年足らずで、よくここまでの物を身につけられたよな。

小細工抜きで純粋に今の彼女の全力でぶつかってきてくれたことが、すごく嬉しかった。

これも真帆のひたむきな努力の賜物か。

「あ。じゃないでしょっ。あんなバレーバレーな動き、長谷川さんに通じるわけないでしょうがっ」

真帆にダメ出しをしつつも、興奮が抑えられないといった感じの紗季。

きつと自分だったら、ああする。こうするといくつもパターンをシミュレートして、早く試したくてうずうずしているんだろうな。

「あたしだって最初は色々考えたけどさ、もっかんみてーにキョーじゃないし。それなら、ヘタなコザイクなんかしないで、おもつきし伊っちゃえっ。って思ったんだ」

「真帆の動きもすっごく良かったよっ。とても早くて真っ直ぐなんだけど、もしここでフェイクが入ってきたら？　って考えちゃったら、きつと追いつけなくなっちゃうと思うよっ」

「おー。まほ、とってもはやかったよー」

珍しく智花もやや興奮気味になっているが、俺と同じくらいかさそれ以上に真帆の成長ぶりを目の当たりにできたのが嬉しいのだろう。

ひなたちゃんもびっくりした様子で彼女を賞賛している。

実際に対峙させてもらった俺としても、猪突猛進な感じが初めて相手をした智花とそっくりな感じがしていた。

「今回は俺に止められちゃったけどさ、今のを止められる相手なんてそうそういないぞ。もちろん色々工夫することも大切だけどね」

「わかってるってっ。今回はすばるんとー対ーだったから、セーセードードーマツコーショーブだったけどさ、みんながいる時はいっぱいキョウリヨクプレーするに決まってるじゃんっ！」

「だよなー」

見てるこちらにも気持ち良くなるくらいの良い笑顔を見せてくれた少女の頭をぐりぐりと撫で回す。

俺の愛撫に目を細めている少女は、上背こそは平均以下かも知れないが、それを補う以上の身体能力と素質を兼ね備えている。

エースという立場は純粋な経験値や同等の身体能力を持っている智花に委ねているが、ある才能に置いては彼女は智花どころかこのチーム1のものを持っていると俺は確信していた。

それは『仲間への絶対的な信頼』だ。

もちろん自分の実力にも自信を持っているだろうけど、真帆はそれ

以上に自分が仲間と決めた相手をとことん信じているのだ。

そんな彼女がいたからこそ、このチームは一人一人が自分の持ち味を最大限に発揮したチームプレイを可能にし、時にはそれが格上の相手すらをも凌駕し得るのだ。

さて、そんな彼女たち最大のアドバンテージを発揮できない状況。加えてコートของ広さもバスケの高さも普段のミニバスとは違う一般のバスケのものだ。

例え俺がデイフェンスの時はジャンプを禁止にしても、それでも俺に有利な環境というのは変わらない。

だが、今回の勝負はガチンコを超えたガチガチンコ。

そう銘打ってしまった以上、俺も絶対に手を抜くようなことはしないと決めている。

「それじゃ、今度は俺の攻めだな」

「ねえ、すばるん?」

「ん? なんかあったか?」

互いの立ち位置を入れ替えボールを求めるように手を前に出していると、真帆が何か聞きたそうな顔をしていた。

「すばるんが攻めの時ってさ、絶対にあたしら抜いてからじゃないとジャンプもシュートも禁止なんだよね?」

「そうしないと勝負が成立しないだろ」

「ほえ?」

あ、わかってなかったのか。

きよとんとした表情の真帆からボールを受け取ると、その場でシュートを打つ動作を見せる。

それで彼女も理解したようだ。

今は3pラインより少し後ろ位の距離だが、そこから少し前に進むだけで俺は自分の射程距離からシュートを撃つことができしてしまうのだ。

それ自体はそこまで大きな問題ではないのだが、愛莉はともかく俺と少女たちとの身長差が致命的すぎた。

30cm近い身長差ではいくら少女がシュートブロックしようと

飛び回ったところでほぼノーマーク状態とっていい。

仮に彼女が俺に密着ディフェンスを試みたとしても、俺は後ろや横に避けてしまえばそれまでだ。

なにより小学生たちが必死に俺から離れないようにと密着してくる状況を俺の方から引き離すという行為自体、めっちゃくちや心苦しすぎる。

そんな思いをするくらいなら、いつそ無しにした方がお互い気持ち良くプレイができるというものだ。

加えてシユート警戒に大きく意識を割きすぎてしまっていると、今度は注意力が散漫になっていて正面からいくらでも抜き放題になってしまうのだ。

もはやガチンコどころかただのゴリ押しのパワープレイ。ただの一方的な蹂躪だ。

そんなものを俺は望んではない。

「というわけだ。ま、本当は外からのシユートの駆け引きもあるんだけど、俺の攻めの時に関しては今回はそこは考えなくていい。その分、俺に抜かれないよう、中に入り込まれないよう集中して欲しい」「わかった。くふふ、ぜったいすばるんを中に入れさせないかんねー」

言いながら手足を広げしつかりと俺を受けるための体勢になる。隙あらばボールに飛び掛かってそうな気配に両手でしつかりとボールを構えつつ思案。

そして、ゆっくりとボールから手を離す。

こぼれ落ちるように落ちて行ったボールが地面にぶつかり上に跳ね上がる。

それを再び地面に軽く押し返す。

まるで子供が毬を突くような、かなりゆつたりとしたドリブルを開始する。

パツと見、隙だらけの俺の姿に、すぐにでもボールに飛びつきたい衝動を必死に抑えながら、焦れたそうにしている真帆。

予想通りの彼女の性格的にも効果覲面だったようだ。

必死に俺の動きを見逃さないようにしているが、集中力が徐々に乱

れ始めている。

俺との対峙直後はしっかり閉じられていたが、徐々に真帆のディフェンスの穴が見えてきた。

じわりじわりと彼女の意識が弱い部分が広がってきているのが手に取るようにわかる。

彼女の穴が十分に広がったのを確信し、俺は――

真帆の意識の外を縫うように一直線に彼女の穴へとするりと体を滑り込ませていく。

別に速さを意識して動く必要はない。

ただ一筋の風が吹き抜けただけのように、極々自然で当たり前のごとが起きたように。

抵抗なく通り抜けることに成功し、そのままふわりと跳躍しレイアップを決め、試合終了。

よし。今のは多分かなり良かった。

内心で自分の攻めにかんりの手ごたえを感じている一方で、「ぐううう。すばるんのそれ、なんかずりーぞつ！」

真帆が恨めしそうに唸り声を上げていた。

やはり今回も抵抗する間もなく、あっさりとは抜かれたのが悔しいんだろうな。

まあ、俺の方はそれが目的なのだから仕方ない。

「俺の動きどうだった？」

「見えてたのに、全然動けなかった。頭の中ではすばるんが動いているから、ちゃんと受け止めなきゃ。って思ってたのに……うううやっぱなんかすっげえナツトクいかないぞおっ!!」

最初のディフェンスの時も、そして今も俺はしっかりと真帆の気配の変化を見極め、上手く誘導することができたのだろう。

まあ、結果的に真帆にとつてはかなり不完全燃焼な形で決着を付けられてしまったようだが。

「……………なんなら、もう一回するか？」

名目上はガチンコ勝負であり、何より他の子たちの順番を待たせてしまうのは申し訳ないとは思うものの。



物足りなさそうにむず痒い思いを感じているだろう真帆の表情を見て、思わず再戦を提案してしまった。

「んーん。あたしだけトクベツアツカイはダメだし。ルールは守んなきゃね。あとはすばるんの動きスミズミまでカンサツしてすばるんの弱いところゼツタイ見つけ出してやるかんねっ」

そう言い、あっさり二回戦のお誘いは断られてしまった。

結果的には他の子たちに不平等を感じさせずに済んだのだが、フラれてしまった感じがして少し悲しい。

「そっか。いっただって勝負の受け付けはしてるから、遠慮しないでいつでも来てくれよ」

コートの外へと出て行く真帆の背中に期待の声を掛けながら見送る。

実際との所、純粋な小学生の目に全てを曝け出すというのは意外と危険な行為かもしれない。

その純粋無垢な視線に映る俺は、いったいどんな姿をしているのだろうか。

自分では自然体で振る舞っているつもりでも、身体の一部がひどく緊張してしまっている可能性だってある。

致命的な弱点を見抜かれ、そこから一気に崩されてしまうことだってあり得るのだ。

だが、それは見方を変えれば、小学生たちに早い段階で俺の弱点を教えてもらえるチャンスでもある。

まあ、小学生に俺の至らない部分を見つけられるという羞恥プレイに怯える日々を過ごすことにもなるのだが。

もつと大事な局面で、そんな大ミスを仕出かしてしまうよりもマシだ。

小学生たちとの経験で目覚めることができた俺の静のバスケ。

まだまだ俺の技術として確立するにはあやふやな域を抜け切れてはいないのも事実。

身を持って教えてくれた彼女たちの期待や想いに応えるために、何より今後の俺自身の成長のためにももつともつと磨きを掛けなくて

はならない。

そのためにも俺はもつともつと彼女たち小学生たちとの経験を重ねなくてはつ。

真帆との経験同様に、他の四人との実戦でも成果を得て、必ずみんなが胸を張って誇れるような男として大きく成長するんだ。

「次はひなたちゃんか。お手柔らかにね」

彼女と入れ替わるように両手を上げながら元気よくコートに入ってきた少女に優しく微笑みかける。

言っておくが決して油断しているわけでは断じてない。

かわいい天使の降臨に頬を緩ませてなんかいない。

「おー。まほのかたきうち、ひながするよー。おにーちゃん、おかーごー」

ひなたちゃんも俺に得難い経験を十分に積ませてくれるに違いない。

お返しに俺もたつぷりとひなたちゃんに、俺の知識を教えてあげようがんばらないとな。

## 無垢なる天使の成長

『小学生を舐めてはいけない』

そう。これは至極当然。すぐく当たり前の常識だ。

だというのに昨今ではその『当たり前』を忘れてしまっている者が増えてしまっているのではなからうか？

まったくもって嘆かわしいことだ。

……まあ、かくいう俺自身も同じ一つ屋根の下、あるいはテントやホテルで実際に小学生たちと一夜を共にする様な機会がなければ実際のところ舐めてしまっていたかもしれないのは否定できない。

そんな過ちを犯しかねない危険な状態だった俺は昔、偶然目にしたとある論文に『小学生とは奇跡の上位互換である』という記述があったのを思い出していた。

当時の俺は「何を言ってるんだこいつは」などとまるで気にもかけなかったが、今ならわかる。これは真実だと。

だからこそ俺は自信を持って言える。

——俺は絶対に小学生を舐めたりはしない。

「おにーちゃん。よろしくおねがいます」

「(こちら)こそよろしくね。ひなたちゃん」

これから一戦交える相手に輝かんばかりの笑顔を浮かべながら、ペこりとお辞儀するひなたちゃん。その姿まさに天使。

決して他の少女たちと比較するつもりはないが、おそらく純粋な小学生力は間違いなく彼女が部内で一番だ。

奇跡の上位互換である小学生のトップ。言わば小学生オブ小学生。

そんな彼女がバスケの才能を完全に開花させる前に、すでに別の才能の片鱗を見せてくれたこともある。

例えるならポーカーもその一つだ。

もし然るべき機関が先にひなたちゃんという才能を見つけてしまっていたら、もしかしたら俺はこの天使と邂逅することが叶わなかったかもしれない。

だが彼女は数多の才能の中から仲間と共に歩むバスケを選んでく

れたのだから、やはりこれは運命を感じずにはいられない。

さて、そんな天使——ひなたちゃんだが、ポジションは真帆と同じく慧心女バスのフォワードを担当。

真帆のチェンジオブペース・クロスオーバーといった急激な変化で相手を翻弄するプレイスタイルとは似て非なるもの。

独特なリズムとセンスで相手の虚を突くことに特化したトリックスター。なによりも小さくてかわいい天使。

バスケットにおいて背が低いのは弱点と思われがちだが、決してそんなことはない。

このチームの中でも特にひなたちゃんに至ってはその小ささを、もはや自分の個性として最大限利用しているのだ。

何よりも恐ろしいことに彼女はそれを無意識に極々自然体で当たり前のように行っている。

そう。俺自身がようやく自覚した自分の真のプレイスタイルである自然体。『静のバスケット』をひなたちゃんはすでに会得していたのだ。こんなにも身近なところに最もバスケットの神に近い天使がいたのだ。これはもうひなたちゃんには胸を借りるつもりで全力で当たらせてもらおうしかあるまい。

何も知らない奴からしたら『小学生相手にお前は何を言っている？』と冷ややかな目で見られるかもしれないだろう……が、そんなことは関係ない。

小学生に舐められてどうするだって？

むしろ望むところだ。いくらでも舐めてもらってかまわない。むしろ望むところだつ。

ちんけなプライドなんてかなぐり捨て、俺はひなたちゃんに胸を貸してもらい、彼女が知っている絶頂の更なる高みへと導いてもらうのだ。

「おー？ おにーちゃん、なんか嬉しそう？」

おっと。いかな。思わず頬が緩みすぎてしまったようだ。

「あー長谷川さん、ヤバいかもね。これは本当にひなに初めて奪われちゃうかもしれないわよ。トモ？」

「ふええっ!? ベ、ベべ別に昴さんの初めては私のもってわけじゃ……う、うう。で、でも……はううううっ」

「長谷川さん、みんなに優しいけどひなちゃんには特に甘いし、もしかしたら……」

「ごらーっすばるーん!! マジメにやれーっ!!」

どうやらコートの外で見守っている少女たちにもあらぬ誤解をか  
けられてしまっているようだ。反省。

言い訳しているように聞こえてしまうかもしれないが、当然油断な  
どは一切していない。

むしろ俺は今歓喜に震えているのだ。

とはいえ、あまり表情を緩めすぎてしまうのも失礼だな。決してそ  
んなつもりはないのだが、もしかしたら小学生を舐めていると思われ  
てしまうのも心外だ。

手にしたボールを軽く弄びつつ二人目の相手——ひなたちゃんに  
尋ねる。

「先にひなたちゃんからしたいよね?」

「んー? ひな、おにーちゃんに攻めて欲しいかもー」

ここでさっそくトリックスターはこちらの思惑と正反対の選択を  
とる。

てつきり真帆と同じく先に攻めたいと思っていたのだが、どうやら  
ひなたちゃんは俺に攻めて欲しいそうだ。

「おにーちゃん。いつでもいいよー」

ボールを持っている俺をまつすぐ見つめながら、とおせんぼーと言  
わんばかりに小柄な肢体を大きく開き、俺を受ける準備も万端なご様  
子。

さてどうしたものか。

……白状する。実はめちやくちや困ってる。

はつきり言ってしまうと、ひなたちゃん相手に抜くことは自体はそ  
こまで難しいわけではないが抜き方が問題だ。

高校生と小学生という圧倒的な身体能力差でぐいぐいと強引に攻  
めるわけにはいかない。

俺の本来のスタイルはここまで小さく柔らかな女の子とのプレイを想定していないのだから。

日頃から毎朝、俺に新鮮な刺激と高揚感で満たしてくれる智花のおかげで慣れてはいるものの、ひなたちゃんは彼女それよりさらに小柄。加えて得意なプレイも全く違うのだ。

そんなひなたちゃんのウィークポイントを探り当て、そこを高校生の肉体ではなくテクニクで攻め抜いてこそ、完全勝利と言えるだろう。

俺が目指すべきバスケの神に最も近い天使相手にとんでもないレベルの難題だが、やるしかあるまいっ。

「いくよ。ひなたちゃん」

俺からの勝負開始の合図に勝負前のにこやかな天使の笑顔から一転、じつと真剣な表情で俺に熱い視線を向けている。

気合もやる気も十分といったところだな。

さて、どういう攻め口で切り崩していこうか。

「じー」

その場でドリブルを始めた俺とひなたちゃん、熱い視線を交わし合うが、相変わらずというべきか、ひなたちゃんの考えは読み切れない。

見た感じひなたちゃんはおそらく何かを狙っているような気はするのだが、基本的には俺の出方を待ち続けているのか、完全に受けの体勢になっている。

真帆のように攻め気の強い相手に対してならば、先の焦らしプレイはなかなか効果的だったのだが……。

おそらく同じ手は、きつとひなたちゃんは焦らされているとすら思わないかもしれない。

何より今の俺が感じ取れるレベルでは、ひなたちゃんの意識の間隙とも言える穴が見つからないのだ。

相手が防御に徹している以上、やはりこちらから動いて閉じられていく穴を少しずつ広げていくべきだろうか？

いや、それともっとひなたちゃんを隅々までじっくりと――

——ひなたちゃんが目が合った。どうやらひなたちゃんも俺の一挙手一投足を見逃さないよう熱い視線を向けていたのだろう。

小さな少女がこちらに向けてくる熱い双眸。なぜか吸い込まれるように魅入られ、目が離せなくなってしまうていた。

例えるなら輝かんばかりに眩い光を放っている。言わば小学生の輝きを放っている部分を表層とするなら、その瞳の奥の深層部。

そこはまるで正反対のどこか無機質な鈍い輝きを放ち、妖しく俺の心を惑わし、誘っている。

瞳の奥底に感じたソレは俺の知っている『袴田ひなたちゃん』のものではなかった。

まるで異質の名状しがたいナニカの存在に気づいた俺は、その正体を探ることに意識の大半を奪われてしまっていた。

「めー」

不意に俺と熱い視線を交わし合っていた天使——の姿をした小学生が山羊さんの鳴き真似を始めた。ちよーかわいい。

直後——

「——なっ!?!」

俺が意図しないタイミングで場が激変する。

予備動作を一切感じさせない動きで一瞬で距離を詰めてきたのだ。

反射的に身を翻すように反転し、背中で庇うようにボールをキープ。

事前知識としては持ち得ていたはずなのに……不覚。と言うべきか対応が完全にワンテンポ遅れてしまったことを認めざるを得ない。

外野からしたら完璧に俺の油断が原因だとヤジが飛んでもおかしくないだろう。

だが、これだけははつきり言える。俺は油断などしていなかった、と。

ひなたちゃんから目を離せるわけがない。俺はずっとひなたちゃんを見続けていたのだ。

なにせよ今はその是非を問うより、この状況を打開する術を模索

することに心血を注ぐべき。

小柄な少女に身体と身体が触れ合う密着寸前の超至近距離まで接近を許してしまったものの、幸いにもボールは俺の手中にある。

主導権はまだこちらのままだ。

「めー」

ちよーかわいい山羊さんの鳴き真似をし続けるひなたちゃん。

しかしその愛らしい声と容姿とは裏腹にその小さな体からは、あまりにも場違いなまでの異質な威圧感が放たれていた。

幸いと言うべきか、追撃は来ないよう――

「――うおっ?!」

幽かに視界の右下側から入り込んできた細長い何かの存在にぞわりと背筋が震え、ボールを右から左へと流す。

いつの間にか、ひなたちゃんがするりとこちらの右側面に回り込むと、その手がボールを狙っていたのだ。

「おー。おしかったーぎんねん」

普段のおっとりとした口調で空恐ろしいことを呟いた天使に思わず戦慄しつつも、ステイルの回避からそのまま反撃に転じるべく、仕掛けて来たひなたちゃんと立ち位置を入れ替えるようにターンを決め一気に抜き去る――つもりが。

「めー」

女バスのバランス感覚と柔軟な肢体が驚異の敏捷性を発揮し、体勢の悪い状態からの走り出しでスピードに乗り切る前の俺より速く進路上に立ち塞がる。驚くべきリカバリーの早さ。

深淵の底のような昏い瞳は変わらずこちらのボール狙っていた。

普段のあのひなたちゃんからは考えられないぐらいのアグレッシブなプレイ。

初戦の真帆にすら匹敵し得るのではないかと思われるレベルの攻めっ気をオフセンスではなくディフェンスで発揮してきたのだ。

「これが、ひなたちゃんの更に進化した山羊さんモードか」

ひなたちゃんの背後にまるでヌシがいて「お前のボールを寄せ」と威圧してきているような錯覚に思わず息を飲む。



『山羊さんモード』

以前ひなたちゃんは自身の天使としての愛くるしさの極々一部を代償にし、代わりにヌシを自身に降臨させるというとんでもないプレイを見せてくれたことがあった。

もし、ひなたちゃんがその独自で編み出した技術に更に磨きをかけていたとしたら……。

そんな思いがよぎった瞬間、すぐに自分の甘い考えを切り捨てる。そう。『もし』なんて生易しい発想をすること自体がそもそも間違っている。小学生を舐めまくっている行為だ。

間違はなくひなたちゃんは天使の外見を残したままヌシになりきることが出来るくらいに考えた方がいいだろう。

ん？

幽かに自分が至った思考に引っかけりを感じた。

今のひなたちゃんは、ヌシに成り切っている——そう。『成り切り過ぎて』しまっている。

あの名状し難い畏怖と威圧感を放つ眼光で目を合わせてしまった相手を委縮させてしまうような、あまりにも強大な存在感を有するヌシに。

——勇敢に恐怖に立ち向かう？ 違うな。はつきり言って何をされるのかわかったもんじやないし、めっちゃくちゃ怖い。

「めー」

再び思考を巡らし始めた俺をまるで威嚇するようにじりじりと擦り足をしながら鳴き声を発する。うん。すごくかわいい。

今にも油断したら音もなく一瞬で飛び掛かってきそうな相手に抱くべき感情ではないだろうけど、実際ヤギに成り切っているひなたちゃんもメチャクチャかわいいのだから仕方ない。

さて、俺はまた一つひなたちゃんの見たことがない部分を見せてもらえたな。

自身が志している道の一つ——ひなたちゃんマスターに一步大きく前進できた確かな手応えを感じながら、山羊さんモード攻略を開始した。

『山羊さんモード』その正体は、相手を無意識に降ろすバスケ。

見た目からは想像もできないくらいに気合と闘志……のようなものを発し、獰猛な肉食獣が虎視眈々と相手の隙をじっと待ち構えている……ような感覚に近い何か。はつきり言つて得たいが知れなすぎるのだ。

そして、不意に気づいて——いや気づかされてしまうのだ。こんな小さな相手と気合勝負？

負けるわけがない。まるで最初にカードが配布された時点で勝ちを確信したギャンブラーのように——

誘われるままに相手のナワバリに無警戒で踏み込んでしまう。実は分の悪い勝負を挑まされてしまっていることに気づかないまま。

そして得体の知れない威圧を孕んだ視線を再び受けた時に、不意に迷いや戸惑いを受けた者は足を止めてしまう。

そうなつてしまえば主導権は完全にひなたちゃんのものだ。

腰が引け、待ちの体勢になつてしまった相手に容赦のないドライブが、あるいはステイールが飛んでくるのだ。

この駆け引きの技術もヌシから教わつたものなのだろうか？

いやはや。なんとも末恐ろしい。今後の成長がますます楽しみです。仕方がない。

さて、攻略法だが。

多少変則的なものではあるがやはり気合勝負であることには変わらない。

気持ちで負けないことがまず第一。

ギャップに惑わされずひなたちゃん本人をしつかり捉えることができるれば、あとは今回に限つて言えばガチンコでやり合うだけ。

まあ、俺の場合は——

重心を傾けながら右サイドに大きく1ステップと同時にボールは右から左へ切り返しクロスオーバー。

直後ボールを奪うという明確な強い意志に引つ張られるようにひなたちゃんダブルクロスオーバーの重心が大きく左に傾くのを感じながら、再びボールを左から右へと二段切り返しで、逆サイドから一気に侵攻する。

「お？ おー、とと」

すぐさまリカバリーに入ろうとするが、やはり最初のフェイクに掛かってしまったのが致命的だった。

重心が大きく横にブレてしまった少女の脇を通り抜けるべく半ば強引に挟り込むように侵入し——抜いた。

ウイニングラン代わりのレイアップを決め、まず1本目を先取。

予想通り今のひなたちゃんは、俺のちよつとした動きにさえ身体が正直に反応してしまうくらい敏感になっていたのだが、それも当然だろう。

もともとそういう勝負を挑んできたのがひなたちゃん自身であり、相手の幽かな揺るぎを見つけたらその瞬間に動けなくてはいけないのだ。

幸いと言うべきか、一時期もつと熱く苛烈な選手との勝負を想定した練習を積みまくった経験が活き、山羊さんモードに入ったひなたちゃんを逆にこちらの思惑通りに誘導できたのが今回の勝敗を分けたと言つていいだろう。

「おー。さすがおにーちゃん。ひな、簡単に抜かれてしまいました」「ひなたちゃんのデイフェンスもすごく迫力があつてビックリしたよ」

先ほどまで感じてた荒々しい気配がすっかり霧散し、ぱちぱちと小さな両手で拍手をするひなたちゃんと、その小さくふわふわの柔らかな髪を撫でる俺で互いのプレーを称賛し合う。

そこでふと気づく。

……はて、俺はひなたちゃんから彼女の静のバスケットを見せてもらうつもりだった気がするのだが……？

あのヌシを模したアグレッシブなプレイスタイルは『静』とは全くの正反対のむしろ『動』。

確かに積極的に動き、時折可愛らしく鳴くひなたちゃんというの、それはそれはすごく魅力的で何よりお相手して頂いた俺自身も素晴らしい体験ができたのは間違いない。

実際、初見殺しとしても十分通用しそうだな。

とはいえ、このまま山羊さんモードを続けるつもりならば、ひなたちゃんには悪いが俺の勝ちが揺るがないものになると確信している。残念ながらひなたちゃんがどんなにヌシに『成り切ろう』としてもヌシになることはできない。

あの名状し難い威圧と存在感は強靱な肉体を有しているヌシだからこそ、その真価を發揮できるものだ。

今は真剣勝負の最中だから、無粋な真似はできないが、この勝負が終わったらコーチとしてしつかりひなたちゃんを諭してあげないとな。

ない物ねだりは俺自身も、そして、きつとこの場にいる誰もが通った道。

もちろん手に入れるための努力を怠らないことは大切だが、それに縛られ過ぎてしまってもいけない。

などとすごく偉そうな事を考えていたが、そんな俺のつまらない懸念は杞憂だったようだ。

小さな両手でボールを抱えながら、輝かんばかりの笑顔を浮かべている少女の姿に確信せざるを得なかった。

無垢なる魔性は、深淵の如き魔性ヌシをも取り込み、魅了チャームへと更なる昇華をさせていたのだ。

「今度はひなが、おにーちゃんをいっぱい攻めるね」  
ぞくり。と背筋が震えた。

ドキドキと胸の高鳴る鼓動が抑えられない。  
これを喜ばずにいられるか。

——俺の前に天使が舞い降りた。

長谷川昂はこの瞬間、全身全霊をもって天使の降臨の悦びにその身を捧げるのだった。

「おにーちゃん、いくよー」  
「いつでもおいで、ひなたちゃんっ」

俺は今もイノセント・チャームにかかっている。ひなたちゃんから目が離せない。きつとこれからも。ずっといつまでも。

彼女が流れるようにごく自然に流麗な動作でその場でドリブルを始めた。

何も知らない素人ならば、ただ天使がボールをついているだけに見えないだろう。特別なことなど何もしていない極々普通のドリブルだ。

だが、当然その練度は素人なんかとは比べるまでもないのは言わずもがな。

ただ純粹に仲間とのバスケットを楽しみたい。楽しめるようになりたい。という健気でひたむきな努力で培われてきた彼女のバスケットが――

――今この瞬間。俺のためだけに繰り広げられようとしていた。

「とおーっ」

どこまでも楽しそうな笑顔を浮かべながら天使が滑空してきた。

まるで地表ストレスを滑るような超低空ドライブ。相変わらず予備動作なしで繰り出されるドライブはまるでタイミングが読めず、せいぜい進路を塞ぐだけが精いっぱいに対応となってしまうのは内心少し悔しい。

とはいえ多少強引にでもと、不用意に手を伸ばしてしまうことは、あまりにも危険すぎる。

おそらく、そんな危険を冒してしまう者が今後とも間違いなく大勢増えてしまうだろうことは容易に予測できる。

日ごろから観察させてもらっている俺でさえ、彼女のふわふわと柔らかなような見た目と雰囲気には惑わされ、まるで誘われてしまったようについ手が伸びそうになるのだから。

しかし、実際に俺が、130cm程度しかないひなたちゃんからボールを奪おうとするには、体勢をより低く身構えなければならぬのだ。

それでも、ドライブのタイミングや軌道を読み切ることができれば、十分対処可能なのだが……独特なリズムと絶妙なまでに間をずらしてくる、ひなたちゃんとの自由奔放な動き。どう対応したものか。

答えは目の前にあった。

というよりも、最初からひなたちゃんはずっと教えてくれていたのに、俺が気づかなかっただけだった。

俺はひなたちゃんから俺の知らない『静』を学び取ることを目的としていたが、それがそもそもの間違いだった。

彼女はディフェンス——山羊さんモードになった時から彼女自身のバスケ、言うならば『生』のバスケで俺に挑み、存分にトリックスターぶりを俺に見せつけてくれていたのだ。

当たり前だ、俺がどんなにひなたちゃんを隅々まで調べ尽くし、本人が知らないであろう部分まで知り尽くせたとしても、俺は絶対にひなたちゃんになれるわけがない。

気づいてしまえば、簡単だった。最初から止まる必要なんてなかったんだ。

半ば確信めいた予感に従い、俺は抜くか抜かれるかという真剣勝負の最中、今この瞬間のプレイを心の底から楽しんでる少女に引き寄せられるまま、それでいて自分の方からも全力で手を伸ばした。

「おー。おにーちゃんに奪われちゃった」

「ふふふ。ひなたちゃんのおかげで、俺はついに至ることができたよ」  
小学生に導かれるままに昇りつめ、初めて未知の領域を知った。

まあ、知ったと言っても、せいぜい指先程度のごく浅い範囲でしかないし、きつと俺にはこれ以上奥を知ることができそうもない。

だが、確かに俺が知らない世界が存在していたのは間違いない。

その証として、俺の手にはしっかりとボールが握られていたのだ。  
ひなたちゃん——イノセント・チャームの導きのままに手を伸ばし、彼女にステイルを決める刹那、不思議な感覚に包まれた。

まるで俺の手の中にあるのが当たり前だと言わんばかりに、吸い寄せられるようにひなたちゃんの手から離れていくボール。

深い集中状態に入っていたのだろうか、ひなたちゃんの動きが全て手に取るようにわかるような万能感。

なんかよくわからないけど、今の俺なら例え相手にどんなディフェ

ンスを敷かれたとしても30秒あれば6得点ぐらい簡単に取れてしまえそうだ。という自分でも意味不明なまでに傲岸不遜な自信が湧き上がったかと思うとすぐに霧散。

そして一瞬でもそんな考えをしてしまった自分がめっちゃくちゃ恥ずかしくなる。いくらなんでもハイになりすぎだろ、俺。

しかしほんの一瞬とは言え知覚したあの感覚の先には、なんかバスケを超えたバスケの様などんでもない可能性が秘められているような……？

……いや、深く考えるのはやめよう。俺は俺が知っているバスケだけで手いっぱいだ。

スーパープレイは日々の弛まぬ努力の果てに偶然起こりうる奇跡の様なものであつて、突然都合よく目覚めたり覚醒してできるようなものではないんだ。少なくとも俺の世界では。

今回はひなたちゃんに特別に見せてもらえたけど、俺が俺自身のバスケを極めない限りは絶対に辿り着けない境地であることには変わらない。

「おにーちゃん。ありがとうございます」

「こちらこそありがとう。ひなたちゃんの成長振りしつかりと見せてもらったよ」

「おー。またひなの、おあいとお願ひします」

「もちろん。またいっぱいいしょーね。ひなたちゃんっ」

大戦前同様にぺこり。と可愛らしくお辞儀をしてコートの外へ出ていくと、ひなたちゃんはすぐに四人に囲まれ労いと称賛に包み込まれた。

「おつかれさま、ひなたっ」

「やっぱし、すばるんはてごわいな」

「ひなたちゃんのマネ、離れた私でもびつくりしたよ」

「長谷川さんに破られちゃったけど、でも最初はすごい驚いてたし、意外と有効なのかもね」

「おー？ こんど又シにもバスケおすすめしてみよーかな？」

「それはやめておきなさい。誰も手が付けられなくなるから」

何やらすごく盛り上がっているようで、みんな話に夢中になっているみたいだし、俺も興奮した心のクールダウンをさせないと。

まだあと三人も控えているのだ。その誰もがみんな個性豊かな少女たちなのだから、万全を期して当たらないと。

不意にコート内にひゅう。と一筋の風が吹き、

——ウイ。ワタシもいつかコーチとオテアワセ、ネガイたいデス

俺の耳元を通り過ぎるのと同時にそんなとてつもない幻聴を残していった。

「——っ!？」

まるで心臓を鷲掴みにされたような感覚にどきりとしながら、ばっ。と後ろに振り返るが当然誰もいない。

疑心暗鬼気味に念入りに辺りを見渡すが、爽やかな風がそよそよと吹いているだけで、やはり俺たち以外の人影はなかった。

ひなたちゃん並に小柄でいて、智花並の突破力を持ち合わせている銀髪のフランス少女、ミミちゃん。

幸いと言うべきか残念と言うべきか、今のところミミちゃんはそこまで俺に興味を持っていない（むしろししょーと敬意を示している智花にご執心だが）ため、まだ直接対決の場は設けられたことがなかったが、いずれ相まみえる可能性も無きにしも非ず。

比較的小さい子との経験が豊富な方だとは思っていたが……どうやらまだまだ経験を積んで守備範囲を広げていく必要があるそうだな。